

禮記
曲禮篇



PQ
4322
J3
A11
1917
v.3
GTU
Storage

B. Komitsuka

1918. Nov 2

at.

Whiter cal

テンダ
曲 神
篇國天

譯樹昌山中

版堂陽洛





PQ4322.J3

All

1917

v.3

序

地獄篇が人類罪惡の畏懼戰慄すべき劇詩であり、煉獄篇が人間意志の酷烈莊美なる英雄的戰闘詩であるやうに、天國篇は靈魂の榮光赫々たる凱旋歌である。「一切に勝つ意志」を主張せしダンテは遂に藝術に於て、智力に於て、道德に於て、宗教に於て、永遠の凱歌を奏した。ダンテにとりては天國は困憊疲勞せる靈魂の憩ひの樂園でなしに、善戰の靈魂の凱旋する宮殿である。悲嘆苦惱せる靈魂の救ひ入れらるゝ淨土でなしに、健闘の靈魂の歡呼する天上の都城である。「戰を共にせし靈魂が榮光を共に」する王國である。その地獄に降りしは基督磔殺日の陰慘な夕であり、その煉獄に向かひしは復活節の朗かな朝であつた。而してその天國に昇りしは光煌々たる眞晝であつた。レエテ及びエウノエの二清流に一切の罪惡を洗滌し「宛ら若葉に粧ひ新たなる若木のごとく清く」なりしダンテは、今や美しき微笑のベアトリチエに伴はれて、光の湖、諸天の諧調の中を、層一層神へと接近しゆく。「水中に入る光線のごとく」何の障礙もなしに月天に昇れば、「額の白き眞珠の水面に映ずるのごとく」諸靈現れ、その中聖キアラ尼僧院の童貞女たりしビッカルダ、無理に曳き出されてフィレンツェの悍猛なる一貴族と政治的結婚をなせし物語をなし、然も今や悔いなく惱みなく、「神の意志こそは我等の平安なれ」と云ひ、やがてアエ・マリアを歌ひつゝ「重きものゝ深き水に沈むが

を見る。原動天にては諸天使の祭を眺め、遂に第十清火天に昇れば

かくて光は河の形となり

妙なる春を彩る兩岸りやうがんの間に

照り輝くを見たりき

この流より活ける火花注ぎ出で

兩側りやうがはの花に落つるさま

宛ら黄金わうごんに圍まる紅玉に似たりき

かくて後香かに酔へるがごとく

自おのづから奇しき奔流に再び沈み

入るものあれば又飛び出づるものありき

天國篇三〇の六一―九。

基督の血にて贖はれし聖軍は純白の薔薇の形に現れ、焔の顔、黄金の翅、雪白の身の無數の天使等、蜜蜂のごとく、聖徒の花弁の間を上下して、平安と熱誠を頒かつ。茲に至りて「天啓」の表象たるべ

ごとく」消え失せた。これを、しほにベアトゥリチエの高邁壯烈なる自由意志論あり。第二水星天に至れば大望野心の諸靈「餌に誘はる池中の魚のごとく」浮び來たり、その中法典編纂にて著名なるユステイニアヌス大帝の靈欣然として羅馬帝業の由來を述べれば、神學の表象たるベアトゥリチエは此に添へて基督贖罪の大業を論ず。金星天に昇れば戀愛の諸靈宇宙舞踏をなして、然も尙ほ彼等は法王痛罵を忘れず。太陽天には賢者神學の諸靈音樂を奏でつゝ冠の如くベアトゥリチエを圍み、トマス・アクナス出で、「愛と清貧と歡喜」の聖フランシスクスを讚美すれば、ボナエントゥラ代りて「味方には寛仁、敵には殘忍」なりし聖ドミニクスを嘆稱す。次で火星天に昇れば信仰の戰士等白く基督の十字架の形を描きて現れ、その中よりダンテの祖先カッアグダ出で、フィレンツェの古を偲び、今を慨し、かくてダンテの流竄を豫言して「他人の麪麴のいかに味鹹く、他人の階の下り上りの如何に辛き徑なるかを汝は閑し盡すであらう」と云ふ。ダンテはこの苦き言葉に代へてベアトゥリチエの聖き眼に恍惚たりしが、彼女は「わが眼にのみ天國あるにあらず」と告ぐ。やがて赤色の火星天を去つて白色の木星天に至れば、正義の諸靈飛翔し、拉甸の文字にて「地の審判者等正義を愛せよ」と空中に描く。かくて瞑想の土星天に至れば滿天清冽の氣を帯びて、ベアトゥリチエ微笑さず、音樂も亦止む。たゞひとりヤコブの金楷高く聳えて無數の光のくだるを見る。恒星天に於てダンテは使徒彼得、雅各、約翰より夫々信、望、愛に就て試問を受け、茲に宇宙の微笑 (riso dell' universo)

洩らして感傷的にさへなつてゐる。

天と地とが手を置き

多年の間私を憐れしめた此聖詩が

かの戦ひを齎らす狼どもの敵なる

一疋の羔として私が眠つてゐた美しい

羊檻（フィレンツ）より私を閉めだした残忍に

もし勝ち得ることもあれば

その時異なる聲、異なる羊毛の

詩人として私は歸還し

わが洗禮盤にて花の冠を戴くであらう

天國篇二五の二—九。

そして清火天に於て聖徒の純白の薔薇を仰望しつゝも、彼の心は夙く地上に馳せて、三位一體の神の榮光に向かひ、「下界なる我等の擾亂を覽はせ給へ」と祈願してゐる。天上にありて地を忘れぬは

アトリチエの使命は終り、直觀の典型たる聖ベルナルドゥス代つて祈願を聖母マリアに捧げ、遂にダ
ンテをして神の幻影に接せしむ。神曲の大業は茲に果たされて幻影は消えしも「それより生まれし
甘美は尙も心のうちに雫し」、ダンテの意志は双輪のごとく「太陽と諸の星を動かす『愛』にめぐる」
ものとなつた。

ダンテの藝術と宗教は斯くして天國篇に於て凡そ人類の及びうる美しさ、高さ、聖けさに達して
ゐる。然し斯くも莊美高邁な光と愛と音樂の調のうちにあつて實際ダンテは天上の歡喜に全くは充
たされてゐない。「我もなく世もなく」と云ふ如き狀態に達してゐない。「耶蘇は口内の蜂蜜、耳の中
の爽かなる音樂、心の中の甘き歌」と云ひし神秘家聖ベルナルドゥスの如く、全身全靈を歡喜に融合
してゐない。げにマコウレイの云つたやうに、ダンテは苦難者と悲慘者の情感には強き同情を感ず
るも、然し受福者の間にあつては即ち天國にあつては傍觀者の態度を採り、恰も彼等の歡喜の度合
のみならず、その性質をすら眞に了解しないやうに見える。微笑み灼く諸靈のうちに云ひ表し難さ
鬱鬱を額に帶び、また侮蔑の痙攣を唇に湛へて立つダンテを我等は見る。天より天への上昇の途す
がら彼は一度ならず下界を瞰下し、半ば侮蔑半ば愛慕をもつて「人類を猛からしめる打殻庭（地球）」
を眺めてゐる。而して地獄の底近くにて「フィレンツェよ歡べ、汝はいと偉大にして、海に陸に翼を
搏ち、また汝の名は地獄にひろがる」と叫んだダンテは、天の窮極近くにて切々たる慕郷の情緒を

して此二大制度はフイレンツェに於て種々なる政治的利害と錯綜して戦つてゐた。デイン・チャアチが云つてゐるやうに、ダンテをして偉大なる詩人たらしめたのは此フイレンツェの黨争であつた。彼は伊太利亞の苦々しき政争により安閑たり得ざることを知つた。此によりて彼は人生の眞の源泉と深淵とを眼のあたりに見たのであつた。戀人の情緒よりも強き動機と情熱の存することを學んだのであつた。而して身自ら此鬭争の犠牲となつて遂に永遠の流竄者となつたのである。げに「神曲の觀念は文藝市民の樹蔭の下にてなく、流竄者が世界の大道に追放されて海上或は河邊或は山路に自然を學び、エロナやラエンナの宮廷、ポロニアや巴里而して恐らくは牛津オクスフォードの學堂にて人間を學んだ時に、體をなしその恐怖と美の窮みなき様相にまで展開したのであつた」。さればマコオレイの如きは神曲の莊美なる或る部分を詩と云ふよりもオレエシオンであると云ひ、デモスセネスに次ぐ政治的雄辯家だと稱してゐる。天國篇第六曲の如きはその好箇の例である。以上ダンテの世俗的關心乃至政治的情熱が、神曲の永久に生きて人の心を惹き付ける重要な要素であらう。遮莫當時「教會」の横暴に慨してダンテは「帝國」のために「帝政論」一篇を書いた。もし彼をして今日世にあらしめば、「帝國」の抑壓のために哀れ蹂躪せられざる世界の宗教のために人道のために De Ecclesia (教會論) 一篇を書いたであらう。

自分の神曲翻譯は此天國篇刊行によつて完了した。日本に於ける神曲の全譯は此を以つて最初と

只にダンテのみでない。使徒彼得でさへが恒星天の「宇宙微笑」の眞中^{ななか}にて法王の墮落を痛罵すれば、滿天も同感赫怒して^{あか}赭く燃え、「自然と藝術を超絶せる」ペアトゥリチエの美しさ^{かんせせ}顔も赧^{ちか}らんだ。殊に神曲最後の聖ベルナルドゥスの祈願の結句そのものが實に地上の人々に關する事柄であつて、此世界最高の聖詩は一大世俗的關心、humane な執着を以つて結了してゐる。げに Subjectum est Homo (主題は人なり)であつた。

然し神曲の生命は實は此「俗臭」に存するのである。此世俗的興味政治的關心に存するのである。元來ダンテは高遠なる政治的宗教的理想を抱いてゐた。即ち宇内を包括する「羅馬帝國」と靈界を統一する「羅馬教會」の二大制度これである。此は遠く希伯來の神政々治の理想に由來するもので、凡そ人類の頭腦に浮び得し制度の最高最大なものであらう。デエムス・ブライスの名著「神聖羅馬帝國史」を読み、嘗て人類が此壯烈なる政治的統一と宗教的統一に努力した跡を見て感激せざる者があらうか。此二大制度が提携して然も相冒さざる處に人類の眞の平安と幸福が成立するとはダンテ畢生の所信にして、有名なる彼の帝政論 (De Monarchia) に堂々と此事を論じてゐる。然るに當時「羅馬教會」の代表者なる法王は本來の使命を忘れ、グレゴリウス第七世及びインノケント第三世に依つて教會は所謂俗權を擴大して政治に干與し、皇帝は又「羅馬帝國」の理想を忘れ教會の此專横を制遏し得ない状態であつた。帝政論一篇は此間にあつて「羅馬帝國」の神聖を宣明したものであつた。而

りも易く」飛ぶ如く登ることが能きやう。自分の翻譯の一見難解に見ゆる箇處が、後には Dantesque
たらんとする譯者の用意の存する處であることを、成程と讀者は肯くに至るかも知れぬ。天國篇は
其獲物の巨大なるだけ夫だけ讀者の課せらるゝ耐忍と精力は甚大であらう。月面の暗班點や、諸天
の感化や、アダムの言語や、ソロモンの智慧に關する煩はしい考證議論は、只に無味乾燥なるのみ
ならず、方に怠屈な沙漠を行く心地がする。ダンテ自らも此を知つてゐて、天國篇第二曲の冒頭に
讀者に對し警告を加へて

おゝ汝等、聽かんと願ひ

いとさゝやかなる小艇に乗り

わが歌ひつゝ過ぎゆく船の後を追ひ來しものよ

振向きて汝等の岸邊を顧み

太洋に漕ぎいづるなかれ、恐らくは

我を失ひて汝等さまよひ残るべければなり

わが越す水は嘗て人の駛せざりしところ

ミネルヴ息氣吹き、アボルロわれを導き

する（神曲の序曲と云はるゝ「新生」も二月中旬に既に出版した）。最初と云ふことは必ずしも光榮でないが骨の折れることだけは事實だ。將來日本のダンテ研究史に此點だけは買つて貰はねばならぬと思つてゐる。無論種々なる缺點はあるに相違ないので、自分は先づ翻譯らしい翻譯が出来上がるまでには少くとも十種位な譯本が出ねばならぬと思つてゐる。否神曲の如き永遠に生きて行く書は時代々々の氣分と理想とに應合した言葉と精神を以つて永久に翻譯し更へて行かねばならぬと思つてゐる。此點に於てケリイやロングフェロの英譯は大分我等には甘い感じがする。そこに行くに適勁な漢語を有する日本語はダンテの「強さ」を表すに寧ろ都合好さを感じる。自分の譯は多少此方面に於てダンテの精神を傳へ得たやうに私かに自任してゐるものだが、何分邦語の容す限り逐字譯を試みたのであるから、例の日本人式にサラ／＼と讀み流すわけには行くまい。第一原詩そのものからしてが思ひ切つて高踏的なもので、文章の大膽な簡潔法に従つてゐる。さればダンテの死後五十二年にフィレンツェ市は神曲の講座を置いてボッカッチオを最初の講師にし、引續きボロニア、ピサ、エネツィア、ピアチェンツァ、ミラノも此に慣つたと云はれる。原詩が既にさうであるのだから譯本を原詩以上に樂に讀み流さうと云ふのは虫が善すぎる。もし神曲が易々と讀み得たとすれば、それは譯本が如何かしてゐるか其とも讀者が如何かしてゐるのである。神曲を讀むほどの者は恰も煉獄淨罪山の峻峻を踏破する覺悟を要する。始めは手と足とを要する。帆と櫂とを要する。然し遂には「平地よ

改造し得る力を保藏する「神曲」が其力を我國民の上に發揮する端緒ともならんことを切に祈つてゐる。

一九一七年三月十八日（歐洲戰亂方に關する時、露國革命の報を聽きつゝ）

東京にて

譯

者

識

九つのムウゼ我に熊星を指し示さん

と云つてゐる。そして

汝等この世の人の生命を繋ぎ

しかも飽き足る例なき天使の糧に

折よくも頸を挙げし些の人々よ

宜しく汝等の船を太洋にうかべ

わが漕を前にして続けよかし

と云つてゐる。讀者は方に此警告に償ひする堅固なる覺悟を以つて天國篇に入らねばならぬ。尙ほ自分は容す限り註解に於て希臘拉甸の本文を挿入し、神曲の基礎の博大深遠さを讀者の心に印銘するよすがとした。(註の中「新生」に關するものは自分の譯本に據る)。

神曲を完了して自分は一種勝利の快感を覺える。然し夫と共に又甚大なる冒瀆の感にも襲はれる。遮莫自分の此努力が、單に文藝と云はず、藝術と云はず、人類の精神を革新し、世界の文化を

目次

第一曲	ダンテ地上樂園より昇天す	一
第二曲	月天に昇り月面の暗班點を論ず	二
第三曲	月天、破戒の尼僧	三
第四曲	靈魂起原論、自由意志論	四
第五曲	水星天、大望野心の諸靈	五
第六曲	羅馬帝業論	六
第七曲	人類墮落及び贖罪論	七
第八曲	金星天、戀愛の諸靈、遺傳論	八
第九曲	戀愛の諸靈法王痛罵を忘れず	九
第十曲	太陽天、賢者神學の諸靈	一〇
第十一曲	聖フランチェスコの頌	一一

第二十五曲	使徒雅各希望を試問す	二四三
第二十六曲	使徒約翰愛を試問す、アダム現る	二五三
第二十七曲	彼得法王を痛罵す、原動天	二六三
第二十八曲	天使の段階政治	二七三
第二十九曲	宇宙創造論、天使創造論	二八三
第三十曲	清火天、光河、天上の薔薇	二九三
第三十一曲	天上の薔薇、聖ベルナルド	三〇三
第三十二曲	聖ベルナルド諸聖徒を指示す	三一三
第三十三曲	聖母マリアへの祈願、神の幻影	三二四

第十二曲	聖ドメニコの頌	110
第十三曲	ソロモンの智慧を論ず	120
第十四曲	靈體論、火星天、信仰の戰士	130
第十五曲	ダンテの祖先カッチアグキダ現る	140
第十六曲	カッチアグキダ、フィレンツェの沿革を述ぶ	150
第十七曲	ダンテ流竄の豫言を聴く	161
第十八曲	木星天、正義の諸靈	171
第十九曲	正義論、信仰論	181
第二十曲	正義の諸王の頌	191
第二十一曲	土星天、瞑想の諸靈、雅各の金櫛	201
第二十二曲	聖ベネデット教團の墮落を難ず	211
第二十三曲	『基督の凱旋』	221
第二十四曲	使徒彼得得信仰を試問す	231

天
國
篇

挿 繪

ダンテの像……………	(ナ　ボ　リ)……………頭卷
月天の破戒の諸靈……………	ボッデイチ <small>エル</small> リ……………三
聖 <small>トム</small> マゾ・ダク <small>井ノ</small> の説教……………	(ベノツツオ)……………一〇
ベアトウリチエとダンテ(太陽天)……………	ボッデイチ <small>エル</small> リ……………一二
カチアグ <small>井</small> ダとダンテ……………	(巴　　里)……………一六五
ダンテ雅各の金階に登る……………	ボッデイチ <small>井ル</small> リ……………二九
一點なす神の閃光……………	同　　上……………二七五
諸天使の旋回同……………	同　　上……………二七七

第一 曲

ダンテ天の諧調を聞きつゝ眞晝に月天にのほれば光輝灼耀として日に日の加へられしが如し。ペアトリチュは上昇の途すがらアリス・トテレス及びトマス・アクヰナスの説に基きて萬象は神を求め人間の眞位は神にありと説く。

萬象を動かす「彼」の榮光は

宇宙を貫き、或る部分には強く

他のところには微かに反映す²。

その光を最も多く受くる天に到つて

さまざまなことを私は見たが、上の彼方より

降つた者に此を述ぶる術なく力もな⁴。

蓋しちのが願望に近づくや

われらの智性はいたく沈潜して

記憶が遡り得なくなるからである。

一〇 實にわが心に蓄へ得し

聖き王國のことが

今わが歌の題材となる。

おゝ善きアポロよ、この最後の業に向かひ

1 神。一切の運動の源泉にして而も自らは不動なる

神。 Deus est primus motor omnium qui natura

mutetur moventur (神は自然界に動く萬象の本原た

り)。「神學綱要」二の二。この思想はアリストテレス

の *κινουν οὐ κινουμένων* (諸動の動力)より來た

る。「形而上學」入。七。

2 神は事物の本質に貫徹 (penetra) し、或は強く或は

弱く個々物々に反映 (reflect) す。ロカン・グランデ

の書翰二三。饗宴篇三の四。

3 神の實座なる清火天。

4 わが見しことは天上より降りし者の能く述ぶる術な

く又力もなきものなりき。記憶もかなはず言葉も及

ばず。哥林多後書一二章の四參照。

5 靈魂生得の願望は神の幻影に接せんことなり、茲に

「窮極完全の祉福存す」神學綱要二の一。煉、三一の

二三。天、三三の四六。

6 天國。

7 太陽神。二の八。

天國は、プトレマイオスの天動説に従ひ、地球を中心として廻る七天並びに恒星天、原動天、清火天の三天都合十天より成る。下方の三天には世の誘惑の爲に生涯を完うし得ざりし諸靈現れ、上方の四天には此を完うせし諸靈現る。即ち月天には破戒の尼僧、水星天には大望野心の諸靈、金星天には戀愛の諸靈置かる。又太陽天には賢者神學の諸靈、火星天には信仰の戰士、木星天には正義の諸靈、土星天には瞑想の諸靈置かる。恒星天及び原動天は夫々諸靈及び諸天使の集合處たり。第十清火天は神の御座の存する處、ダンテ茲に至りて神の幻影に接し、神曲の大業成就す。木曜日正午天國に昇りて其日の夕に到る。即ち神曲の全旅程は正に一週日なり。

集めらるゝこといと稀なれば

三〇（これ人の意志の過にして耻辱なり）¹³

ペネイアの葉おのれを慕ふものを

起こさば、悦べるデルフオの神に¹⁵

歡喜を齎らさん。

小さき火花に大なる焰ぞつく。

恐らくはわが後に優れる聲の祈起こり

チルこれに應へをなさん。¹⁵

世界の燈は異なる徑より¹⁷

人類にのぼる。然し四の環を^{よつぐわん}

三の十字に結ぶ處より出づる時^{みつ}

四〇その行路は善多く、伴へる星も^{かうろ}

善おほし。¹³ また世の蠟をやはらげ

おのが像を印すること一入である。^{ひとしは}

ほゞ斯かる徑が彼方に朝を、此方に^{あした}

13 皇帝の盜安を叱咤し詩人の無能を嘲罵し、共に月桂

冠を得んとの野心なしとなり。

14 月桂樹の葉。河神ペネイアの娘ダフネ太陽神ア

ポルロに追跡され將に捉へられんとせし時月桂樹に
化せり。

15 アポルロ。デルフイにて託宣をくだす。

16 デルフイより西南十五哩の邑。こゝにてはデルフイ
のこと。

17 太陽。

18 春分に太陽は、四大環即ち地平線、黃道、赤道及び
晝夜平分線が相合して互に交り三つの十字形を成す
點より昇る。而して太陽は白羊宮にあり。この宮は
幸多き宮にて天地創造も基督受胎の告しも此時なり
きとせらる。地、一の三八註。

19 世界は宛ら臘の如く太陽に和げられてその力を鮮か
に受く。

願くは愛しめる月桂樹を與へんとて求むる

汝が力に適はしき器と我をなし給へ。⁸

これまではバルナツの一の峯⁹

我に足れりき。されど今や双峯により

残れる闘場に我は入らざるべからず。¹⁰

願くはわが胸に入り、マルシアを

二
その肢體の鞘より剝ぎし時のごとく

汝われを靈感し給へ。¹¹

おゝ神の力よ、汝もし力を我に貸し

わが頭に印せられし祝福¹²の王國の倂を

啓示し得るものと我をせば¹¹

汝が悦べる樹にわが來たるを見

かくて汝はその葉もて我に冠し、題材と

汝とが此を受くるに足るものと我をせん。

父よ、或はチザレ、或は詩人の凱旋のため

8 我を靈感して天國を詩に歌ふ此の業を成功せしめ以つて月桂樹を受くるに足るものとせよ。

9 バルナツは二つの峯を有すと想像せられき(「メタモルフオシ」一の「三六」)。ダンテは茲にその一に藝術の九女神ムウゼ住み他の一にアポロ住めりとなせり。地獄篇煉獄篇の冒頭に於てダンテは只ムウゼのみに祈願せり。地、二の七。煉、一の八。以上二界にては理性の教示と哲學の光明とにて事足りしが今や天國に入り超感覺的事物について叙せんとするに當りては神の恩寵と神學の啓導を要す。

10 汝マルシアをその鞘なる肉體より剝ぎしごとく我を人の儚さより自由になしたまへ。マルシアはフリデアの半人半山羊の怪物なりしが吹笛に於てアポロと競ひしたため生剝されたり(「メタモルフオシ」六の三八一以下。この句は靈感を受けざる詩人に警告を加へしものなるか、或はマルシアを挫ぎし時のごとくアポロに熱心に我を扶けよとの意なり。

11 或は Manifesti (啓示し)を二人稱として「わが頭に印せられし祝福の王國の倂を啓示したまはど」。

12 月桂樹。

四散するを見たのは、鐵の煮えて火より
出るより長くもなく短くもなかつた。

やがて急に日²³が日に加へられ

恰も力ある者が更²⁴に一つの太陽にて

天を飾つたやうに見えた。²⁵

ベアトウリチュエは眼を諸の永遠の輪²⁶に

全く注いで立ち、私は眼光^{かんくわう}を

上方より移して彼女の上に向けた。

彼女の貌^{すがた}により私は内心

恰もかの草を味ひ、海の神々の

伴侶^{とも}となれるグラウコ²⁷のやうになつた。

七 超人化は言語に表し難い。

されば恩寵がこの經驗を備へし給ふ人々に

この例²⁸にて満足せしめよ。

われわが身の汝が最後に造り給ひし

23 地球の氛圍氣と月天との間にありと想像されし火圈を横切り、今ダンテはベアトウリチュエに伴はれて迅速に天に上昇す。

24 神。

25 太陽に接近しつゝある故に。

26 *l'oe.* 以下この語によりダンテは地球を中心として廻る諸天を意味す。

27 漁夫なりしが魚を甦らしめし草を食らひ、爲に海を憧るゝ心に捉へられ、永久に陸に訣別して海中に入り遂に海神となれり。「メタモルフォシ」一三の九二〇以下。

28 グラウコの。

夕^{ゆふべ}を齋^いらした²⁰。彼方なる半球は

全く白く、他の部分が黒かつた時²¹、

ベアトウリチエがその左方に振り向き

太陽を眺めてゐたのを私は見た。

鷺も斯くこれを凝視したことが絶えてない。

かくて歸郷を欲^{ねが}ふ巡禮のごとく

五 第一の光線より第二の光線が

常に出で、再び上に昇るやうに

眼を通してわが想像のうちに浸^{にじ}みし

彼女の動作により、わが眼も斯く登り

われらの慣^{やう}ひを超えて眼を太陽に注いだ。

人類本來のものとして造られた處²²なるゆゑ

この世にてわれらの能力に

許されざる多くのことが彼處²³に許される。

私が太陽に堪へ、またその火花の

20 彼方即ち南半球淨罪山の頂なる地上樂園は朝、此方

即ち北半球は夕。朝とは日の出より正午まで、夕

とは正午より夜まで、即ち現今の語にて云へば午前

及び午後の謂なり。ダンテは夕暮地獄に入り、朝煉

獄に入り、光煌々たる眞晝に天國に向かへり、第六

時即ち正午は一日中最も貴き時間にして最も大なる

力を有す」饗宴篇四の二五。

この時春分は數日過ぎをりしたため太陽は四〇行の幸

多き徑を精確にでなく「ほど」通りしなり。

21 南半球が晝にして北半球が夜なりし時。

22 アダムとエヴの墮落前人類本來の住處として造られ

しエデンの樂園。煉、二八の九一—三。

愚鈍にする。即ち此を拂ひ去れば

〇〇 見えるものが、汝に見えなくなつてゐる。

汝の思ふごとく汝は地に居らず。

あのが本來の座³³より逸^{いつ}する電光^{でんくわう}も

彼處^{かしこ}に歸る汝の如くに嘗て馳³⁴せず。

微笑^{さび}みの短き言葉により

第一の疑惑は剥ぎとられたが

更に新しい疑惑の網に私は捉へられた。

そこで私は云つた「大なる不思議は既に

充たされて私は慰ふ。然し今能く輕き

此等の物體³⁵をわが如何に超えゆくかを怪しむ」。

〇〇 すると彼女は憐憫^{れんびん}の嗟嘆^{さたん}の後

惑亂せる子の上に注ぐ母の貌^{すがた}して

眼を私の方に向け、そして始めた

「萬象は悉くあのれの間に

33 火圈。一切の火は此處に生じ此處に歸る。二三の

四〇一二。

34 天即ち靈魂の眞の家郷。

35 アリストテレスは空氣は比較的輕きもの、火は絶

對的に輕きもの即ち重量なきものとせり。ダンテは
茲に重き物體たる己が身の如何にして空氣と火とな
越えて浮びゆくかを怪しむ。

分^{ぶん}のみなりしや、天^{てん}を統^すべ治め給ふ愛よ
汝^なが光^ひにて我^{われ}を擧^あぐる汝^なぞ知る。

慕^慕はれて汝^なが永遠^{永遠}のものとなす廻轉^{廻轉}が

汝^なのあはせて整^しへたまふ調^{しらべ}により

わが心^{こころ}をおのれに惹^ひき寄^よするや

その時満天太陽^{太陽}の焰^{えん}に燃^もやされしごとく

ひ〇 われに見え、雨も川も漲^{しほ}りて

斯^{しか}かる湖^{うみ}を作りしこと嘗^{かつ}てなかりき。

響^{ひび}きの妙^{たふ}なると大^{だい}なる光^{ひかり}とが

その原因^{おこり}を知らんと、嘗^{かつ}て感^{かん}ぜられしことなき

いと鋭^{おとこ}き願望^{ねんぼう}を私^{わたし}に燃^もやした。

するとわが亂^{みだ}れし心^{こころ}を私^{わたし}に劣^{せう}らず

看破^{くわは}した彼女は、これ^{これ}を鎮^{しづ}めんとて

私の訊^きぬるに先^{まづ}立ち口^{くち}をひらいて

始めた「汝^な自ら虚^{むな}しい想像^{さうぞう}におのれを

29 靈魂。 腦の機關の完成後神は新しき靈を吹き入れ

たり（煉、二五の六七—七五）。こゝにては使徒保羅^{パウロ}

が天に擧げられし時の如く（哥林多後書一二の三）

ダンテが肉體にありしか或はあらざりしか語るを得

ずとなり。心身いづれが先に造られしやはスコラ神

學者間の問題の一なりき。オリゲン^{オリゲン}はプラトオンに

従ひて靈魂まづ造られて肉體を俟てりと云ひ、トマ

ス・アク^{トマス}・ナスは同時に創造さるとせり。ダンテは後

30 アリストテレスに據れば神は物質ならざる故に物理

的手段によりて宇宙を活動せしめず、愛と憧憬をこ

れに靈感せしめて無窮の宇宙運動を起こさしむ（「倫

理學」A. T. 1071. a

31 ダンテは今地球を包む氣圍氣を更に包む火圈を通過

一 行くなり。

32 ヒタゴラス及びプラトオンに従へば七遊星はめぐり

つゝ琴の七絃の如く神々しき諧調を奏す。この觀念

はアリストテレス並びにアク^{トマス}・ナスの排斥せし處な

りき。これダンテがアク^{トマス}・ナスの教理より離れし稀

なる場合の一なり。

被造物のみならず、知解と

二二 愛とを有するものをも射出する。⁴³

かく凡てを整ふ『攝理』は

最大速度にめぐる天をうちに抱く天を⁴⁴

おのが光にて常久に鎮める。⁴⁵

そして喜びの的に向けて凡ての箭を

射る絃の力が、定められし坐として

いま彼處にわれらを運びゆく。⁴⁶

物質が啞にして應へないため

往々形が藝術の眞意に

添はないのは事實である。

二三 その如く被造物は時としてこの行程より

離れ去る。これ若し原始の衝動が

虚しき快樂により地に誘はれんか

かく促さるゝ被造物の有らぬ方に

43 この本能が生物無生物を各本来の目的に向かはしむること恰も弓がその的を射るが如し。

44 原動天 (prim mobile)、物質的九天中最際端にありて速度最も大なり。第十清火天より力を受け諸天をめぐらす原動力の出づる天なり。

45 原動天を包容する清火天 (emfireo)、空間を超越し只光と愛と永遠のうちに存して神の御坐のある天。

46 萬物を神に向けしむる本能。これ九八行に於けるダンテの疑問に對する答なり。

47 清火天。

秩序を保つ。これ宇宙を

神に肖せしめる形質である。³⁶

こゝに高さ被造物は³⁷

いま述べし規範の造られて目指す

窮極たる永遠の力の痕跡を見る。³⁸

わが云ふ秩序に全自然は

110 或は近く或は遠く、定を³⁹

異にしてその原始に向かふ。⁴⁰

かくて彼等は存在の大海を越えて

異なる港にすゝみ、あのく

與へらるゝ本能を携へて行く。

火を月の方へと運ぶもこれ⁴¹

人の心にある原動力もこれ

地を結びて一にするもこれ⁴²

またこの弓は智性なき

36 造られし宇宙の秩序は神の觀念の外形的表示なり。

而して被造物に向かひて神の最も望み給ふはその己に肖んことなり。ペアトウリチエの所説はトマス・アク・ナスの「神學綱要」の教理と全く一致す。

37 靈魂を賦與されし被造物即ち天使と人類。煉、一の一。

38 大使と人類はこの宇宙の秩序のうちに、宇宙の初にして終なる神の痕跡を明かに認む。

39 神に肖ることは事物によりてその度を異にす。

40 煉、一八の二八―三〇。アク・ナスも同じ比喩を用ゐたり。

41 神を慕ふ人類生得の本能。

42 二九の二三。

第二曲

あゝ汝等、聽かんと願ひ

いとさゝやかなる小艇こぶねに乗る

わが歌ひつゝ過ぎゆく船ふねの後を追ひ來しものよ

振向きて汝等の岸邊を顧み

太洋に漕ぎいづるなかれ、恐らくは

我を失ひて汝等さまよひ残るべければなり。

わが越す水は嘗て人の駛せざりしところ。

ミネルヅ息氣吹き、アポロわれを導き

九つのムウゼ我に熊星を指し示さん。

二 汝等この世の人の生命を繋ぎ

しかも飽き足る例なき天使の糧けに

折よくも頸を擧げし些わづかの人々よ

宜しく汝等の船を大海にうかべ

ダンテはベアトリチエと共に宛ら水中に入る光線のごとく何の障
碍もなしに月天に入る。たま／＼月の暗き斑點に關るダンテの疑問
に答へてベアトリチエは全宇宙が神および天使等の力の直接の發
動にして「宛ら活ける眸よりする喜悅」のごとく輝くと説く。

1 原語 legno (木)。

2 天國篇の題材の高遠なるを告げ此を了解するの困難
なることをダンテ茲に警告す。

3 智慧の女神ミネルヅ帆を孕まし。

4 一の二三。

5 nove. 或は「新しき」と譯する人もあり。

6 藝術の九女神船路の道しるべとならん。

7 神に關る智識。二四の一―三「おゝ天使の糧を食
する食卓に坐する祝福めづまれし些かの人々よ」饗宴篇
101。

傾くことあるは、能く汝が雲の火の

墮つるを見るにあなじ。⁴⁸

われ過らずば、汝の昇りゆくは

高き山より低さにくだる流と等しく

怪しむことにあらずと思ふ。⁴⁹

汝障礙を除かれながら下方に坐しをらんか

一四〇

それこそ地上の燃ゆる火の静まるにも似て
汝にとり怪しむべきことであらう⁵⁰。

かくて彼女は顔を天の方へ再び向けた。

48 藝術品が往々藝術家の精神をさながらに表現せざる

が如く自由意志を有する人間も往々世の快樂に誘は
れて神意に背き去ることあり。然しこれは元來上に
登るべき火が電となりて地に墮つるが如く本來の性
に反するものなり。煉、一八の二八―三三。

49 淨罪終りて靈魂の神に翔りゆくは水の海に注ぎくだ
る如く全く自然なり。

50 上にのぼらざる。

私に云つた「我等を第一の星に結びし神に

三 なんぢの感謝のこゝろを向けよ」。

太陽の照らす金剛石にも譬ふべき

灼く、濃き、凝まり、磨かれた雲が

われらを蔽ふたやうに見え

宛ら水が光線を容れながら

とこしへに純一なるがごとく

永遠の眞珠は己のうちに我等を容れた。

私が肉體のまゝであり、そして物體に匍ひ入るには

必ず容積が容積を包容せねばならぬので

(これは地上にては考へ難きことである)

四 人性と神との結合の狀の示される

かの『本質』を見たいといふ願望に

一際つよく我等は燃やさるべきである。

信仰によつて我等の望むことが此處に

14 月のこと。

15 月。

16 地上にありては二容積は一時に一處を占むる能はざるに今肉身のまゝなるダンテは月天の物質を排除することなしに入れり。こは物理的方則に背くことなるが而も事實たり。このことが一層神性人性の結合たる基督の二重性の神秘を知らんと願望を起さしむ。

17 「それ信仰は望む所を疑はず未だ見ざるところを眞とするものなり」希伯來書一一の一。

わが滯^{みを}を前にして續けよかし。
水はやがて滑かにかへらん。

コルコに渡りし榮光^{さかえ}ある人々

農夫となりしデアソネを見て抱きし

驚愕^{おどろき}も、汝^{かど}の驚愕^{おどろき}には及ぶまじ。

神ながらの王國を慕ふ

二〇 生得^{しやうとく}不朽の渴望¹¹が我等を運び

迅きこと汝等の見る天に似たり。

ベアトゥリチュエは上方を、私は彼女を仰望^{ぎやうばう}した。

すると弩箭^{どせん}が番^{つが}へられ、飛んで

駒^{こま}を離るゝにも似て束¹²の間に

奇しきものが眼を惹いた處に

私の來てゐるのを見た。そこで

わが働^{はたら}きの隠るゝことゝてはなき彼女は

美しきごとく悦ばしげに振返つて

9 bideo. 牡牛を追ふて耕作する人。

10 デアソネ(地、一八の八七)黄金の羊毛を獲んとして
火を吐く二頭の牡牛に軛を掛けて耕作し、畦に龍の
齒を播けり。「メタモルフオシ」七の一〇四―一二。
11 前曲にてベアトゥリチュエの説きし神を慕ふ不能。煉
二一の一―三。

12 矢の管を離れて飛ぶにも似てと云ふべきを、ダンテ
は順序を逆轉してその瞬間の迅速さを示せり。

13 異本、おもひ (cura)。

そこで私は「高くこゝに異なる姿を現すは²¹

忒 物質の稀薄濃厚によると私は信ずる」。²²

すると彼女は「これに關るわが駁論に²³

良く耳を傾けんか、汝の所信の全く

虚妄に沈むを確かに汝は見るであらう。

第八圈は數多の光をなんぢに示すが²⁴

いづれも質にまた量に

姿を異にするのが認め得られる。

もし稀薄濃厚がこれを斯くなすとせば

たゞ一の力が強弱または等量に²⁵

凡てに頒かたれることになる。

セ 然し異なる諸の力は確かに

諸の形質原理の果であるのに、汝の議論によれば

此等は一を除いて凡て亡ぼされ了はる。

更にまた稀薄が、汝の訊ねる陰暗の

21 月の暗斑點。

22 ダンテは同じ意見を饗宴篇二の一四に述べをれり。

ダンテは茲にベアトリチエの口を借りてこの説の誤れるを記す故、神曲のこの部分は饗宴篇よりも後の作たること明かなり。

23 恒星天。

24 星。月の暗斑點が物質の濃厚稀薄に據らざること

を證明せんとてベアトリチエは恒星天の例を引く。

曰く諸の星は光度のみならずその質に於て互に相異なる。もし此差異が只濃厚稀薄といふことに過ぎずと

せば諸星の間には畢竟唯一の力あるのみとなる。然るに事實は此に反して諸星は異なる力を有す。

25 スコラ哲學は原理を、一切の物體の形づくらるゝ本原物質なる物質原理と、事物特有の性を形づくる形質原理とに區別せり。

證明されてにあらず、人の疑はざる

自明の原理として識られるであらう。¹⁸

私は答へた「わが貴女よ

人間世界より私を移し給ふた『彼』に

能ふかぎり虔しく私は感謝する。

しかし下方地上の人々に

五〇 カイノの取沙汰をなさしめる此物體の

暗點が何であるかを私に告げよ。」

彼女は少しく微笑み、斯くて私に

云つた「感覺の鍵が解かない場合に²⁰

人間の意見が誤るとても

確かに今より後驚愕の箭に汝を

貫かしめざれ。蓋し感覺を追ふ

理性の翼の短きことを汝は識る。

しかし汝自らこれを何と考へるか、妾に告げよ。」

18 議論によりて證明さるゝにあらず直覺により自明の本原眞理 (re's hoi) として識らる。煉、一八の五五―七。天、六の一九―二一。

19 アダムの子にして弟アベルを殺せしカイン。創世記第四章。月の暗斑點はカインが獣物の火として荊棘を携へ行く姿なりと思はれき。地二〇の一三五。

20 感覺の力の及び難き場合に。

色の歸りくる状さなからに

他よりする光線が其處から撥ね返される。

さて他の部分よりも其處に光線の

暗く見えるは、反射の一際

奥深さに據ると汝は云ふであらう。

しかし常に汝等の學術の流の源たる

實驗によつて今吟味せんか

此反論より汝は解放されるであらう。

三つの鏡を採つてその二つを汝より

一様に遠ざけ、残る一つを更に遠く

前の二つの間に移して汝の眼に會せしめよ。

100 彼等の方に面し、汝の背の後に

光を置いて三つの鏡に輝かしめ

いづれよりも光を再び汝に跳ね歸らしめよ。

さて遠き方の像は量の大いさを

29 *instanti*. 希臘語 *epitaxis* (アリストテレス修辭學二の二五) の譯語にして「反射」の意なり。

原因であれば、この遊星の一部分が物質を缺いで透明であるか

26 原語 p. 151. no. 斷食して。

或は肥えてまた瘦せる肉體のやうに

おのが卷物の枚數を

變へるといふことになる。

もし第一であれば、光が他の稀薄な

ハ〇 物體に注ぐ時のやうに、日蝕の際

光の透過によつて示される筈である。

然しこれは眞でない。そこで第二を

看ねばならぬが、もし此をも妾が撲滅せんか

なんぢの意見の虚妄が明かになる。

この稀薄が透明でない以上そこに

限界があつて、これを越えては

過ぎゆくを其反對面が許さぬとせねばならぬ。

そして己が後に鉛を秘す硝子より

27 光が月の面を透過せざる以上。

28 鏡。地二三の二五。

おのが目的を果たし、おのが種を播かんとて

二三 自ら衷に有する特性を發揮する。³⁸

かく世界の諸の機關は、今より汝の

見るごとく、段より段に進む

即ち彼等は上より受けて下へと働く。

やがて汝が獨り淺瀬を辿り得るやうにとて

いかに妾がこの處に沿ひ、汝の願ふ

眞理さして進むかを汝能く看よ。

槌の技が治工を俟つごとく

聖と諸環の運行と力とは

祝福まれし動力の群より息氣を受けねばならぬ。

二四 また數多の光の美しくする天は⁴¹

おのれを廻らす奥深き心の

像を浮べて、これを封印とする。

更に汝等の塵の體のうちなる魂が

38 諸天はそれぞれ特殊の力を有して他に感化を及ぼす。

39 諸天のこと。プラトオンはティメウス四一のE及び四二のDに遊星のことを *ὑπὸ τῶν ἡμετέρων* (時の機關) と呼ぶ。

40 天使の諸階級。神の智が彼等を器として宇宙に注がる故に彼等は *intelligenza* (慧智) と呼ばれる。一三六行を見よ。天使の諸階級とその支配する天につきては二八の四〇—一三九を見よ。

41 恒星天。

42 諸天使の心。彼等の心は神の心を反射し且つこれを活動せしむ、故に奥深き心といふ。

減ずるも、その輝きの必ず

等しいのを其處に汝は見るであらう。³⁰

さて雪の下敷が暑い

光線に射られて、今までの

色と冷さとを失つて了ふやうに³¹

智性を拭はれた汝に姜は

110 その面のうち顫ふ

活ける光を體得せしめやう。³²

神の平安の天のうちに物體が廻り³³

その包容する一切のものは

このものゝ力のうちに横たはる。³⁵

これに次ぐいかにも觀物多き天は³⁶

己とは異なりて而も己の包容する

諸の本質に恰くこの力を頒かつ。³⁷

さまざまな變化にめぐる他の諸の環は³⁸

30 以上の實驗により距離によりて影響を受けるは光の
大さにして光の實質は然らず。

31 雪が地面より消えて雪の色(白色)と冷やかさが失
せ去ることく。

32 既に論じて汝の心を蔽ひし誤謬を除けり、進んで月
の斑點の眞因を告げん。

33 清火天。

34 原動天。

35 原動天は清火天より力を受けて以下の八天にこれを
傳ふ。一の一二二。

36 原動天の次に位して諸星群がる恒星天。

37 土星以下の七遊星。

第三曲

水面に映ずる姿のごとく諸靈現はる。その中サンタ・キアラの尼なりしが心ならずもフイレンツェの貴族に嫁せしといふピツカルダ出でし神の意志こそは我等の平安なれと述べ、次で心の面帕を除かざりしといふ皇后コスタンツァのことを語り、アエマリアを誦唱しつゝ重きものゝ深き水に沈むが如くに消え失せたり。

1 ペアトウリチエ。

わが胸を曩に愛に熱した太陽は

論じつゝ難じつゝ、美しき眞理の

甘美な貌を私に露にした。

そこで私は自ら訂され確められし旨を

告白せんとし、ほどく／＼に頭を擧げ

稍身を眞直にして語らうとした。

しかし或る幻が現はれて私を

固く捉へ、その方を眺めさせたので

遂にわが告白をなし遂げ得なかつた。

10 透明な綺麗な硝子に

または底暗きほど深からぬ

清らかに澄める水に

2 1884. 或は「底を見失ふほど」。煉、九の九七。地、五の八九。

異なる肢體に邇漫し

凝つてさまざまな能となるやうに

『慧智』は無數の星に

あのが力を展開し

然もあのが純一を保つてめぐる。⁴⁴

汝等の衷なる生命のごとく

一四〇 異なる力が貴き物體と様々に

合金し、これと結ばつて活かす。

悦ぶ性より注ぎいづるがゆゑ

力は混じて物體のうちに

宛ら活ける眸よりする喜悅のやうに輝く。

光と光とが異なると見えるは

これに據るので、濃淡にあらず

これ己が善に適ひて、溷濁

澄明を生ずる形質原理である。⁴⁵

43 恒星天の天使等、二八の七七。

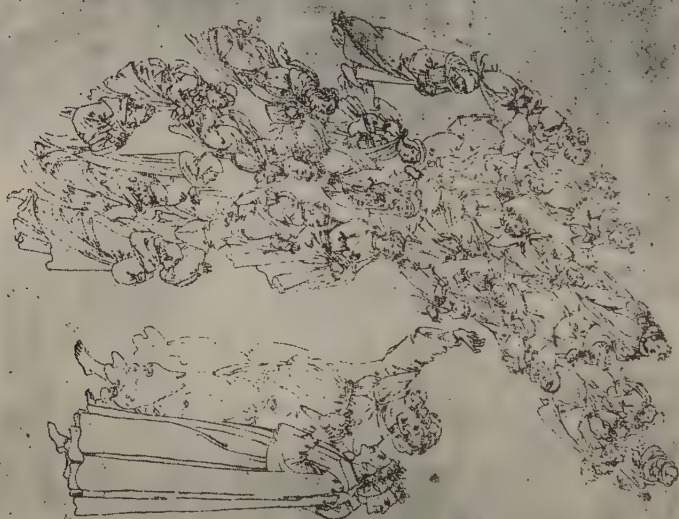
44 「日の榮あり月の榮あり星の榮あり、此星と彼の星とその榮また各異なり」哥林多前書一五の四一。

45 神。

46 四〇行。

47 諸星の異なるはこれを形づくる物質の濃厚稀薄によるにあらずして力の多種多様なに據る。

48 月の暗斑點に關する一見極めて詩的興味なき問題を捉へてダンテはこの曲に於て、天界にあつては感覺の頼むに足らざること、また諸天は異なる力をも有して而も皆神の意志により神の計畫を宇宙に遂行し神の姿を印銘せんと努むることを説けり。



われらの顔の輪廓が微かに映り

これに劣らず速かに白き額の眞珠が、

われらの眸に映じくるやうに。

語らんと喘ぐ多くの顔を私は見た。

そこで私は人と泉の間に愛を

燃やした誤の反對の誤に陥つた。

それと氣付くや否や直ちに彼等が

二 鏡に寫る肖像ならんと思ひ

その主を見んとて私は眼を回した。

しかし何ものをも見なかつたので再び眼を

甘美なる導女の眼光へと眞直に前へ轉じたが

彼女は微笑みつゝ聖き眼に輝いてゐた。

彼女は私に云つた「汝の子供らしき想ひに

わが笑ふを怪しむなかれ。蓋し

眞理の上に未だ足を委ねずして汝は

3 これダンテの譬喩の最も瑰麗なるものの一なり。

4 美しき希臘の若者ナルチツソはニムフォのエコの切なる戀を斥けしかばニムフォは悲しみの餘り消え失せて遂に聲となれり。ネメシスはナルチツソの無情を罰せんとして彼を泉に導き彼の貌を水上に映せしむ。彼即ちおのが美貌を戀ふて去り得ず遂にその名を帶ぶる花となれり「メタモルフオシ」三の四〇七以下。即ちナルチツソは影を實物と間違へ、ダンテはその反對即ち實際の人物を己が後にゐる人々の影なりと思ひたり。

以下諸天に於ける諸靈は順次ダンテを迎へて幸福の眞諦を彼に示さんため一時清火天なる己が永遠の坐を去つて現はるゝなり。而して彼等の啓示するは天の秘密ならで寧ろ神意と人事との活關係なり。

依然として身を虚妄に回らしてゐる。

汝の見る此等は眞の本體にて

三〇 誓約を缺きしたため此處に誦されてゐる。

されば彼等と語り、聽いて信ぜよ。

蓋し彼等を満ち足らす眞の光は

あのれより彼等の足を轉ぜしめない。

そこで話さうと切に喘ぐと見えし影に

私は身を向けて、恰も極度の慾望に

亂される人のやうに始めた

「味はずば識る由もなき甘味を

永遠の生命の光線裡に感ずる

あゝ善多く造られし靈よ

四〇 もし汝の名と汝等の定命とを告げて

私を満ち足らせば、私は感謝する」。

すると彼女は直に微笑む眼にて

5 本體とはスコラ哲學によれば獨存獨立の存在をいふ。即ちこの句の意味は「此等のものは影にあらずして眞の人間なり」となり。

6 光と眞理の源なる神は諸靈に罪を犯さしめず、されば彼等の語るところは絶對に眞實なりとして受け容れよ。

7 ben oreth. 煉・五の六〇には ben nate とあり。

8 月天に現れし凡ての諸靈を包括して「汝等」といふ。

そこで私は彼女に「汝の奇しき貌に

不思議にも神々しいものが輝き

ありし日の俤より汝を移すので

私は速かに想ひ出せないのである。¹³

しかし今汝の私に語つたことが私を扶け

再び姿を象ることを私に甚く容易ならしめる。

さて此處に幸ひなる汝等、私に告げよ

更に多くを見、或は更に多くの友等を

己に得んとて、汝等なほ高き處を願ふか」。

他の諸の影とともに先づ暫く微笑んだが

やがて愛の初火に燃えるかのやうに

いかにも悦ばし氣に彼女は私に答へた

セ「兄弟よ、慈愛の徳がわれらの意志を鎮め

われらの有てるものをのみ欲はしめて

その他のものに我等を渴かしめず。¹⁴

13 地獄に於けるチアッコに對するダンテの言葉と對照

せよ（地、六の四四）。地獄にては苦痛が、天國にては
歡喜が、靈の姿を變へて辨へ難からしむ。ピッカル
ダの兄弟フオレゼも辨へ難かりき。煉、二三の四三。

14 「聖徒達には嫉妬がない。蓋しおのが性の善に準じて
各願望の目的に到達してゐるからである」饗宴篇三
の一五。

「あのが宮居^{みやゐ}を全く己の如からんことを

欲し給ふ『慈愛』と等しく、我等の慈愛も

正しき欲望^{ねがひ}にその扉を鎖さず。

世にあつて妾^{わたし}は童貞の姉妹であつた。

もし汝の記憶にして良く願みんか

わが優^{よき}れる美も妾^{わたし}を汝に秘^{かく}さず

妾のビッカルダ¹⁰であることを汝は認めるであらう。

五〇 此等諸の受福者達とともに妾は

こゝに置かれ、最も緩^{ゆる}き圈¹¹に祝福^{めぐみ}を受く。

聖靈の悦びにのみ焰を擧げる

われらの愛情は、神の秩序により

形^{かた}どらるゝまゝに悦^{よろこ}ぶ¹²。

されば如何にも低く見える此定命^{さだめ}の

われらに授けられたのは、我等が誓約を

忽^{ゆるがせ}諸^{しよ}にし、或る點を缺いだためである」。

9 vergine sorella. 聖キアラ(クララ)教團の尼。

10 フイレンツェの名門シモノ・ドナテイの娘にしてコル
ソ及びフォレゼ・ドナテイの姉妹なりき。煉、二四の
一三―五。またダンテの妻デエム・デイ・ドナテイと
親戚たり。天國にて始めて遇へる靈はこのダンテと
親屬關係ある女性なりき。

11 月天。地球を去ること最も遠き天は速度最も速く
地球に最も近き天(月天)は最も緩し。

12 宇宙の形質たる神の秩序に適ひて己が形質即ち本質
を探ることを悦ぶ。一の一〇五。七の一三三―一四
一。

そこで假し『至高善』の恩寵が一樣に

こゝに雨ふらずとも、天にあつては

たゞ 到る處が樂園である譯が私に明かになつた。

然し時として或る食物に飽きながら

尙も食欲が他の食物に残り、彼に感謝しつゝ

此を願ふことがあるやうに

身振と言葉とにて私は、彼女が

終りぢやで梭を引き切らなかつた織の

何であつたかを識らんことを願つた。

彼女は私に云つた「全き生活と高き功德が

ひとりの貴女を更に高く擧げる。

彼女の規範に従ひ下方汝等の世界に

100 愛がその意に適はしむ凡ての誓約を

容れ給ふ『新郎』と、死に至るまで、共に醒め

共に睡まんとて自ら衣を着面覆する人々がある。

18 ヒツカルダの遂行し得ざりし誓約の何たるかを。

19 聖フランチェスコの友なる尼僧サンタ・キアラ（クラ）。

二一二年峻厳なる童貞教團を設立し、彼女の名を帯ぶる教團全歐洲に擴がれり。一二五三年に死し、一二五五年に聖列に加入さる。

20 基督。彼は凡ての誓約を受け容れ給ふにあらず（五の六四―八四）愛より出て、彼の意に適ふものゝみなり。

もし我等更に高かゝらんことを願はゞ

われらの願望は此處に選おぼびし者の

意志に適はざることとなる。

慈愛のうちの生存が此處に必然であり

またその性質を良く省みんか

斯かることの此等の圈に容ゆるされざるを汝は見るとあらう。

否我等の意志を自おのから一にする

合 聖旨のうちに己を置くことが

この祝福めまれし者の本性である。

かくて闕しきより闕へと此王國に我等の居るは

あのが意志のうちに我等を意志せしむる『王』

並びに全王國の心に適ふのである。

また彼の意志は我等の平安である。¹⁶

これ彼が創造し自然が造る¹⁷

一切のものゝ注く海である」。

¹⁵ 天界より天界へと。

¹⁶ *La sua voluntate è nostra pace.* これ神曲中有名

なる美しき句の一なり。

¹⁷ 神は物質、天使、及び人間の靈魂を無より創造し、
自然は神の造りしものゝ形を整ふ。

これはスズギアの第二の風より

第三にして最後の力を生みし

一〇 偉大なるコスタンツァの光である」。

かく彼女は私に語り、やがて Ave Maria²⁴を

歌ひ始めた。そして歌ひつゝ重きものゝ

深き水に沈むがごとく消え失せた。²⁵

能ふかぎり遠く彼女を追ふたわが眼は

彼女を見うしなつた後

更に大なる願望^{おぼへ}の標^{はと}に向けられ

全くベアトリチエに轉じた。

然し彼女はわが眺めに輝き

最初わが眼はこれに堪へ得ず

二三 斯くてこのことが私を質問に躊躇^{たじろ}がしめた。

24 「慶^{めで}たし恵^{めぐ}まるゝものよ」路加傳一の二八。聖母受胎^{めい}告示の聖歌。

25 一〇行以下の譬喩に戻る。諸靈は語り終りて第十清火天の常住の處に歸りしなり。

少女の時^{をとめ}妾^{わかし}は世を遁れて

彼女に従ひ、彼女の衣に身を包み

その宗^{しゆ}の道に一身を誓つた。

その後善よりも惡に慣れた人々が

甘美なる僧院より妾を拉し去つた。²¹

以後わが生涯が如何なりしか、神知り給ふ。²²

またわが右側^{みぎがは}にあつて汝に現れ

110 われらの圈のすべての光に

燃やされるこの輝きも

妾の身の物語を身自ら味ひ識つてゐる。

彼女は童貞女^{ツレルヲ}であつたが、同じく彼女の

頭^{かしら}より聖き頭巾の陰が取り去られた。

然し自^{おのづ}から意^{こころ}にも背き慣習^{なはし}にも

背いて遂に還俗した後も

心の面覆^{かほおほひ}を彼女は嘗て弛めなかつた。²³

21 註解者によれば彼女の兄弟コルス無理に彼女を尼僧

院より拉し去りて尼の衣を裂き婚禮の晴衣を着せ、
フィレンツェの貴族にして獷猛なるロッセルリノ・デル
ラ・トザと政略的結婚をなさしめきと。

22 又曰く結婚後彼女は間もなく死せりと。

23 チシリア王ルツデエロ第一世の娘にして一一八六年
フェデリゴ・バルバロッサの子なる皇帝エンリコ第六
世に嫁し、この一家の最終の皇帝なるフェデリゴ第
二世を生めり。傳説によれば彼女は尼なりしが一一
八五年三十二才の時己が意に反して皇后となりしと
こゝに「風」と云へるは彼等の粗暴なる性情を指せる
ものならんか。

ナブツコドノソルを昂めたダニエルロの

役目をベアトゥリチエが私に果たして

云つた「此願望彼の願望が汝を索ぎ

かくて汝の意欲が自らを縛り

遂に息氣吐かざらしめる状態を良く妾は見る。

汝は論ずる『もし善き意の續くかぎり

他人の暴行が私の功德の量を

減ずるは何の理由に據るか』と。

なほ又プラトネの説により

魂が諸の星へ歸るやうに見えることが

なんぢに疑惑の原因を與へた。

此等が汝の慾望にひとしく押し迫る

疑問である。されば先づ害の

最も多きものより妾は述べやう。

セラフィニのうち最も神にあるもの。

2 バビロン王ネブカデネザル(前六〇四―五六一年)。

金屬泥土の巨人(地、一四の一〇三註)を夢みバビロンの智者を集めて此を解明せんことを求めしも能はず、怒りて王彼等を殺さんとせり。その時ダニエル出て夢を解き王の兇猛なる忿怒を鎮めたりき。但以理書二の一―四五。その如く今ベアトゥリチエはダンテを惱ませし疑惑を解きて彼の願望を充たせりとなり。

3 二疑問の共に解かれんとの願望がダンテをして其いづれをも云ひ表す力を妨げたり。

4 本人の意志は強固なりしが只他人の暴力に餘儀なく誓約を破りし場合、その破戒は當人の責任にあらずと思はる。

5 プラトオンは「ティメウス」の四一、四二に於て宇宙の創造者は各の靈魂を異なる星に指定し置き、時てふ器によりて地上に播くと云ひ、かくて「定められし時の間善き生涯を送りし者はおのが住處なりし星に歸り、そこにて祝福まれて適はしき存在を保たん」と云へり。これ一切の祝福されし靈魂が清火天に於て神の幻影を仰ぎつゝ永遠に活くとのピツカルダの言葉(三の五〇、五一)に反し、また斯かる思想は倫理的に又神學的に有害と見ゆとなり。

6 前註プラトネの説。これは五四〇年コンスタンティノブル會議にて異端として排斥されし說即ち靈魂が肉體と離れて送られしといふ說を含めばなり。

7 天使階級中最上に位するもの。

8 *india*。ダンテの創造語にして神に没入融合する意。九の八〇を見よ。

第四曲

距離ひとしく、共に心を動かす

二つの食物の間には、自由な人も

その一つを齒にかける前に餓えて死ぬであらう。

同じく猛き貪婪な兩狼の間に

羔は等しき恐れに佇むであらう。

同じく双鹿の間に犬は佇むであらう。

されば私が疑ひに等しく促されて

沈黙したとても、餘儀なきことゆゑ

自ら責めもせず、薦めもしない。

10 私はいら沈黙したが、私が願望は

顔に彩られ、それと共にわが質問は

明かな言葉よりも遙かに熱く描かれた。

かくて無方にも兇惡ならしめた忿怒より

破戒の尼僧ピツカルダの言葉によりダンテの心に二個の疑問起こる
ベアトウリチエこれに答へてプラトネの所説を駁し靈魂の起原を直
接神に置く。次いで暴行的強迫に據れる破戒を論じて高邁壯烈なる
自由意志論に及ぶ。

1 以上は論理學上の好題目として「Buridan の驢」て
ふ名の下に汎く知られし詭辯なり。ピツカルダの言
葉は二個の疑問をダンテの心中に起こせり。即ち諸
星に於ける諸靈の位置に關するものと、また暴力的
壓迫に據れる誓約破戒に關するものなり。ダンテ
は双方とも解かれんことを望みその何れを先にすべ
きかを決し兼ねたるなり。

酌量して足や手を神に附してゐるが

眞意は他に存するのである。¹⁷

また聖き教會もガブリエルやミケレや¹⁸

またトビアを再び全からしめたものを¹⁹

なんぢらに表すに人の貌をもつてする。

その言通りに信ずるやうに見えるが²⁰

五〇 テイメオが靈魂について論ずるところは²¹

この處に見らるるものと同じからず。

自然が靈魂を形質として與へた時²²

こゝより裂きとられたと信じて

靈魂があの星に歸ると彼は云ふ。

しかし恐らく彼の説の眞相は

言葉の響き以外のものたるべく

嘲けるべからざる意味あるやも知れず。²³

彼もし諸星の感化の功罪が

17 聖書が神の腕と稱する時字義的意義は何等斯かる肉

體的肢體を有すとはあらで、如上の肢體(腕)によりて示さるゝもの即ち活動的力を指すとアクサナスは云へり。

18 聖母受胎告示の首天使。路加傳一の二一。

19 魔王サタナを滅ぼせし首天使。約翰默示錄一二の七—九。

20 老いしトビア(正確にはトビトウ)の眼を癒せし首天使ラファエル。

21 萬象及び人類の創造を論ずるプラトオンの「Timeus」プラトオンの著作のうちこの書はダンテが特殊の智識(拉句譯を通じて)を有せしと見ゆる唯一のものなり。

22 肉體の本體的形質として靈魂を結びし時。Anima est forma substantialis hominis (靈魂は人の本體的形質なり)「神學綱要」一の七六。

23 六世紀の Simplicius 及び二三世紀の Aphrodisias のアレキサンドゥロスはアリストテレスの二大希臘註解者なりき。前者は字義以上に後者は字義通りに解釋すべしと主張せり。ヘアトゥリチュも茲にこの二大學派の何れに加擔すべきか惑ふと見ゆ。

モイゼ、サムエル、またいづれの

三〇 約翰ヨハネを汝ニ擇ぶとも、否マリアさへも

今し汝に現れた諸靈の住む天界以外に

その坐を有たず、またその存在の

年も彼等より多からず、少からず。¹²

凡てのものが第一環13を美しくする。

しかも永遠の息吹いぶきを感じることの多少により

甘美なる生活に差違がある。¹⁴

こゝに身を現したのは、この圈が彼等に

當合あてあはれたからでなく、天上の登ること

最も少なきものなることの記號しごうたらん爲である。¹⁵

四 汝の才にかく語らねばならぬ譯は

後には智の對象たり得るものを

まづ感覺的事物によつて觀念するからである。¹⁶

これがため聖經も汝等の能力を

9 希伯來の立法者モオセ。

10 希伯來の最初の豫言者サムエル。

11 福音書の約翰または洗禮の約翰。

12 祝福めづまれし諸靈は凡て古の諸聖徒と共に清火天に永
久常住す。

13 上よりの算へて第一圈即ち清火天。

14 一切の諸靈は清火天に常住するも各の靈的能力に準
じて神よりの祉福を享樂する程度に差異あり。而も
何れの靈魂も不足不満を覺えず。これ約翰傳一四の
「二住處多し」の夙き時代よりの解釋なりき。

15 月天に現れし破戒者はその一なり。

16 アリストテレスの（従つてスコラ哲學の）心理學に據
れば、感覺的機能より受けし印象を想像的機能が受
け、かくて此を智性に提供す。

全く暴力に強制せられた場合としても

それがため此諸の魂は宥さるべきでない。

蓋し意志が意志しない以上意志は死滅せず

否暴行が千度^{せんたひ}扭ぢるとも

火が自然に昇るやうに起きあがる。

されば多かれ少なかれ屈するは即ち

意志が強制に従ふことである。斯く

此等の靈は聖處^{せいじよ}に歸り得たのに屈從^をしたつた。

ロレンツ³¹オを焙器^{あぶりき}の上に自若たらしめ

ムツ³²イオをして己が手に峻嚴たらしめたごとく

彼等の意志が完きものであつたならば

即ち弛められるや否や、曳^きかれ來し道に沿ひ

彼等を馳せ歸らしめたであらう。

しかし斯く堅固な意志はいと稀である。

さて汝^{あな}過たずに以上の言葉を刈り集めんか

29 暴力的壓迫によりて誓約を破りしもの。 以下の自由意志説はアリストテレスに據る。

由意志説はアリストテレスに據る。

30 一の九二註。

31 西班牙人にして羅馬教會の補祭たりき。 知事教會

の寶物を奪はんとし此を示さんことを求めし時彼は

三日の猶豫を乞ひ病者貧民を集めて知事に云へり、

「見よ、こゝに基督の教會の寶あり」と、知事怒りて

二五八年八月十日に彼を燒殺す。彼は焙器の金網の

上にありて燒かれつゝ全身を燒き盡すやうわが體を

回せよと云へりと「基督に對する彼の愛は焔により

て壓倒せられず、外に燃えし火も内に燃えし火に比

しては弱かりき」羅馬教會日讀祈禱書。

32 カイウス・ムキウス(前八二年死)。羅馬の市民なり

しがクルシウムの王ボルセナを包圍せし時、彼

單身敵陣に赴きボルセナを殺さんとして果たず、

捉へられて燒殺せれんとするや右手を火中に入れ泰

然自若として王を眺む。王その剛勇を嘆賞して暗殺

用の劍を返せしに彼は左手を伸べて此を取り「我は

ボルセナを憎伏せしめしも彼の仁慈に我は征服され

たり。されば刑罰の強請し得ざるものを我は自狀す」

とて三百人の伏兵あることを告ぐ。かくて王は遂に

包圍を解けり。爾來ムキウスは Scævola (左手)と

此等の諸輪に歸ることを意味せば

○ 恐らく彼の弓は或る眞理を射てゐるであらう。

この原理が曲解され、嘗て殆んど

全世界を邪道に入れ、馳せ迷ひて、デオエ

メルクリオ、マルテの名を呼ばはらしめた。²⁵

汝を惱ます他の疑惑は汝を

妾から他の處へ導き得るほど²⁷

兇惡でなかつたので害を有することが少ない。

われらの正義が人間の眼に不正義と

見ゆるは、信仰よりの議論にして

異端的罪惡の議論にあらず。²⁸

セ しかし汝等の智慮は良く

この眞理に透徹し得るゆゑ

願ひのまゝに汝を満足させやう。

もし被害者に何の疚しきところなく

24 諸天。

25 迷ひの結果遂に人類は諸星の感化力を神々に歸し以上神々の名をこれに付するに至れり。デオエは羅馬諸神の主神にして木星の、メルクリオはデオエとマイアの子にして水星の、マルテは羅馬の軍神にして火星の名となれり。

26 暴力的壓迫に據れる誓約破戒に關する疑惑。

27 議論ある句なるが、靈魂が星へ歸るてふ説は汝を天啓の眞理（ヘアトゥリチエこれが表象たり）より誘ひて異端に導く恐れあるも、暴力的壓迫に據りて止むなく誓約を破りしものゝ天にて貶黜さるゝを見て神の正義を疑ふは必ずしも異端罪を以つてすべきにあらずならん。

28 人もし全然神の正義を信ぜずば神の不正義云々は問題とならざるべし。これを云爲するは既に神の正義を信じざるなり。

弑したアルメオネのごときは

孝心を失はずに不孝な者となつた。

この點に於ては強制が意志と混合し

共に疏るべからざる罪過を果たしたりと

なんぢの考へんことを妾は望む。

絶對意志が災害を是認したのではない。

二〇

しかし差控えんか優れる災難に陥ることを

怖れたので、遂に承認したのである。

さればピッカルダがこの事を述べた時

彼女は絶對意志を意味し、妾は他を意味する

即ちわれらの語るところは共に眞理である」。

一切の眞理の注ぎ出づる泉より發せし

聖き流の漣波は斯くのごときものであつた。

かくして二つの願望を平安ならしめた。

そこで私は云つた「おゝ『原初愛人』に愛せらるゝ者よ

39 アンファイアラオ己が死を豫知して隠れをりしも妻アルモニア美しき頸飾を賄賂に受けて彼の居處を告げ

しかば餘儀なくテエベ包圍に加はり遂に死せり。彼死せんとして子アルメオネに歸りて母に復讐せよと云へり。彼即ち此を果たして父には孝母には不孝なるものとなれり。地二〇の三四。煉、一二の四九。

「強制を云爲すべからざる行爲もあらん。例へばエマリピデスの劇に於けるアルメオネの母弑逆のごとき

に強制を云ふは如何に荒唐なるよ」アリストテレス「倫理」一の三。

40 意志に二種あり、絶對的意志と相對的意志これなり

後者は大惡を避くるため小惡を納るゝことあり。

41 コスタンツアが心に尼僧の精神を持続しつゝ、尙僧院に歸らざりしは、斯くなして受くる大なる災難を恐

れてなり。これ絶對的意志の承認せざるところなれども止むを得ざることとして相對的意志が許せしなり。

42 相對的意志。

43 六行註を見よ。

44 P. imo amato. 神。

なほ數多度^{あまたたび}なんぢを惱ますべかりし

90 議論³³が絶滅³³されてしまふであらう。

しかし疲れざる前に汝自らにては

逃れ出で得べくもなき他の徑^{みち}が

いま汝の眼前を過ぎて横たはる。

『原眞³⁵』に近く常住するがゆゑ

祝福^{めづ}まれし魂は伴るを得ずと³⁶

なんぢの心に妾は確信せしめた。

然るに面覆^{かほおほひ}を慕ふころをコスタンツァが

保つてゐたと確かに汝はビツカルダから聴いた。³⁷

かくて茲に彼女は妾と矛盾³⁸するやうに見える。

100 兄弟よ危険を免れんがため

爲すべからざりしことが

意^いに反して既に數多度^{あまたたび}行はれた。

例へばあのが父に懇請^{こんきん}されて實母を

33 神の正義に關する。

一九の六七以下。

34 難問。

35 PRIMO VERO. 神。

36 三の三三。

37 三の一七。

38 若し皇后コスタンツァが「心の面帕を嘗て弛め」ざりしとせば、而して意志が以上ベアトゥリチエの語りし如く強きものなりとせば、何故にコスタンツァは僧院に歸らざりしや。これ疑問なり。

これが私を確信せしめて、私に

昧^{くら}き他の眞理を恭しく汝に訊ねしめる。

缺きし誓約を人が他の善によつて汝等に

充たし、汝等の衡^{はかり}に輕からざるを

得るや否やを私は知らんことを望む⁵⁰」。

ベアトゥリチエは愛の閃光に充てる

一四〇 いかにも神々しい眼にて私を眺めたので⁵¹

私の力は壓倒されて腰をかはし

眼を垂れて私は氣を失はん許りであつた。

50 他人の善行祈願によりて破戒は償はれ天の宮居なる

汝等を満足せしめ得るや。

51 ベアトゥリチエが神智天啓の表象たりしことを忘る

べからず(地、二の七〇註)。 追々ダンテの神智に

進みゆくを見、今彼女は悦びて微笑むなり。

あゝ神のものよ、汝の言葉は溢れて

二三 われを暖め、斯くてますく我を活かす。

わが愛情は深からずして汝に向かひ

恩寵に恩寵を酬ゆるに足るを得ざれども

見また做しあたふ者此に應へ給はん。

これを超えて占むる眞なるものとはなき

「眞理」が照らさずば、われらの理智が

永久に充たされぬのを私は良く識る。

これに達するや否や、巢窟の野獸のごとく

そのうちに理智は慰ふ。そして此に達し得る。

然らずば一切の願望は空しからう。

130 これがために眞理の麓に疑惑が

若芽のごとくに生ずる。そして丘より丘へと

われらを頂に促すのは自然である。

貴女よ、これが私を抱き

45 恩寵に足る感謝を。煉、三一の一三五。

46 神。

47 窮極の眞理、即ち神。

48 煉、三の四〇。

49 眞理に對するこの不斷の願望ゆゑに、新しき眞理に達せんとして人心には自然に疑惑が陸續として繼起し彼をして次より次へと進ましむ。

遂げざりし誓約を他の奉仕によつて償ひ

かくて魂に訴へ⁴を免れしめ得るかを

なんぢは知らうと欲する」

かくベアトウリチュ^エはこの曲を始めた。

そして恰も言葉を裂かぬ人のやうに

彼女の聖き^{ろんぎ}論議を斯く續けた

「神が創造の時その恩恵^{めぐみ}によつて與へ

二〇 また彼の善に最も^{かな}適ひ

且つ彼のいと尊び給ふ最大の賜^{たまひ}は

自由意志であつた⁵。

これは理智ある被造物^{ひざうぶつ}凡てに

そして彼等^そにのみ昔與へられ今與へられる。

さて汝もし此より論ぜんか、誓約⁷が

汝の認諾^{にんだく}と同時に神の認諾である以上

その價值^{あたひ}の高さが汝に明かであらう。

4 初の誓約に據れる権利の履行を迫る神の訴訟。「山々
よ地の變はることなき基よ汝らエホバの辯争を聴け
エホバその民と辯争を徹しイスラエルと論ぜん」米
迦書六の二。

5 *Haec libertas...est maximum donum humane
nature a Deo collectum.* (この自由は……神のたま
ふ人性最大の賜なり) 帝政論一の四。煉。一八の七
三。

6 天使と人類。

7 童貞の誓約。三の101、110。

第五曲

「たとへ地上に見らるゝ度を超え

愛の熱を抱いて妾が汝を焰に燃やし

かゝて汝の眼の力を壓倒するとも

汝怪しむ勿れ。蓋し此は觀念するや

直ちに觀念さるゝ善に足を

進ましめる全き眺^{ながめ}より發してゐる。

見しのみにて常に愛を燃やす

永遠の光が既に汝の理智のうちに

いかに輝くかを良く妾は見る。

10 そして何ものかゝ汝の愛を拐^{かど}す^どとせば

それは此うちに貫き輝くこの光の

或る曲解されし痕跡にほかならず。

靈的智解に於けるダンテの進歩を悦びてベアトウリチエは微笑し、
約破棄の重大なることを諷す。やがて絃を離れて的を射る如く第
二天、星に至れば星も色めき諸靈は餌に誘はる池中の魚の如く浮び
來たる。彼等は欲望を抱きて世を去りしものなり。その中にヂウス
ティニアノ帝ありてダンテを迎へ悦びに輝く。

1 神の幻影、汝の眼を眩暈せしむる愛の熱は神の幻

影より發す。神の幻影は神の智識を靈魂に啓示する
に準じて神に對する愛を起こす。煉、一七の九一以
下。同、一八の一九以下。ベアトアリチエは天より
天に登る毎に美を増す。

2 前曲一二四一六のダンテの言葉により。

3 靈魂は本來善を願ふ。罪を犯すは善を假裝するも
のに迷はさるゝなり。煉、一六の九一。

この犠牲の本質に二つのことが結ばる。¹³

一は犠牲の倣さるゝ物に關り^{かゝ}

他は契約そのものである。

この後者は守られずしては

決して抹殺されず。

これに就ては明かに上に語つた。

即ち汝が方^{たま}に知ることく

五 献げらるゝ物は換へ得るも¹⁴

献げることとは希伯來人^{エブレイ}に實^{じつ}に必至であつた。

次に供物^{くもつ}として汝に示されたものは

宜しく何の咎^{とがめ}もなしに

他の供物と取換へ得るものである。

然し白きまた黄^{きいろ}き鍵の廻るを待たで¹⁵

何人にもおのが意^{こころ}のまゝに

その肩の荷を換へざらしめよ。

13 誓約は二要素より成る、即ち(一)童貞、清貧等誓約

の對象物(二)誓約の決意行動即ち自由意志の犠牲に
れなり。後者は絶対に廢棄し得ず。前者は變更し得
るも二個の條件即ち(一)教會の許可を受け(二)代用
物が原の物よりも價高きものたるを要す。

14 利未記第二十七章。 出埃及記一三〇・一三。三四の二

〇。民數紀略一八の一五—一八。

15 聖彼得の双鍵の廻轉なしに。 即ち教會の許可なし

に。一般の觀念によれば黄金の鍵は教會の權威を表
示し、銀の鍵は人心を鑑識する智力を表示す。煉、
九の一—一八—二六。

蓋し神と人との間に契約をむすぶ時

妾の云ふところの此實⁸が犠牲にせられ

三〇 然もそれは自發的に做される。

されば倍償^{はいしやう}として何が做され得るぞ。

献げし物を善用しやうと思ふは

不義の所得にて善き業^{わざ}を做さうとするのである。¹⁰

一層重大なる點を今汝は會得した。¹¹

然し此に就て聖き教會は、妾が汝に

露^{あらは}にした真理に反すると見える赦^{ゆるし}を與へる故

なほ暫く汝は食卓に坐らねばならぬ。¹²

蓋し汝の採れる硬き食物を消化するに

また助力を要するからである。

四〇 妾が汝に啓示^{しめ}したことに

汝の心を開き、それを中に固めよ

聽きて留め置かずば知識とならず。

8 意思の自由。

9 童貞に關するこの峻嚴なる見解はダンテの獨創にしてトマス・アクヰナスの教義は斯く嚴しからず。

10 一度誓ひしことを假へ善きことにもせよ他用に供するは、誓約破棄の罪に問はれざるを得ざること恰も惡錢にて慈善を爲し得ざるが如し。

11 一三—五行を見よ。誓約破戒は他の如何なる奉仕によりても償はれ得ず、蓋し如何なる犠牲も自由意志の犠牲には比すべからざればなり。

12 なほ暫くベアトリチエに傾聽するを要す。

汝等くろす基督教徒よ、少しく行動に慎重なれ。

風のまに／＼動く羽のごとからず

また凡ての水が汝等を洗ふとも思はざれ。²¹

なんぢらは舊新約書

また汝等を導く教會の牧者を有す。

これにて汝等の救拯ナクに足れりとせよ。

他にもし惡しき貪婪が汝等に叫ぶとも

へ 汝等愚鈍な羊でなく、人であれ。²²

かくて汝等の中なる猶太人ゲワテオに汝等を笑はしめざれ。²³

なんぢら己が母の乳を棄て、

愚かにも放埒におのが意のまゝに

己と闘ふ羔のごとく爲さざれ」。

わが記す如く斯くベアトッリチエは私に云つた。

かくて全く慕はし氣に世界の

最も活きづく方へと再び向いた。

20 煉、一〇の一二三。

21 眞の教會的權威に據れる洗禮のみ人間の罪を除く。

22 教會及び聖書の教ふるよりも容易なる條件にて赦罪を約することなりとも信ずる勿れ。此等は人にあら

ず羊と呼べるべきである」饗宴篇一の二。

23 猶太人は只舊約聖書を信ずるのみなるに良く誓約を守る。汝等更に新約聖書を信ずる基督教徒よ誓約を破りて彼等に笑はるゝ勿れ。

24 清火天。或は、天の最も迅速なる部分にして（饗宴篇二の四）今太陽のある赤道。又は、東方のことか。一の六四。

また下ろせし物を取り上げらるゝ物に

包まるゝこと、六に四の如くならずば¹⁶

○ 一切の交換の愚なるを思はしめよ。

されば自らの尊嚴により一切の衡を^{はかり}

引きさぐるほどに重きものは凡て¹⁷

他の費によつて償い難い。

誓約を人間に戯れと思はしめされ。

誠實なれ、然もこれを做すにデエプテが

その初供に做した如く斜視たらざれ¹⁸

誓ひを守つて優れる惡を做さんよりは

寧ろ『われ誤れり』と彼は云ふべきであつた。

同じく愚かなりし希臘の大將¹⁹を汝は見るであらう。

○ これがためイフィデニアは己が美貌を哭き^{なげ}

また斯くて行はれし禮拜を傳へ聞きし

愚者賢者なべてに彼女を哭かしめた。

16 代用されんとする誓約の對象物は破棄されんとする

誓約の對象物よりも高價なること六對四即ち一倍半
たらざるべからず。利未記二七章には五分の一を増
せとあり。蓋しダントは概數を云ひしものならん。

17 童貞の誓約はその一なり。

18 誓約遵守には嚴格誠實なれ、然もエフタの如く極端
に馳する勿れ。猶太の勇士エフタ誓願を立て、アン
モン人に勝たば我家の戸より出て、最初に彼を迎ふ
るものを燔祭として獻ぐと云へり。やがて凱旋の時
その獨娘鼓を執り舞ひ踊りて彼を迎ふ。彼「我エホ
バに向かひて口を開きしによりて改むること能は
ず」と云つて彼女を燔祭とせり。士師記一一の三〇—
九。

19 アガメムノネ。 トウロイア遠征の際逆風を止どめ
て順風を與へんか其年に生まるゝ最も美しきものを
捧ぐべしとディアナ女神に誓願し、遂に娘イフィデ
ニアを犠牲にせり。ダントはこゝに例の如く聖賢及
び古典より各その例を採れり。

千餘の灼きのわれらの方に

寄せくるを見、いづれも「見よ

我等の愛を増す者を」と云ふのが聞こえた。

やがて各がわれらに來た時

それより發する燦爛たる灼きに

影も歡喜くわんきに充つるよと見えた。

讀者よ、もし斯く始めて

二〇 前に進まずば、汝は先を知らんと

いかに悶もんを求むるかを思へ。

されば汝自らより推して、彼等がわが眼に

明あきらはになるや否や、彼等よりその狀さまを

聞かんと如何にわが願ひしかを識れ。

「軍役廢つよめまづるに恩寵おんちゆうが

永遠凱旋の王坐を見るを容す

あゝ生なままれ善よきなる人よ、全天を貫いて

28 我等の愛を表す機會を與へる者な。諸靈は今やダ

ンテの疑問を解きて彼等の愛を示す機會を得るを悦ぶなり。煉、一五の五五―七。七一以下。

29 militia. 戦闘の教會の一員として地上生活の終らざる前に、即ち死せざるに。地上の教會は戦闘の教會天上の教會は凱旋の教會 (chiesa trionfante) なり。

彼女の沈黙と彼女の變はれる貌^{すがた}とが

既に新しい疑惑を進めて

わが貪婪な才に沈黙を課した。

かくて宛ら絃の靜まらざるに

的^{まと}を射る箭のごとく我等は

第二の王國²⁵に馳せてゐた。

この天の光をわが貴女が受けるや

茲にいたく悦び、それがため遊星^{ふし}自らも

輝き増さるのを私は見た。

既に星が變はつて微笑^{なみえ}んだ以上

生來^{しやうらい}あらゆる狀^{さま}に變じうる私は²⁷

如何になつたであらうぞ。

100 靜かに澄める魚池^{いけ}にゐる魚が

彼等の餌^えともあもはれる狀^{さま}して

外^{そと}より來るものに寄り集まるやうに

25 水星天。饗宴篇二の一四。辨證法の表徴。榮譽と

名聲を追求して活動せし諸靈こゝに現る。地球の蔭
なほ此處に達す。地上の榮譽を慕ふことが天の榮光
に對する憧憬より彼等を遠ざけし故斯く低き天界に
彼等は現る。

26 水星。「水星はその結ばる遊星の善にも惡にも容易
く動かさる」ブルネット・ラティニの「實」一の三。

27 生物たる人間としての私は。

和やわく濃こい水蒸氣すいじょうきを熱あつが嚙かみ去はなつた時

太陽が極度の光により

あのれ自みづからを蔽おほすやうに³⁷

悦よろこび優なごつて聖せいき像かたちは

自らの光線裡に身を私より蔽し

かく包み包まりつゝ

次の曲の歌ふごとく私に答へた。³⁸

37 煉、一七の五二。

擴がる光に我等は燃やされる。

されば我等により汝自らを輝かさんと

二三 願はど、心のまゝに飽けよかし」。

斯くその敬虔なる靈の一つが私に語つた。

するとベアトウリチエは「語れ、安んじて語れ

また神々として彼等に信頼せよ」。

「汝自らの光のうちに如何に身を巢くふか

また汝が微笑むや眼が閃めくので

汝の眼によつて光を曳くを私は明かに見る。

しかし尊き魂よ、汝が誰であり

また他の光線により人間に蔽はれる

圈の段を汝が占めをる譯を私は知らない」。

二三 曩に私に語りし光に向かつて

斯く私は云つた。するとそれは

有りしに優つて甚く輝いて來た。

30 八の三四―九。九の六二。

31 デウス・テイニアノ皇帝。 次曲を見よ。

32 凡ての諸靈を恰も神々のごとくに信頼せよ。「恰も聖き人々が神々と呼べるゝ如く」神學綱要三の「一六。

33 こゝに諸靈の参見ゆ。然し以後清火大に到るまで諸靈は全く火に包まれて蔽はる。

34 二の一四四。

35 太陽の光線。 水星は太陽に近きが故良く見るを得ず。饗宴篇二の一四。コペルニクスは嘗て水星を見得ざりしことを臨終に嘆じたりと傳へらる。

36 月天に於けると同様ダントは靈に(一)何人なりや(二)何故にこの圈にありやの二個の質問を發す。

俺は基督のうちに一性以上を信せず¹⁰

この信仰に俺は満足してゐた。

しかし至高の牧者たる祝福まれし

アガビトが、彼の言葉によつて¹²

俺を純なる信仰に導いた。

俺は彼を信じた。そして凡ゆる矛盾が

虚妄眞實いづれかであるを汝が観るごとく

彼の所信を今俺は明かに識る。¹³

教會と歩調を共にして進むや直ちに

恩寵により神はこの高き事業に俺を

靈感するを好とし、俺はこれに全身を委ねた。

斯くてわがベリザルに武器を委ねた。¹⁴

天の右手が彼に堅くむすばれて

わが慰ふべき徴候となつた。¹⁵

さて第一の疑問に對するわが答は

situationes の二編纂あり。以上四編纂は一般に Corpus Juris Civilis と稱せられて所謂「羅馬法」を構成す。一一行の「原愛」とは聖靈のこと。

10 基督の神性のみを信じてその人性を信ぜず。これは Eutyches の説にして皇后テオドウラも此を主張せり。

11 法王。

12 アガベトウス。五三五―三六六年に亘り僅か十箇月

法王たり。彼はゴトの王テオダハドゥに差遣されて君府に來り王と皇帝の間を調停せんと圖りて成功せざりしも、デウスティニアノ皇帝を説き、基督一性論者たりとの理由によりて君府の族長を廢黜せしめ以つて東方並に西方兩教會に於ける羅馬法王の權力の優越を確立せしめたり。

13 二個の矛盾せる命題の一が必ず眞にして他が必ず偽ならざる可からざるが如く今天上に來りて基督の兩性の眞理が明かになれり。

14 ベリサリウス。五〇五年頃に生まれデウスティニアノ皇帝の有名なる將軍なり。彼は阿弗利加に於けるブンダル王國を顛覆し伊太利亞をゴト人より奪還せり。五六五年死。

15 五の一二七。

第六曲

「ラギナを娶りし古人の後に従ひ

嘗て辿りし諸天の軌道に逆つて

『鷲』をコスタンティノが回らしてより

百年また百年餘『神の鳥』は

その發祥の地たる山に近く

歐羅巴の際端に居を据ゑた。

かくて彼處にて聖き翼の下蔭に

手より手へと世界を支配し

かく變遷して俺にまで及んだ。

一〇俺はチザレたりしデウステイニアノにて

今自ら感ずる原愛の意に従ひ、法律の中より

冗漫無用のものを除いた者である。

然しこの事業に意を注いだ前

法典編纂者として有名なデウステイニアノ皇帝の靈、羅馬帝業の起原より説き始め、斯くも崇高偉大なる理想を省みずして徒らに政争を事とする伊太利亞の現状を慨嘆す。次で私利を貪りしと讒せられ怫然として伯爵家を去りしロメオのことを語る。

1 羅馬帝國の創業者なるエネア。彼は既にトゥルノ

の許嫁なりしラギニア(地、四の一二六註。煉、一七の三四—九)をその父の許しを得て妻とせり。

2 コンスタンティヌス大帝(三〇六—三三七)年。彼は

帝國の座所を羅馬よりビザンティウムに移し、西方より東方へ即ちトゥロイアより伊太利亞にエネアが赴きし道を逆に『鷲』を携へ行けり。『鷲』は帝國の權威の表象。

3 遷都の始まりし三二四年よりデウステイニアノが皇帝となりし五二七年迄。

4 『鷲』

5 ビザンティウムに面するトゥロアデ(古代のトゥロイア)地方の山。

6 ビザンティウム。現今の君府。

7 皇帝の稱號。ダンテは茲に、たりしといふ過去勸詞

を用ゐて、デウステイニアノは地上にては皇帝たりしが天上に於ては地上の尊號の存在せざることを示せり。煉、一九の一七—三八。

8 ユステイニウス大帝(五二七—六五五年)。立法家な

るこの皇帝が茲に羅馬帝國の代表者たるは帝國存立の意義が平和の建設にありしことを示す。

9 諸の法律を包括して五十卷より成る Pandectae 及び帝國の憲法の編纂たる Justinianus Codex の二大事業。その他に Institutiones 及び Novellae Con-

同盟者等に對し、『驚』が卓絶せる羅馬人等に

押し立てられて何を傲したかを汝は知る。

これによりトルクアト、また蓬髮ゆゑに

名を得たク³¹ニツイオ、²⁹デチ家とファビ家が

俺^{わし}が喜んで薫^からす名聲を獲た。

これはボオ河よ、汝の滑り落つるアルベの

巖々をアンニバレに従つて越えし

亞刺比亞人の傲慢を地にひしいだ。

この旗下にスシビオネとボムベオとは

若うして凱旋し、汝が麓に生まれし

かの丘³⁵にこれは苦々しく映じた。

後^{のち}全天が世界をその靜寧^{さま}な狀に

歸せしめんと欲した頃^{ころは}ひ

羅馬の意志によりチザレ³⁷かこれを探つた。

そしてワロ³⁸より遠くレノ³⁹に亘つて此が

えて羅馬を占領し六ヶ月の後償金一千磅を獲て歸れり。傳説によれば償金受取の際アレノは羅馬の秤目正しからずと稱して己が劍を秤に投ずるや、カミルと羅馬の軍隊現れて彼及びガウル人を攻撃殺戮せりと。

26 エヒルスの王ヒルルス(前三一六年頃一二七二年頃)前二八〇年侵入して羅馬を去る二十四哩の處に迄至りしが退却し、前二七五年に父襲ひしがクリウス・デシタトゥスの爲に撃破され、同二七二年アルゴス包圍の際根より一婦人の投ぜし瓦に打たれて死せりと。

27 テイトゥス・マンリウス・トルクアトウス。有名な羅馬の英雄にして巨大なるガウル人と一騎打をなして此を殺し屍體の頸飾を取りて己が頸に着けし故にTorquatus(頸飾を着くる)と名づけらる。彼は命を破りし己が子に軍紀振肅のために敢て殺せり。

28 ルキウス・ク³¹ニツイウス・キンキナトウス。古代羅馬共和國の英雄にして廉直誠實の典型たり。前四五八年羅馬を救ふため劬を棄て、敵を擊攘するや、直ちに田園に歸臥し、後八十歳にして再び執政官に選ばれたり。Cincinnatusは縮髮の意なり。

29 羅馬の名門。父、子、孫共に同じ名を有し前三四〇年より前二七九年に亘りて國家の爲に生命を獻けたり。

30 同じく羅馬の名門。この一家より多くの有名なる執政官出でたり。その中ファビウス・マクシムスはハンニバルを撃退せり。

31 ハンニバル。彼の軍をスシビオネ撃破せり。地三一の二一五。

こゝに終る。しかし前後の事情が

三〇 俺に續いて數言を加へしめる。¹⁶

これ『鷲』をわが物顔にする者、¹⁷また此に

反對する者、¹⁸共に如何なる理由によつて¹⁹

この神聖な旗に謀反し居るかを汝に識らす爲である。

いかに大なる徳が此を尊敬するに價するものと

したかを見よ。かくて彼はバルランテが死んで²⁰

『鷲』に王國を與へた時より語り始めた

「『鷲』が三百年以上アルバを²¹

おのが住處^{すみか}とし、遂にこれが爲更に

三が三に對して戦ふ時に及んだのを汝は識る。²²

四〇 またサビニ婦人の禍よりして²³

ルクレッシアの悲嘆に至るまで²⁴

『鷲』の功績を汝は知る。

ブレンノに對し、ピルロに對し、また他の諸公と²⁵

16 既にヂウスティニアノはその皇帝たりしことを語りし故、勢ひ帝國の性質と權威とに就て語らざるを得ず。

17 ギベルリニ黨。皇帝擁護派。

18 グエルフィ黨。教會擁護派。

19 無論諷刺にして意味は「いかなる不正によつて」なり。

20 バルランテウムの王エヴァンデルの子。エネアを扶

けトゥルノと戦ひて死せり。後バルランテの帶を纏へるトゥルノを見てエネアこれを殺せり。かくてエ

ネアはラゼニアを娶りラティオ王國の王となれり。

21 ラティオ王國最古の邑にしてエネアの子アスカニウス此を建設せりと傳へらる。

22 羅馬の名門 Horatii の三兄弟アルバの名門 Curiatii の三兄弟と覇權を争ひて遂に勝てり。以下羅馬帝國の歴史を述ぶ。

23 サビノとは中央伊太利亞に住みし古代種族の名なり。ロムルス羅馬を建設せしも婦人の缺乏を感じたれば

近隣に住みしサビノ族を招き、宴闌なる頃羅馬の青年等をして客人等の伴へる處女等を奪ひ去らしむ。

以後兩種族間に争ひ絶えざりしがサビノの婦人等身を軍中に投じて彼等の夫等と父等の和睦せんことを願ひしかば兩種族は遂に一國民となれり。

24 以後七代の王朝に國權發揚せしがルキウスの妻ルクレティア夫の叔父セクストゥス・タルクニヌスに辱められて自刃せり。かくてセクストゥスの父タルクニヌス・スウペルブスは羅馬王の位を退き遂に羅馬共和國の建設となれり(前五一〇年)。地、四の一・二七。

25 カウルの主領にして前三九〇年アペンニノ山脈を越

ブルトはカッショと共に地獄に咆哮する。
まだモデナとベルヂアとを憂ひしめる。

悲しめるクレオパトラは此が爲に尙も哭く。⁶⁶

彼女はその前に逃げ、蛇により

違かなる黒き死を果たした。

彼と共にこれは遠く紅き海岸に馳せ

ひ
彼と共にこれは世界を平安に置き

遂にヂアノに向かひその神殿を鎖した。⁵⁷

しかし俺をして語らしめるこの旗が

これに従属する此世の王國に亘つて

曩に爲しまだ後に爲すべかりし事は

(明かな眼と純なる情意とをもつて

その第三つチエザレの手にあるを見んか)

その姿微小朦朧たるものとなる。

即ち俺を靈感する『活ける正義』は

46 煉、一八の一〇二。

47 希臘のドラツツオにてボムベオに撃退されしがテッサリアのフアルサリアにて全く彼を撃破せり。ボムベオ埃及(ニロ河—ナイル河—にて示す)に逃れしもトロムメオ(六九行註)に弑せらる。

48 エネアが従者等と共に伊太利亞に向け出帆せし處。シモエンタ河程遠からず流る。

49 トウロイア王ブリアモの長子。彼はアキルレに殺

され屍體は一度希臘軍の陣營に運ばれしが、後トウロアに返せり。この句は、チエザレはヘレスポント海峡を渡りしとなり。

50 埃及王プトレマイオス第十二世(前五一—四七年)。

父の死後姉妹なるクレオパトラと争ひチエザレの爲に破られ遂に溺死せり。

51 ヌミディア王イユムサルの子。絶えずチエザレに反抗したりき。

52 西班牙。前四五年ムンダの役にてボムベオの子等の軍を撃破す。

53 アウグスト大帝。前四三年マルコ・アントニオをモ

デナに伐ち後叔父チエザレの暗殺者たるブルトとカッショを敗りアントニオの兄弟ルチオをベルヂアに撃ちボムベオを亡ぼし埃及にアントニオとクレオパトラを殺し、かくて内亂を終結せしめたり。

54 地、三四の六四—七。同處に彼等は言葉を發せずと記さる。ダンテこれを忘れて此處に「咆哮する」と書きしものならん。斯る例煉、二二の一—三にもあり。

55 アントニオの遂にアクティウムに斃れしを見、クレオパトラ毒蛇に身を咬まして自殺す。地、五の六三。

做した事を、イサラが見、エラとセンナ

またロダノ⁴³を満たす凡ての谿が見た。

ラエンナより出で、ルビコンを

飛び越えた後これが做した大飛躍は

舌も筆も追ひ得ず。

西班牙⁴⁵として此は軍勢を轉じ

次でドゥラツツオに向つてファルサリアを攻め

かくて暑きニロ河に痛みを覺えしめた。

これは再び發祥の地なるアンタンドウロと

シモエンタ河またエットレの臥す處を見

次でうち振ひてトロムメオに禍を加へた。

ちそれより電光のごとくイウバに殺到し

續いて汝等の西方に轉じ

彼處にてボムベオの喇叭を聞いた。

次の旗手と共に爲された事のため

32 ダンテ時代にカルタゴは亞刺比亞人に占有されをれり。古代のカルタゴ人をダンテが當時の占有者亞刺比亞人(Arab)とせしは押韻のためなりしにや。

33 大シビオ(前二三四年頃—同一八三年頃)。

年若うしてティキヌスにハンニバルと戦ひ父の生命を救へり。二十四歳にして西班牙遠征軍の長となり、阿弗利加を平定せり。

34 大ボムベイウス(前一一〇—同四八年)。

二十五歳に至らずして凱旋せり。

35 ダンテの生まれしフィレンツェに蔽ひかゝる山の上にあるフイエツレ。これは有名な陰謀家カティリナ(前六二年死)の本陣なりしが、彼の戦死後破壊されたりき。

36 基督の降誕の頃。

37 カイウス・ユリウス・カエサル(ジュリアス・シーザア)。前一〇〇年生。ダンテによれば羅馬帝國最初の皇帝。以下彼の功績を述べ。

38 南方佛蘭西の河。

39 萊因河。

40 佛蘭西のイゼル(Isere)河。

41 同じく佛蘭西の河にして現今はサオヌ(Saône)と云ふ。

42 佛蘭西のセイヌ(Seine)河。

43 同じく佛蘭西のロオヌ河。

44 チュザレのガウル侵入を指す。

45 北方伊太利亞の小流にして羅馬共和國時代にはガウル人領と伊太利亞との境界なりき。チュザレは己が領地を去り、元老院の命令なしに此河を渡れり。これ羅馬共和國に對する宣戦にして、内亂これより始まる。地、二八の九六。

回らしめよ、回らしめよ。蓋し正義と此旗とを
分かつ者は到底良く此に従ひ得ないからである。

またこの新しきカルロにそのグエルファイ黨と共に
これを打倒さしめず、更に高き獅子より
毛を撈りし爪を恐れしめよ。

既に數多度子等は父の罪のために哭いた。

110 されば彼の百合花のため、神が紋章を

變へたまふとは彼に信ぜしめざれ。

この小さき星は、榮と譽とが

繼ぎ來たらんがため活動せる

諸の善き靈に飾られる。

さて斯く側に外れて願望が彼方に

登る時、上に昇る眞の愛の光線は

勢ひ活力を削がねばならぬ。

然し我等の功德と應酬の量の

63 アンジュのシャルルの子なるナポリ王シャルル第二世。グエルファイ黨の首領にしてダンテは極力彼を蔑みたり。

64 シヤルルよりも強き權力者を亡ぼせし「鷲」の爪。

65 人類を支配する神の器關たる帝國の紋章を區々たる佛蘭西王家のために神が變更を容し給ふとは信ぜしめざれ。

66 水星。以下ダンテの第二問(五曲一二四)に對する答なり。

67 願望が名譽や榮華に置かるゝ時は神を慕ふ精神が減却す。

その忿怒の復讐を果たす光榮を

九〇 俺の語るこの者の手にありし『驚』に容^{ゆる}した⁶⁹

今こゝに俺が汝に説くことに愕け。

後これはテイトと共に古^{いにしへ}の罪の復讐に

復讐せんとして馳せゆいた⁶⁰。

それよりロンゴバルド人⁶¹の齒が

聖き教會を嚙んだ時、この旗の翼の下に

カルロ・マニ⁶²は征服してこれを救ふた。

俺^わが上に糾弾した人々

並びに汝等の凡ゆる禍の原因たる

彼等の罪を今汝は審判し得る。

100 或る者はこの公旗に黄^{きう}百合花^{はく}を逆はせ

他の者はこれを一黨派のものにし

かくて何れ^どの罪大なりや見分け難し。

ギベルリニ黨をして他の旗の下^{もと}にその策略を

56 紅海の邊。

57 デアノ(ヤマス)の神殿の扉は平和の時にのみ鎖されたり。蓋し戦時中はデアノ神は戰場に赴きて不在なりと想像され扉は開放されたりき。共和國時代を通じて此扉の鎖されしは只二回のみ。然しアクグストの治世には三度鎖され、その中一回は「全天が世界をその靜寧な狀に歸せしめんと欲した一時代(五

五、六行)にして此時基督降誕したりと」。

58 皇帝ティベリオ。彼の時代に基督磔殺され、贖罪の事業を完成せり。これに比ぶべき偉業は空前絶後なりき。

59 基督の磔殺は羅馬の權威の下に行はれたりき。斯くてアダムの罪は復讐されしなり。帝政論二の一三。

60 アダムの罪に對する復讐は基督の磔殺として果たされたり。而して此復讐に對する復讐として羅馬の軍將テイト(テイトウス)はエルサレムを陥れたり。

61 テュートン族にして北方伊太利亞に侵入し、ロムバルディアの名を残せり。カルロ・マニオ(シヤルマニョ)法王アドウリアノ第一世の乞を容れロムバルディアの首府パヴィアを陥れ該種族最後の王デジテリオを俘虜とせり。ダンテがこれを『驚』の功業とするは年代錯誤に由る。

62 佛蘭西の紋章たる fleur-de-lys 法王擁護のグヘルフィ黨は佛王の勢力を借りて帝國に反抗し、ギベルリニ黨は帝國の名の下に徒らに黨派的目的を遂行せんとせり。三一—三行を見よ。

女王とした。⁷¹そして彼のために斯く傲したのは

賤しき人にして巡禮なるロメオであつた。⁷²

やがて讒言が彼を驅つて

十より七と五を彼に齎らせし

この正しき人に計算を求めしめた。⁷³

そこで彼は貧しく年老いて立ち去つた。

一四〇 然し生命を麴麴の一片に乞ひつゝも

彼の抱きし心を若し世が知るならば

大いに稱へ、又いよく彼を稱へたであらう。

71 長女マガレットは佛王ルイ第九世に、次女エリオノラは英王ヘンリ第三世に、三女サンツィアはヘンリ第三世の弟なるリチャドに、四女ベアトワリチエはアンジュのシャルルに嫁して皆女王となれり。長女を嫁せしめし時ロメオは「一切を我に委ねて價を惜む勿れ、蓋し長女を善く婚せしめんか、他の娘等は長女の親屬關係によりて善き結婚を安價に倣すを得ん」と云ひしと。

72 彼の名 Romeo (Romieu) よりして巡禮と云ひ傳へられしなり。「新生」四一。

73 プロパンスの貴族等讒してロメオは伯爵の財産を私せりと告ぐ。依つて伯爵が彼に勘定を求めしため、彼は佛然として驃を伴ひ、杖と旅囊とを携へて去り再び姿を現さざりしと。

等しきは、われらの分である。

一三〇 即ち兩者の少からず多からざるを我等は見る。

されば『活ける正義』は我等の衷なる情意を
いと甘美にし、斯くていかなる不義にも

永久に曲げざらしめる。

さまざまな聲々が下界に甘美な節となるごとく

われらの生涯にては異なれる坐が

此等の輪のうちに快き調となる。

さてこの眞珠のうちに

ロメオの光が輝く。彼の美しく

偉大なる事業が嘉みされなかつた。

一三〇 然し彼を陥れたプロゼンツァ人等は

笑を見せず。かくて他人の善行に

身を害ふ彼は惡しき道を辿りゆく。

ラモンド・ベリンギエリは四人の娘を生み悉く

68 受福者の諸階級はその功德に準じて諸天に現る。

三の七〇、七一。

69 水星。二の三六。

70 プロザンスの伯爵ラモンド・ベリンギエリ（一二四五
年死）の執事。財政を整理し伯爵の四人の娘を女
王とし大いに用ゐられしが遂に貴族等に讒せらるゝ
に至れり。

たゞ^ベ Be と^イ Ho のみにて私を

睡^{まどろ}む人のやうに再び首垂^{うなだ}れしめた。⁶

暫く私を斯く棄て置いた後

人を火の中にも福ならしめる微笑⁷もて

私を光射しつゝ、ベアトウリチエは始めた

「わが謬ることなき告示^{しめし}によれば⁸

ニ 復讎が正しく復讎されしとは如何^いといふ^{かん}

一事が汝を思ひに耽らしめる。

しかし妾は汝の心を速かに解かう。

されば聴け、わが言葉は

大なる教義の賜を汝に與へやうとする。

己が益の爲意志の力の上に置かれた銜^{くつわ}を

耐^{しの}ばなかつたので、かの生まれざりし人⁹は

己を罪し、あのが子孫を悉く罪した。¹⁰

かくて多くの世紀の間大なる謬^{あやまり}のうちに

5 ベアトウリチエの名の響きのみにて。

6 三の七—九。

7 煉、二七の五四。

8 ベアトウリチエは神を眺め神の心に反映するダンテの思ひを看取せり。茲にては復讎に關してデウス・テイニアノ皇帝の言葉がダンテの心に起こせし疑惑（六の九—一三）を看取す。

9 アダム。彼は女より生まれず直接神に創造された
り。

10 二六の一—五—七。煉、二九の二四。

第七曲

Osanna sanctus Deus Sabaoth,

Superillustrans claritate tua

Felices ignes horum malacoth!

二重の光をあはした此本體が

自らの節にあはせて廻りながら

斯く歌ふのが私に見えた。

そして此と他の光とが舞ひ出し

宛らいと迅き火花のごとく

忽ち遠ざかつて身を私より蔽ふた。

一〇 私は訝りつゝ云つた「語れ、語れ

その甘美な雪^{しんぷく}にてわが渴^{とど}きを止める

わが貴女に語れ」と心の中に私は云つた。

然しわが全身を支配する敬ひの心は

ヂウス・ステイニアノ皇帝及びその他の諸靈は萬軍の主を讃美しつゝ清
火天に登り去る。ベアトウリチエ即ち帝國の使命と關聯して人類墮落
の問題に入り大體アンセルムの神學說に基きて基督贖罪の根本原理
を説いて詳し。

1 希伯來語の *tsabioth* について「萬軍」の意。

2 オザシナ、サバオトウ聖き神。

汝の輝にてこの王國の祝福^{めづ}まれし

もろくの火を光被したまふ

3 前曲にて語りしヂウス・ステイニアノ皇帝の靈。二重

の光云々はダンテの心を照らすことを悦びて光を増
せしこと。五の一〇三以下。或は皇帝及び立法者と

して二重の光榮を示すとも解せらる。

4 彼等の常住の天即ち清火天に歸りしなり。

『人格』の何たるかを我等省んか¹⁹

かく大なる害惡も嘗てなかつた。²⁰

されば一の行動より異なるものが出た。

即ち一の死が神にも猶太人にも悦ばれた。

これがため地は震ひ天は開かれた。²¹

正しき復讐が後に正しき法廷によつて

吾復讐されたと云ふことが既早²²

汝に難しと見えぬ筈である。

しかし今一つの結節のうちに汝の心が

思ひより思ひに絡み、其より解かれんことを

大いに願つて待つのを妾は見る。

汝は云ふ『わが聞きしことは良く識る。²³

然しわれらの贖罪のため神が此方法のみを

選びたまふた譯が私に蔽されてゐる』と。

この定は、兄弟よ、智が

19 神の子たることを。

20 基督の人性よりすれば人類の罪のため十字架の上に罰せられしは正當なり。然し彼の神性よりすれば世界の歴史上これ程大なる罪惡はなし。さればこそティトウスのエルサレム占領によりて復讐されしなれ。帝政論二の一三。

21 「殿の幔上より下まで裂けて二つとなり、又地ふるひ磐さけ」馬太傳二七の五一。

22 羅馬帝國の裁判（此場合にはティトウスのエルサレム占領）が全人類に對する正しき法律（正義）によりて基督磔殺の不法を復讐せり。

23 神の子なる基督を磔殺せしむるといふ。

人類は下界に病んで横たはり

三〇 遂に『神の道』¹¹が進んでくだり

あのが造主より離れ去りし性を

只あのが永遠の愛の作動により

一身に結びたまふに至つた。¹⁴

さて今妾の話すことに眼を向けよ。

創造られしまゝにはこの性は

神と結びて純且つ善であつた。

しかし眞の道¹⁶とその生涯より

外れ去つたので彼は

あのを故に樂園より追はれた。¹⁷

四〇 されば基督の採り給ひし性¹⁸より量らんか

十字架が受けし刑罰に優つて

かく正しく刺されたものが嘗てない。

同時にまたこの性を身に結びし

11 基督。 約翰傳一の二一五。

12 人性。

13 聖靈。

14 受肉して世に降り給へり。 三三の四一九。

15 人性。

16 地、一の二一。

17 創世記第三章。

18 人性。

即ち萬象を光射する『聖と熱』は

己に最も似るものうちに最も活く。

すべて此等の特權³¹を人間は

享^うけてゐる。故に人もし過^{あやま}たんか

おのが尊嚴より墮ちねばならぬ。

彼より權^{けん}を剝奪し、『至高の善』に

△ 似つかはぬものとしたのは只罪であり

かくてその光の照らすことが微かになつた。

そして罪の空虚にする處を惡しき快樂^{けらく}に逆ひ

正しき刑罰によつて盈たさぬかぎり

人は永久その尊嚴に復歸するを得ず。³²

汝等の性³³が、總てその種³⁴に於て

罪を犯した時、樂園^{パラダイス}よりと共に

この尊嚴より移されたのである。

また良く微細に審^{しら}べんか、何れか次の淺瀬を

31 不死、自由意志、神に肖たること、神よりの愛等。

五の一九―二四。

32 以下の贖罪論は直接間接アンセルムの *Our Days*

Home (何故に神は人となりしや) に據る。特にその第一章一五節を見よ。

33 人性即ち人類。

34 アダム。

愛の焰に熟せざる

○なべての人の眼に埋れて残る。

實にこの標的は眺められること多くして

而も識られること稀なるゆゑ

この方法のいと畏き譯を妾は告げやう。

一切の憎惡を己より斥ける

『神の恵』は自らのうちに熱して

火花を發し永遠の美を表す。

此より直接に出づるものは

その後終局を知らず。即ち神の銘は

印せらるゝや永久に取り除かれず。

○神より直接に降るものは

全く自由である。即ち新しさのもの

力に従屬することがない。

これは甚く神に結び、斯くて神を甚く悦ばす。

24 以下人類墮落の状態を説かんとして先づ創造のことを語る。

25 原語は *eroino*。にして通常は嫉妬のことなるもダンの意義によれば愛の反對即ち憎惡を指す。

26 「彼(神)は善なりき、かく善にして何ものに對しても憎惡を起こさず」プラトンのティメウス二九頁。

27 *seuna honzo*。介在物なしに。直接間接の區別に關しては一三〇—一四一に詳し。

28 天使または人の靈魂等直接神に造られしものは。

29 *cosé hôte, cosé* は茲にては原因の意にして第二原因即ち天體と原素のこと。

30 天使により動かさるゝ諸天の力に従屬せず。煉、一六の七九—八一。

即ちその一或は實に双方により

人をその完き生涯に回復するを要した。

しかし行ふ者の行爲が有難ければ

有難きほど、行爲のいでし心の

慈悲深さを我等に示すゆゑ

世界に印する『神の恵』は

二〇 その凡ての道により満足して

汝等を再び引き上げやうと試み給ふた。

最後の夜と最初の日のあひだに

此と彼いづれの道によつても斯く高く

斯く壯大な業は嘗てなく又ないであらう。

蓋し神は恵みいや深く

只自ら赦し給ふよりも己を與へ

人をして自らを高うするに足らしめた。

また若し『神の子』が己を卑うして

38 前註の仁慈と眞理（正義）の二つの道。

39 開闢以來世の終りまで。

過ぎずしては如何なる途によつても

九〇 これを回復し得ざることを汝は知るであらう。

即ち神が全くその愛いづくしみによつて

赦し給ふか、或は人自ら

その愚行を倍償し得るかである。

能ふかぎりわが言葉に緊と

注ぎし如く、永遠の聖旨みむねの

深淵の中へ汝の眼を今注げ。

人は制限内にあつて決して満足を齎らし

得なかつた。蓋し引續く服従によつて

いかに謙卑いやしく降るとも、不順によつて

一〇〇 上らんと企てし度36に及び難いのである。

これ即ち人の力が塞がれて

自ら倍償を做し得ざりし譯である。

かくて神自らの道37

35 cortesia (慇懃)。

36 禁制の果を食らひて。創世記三の五。

37 「エホバのもろゝの道は……仁慈いづくしみなり真理まことなり」詩篇二五の一〇。茲に眞理とあるは正義の意なり。

「秩序を定めて萬象を己が智慧即ち法則の規範に一致せしむる神の義は宜しく眞理と云はるべきなり」神學綱要一の二一。

並びに彼等より成るものは

被造物つくられしものの力より形質フォルマを受ける。⁴⁶

彼等を作り成す物質は被造物つくられしものである。

彼等を廻りゆく諸の星にあつて

彼等に形質フォルマを與へる力も被造物つくられしものである。

この諸の聖き光の光線と運行とは

一四〇 物質の潜勢複合47より一切の獸と

植物との魂を引き出いだす。

しかし『至高の仁慈』は直接に

汝等の生命いのちを吹き入れ、己を愛せしめ給へば

かくて人は永久に彼を慕ひ喘いぐ。⁴⁹

さて最初の兩親50が共に造られた時

その際いかに人の肉が造られたかを省んか

此よりして進んで汝等51の

復活を推し測ることが能できる。⁵²』

46 諸元素とその結合より成れる物は神より直接に形成されず、天使等の動かす諸天に神の與へる其力より間接に形成さるゝなり。即ち太陽より生活力を、他の遊星より植物的乃至動物的生命を受く。

47 *complezione potenziata*. 植物的乃至感覺的(動物)の靈魂によりて形成され得る力を有する種々なる物質。暑、寒、溫、濕等或はその結合。饗宴篇四の二五に *complezione* を説明して *gli elementi della* (結合せる原素)とせり。

48 「エホバ神土の塵をもて人を造り生氣をその鼻に吹き入れたまへり人即ち生ける靈となりぬ」創世記二の七。

49 煉、一六の八五—九〇。同、二五の六一—七五。饗宴篇三の六。

50 アダムとエヴァ。

51 以上述べし説明により。

52 アダムとエヴァの肉體は直接に神に創造せられたり。

而して以上述べ來たりし神より直接に出づるものは不滅なりとの原理よりして、やがて贖罪の業の完了する最後の審判の時、人類の肉體が靈と共に復活してその本來の尊嚴を回復することが推論せられ得べし。

受肉し給はざりせば、他の凡ゆる方法は

130 正義に事缺いたであらう。⁴⁰

さて汝の一切の願望^{願望}を良く叶へんため

妾は或る處⁴¹に歸つて其を明かにし

わが識^しる如くに汝にも識らせやう。

汝は云ふ『私は水を見る。私は

火と空氣と土とを見る。また凡て

此等の混合が壞滅に歸し、存續が短い。

而も彼等はおなじく被造物^{つくられしもの}である。⁴²

然るに妾の云つたことが眞^{まこと}であれば

彼等は壞滅に冒かされない筈である』と。

130 兄弟よ、天使等また汝のゐる

この純なる國⁴³は造られて全存在⁴⁴を保ち

今ある姿を呈⁴⁵すと云はるべきである。

しかし汝の擧げし諸の原素

40 帝政論二の一三。

41 六七—九行を見よ。神に直接造られしものゝ不滅

に關するダンテの疑問。

42 直接神に造られしもの。

43 天。アリストテレスは原素の中火と土とを不滅な

るもの即ち純なるもの (eternals) の中に數へた

り。然しダンテにとりて不滅なるものは天使と人の

靈魂のみなりき。

44 直接神に。

45 彼等の本質的性質に於てのみならず今あるまゝの具

象的存在に於て永遠不變なり。

然し一際美しくなれるわが貴女を見て¹⁰

そこに到つたことを私は全く確信した。

やがて焔のうちに火が見えるやうに

また一が止まり一が行きつ戻りつして

聲のうちに聲が辨へられるやうに¹¹

その光のうちに数々の燈が環に動き

二〇 速度の強弱は、思ふに彼等の

永遠の眺の度によるよと見えた。¹²

此等の神々しい光が、初め高さ

セラフイムに始まる廻轉を去つて¹³

われらに來るのを見た人には

寒き雲よりいと速かに降る¹⁴

見ゆるまた見えざる風も¹⁴

阻まれて緩しと思はれるであらう。

かくて最先きに現れたものゝ中に響きし

は或は朝或は夕に現はるゝに據る……」饗宴篇二の一七。この天に Spiriti Amanti (戀の諸靈) 現る。
10 ベアトヤリチエは一天より一天に昇るにつれて美しさを増す。

11 斯かる歌曲を *canto fermo* と呼べり。

12 一四の四〇—二。

13 清火天にめぐる天使の最高級 なるセラフイムの舞踏に合はせてめぐる諸靈この天にくだる。煉、五の三七—四〇。

14 電光も普通の風も、アリストテレスに従へば電光とは燃焼によりて見ゆるものとなるる風に過ぎず。

第八曲

ダンテ愛の遊星なる金星大に登り、輝きの中に、聲の中に、聲する諸靈の宇宙舞踏を眺む。そのうちに王カルロ・マルテロあり。ダシテ不肖の子の生まるゝ所以を聞くや、彼は遺傳論より説きて諸星の感化力に及び遂に天性の尊貴を高調す。

世界はその危ふかり日にチプロの

美はしきものが第三擺線をめぐつて

狂亂の愛を射光すると汎く信じてゐた。

かくて昔の人々は昔ながらの迷ひに

たゞに彼女を崇めて犠牲を献げ

祈願の叫びを發したのみでなく

デイオネとクビドをも崇め

彼をその母、此をその子とし

またクビドがデイドの膝に坐したと云つた。

10 として我この曲の冒頭にする彼女より

人々は、時に頂より時に眉より

太陽が云ひ寄る星の名を探つた。

彼女に上りしことに私は氣付かなかつた。

1 虚妄欺瞞の神々の異教時代。邪信の刑罰に危き時代。四の六一三。

2 愛の女神エネレ(ギナス)。チプロ島附近の海より生まれし故 *kenprotyeueu* (チプロ生まれ) と云はる。

3 古代天文學に於て擺線(epicycle)といふ語は他の圓周に中心を有する圓を指せり。諸遊星の外觀上の運動を測定せんとしてプロレマイオスは地球をめぐる諸天の圈上に擺線を描きて諸遊星は運行すと假定せり。饗宴篇二の四。

4 デイオネはデオエによりてエネレを生めり。

5 戀の神。エネレの子とせらる。

6 テイロ王ベロの娘。叔父シケオに婚したりしが其富を奪はんとてデイドの兄弟バマリオネはシケオを殺せり。デイドは阿弗利加に逃れてカルタゲネを建設せり。クビドはエネアの子アスカニオに扮してデイドの膝に坐せしに、彼を眺めて遂にデイドはその父エネアを戀ひするに至れり。彼の去るに及び、彼女は失望の餘り自らを燒き殺せりと「エネアの歌」一の六五七以下。地、五の六二。

7 エネレ女神。

8 金星。或は日没後の宵の明星となり或は日の出前の曉の明星となる。

9 金星。「金星は二つの特性によりて修辭學に比べらる。一はその他の星よりも眺め美しきに據り、第二

そして「汝等の誰なるかを語れ」が
私の大なる愛情を印した聲であつた。

あゝ私が語つた時、おのが歡喜に

新しき歡喜が加へられ、そのいかに

量と質とに優りゆくを私は見しぞ。³²

かく成つて彼は私に云つた「俺が下界にゐたのは

吾東の間であつた。今少し長かりしならんには

來らんとする多くの禍が起こらずに濟んだであらう。

身の周圍に射光するわが喜悅が

宛らおのが絹に包まる塵のごとく、

俺をなんぢに秘めかくす。

汝はいたく俺を愛したが、それには

大いに譯があつた。下界に止まりをらんか

俺は葉以上に多くわが愛を汝に示したであらう。

ソルガと混じた後のロダノに²⁸

22 天の諸靈はダンテに答ふる時光の大ききと輝きを増せり。ピツカルダ(三の六七—九)も、ダウスティニアノ(五の「三三七」)も然りき。

23 ナボリ王カルロ二世の長子カルロ・マルテルロ。一二七一年に生まれ一二九五年疫病に罹り二十四歳にて死せり。彼の妻も同じく數週間に死せり。彼は一二九四年乃至五年フイレンツェに滞在せしが、その間にダンテを識るに至りしならん。フイレンツェ人は彼を大に尊敬し、彼は亦フイレンツェ人を大いに愛したりき。九の一—六。

24 一三〇九年カルロ二世死するや、ルテルロの繼承すべかりしナボリ王國が彼の子を排して彼の兄弟ロバルトを王とせしたため種々なる災ひ起これり(七六一—八四行)。

25 初代伊太利亞藝術に於いては靈魂を黄金色の榮光に包めり。五の一三六。二六の九七、一三四。此より後諸靈は全く光の姿にて現る。

26 果をもつて。

27 佛蘭西のソルグ河。アギニオンより三四哩の處にロオヌ河に結ばる。

28 佛蘭西のロオヌ河。六の六〇。

オザンナは、以後私をして此を再び聞かんと

三 願望に堪へざらしむる程のものであつた。

やがて一つ我等になほ近づき、獨りで

始めた「我等と歡びを共にし得るやう

我等凡ては専ら汝の意を倣さうとする。

世にありて嘗て汝が『その慧智

第三天を動かす汝等』と云ひし

天の王達と環を一にし廻轉を一にし

渴望を一にして我等は廻つてゐる。

また我等は甚く愛に充ち、汝を悦ばす爲には

暫しの静も等しく我等に嬉し」

四〇 わが眼は恭しくわが貴女に

おのれを捧げ、彼女より親しく

満足と確信とを受けた後

大なる誓ひをなした光に再び向けられた。

15 カルロ・マルテロ。四九行を見よ。

16 金星天。

17 饗宴篇最初の短詩の起句。

18 天使階級の下より第三位のもの。二八の一〇三—

五—

19 空間に於いて環を一にし、時間に於て廻轉を一にし

神の仰望に於て渴望を一にし。

20 廻轉と同じく。

21 彼女の意に適ふを見て安心し。

カルロおよびルドルフより俺を通じて生まれる

王達⁰を今なほ俟ち望んだであらう。

また俺の兄弟⁴¹がこの事を豫め見得たならば

カタロニアの貪慾な貧窮より

夙^とく逃げて已に害を倣さしめなかつたであらう。

蓋し積荷せるものが船に

ハ その上荷を積ませざるやう⁴²

げに彼または他の人が備へすべきである。

寛容なる者より吝嗇に生まれし

彼の性質は、匣^{ばこ}に貯へることに

目も呉れぬ軍勢⁴³を要した。

「わが主よ、汝の言葉の私に注ぐ

高き喜悅を、わが見るごとく

彼の一切の善の終りであり

始である處⁴⁴に汝見るがゆゑ

40 父シャルル第二世、祖父アンジウのシャル、或は妻の父皇帝ルドルフよりの子孫。

41 シャル、第二世の第三子ロベルト。一三〇九年ナポリ王たりしが彼の貪婪と臣下の貪慾のため災を招けり。

42 惡政に惱みし國が更に重税に苦しめられざるやう。

43 人民を壓制して私腹を肥やさんと努めざる官吏。

44 一切を照覽する神の心。「我はアルバなりオメガなり始なり終なり」約翰默示錄二一の六。

洗はれる彼の左岸²⁹が、時到了ば

おのが主君にと俺を待つてゐた。

またバリやガエタやカトナを界とし

トゥロントやエルデが海に吐き出す

アウソニアの角も待つてゐた。

獨逸³⁰の岸を棄てた後ダヌビオが

灌く彼の土地の王冠も

既に俺の額に灼いてゐた。

またエウロよりいと大なる煩ひを

受ける灣にあたりに、バキノと

ペロロの間に、ティフェオの爲でなく

生ずる硫黄の爲にかすむ佳しき

トウナクリアも、もし臣民の心を常に

傷ましめる悪政がバレルモを動かして

『死せよ、死せよ』と叫ばしめざりせば

29 フロザンス。カルロ・マルテルロの祖父カルロ・ダン

ゾオはベリングエリ・ラモンドの末娘ベアトリチエと婚し嫁室としてロダノ河東に横はるフロザンスの一部分を受けた。六の一三三、註。

30 南方伊太利亞ブリアにある邑にしてアドウリアティコ海岸に濱す。

31 南方伊太利亞カムパニアの邑。地、二六の九一。

32 南方伊太利亞カラブリアの小邑。

33 中央伊太利亞を貫く河。

34 南方伊太利亞の主要なる河の一。煉、三の一三二。

35 伊太利亞のカムパニアを指す古名なりしが、こゝにては伊太利亞のこと。その角とはナポリ王國のこと。

36 ダニューブ河のこと。地、三二の二五。

37 匈牙利。カルロ・マルテルロの母は匈牙利王ラティスラウス第四世の姉妹なりき。彼後繼なくして没せしかば、カルロ第二世その妻によりて同王國を占有せり。

38 チシリヤ島のこと。三角形なりしにより斯く呼ばると。硫黄の煙にてかすむは同島の東南端なるバキノ岬とペロロの間に横はるカタニア灣のこと。

この灣はエウロ即ち東風に晒されエトウナ山の煙が時として此を暗くす。エトウナ山の噴火は神々との戦ひに於て遂にデオゾ神の雷霆に壓倒されし巨人ティフェオの苦悶による。メタモルフオシ」五の三四六—五三。

39 チリシア島の首府。一二八二年三月三十日晚鐘を相繼に *Muroano Francesco* (佛蘭西人を殺せよ) と叫んで此を虐殺し、アンジウのシヤル、の勢力を一掃せり。

宛らおのが標^ま的^とに向けられる物のごとく

その豫知^{めあて}の目的^{めあて}さして落ちる。⁵¹

然らざれば汝の旅する天の生ずるは

巧^{わざ}みの業^{わざ}ならで廢墟^{わき}とならう。⁵²

しかし此等の星を動かす諸の『慧智』に缺なく

二〇 また『原始慧智』に缺なく、彼等を

不完全ならしめざる限り此は有り得ぬことである⁵³

この眞理が汝に尙も明かならんことを願ふや」

そこで私は「否然らず。蓋し自然が

必要^{ひつようじ}事に斷じて疲れざることを私に識^しる。⁵⁴

すると彼は再び「さて語れ、地上の人にとり

市民た⁵⁵らざることが不幸であるか」。

「然り、而し其譯を私は茲に訊ねない」と私は答へた。

「さて下界にて人が異なる職務により

異なる生活をせず⁵⁶に斯く成り得るや、

51 諸星の感化力は皆一定の目的を有し、偶然なるものあるなし。

52 「一定の目的を有せずば自然の働きは空しと云はざるべからず」『饗宴篇三の一五。帝政論一の三、四。

53 從屬的「慧智」の不完全は神の不完全を包有す、これ不可能なり。不完全とは事物本來の目的を果たす作用力を缺くことを指す。

54 自然の秩序の毀たるゝこと不可能なり、何故なれば此秩序は創造に於ける神の計畫たればなり。

55 即ち社會に連ならざること。 *φύσιν πολιτικός ἀνθρώπος* (人類は自然に政治的なり) アリストテレス「倫理」一の七。

56 市民たりうるや。 饗宴篇四の四。

一際私に悦ばしい。なほ又神を眺めて

九〇 汝これを識るゆゑ、私はこれを貴ぶ。⁴⁵

汝は私を悦ばした。語つて私を動し

惑はしめた汝、されば今甘き種より如何にして

苦さが^{にが}出で得るかを私に明かにせよ。⁴⁶

かく私は彼に。すると彼は私に「眞理を⁴⁷

俺が汝に示し得んか、なんぢが求めて

而も背にするものに顔を向けるであらう。

汝が昇る全王國をめぐつて

充たす『善』は、おのが攝理を

此等の大なる物體に力たらしめる。⁴⁸

100 また諸の自然のみならず

その寧福⁴⁹がもる共に

自足圓滿な『心』のうちに豫知せられる。⁵⁰

さればこの弓の射るものは悉く

45 汝が神のうちにてこれを知るが故にわが喜びのいよ
ゝ大なることを更に汝が識る故に我に貴し。

46 何故に善き父より惡しき子生まるゝや。 八二、三
行を見よ。

47 神の攝理が諸大體に通じて働き（煉、三〇の一〇九
以下）一切他の原因を壓倒して萬物を各の目的に向
かはしめ、自然の秩序を整へて此を保存せしむとの
教義。

48 神は創造仕放しにあらず、攝理によつて此を支配し
活動力を賦與す。これにより諸天體は各自の感化力
を己に屬するものゝ上加へ、豫定の結果を生ぜし
む。

49 *well-being* この語の意味は廣汎にして「靈的健康」「靈
的完全」「救済」「祉福」等の意味あり「新生」三三
の註二參照。

50 凡ての自然即ち一切の被造物は只に豫定せらるゝの
みならず、萬象が各自の目的に向かふやう自然の秩
序も豫定せらる。

同じあのが行路を常に辿るであらう。⁶⁷

汝の後にあつたものが今や汝の前に置かれる。⁶⁸

しかし俺が汝を悦ぶことを知らすため

系の外套ゴントにてなんぢを蔽ひたく思ふ。⁶⁹

自然はあのれに運命が添はない時

一四〇 恰も土地外れの凡ての種のやうに

常に良く果を結ばない。⁷⁰

それと同じく下界が自然の置く

礎いしづなに心をとめて此に従はんか

人々は善き者となるであらう。⁷²

然るに汝等は劍を帯びんとて

生ずるゝ者を宗教に強奪し、また汝等は

説教のために生ずるゝ者を王とする。⁷³

かくて汝等の轍は徑より外づれるのである。

67 社會の進歩なからん。煉、七の一二三。

68 九十六行を見よ。

69 外套を纏ひて服裝が全く整ふ如く系(餘論)によりて以上の教訓を全からしめんとす。煉、二八の一三六。

70 生命ある植物は其性に從つて一定の處を慕ふ情を明かに示す。さればこそ或る植物は水邊に、或る植物は山地に、或る者は斜地と山麓とに根を下ろすなれ。蓋し彼等が若し移植されんか、全く死するか或は己が親しき者より離れしめられし者の如く一種憂鬱なる存在をなす」饗宴篇三の三。煉、三〇の一八二〇。

71 natura. ダンテは此語を種々の意義に使用せり。一〇〇行にては一般の廣き意味に、一一三行にては世界の「慧智」の意味に、一二七行の「廻る自然」は諸天體の意味に、一三四行にては個性の意味に、夫々用ゐらる。一三九行の「自然」は一四二行のそれと同じく一般の意味に採る方可ならん。

72 人もし生得の性向のまゝに育てられんか世界は一層善き者とならん。

73 賢明にして神學に通じ哲人にして説教もし、王たるよりも修道僧に適したりし王ロベルトもその一人に加ふべし。

二三 然らず。汝等の師の汝等に記す處正しくば」。

かく彼は推論して茲に至り

かくて彼は結論した「されば汝等の

業の根は雜多なるを要する。

即ち或る者はソロネに、或る者はセルセに

或る者はメルキセデクに生まれ、また或る者は

空を翔つて己が子を失ふた者に生まれる。

人間の蠟の封印なる廻る自然は

良くちのが技を果たすが

彼此と宿をわきまへはしない。

一三〇 そこでエサウがデアコッベとは種を異にし

またマルテの裔なりと云はれたほど

賤しい父よりクヰリノが出ることとなつた。

もし神の攝理が壓倒しないならば

生まれし性は、その生みしものと

57 アリストテレス。地、四の一三一。

58 行爲の根底たる人心の性向。

59 希臘七賢人の一にして立法家（前六三八年頃―五五八年）。

60 波斯王ザアクセス（前四八五―四六五年）のこと。

希臘侵入にて名高し。

61 麴麴と葡萄酒を獻げし猶太の祭司の典型。創世記

一四の一八。

62 デダロ。子のイカロに翼をつけてクレタ島を去らしめしが、父の命に背きて高く飛びしため翼を粘けし蠟が太陽の熱に解け、自ら海中に陥りて溺死せり。

地、一七の一〇八。

63 人心に感化を及ぼす諸天。一の四二。

64 諸天は誰彼の別なく盲目的に感化力を注ぐ。これ

父と異なる性情の子の生まるゝ所以なり。

65 「エサウは巧みなる獵人にして野の人となりヤコブは素直なる人にして天幕になる者となれり」創世記

二五の二七。

66 ロモロ（ロムルス）。彼および其兄弟レモを巫女レ

アはマルテ神によりて生みしと。ロモロは常に槍

(quins)を携へし故にQuintusと呼ばれたりき。

私の方に來て、外面を輝かしつゝ、

私を悦ばさうとする己が意を示した。

前のごとくわが上に注がれし

ベアトワリチエの眼は、わが願望に

嬉しき許容を確かに與へた。

私は云つた「祝福まれし靈よ

三 願くはわが慾望に速かに補償をなし

またわが思ひを汝に反射し得る證據を私に與へよ。

すると尙も私に新たなりし光は

曩に自ら其中に歌つてゐた深處より

善を做すを悦ぶものゝ如く續けた

「リアルトとブレンタ並びに

ピアヴの源の間に坐する邪惡なる

伊太利亞の地のその部分に

一の丘が隆まり、聳ゆること甚だ高からず。

7 三の四二。

8 神の心に跳め入りて其中にわが思ひの反射するを汝が見ることを示せ。即ちわが訊ぬるを待たて答へよとなり。

9 何人か名の明かならざりし。

10 八の二八—三〇。

11 元來はエネツィア市を形成せし島の一。此處にてはエネツィアを指す。

12 上部伊太利亞の河。下流はエネツィアの潟となる。

13 北部伊太利亞の河。エネツィア市の上方約二十哩に河口を有す。

14 トウレギンの沼澤のことにしてロマノの地形を指す。

第九曲

戀に浮かれしクニツツアの靈現れて故郷ロマノの民の情弱を叱咤し不信を罵りて宇宙舞踏に歸る。次で馬耳塞の戀愛詩人フオルコの靈灼きて青春時代の戀物語を倣し、遊女ラアアの功德を稱し、引いて聖地回復に對する法王の怠慢を叱責す。

美はしきクレメンツァ¹よ、汝がカルロは

わが心を啓き^{ひら}し後、あのが子孫の

受くべき欺瞞^{あざむき}を私に述べた。

然し彼は云つた「黙して歲月を廻らしめよ」と。

されば只なんぢらの災害^{わざはひ}の後に、正しき^{ただ}哭き^{なげ}が

來ると云ふほか何事をも私は語り得ない。

さて既にこの聖き光の光命^{いのち}は

一切のものを充ち足らす「善」のごとく

彼を満たす「太陽」へと向き返つてゐた。

10 あゝ斯くの如き「善」より汝等の心を背け^{そむ}

なんぢらの顛顛^{こめがみ}を虚妄^{いつはり}に向ける

欺かれし魂、不虔^{ひさう}の被造物^よよ。

すると見よ、諸光の他の一つが

1 匈牙利の名義上の王たるカルロ・マルテルロの姫。

一三二五年に佛王ルイ第五世の後妻となり一三二八年に死せり。神曲渡端の年代一三〇〇年には七歳又は八歳なりき。或は此クレメンツァをカルロ・マルテルロの未亡人とする人あり。彼女は夫の死を聞き彼を慕ふ餘り頓死せりと。

2 マルテルロの子カルロ・ロベルトはカラブリア公ロベルトのためナポリ王位繼承の權を簒奪されたり。

3 加害者等はその行爲に對して哭く日來らん。マルテルロの子孫の破りし災害如何は傳へられず、恐らく彼等の享けし一般の不法行爲を指すものならん。

4 カルロ・マルテルロの靈。

5 神。

6 煉、一〇の一、二、三、九。

包む民衆は、この事を考へず

また擲^うたるゝもなほ悔いず。

然しこの民が義務に背き^{そむ}頑^{かたく}なるため

間もなくバドグは沼に

并チエンツァを洗ふ水を變へるであらう。²⁴

またシレ河とカニア河とが伴侶^{とも}となる處を

五 或る者が領し、頭^{かうべ}を擧げて行くが

彼を捉へんとて烏網は既に造られる。

フエルトウロは不虔なる牧者の咎を

尙も哭^{なげ}くべく、醜惡斯くのごとき罪のため

マルタに入つた者が嘗てない。

フエララ人の血を容るゝ桶²⁹は極めて

大にして、一オンチア一オンチアと³⁰

これを秤^{はか}る者は疲れ、この慇懃なる司祭は

これを賣^{わた}して黨派根性を

24 ダンテが神曲の此部分を書きし當時(一三二四年頃)

バドグのゲェルフイ黨は彼等が義務を負へる皇帝に反抗し、皇帝の使節たるカン・グランデのためギチエンツァ附近にて一度ならず敗られ、バツキリオネ河がゴロナ附近にて造くる沼澤の水を彼等の血にて染めたり。

25 ゼネツィアの一小流。

26 同上。 現今はボツテニガと呼ばれる。 兩河の結ばる處とはトウレギソのこと。

27 リツカルド・ダ・ガミノ。 煉、一六の一二四の「善きゲラルド」の子にしてニコ・デ・ギスコンティの獨娘ヂオヴナ(煉、八の七二)を娶りしと云はる。

リツカルドは一三二二年將基を遊べる時暗殺されたり。

28 ゼネツィアの一邑。 一三二四年トウレギソのアレッ

サンドウロ・ノ・エルロ此邑の僧正たり。フエララのギバルリニ黨フオンナ家の一人王ロベルトの代理者ピノ・デルラ・トサに對して陰謀を企てしが失敗して保護をノゾルロに乞ひたり。然しノゾルロは彼をピノに引渡して三十人と共に絞殺せしめたりき。斯かる背信の行爲はマルタの牢獄に於ても嘗て處罰されしことなし。同名の牢獄多く或はボルセナ湖の南端の城塞とも、或はギテルボの牢獄とも、或はアッオリノが一二五一年に建てしチタデルラの堡壘とも云はる。

29 Ligoncin: 搾るため葡萄を運ぶ器。

30 重量オンス。

此より一つの炬火^{たいまつ}が降り

三 その國に大なる攻撃を加へた。

一の根より妾^{わかし}と彼とが生まれた。

クニツツアと妾は呼ばれた。そして此星の光が

妾を壓倒したので茲に妾は灼いてゐる。¹⁷

然しわが命運の起因に就ては悦んで

妾は自ら赦し、また己を惱まさない。¹⁸

これ恐らくは汝等俗衆には難解に見えやう。

妾の最も近くにゐる我等の天國の

灼くこの貴き寶石¹⁹の大なる名聲が

殘されてゐる。そして失せ果つるまでに

四 この第百年がなほ五度廻るであらう。²⁰

第一の生涯が第二のものを貽すため²¹

人が自らを秀れしむべきやを見よ。

現在タリアメントとアディチ²²とが

15 暴君アツォリオ(或はエツツェリノ) 一一九四—一二五九年。母は全世界を燒き盡す炬火を生む夢を見て彼を生みしと。彼は地獄の煮ゆる血河に投ぜらる。地、一二の一一〇。

16 アツォリオの末の娘。一二二一年エロナのゲエル

ファイ黨のリチアルド伯と政治的結婚をせしが間もなく詩人ソルデルロ(煉、六の五九註)を戀し、此も長く續かずして勳爵士ボニオに感溺し、彼の死後プレガンツエのアメリカ伯と婚し、彼の死後エロナの一族族の妻となり、次で又バドゾのブツツアカリニと婚せり。彼女は衣裳と歌と遊戲を好みしも一二六五年六十七歳の時多數の奴隸を解放して懺悔の意を表せしと云はる。

17 金星は冷かにして濕氣を帶び、美と寛裕と忍耐と優美と衣裳の好みと金銀の裝飾と友情とを示す。クニツツアの多情は此星の感化に據る。

18 天國の此下方に彼女を置かしめし罪はレエテの流に洗滌され、(煉、三三の九一以下)ヒツカルダと同じく彼女の有する祝福をのみ樂しましむ。

19 九五行註を見よ。

20 百年の五倍即ち五百年。茲にては多年の謂。

21 芳名を千載に垂るゝ生涯。ダンテは屢名譽心のこととを語る、「貴き心の最後の弱點」としては彼自身甚だ名譽心強かりき。煉、一一の一〇〇—一〇六。

22 北部伊太利亞の河にしてエネツィアを距つる約四十哩の處に注ぐ。

23 北部伊太利亞の河。地、一二の五。以上二河によりて現今のポネツィア洲の大部分を指す。

祝福^めまれし靈よ、汝の眺めは彼にある。³⁶

竊かに汝より逸し得る欲望^{ねがひ}としては「もなす」。

されば六の翼^{むつ}をおのが僧衣^{そうい}とする

虔^{まこと}しき諸の火の歌³⁷とともに

諸の天を永久に娛^{たのし}ます汝の聲は

いかでわが願望^{ねがひ}を充たさるべき。

ひ 汝^おがわが衷^{うち}なる如く、我汝の衷^{うち}なりしならんには³⁸

げに私は汝の要求^{もとめ}を待たなかつたであらう」。

すると彼の言葉が始まつた「地の

花輪と成れるかの海を除き³⁹

最も大なる水の擴がる谿¹⁰が

太陽に逆ひて遠く

相好からざる兩海岸⁴¹の間に横たはり

初め地平線たりし處を子午線にする。

この谿に沿ひエルボ河および行路^{かう}些^{いさ}にして

36 tuo veder s'inlita.

37 「セラビムその上に立つ、各六つの翼あり、其二つを

もて顔を覆ひ、其二もつて足を蔽ひ、其二つをもて

飛び翔り、互に呼び云ひけるは聖なるかな聖なるか

な聖なるかな萬軍のエホバの榮光は全地に充つ」以

賽亞書六の二。八曲の二三。

38 汝わが内心を洞察し我また汝の内心を看破せしとせ

ば。ダンテは此處に *intassi* 及び *immi* といふ語

を創造せり。いかににも *Dantesque* にして伊太利

亞人にも餘り見るを得ざる用語なり。七四行參照。

39 地球を繞る大洋。

40 地中海。

41 相對する歐羅巴側と亞弗利加側の兩海岸。當時の

粗笨な地理學に據れば地中海は西方デブラルタル海

峽より東方エルサレムへ向け即ち「太陽（の行路）に

逆ひ」擴がること九十度と考へられき。ダンテは此

九十度を示さんとして、日の出の際地平線たるもの

が天頂の眞下（即ち九十度）となる距離を以てせり。

煉、二七の一—四。

曝露するであらう。且つ斯かる賜が

六 この王國の住民に適はしいであらう。

上方に鏡がある。汝等は此を位と呼ぶ。

そこより神の審判が我等に灼く。

されば此等の言葉は善しと我等に見える」。

茲に彼女は沈黙した。そして

前の如く身を環のうちに置き

他に向かひし如き姿を私にした。

榮えある者として既に私に

識られた他の悦びは、わが眼に

太陽の射る佳はしき紅玉のやうになつた。

七 この世にある微笑のごとく

天上にては歡喜によつて輝き優る。

然し心悲しむ如く下方にては影が外面を暗くす」。

私は云つた「神は一切を観る。そして

31 清火天。

32 "Fou" これは聖グレゴリオに據れば天使階級の第三位にして、これを通し神の審判遂行さる。八の三四—六。一三の五九。二八の一〇三—五。斯く「位」を通じて我等神の審判を語りし故我等の言葉は眞實なりとなり。

33 八の一九—二一。

34 クニッツァが此曲の三七—四〇にて語りし言葉によりてダンテの知りしフォルコの靈。

35 地獄。

これ罪に就てに非ず、罪は心に歸らず。
定めて豫知し給ふ『力』に對してゐる。

茲に我等は斯くも大なる業を^{わざ}

飾る巧みを眺め⁵³、また下界を

天上界に化へる恵を識る⁵⁴。

さてこの圈にて生まれた汝の

110 慾望^{ねがひ}が悉く叶へられて携へ行かんため

なほ少しく俺は進まねばならぬ。

俺に近く、澄める水の上の日光の如く

斯くこゝに閃くこの光のうちに

誰があるかを汝は知らうと欲ふ⁵⁵。

されば知れ、その中にラアブが安らひ

また彼女が結ばるや、一團の

印せられたことが無量であつたことを⁵⁶。

汝等の世界が投げる影が點とる

51 只微笑むと云ふも罪を輕んじてには非ず、罪を心より拭ひ給ひし攝理を感謝してなり。

52 宇宙。

53 異本、「いとも大なる愛情もて飾る巧を眺め」。

54 クニツツアやフォルコを捉へし單なる感覺的愛はそれ自身にては罪なり然し神の攝理により諸天の感化を受ければ、今金星天にある諸靈の抱く如く純愛となる。煉獄にて淨罪の後諸靈は罪を忘却し、今は只神の奇しき御業を眺め、下界の賤しきものを天上の美しきに變へ給ふを見て微笑するのみ。

55 ヨシユアの二人の間隙を迎へ入れしエリコの遊女ラハブ。書約亞記第二章。聖地に對する法王の無關心を叱咤せんためにダンテは茲に此ラハブを擧げしものか。われはラハブ、バビロンをも我を知るものの中にあげん。詩篇八七の四。希伯來書一二の三一。雅各書二の二五。

56 他の何人よりも優りて彼女に金星の一團は輝かされき。

デエノワ人をトスカナ人より分かつ

九〇 マクラ河の間の濱人^{はまびと}で俺^{わし}はあつた。

略^はぼ日の入を一にし日の出を一にして

プヂエアが坐し、また俺^{わし}の出處^{しゅつじょ}にして

嘗ておのが血にて港を暖めた土地も坐す。⁴³

わが名の識られしその民は俺をフォルコと⁴⁴

呼んだ。そして俺がこの天に印せられたやうに

今この天は俺に印せられる。⁴⁵

蓋しシケオをもクレウサをも惱ませる

ペロの娘も、またデモフオオンテに⁴⁶

欺かれしロドペイアの娘も、イオレを⁴⁷

二〇〇 心臓に閉ざした時のアルチデも

頭髮^{かみのけ}の許すかぎり惑溺せし

俺ほどに烈しくは燃えなかつた。

然も茲に俺は悔いずして只微笑^{わいふ}む。⁴⁸

42 西班牙のエルボ河と伊太利亞のマクラ河との間に當り、嘗て中世紀に一時重要な港たりし阿弗利加沿岸のプヂエア(現今のブリヂエ)と略子午線を同じうして馬耳塞位す。

43 前四九年チエザレ(シイザア)の艦隊がブルト(ブルタス)の下に馬耳塞にてボムベオ(ボムベイ)の軍を撃破せり。煉、一八の一〇二。

44 十二世紀末葉に榮えし南歐詩人にして馬耳塞の人。多くの人妻、處女、寡婦を戀せし後シトオ派の修道僧となりトロザの僧正となれり。佛蘭語名はフオクエ(foque)なり。

45 一七行。四の二二以下。

46 デイドネ。彼女はエネアに戀ひし斯くて亡夫シケオ並びにエネアの亡妻クレウサに對して不倫の行爲を敢てせり。地、五の六二。天、八の九。

47 トウラチアの王シトネの娘フィリス。彼女はテセオの子デモフオオンテに棄てられたりと思ひ込みて自殺し巴旦杏の樹となれり。ロドペイアとはトウラチアの同名の山に因みて云へるなり。

48 テツサリアのオエカリアの王エウリトの娘。アルチデ即ちエルコレ此王を殺してイオレを俘虜とし、後彼女を戀ひせしため、妻デイアニラの嫉妬を買ふ。

49 デイアニラ彼の愛を回復せんとしてチエンタウロネッソの血染の衣を彼に送りしかば、彼は毒を受けて狂亂せり。これを見て彼女は自ら縊れて死せり。

地、一一の六九註。

50 青春の續きし限り。

51 三五行註。

見棄てられ、その紙端^{したん}に明^{あらは}なるごとく

たゞ有るのは布令の研究のみ⁶⁷

このことに法王とカルディナレ等が心を注ぐ。

彼等の思ひはガブリエルがその翼を

擴げし處なるナツツアレ⁶⁸テに行かない。

しかし⁶⁹プティカノ^{ビエトウロ}および彼得⁶⁵に

一四〇 續⁷⁰さし軍勢のために墳墓と

なりし羅馬の選ばれし凡ての處は

速かにこの姦淫より解かれるであらう⁷¹。

67 法王布令の研究は大なる金儲となる故に人々争ひて此を研究し、爲に紙端は註に蔽はれ、繁き使用に汚損さる。

68 天使ガブリエル降り來たりて處女マリヤに受胎を告示せしナザレ。路加傳一の二六以下。

69 羅馬の丘にして聖彼得會堂と法王殿この上に建つ。この丘は聖彼得その他初代基督教徒殉教の地として神聖視されたり。

70 聖徒父は殉教者の群。或は代々の法王のこと。

71 一三〇五年法王鵬のアギンオン移轉によりて。或は靈王は法王ボニファチオ第八世の死によりて。或は靈王は廣く伊太利亞の救済者たる統率者の出現を指すものか。法王に對する三大批頭は正確に九數を追ふて第九曲第十八曲第二十七曲にあり。以上七行を抹殺して刊行するやう西班牙の宗教裁判は命じたりき。地、一一の八、九、同一九の一、二、六、七も同斷。

この天へと彼女は、基督の凱旋の何の

二二 魂よりも前に引き上げられた。

げに左右の掌によつて獲られし

尊き勝利の樸欄として彼女を

いづれの天にか置べくべきである。

蓋し法王の記憶に殆んど

觸れざる『聖地』にて彼女は

デオスツエの最初の光榮を扶けた。

初めて肩をあのが造主に向け

その嫉妬が多くのを者を哭かしめし

彼によつて樹てられた汝の都は

二三 呪ふべき花を生じて散らし

狼を牧者としたがゆゑに

羊と羔とを迷ひゆかしめた。

これが爲に福音と偉いなる教師等は

57 金星。 トロムメオの天文學に據れば地球の圓錐形

を成す陰影は金星に至りて終る。この一事の比喩的意義は、地上の道德的陰影即ち薄志弱行、世間的野心、放縱なる愛の諸靈は天國の下段にあつて地球の

58 陰影を受ける月天水星天金星天に置かるゝなり。 然るにラハブは第一に基督に救ひ出だされしものゝ中にあり。

地、四の五二―四。

59 十字架に釘けられし聖手。

60 樸欄は勝利の印なり。

61 約書亞の最初の光榮即ちエリコの陷落はラハブの援助に據る。中世紀を通じて聖書註解者等は往々約書亞を「救世主」の典型とし、ラハブを基督の血によりて贖はれし教會の典型とせり。而してラハブが窓に結びし赤き紐は基督の血を表すものとせられき。

62 法王ボニファチオ第八世は聖地パレスティナの回復を意に介せざりき。地、二七の八五―九〇。

サラチノ人のアクリ占領（一二八一年）を眼前にしてダンテは茲に法王の無能と無責任を痛罵す。これより以後十字軍は遂に聖地に足場を得ずなりぬ。

63 「惡魔の嫉妬によりて死世に來たりぬ」ソロモンの智慧の書二の二四。

64 マルテ神。 フィレンツェの建設者にして又その守護神たりき。當時異教の神々は鬼とせられたりき。帝政論三の三。地、三の八三註。

65 貨幣面の花。 ダンテに據れば教會及び帝國の齎らせし大なる害は貪婪に基す。

66 地、一の二〇九―一一。 煉、二の二〇―二二。

彼等と呼ばはる世界を満足させんとて¹¹

これより分かるゝ状^{さま}を見よ。

また若し彼等の徑^{みち}が彎曲し居らずば

諸天の大なる力も虚^{むな}しく、こゝ下界の

殆んど一切の潜勢は死んだであらう。¹²

また若し直線を去る距離が多^{おほ}くとも

三 少くとも、世界の秩序の大部分が

上下共に缺^{ひそ}けたであらう。

さらば讀者よ、疲れる前に悦ぶことを

願は、なんぢの椅子に止まり¹⁴

仄かに味ひしこの事を省みよ。

私は汝の前に置いた。今よりは汝自ら食せよ。¹⁵

蓋しわが記し來たりし題材が

あのれにわが全心を扭^{ひね}ぢて取る。

諸天の力を世界に印銘^{いんめい}し

11 地球は諸天の感化を求む。

12 傾斜の度に少しにても過不及あれば天地の力は凡て

亡びん。この傾斜は四季の變化を來たらし、四季の變化は生あるものゝ生長死滅を齎し、斯くて遂に人智にまでも及ぶ。一の四二。

13 天は形質 (eidos) の、地は物質 (hyle) の坐たり。

14 學者の如く。

15 以上瞑想の資料を與へたり。神曲を進め行くためダンテは止まりて論ずるを得ざれば、讀者自ら考へよとなり。煉、一七の一三九。

第十曲

あのが「子」を眺め、また「父」と

「子」とが永久に息吹をいだす

「愛」により、元始絶語の力は

精神を貫き空間を貫いて廻る萬象を

造つて妙なる秩序を與へ、これを觀る者に

彼を味覺せざるを得ざらしめる。

さらば讀者よ、汝の眺を私とともに

高き諸の輪に向け、運行と運行とが

相撃つところに眞直に擧げよ。

かくて其處に「工匠」の技を楽しみ

始めよ。彼あのれのうちに此を愛し

眼をこれより嘗て放したまはず。

諸の遊星を負ふ斜の環が

ダンテ太陽天に登れば賢者神學の諸靈微かなる音楽を奏しつゝ冠の如くベアトリチエを圍み三周す。そのうち聖トマス・ダクサの靈出て眞の愛は只愛することに依りて増さるゆくと語り、他の諸靈のことを告げ終るや、諸靈は再び妙なる音楽を奏して廻轉し始む。

1 基督。

2 父なる神。

3 聖靈。

ダンテは「聖靈」を「父」と共に「子」より出づとせり。これ有名なる Alioquin 争論の論點にして遂に一〇五四年東西兩教會分離を齎せしものなり。

4 神。此曲及び次曲に三位一體のことを語ることに多し。天地創造の際三位共に活動したりき。地、三の五、六。

5 一切の心靈的また物質的事物は神に創造さる。神は子(基督)を通じ聖靈の愛によりて此を造れり。されば宇宙を見る者は創造者の像を見ざるを得ず。二七の一〇九—二〇。

6 諸天。

7 白羊宮にある太陽は春分(神曲の時)に於て黃道と赤道の交叉する點にあり。此時太陽は赤道より外づると見ゆ。

8 創造者なる神。

9 神は天地を創造せしのみならず絶えず此を眷顧す。10 黠帶。斜と云ふは春分に赤道を離るゝを指す。九行註を見よ。

述べてこれを想像にだに浮ばし得ない。

宜しく信じて此を見んことを願へ。

我等の幻想が卑うして斯かる壯觀に

挫くとも、怪しむに足らず。

蓋し眼は太陽の上を越えて行つたことがない。

尊き「父」の第四の族はこゝに此力を受く。

五〇 彼はいかに息吹き、いかに生むかを

示して彼等を常に充ち足らしめ給ふ。

やがてベアトリチエは始めた「感謝せよ。

天使等の『太陽』に感謝せよ。彼はその

恩寵により汝をこの感覺の太陽に擧げ給ふた」。

この言葉に私は服従したのに優つて

速かに未だ嘗て人間の心が

敬虔に向かひ、意を盡して

あのれを神に捧げたことがなかつた。

23 神。

19 第四天即ち太陽天にゐる神學の達人等の靈。

20 太陽よりも輝く力。

21 聖靈として。

22 基督として。

おのが光にて我等のために

三〇 時を測る自然の最も大なる司^{つかさど}が

上に掲げしところに結び

繚^は狀をなして廻り、日毎に

夙^はくおのが姿を現してゐた。¹⁷

さて私は彼の處にゐた。然し登りしことを

自ら覺えず、恰もそれと氣付いた時には

既に來てゐるのを識る人のやうであつた。¹⁸

善より更に優^{まさ}れる善へと斯く導くは

ベアトッリチであつて、彼女の行動^{ふるまひ}は

迅うして、時に關^からなかつた。

四〇 私が入つた太陽^ものうちに

色によらず、光によつて姿を現すとは

いかに自ら輝くものと云ふべきぞ。

よし天才、藝術、技巧^{ぎこう}を呼び寄すとも

16 太陽。ダンテは光の源にして輝きの強きにより太陽を凡ての科學を照らし無限の數を包容する數學の表象とせり。

17 九行に記さるゝ赤道と懸帶の交叉する點に於て太陽は繚狀に運行す(トレムメオに據れば)、即ち太陽は春分の後日毎に夙く出て徐々に北方へと進む。秋分後はこの反對の運動を爲す。

18 氣付かざる間にダンテは金星天より太陽天に登れり。

身に翼し天上に翔らずして

その消息を俟つは塵に物聞くに同じ。

かく歌ひつゝ、動かざる兩極に

近き星のごとく、三たび我等を

廻つた後、炎々たる諸の太陽は

恰も舞踏をやめたのでなく、暫し黙して

ひに止まり、耳傾けつゝ、やがて新しき節

踏り入る貴女達のやうに私に見えた。

かくて中より一つ斯く始めるのを私は

聞いた「眞の愛を燃やし、また愛の中に

増さりゆく恩寵の光線が汝を照らし

かの再び上るためならずは

何人も降ることなき階を通じて

なんぢを上に通くがゆゑ

汝の渴きを止めんため、誰も

28 トム・マゾ・ダク井ノ。九九行を見よ。

29 九天（或は雅各の金階）。天國に容れられし者は下るとも必ず再び上るなり。

斯くてわが愛は全く神に注がれ

六〇 ベアトリチエ^カを蝕^くして忘れしめた。

これは彼女を不快ならしめず、却つて

彼女は微笑^{せうごう}み、斯くてその微笑む眼の輝きは

わが一なる心を多くのものに分けしめた。

多くの活きてうち勝つ灼^かきが

我等を中心として自ら王冠の形となり

姿の輝くに優^{まさ}つて聲の甘美なのを私は見た。

空気が雨を孕み、糸を張りて帯を

つくる時²⁴、ラトナの娘²⁵の斯く

卷かれるのを屢私は見る。

七〇 私が行つて歸りし天の宮居には

その王國²⁶より持ち歸り得ない如何にも

貴い美しい多くの寶石があるが

諸の光の歌もその一つであつた²⁷

24 空中に水蒸氣充滿して暈を造る時。煉、二五の九一。
二九の七八。

25 月。

26 天國。 天國に到りしものならては天國の狀を識り得ず。

27 當時伊太利亞にては寶石等貴重品の國外携出を法律によりて禁止したり。ダンテ此を記憶して斯く云ひしものならん。

彼は二つの法廷を良く扶けたので
かく天國を悦ばしめる。

次にその側にわれら合唱隊^ゴを飾るは

貧しき女のごとく、おのが財^{たから}を

聖き教會に献げた彼のピエトロ¹であつた。

我等のうち最も美しい第五の光⁴²は

110 深き愛より息吹^{いぶ}さし、彼方下界の者が

すべてその消息^{おとづれ}を知らうと喘ぐ。

その中にある尊き心に與へられし

智慧が極めて深く潜み、眞^{まこと}が眞なる限り⁴³

斯かる知見に敵^{かた}ふものが嘗て起こらなかつた。⁴⁴

その側^{かたはら}なるかの蠟燭の光を見よ。

下界肉にあつて彼は、天使の性質と

その奉仕^{つとめ}とを最も深く洞察した。

次の小さき光のうちに微笑むは

40 イエス貧しき寡婦のレプタ二つを賽銭箱に入るゝを見て云ひけるは「われ誠に汝等に告げん此貧しき寡婦は凡ての者よりも多く入れたる」路加傳二の三。

41 ピエトロ・ロムバルド。アペラルドの弟子にして書籍を食ひ讀みし故一名 Pietro Mangiadore (喫食家ピエトロ)と稱せらる。佛人にして一一七九年に死せり。生まれ、巴里大學の總長となり一一七九年に死せり。神、天地創造、贖罪、聖禮典、最後の審判等に關る教父等の句を抜萃せる四卷の Sententiarum Libri あり。その冒頭に「貧しき寡婦の如く、主の財に己が貧窮の中より幾干かを投ぜんことを」と記せり。一二の一三三。

42 猶太の名君ソロモン王。ソロモンが天國に行きしや地獄に亡びしやは教會の學者間の爭論の一なりき。

43 聖書が眞理なる限り。

44 「我汝に賢く聴き心を與ふれば汝の如き者なく汝の後にも汝の如き者興らざるべし」列王紀略上三の一。

45 聖保羅の弟子アレオ山の裁判人デオメシオ (使徒行傳一七の三四)。天使の段階政治(二八の一二)に關る五六世紀頃の無名の書 De Qualesti Hierrohia は彼に歸せらる。

おのが壘の葡萄酒を拒み得ざること

自^{おのづ}から水の海に降^{くだ}らざるを得ざるが如し³⁰。

汝を天に勵ます美しき貴女³¹を繞つて

飽かず眺めるこの花冠³²が何の植物の花に

飾られるかを汝は知らうとを願ふ³³。

俺はドメニコ³⁴に導かれて途を辿る

聖き群³⁵の一疋の羔である。

もし迷ひ行かずば彼等は良く肥えるであらう³⁶。

俺に最も近く右側³⁷にゐる此者は俺の

兄弟でもあり師でもあつた。即ち彼はコロニア³⁸の

アルベルト³⁹、俺はアク⁴⁰井ノのトムマゾであつた。

かく凡て残りの者を識らうと願はゞ

來て俺の言葉に従ひ、祝福⁴¹まれし

冠の上に汝の眺⁴²をめぐらしめよ。

次の煙はグラツィア⁴³の微笑より出づ。

30 ダンテの願望を充たすは彼等の性にして此を止むるは水平ならんとする水を止むるに異ならず。煉、一四の七七—八〇。

31 ペアトウリチエ。

32 ペアトウリチエは神學の表象たり。神學の諸靈の飽かず彼女を眺むるは適はし。

33 諸靈の何人なりやを知らんことを望む。

34 一二の五六註。

35 聖ドメニコ教團の修道僧。

36 世のものに誘惑されずば靈的實を獲得せん。次曲に詳し。

37 所謂「大アルベルトウス」(Albertus Magnus)にして博學ゆゑに Doctor Universalis と稱せらる。貴族にして一一九三年に生まれ、パドヴァ及び巴里に遊び

一二二二年ドメニコ派教團に入る。神學の蘊奥を極めて諸處に講演し一二八〇年八十七歳にして死せり。彼はアリストテレスの哲學と基督教とを調和せし第一人なり。トムマゾ・ダク井ノは彼の弟子なり。

38 貴族の出にして一二二七年頃父アク井ノ伯爵の城ロツカ・シッカに生まる。十七歳にしてドメニコ教團に入り神學を究め巴里羅馬ボロニア等に講演せり。一二七四年里昂會議に赴かんとして途上に死せり。彼は Doctor Angelicus (天使の如き學者) と稱せられ、著書の中 Summa Theologia (神學綱要) 最も著名なり。これは神曲の主要なる基礎の一たり。煉、二〇の六九。

39 伊太利亞のベネデット派の修道僧。十一世紀の中葉に榮ゆ。有名な Decretum Gratiani を編集し、聖書、教會の教典、法王令、及び教父等の書より拔萃し、俗法及び教會法の一致を圖らんとせり。

あのが儼げんな思ひのうちに、死の
來たるを遅し52と見た者の靈の光である。

即ち彼は『藁の街』にて講義をし

猜53みを受けし眞理を論證せる

シヂエリの永遠の光である」。

すると、『新はなむこ郎』に己を愛せしめんとて

神の「新婦」が起きて朝禱を

誦ずしやう唱する時刻を時辰儀が我等に告げ

輪が輪を誘ひ促してチンチンと

甘美な節ふしに響くので

善き人の心が咽ぶやうに

この榮光の輪が動き

調快しらべく、聲々相應さまする状は

歡喜よろこの永久なる彼處54

ならでは識るに由なし。

52 煉、一六の一二三。

53 *veri invidiose*、意義不明。或は羨むべき眞理の意に解する人あるも *in* はダンテには常に惡しき意味に用ゐらる。

54 十三世紀頃の巴里大學の哲學教授。自由思想家の色彩を帶びをりしたためトム・マゾ・ダク・ノより公然非難を受け、*Impossible* に於て神の存在を論議せしため異端の嫌疑を受けた。十三世の終頃死す。*Hue du Fontaine* (藁の街) は大學の搖籃地なるが、斯く呼べるゝに至りしは、元來藁の市場なりし故とも、或は學生が椅子の代りに藁を敷きて坐せし故とも云はる。地上にては敵敵なりしシヂエリとトム・マゾ今天國にありて互に推稱す。

55 基督。

56 教會。

57 *oro, oro*、恐らく以上十二の靈を示さんとして此譬喩を用ゐしならん。

58 天國。

基督の時代の彼の辯證家にて

二三 彼の議論をアゴステイノが自ら用ゐた。

さて汝もし俺の讃辭に従つて心の眼を

光より光へと轉ぜんか、なんぢは

既に第八の者に渴してとゞまる。

その中には聖き魂が、一切の善を

見て歡び、よく己に聴くものに

虚妄の世界を露にす。

彼の肉體は下方チエルダウロに横はり

これより逐ひ出だされし魂は

殉教と流竄とを経て此平安に來た。

一三〇 彼方にイシドロとベタとまた思想に

於ては人間以上なりしリッカルド等の

熱する息吹の燐を見よ。

汝の眺を俺に返すこの者は

46 バオロ・オロシオ。四、五世紀頃の西班牙の僧侶にして歴史家。聖アゴステイノ（アウグスティヌス）彼より暗示を受けて *Historia adversus Paganos* を著し、羅馬帝國の被りし災難は基督教に據るとの非難を駁論せり。此書は *De Civitate Dei*（神の都）の補遺と見るべし。

47 ボエツィオ。羅馬の政治家にして哲學者。四七五年頃生まれ雅典に遊び諸學藝に通ぜり。後讒せられて投獄せらる。獄裡にて彼は有名なる *De Consolatione Philosophiae*（哲學慰安論）を著せり。この書を尊重してダンテは塵囂篇に引用せり。特に二の一三及び一六を見よ。

48 ボエツィオは紀元五二五年バギアにて死刑に處せられ *Cicero de Oro*（黄金の天）と呼ばれし聖彼得會堂に葬らる。

49 西班牙人にしてセルギエンの僧正。六三六年頃死。百科全書 *Origines* 一名 *Eymologiarum* 二十卷の編纂あり。

50 六七三年頃生まれし英國の教會史家。英國教會史五卷の著あり。

51 蘇國人にして巴里聖ギクトル修道院の長。十二世紀の神秘家。 *De Contemplatione*（瞑想篇）の著あり。一一七三年死。



第十一曲

あゝ人間の麻痺せる配慮わづらひよ

汝の翼を搏つかちて垂れしむる

推論シロヂヤスのいかに缺くるかよ。

或るものは法律を、或る者は格言1を

追跡し、或る者は僧職を追求2し

或る者は暴力と詭辯とにて支配し

或る者は掠奪し、或る者は公務に關り

或る者は肉の快樂けらくに耽ひつて疲れ

或る者は安逸に身を持ち碎くだしてゐた。

一〇 斯かる時に一切此等のものより解かれて

私はベアトリチエとともに天に到り

かく榮光の裡に迎へられたのである。

光がいづれもその前まへにゐた環くわんの處に

アケアケ先づ此世の慾望の虚妄を述べ續いてダンテの疑問を解かん
とし、神の攝理によりてアッシジの聖フランチェスコの世に出でし
旨を簡明にして而も含蓄多き詞にて語り、且つ彼と彼の弟子等を讚
美す。次いで一轉して教團腐敗の現状を慨嘆す。

1 醫學の鼻祖イッポクラテ（ピッポクラテス）の格言。
こゝにては醫學のこと。

2 以上法律、醫學、神學の三職。

歸るや、燭臺の上の

蠟燭のやうに佇んだ。

かくて曩に私に語つた光はますます

自らを明かにし、微笑みつゝ内より

かく始めるのを私は聞いぬ。

「俺は『永遠の光』の光線をこけて

二

反射するゆゑ、汝の思ひの由來する處を

覺り得る。曩に俺が『彼等は良く肥える』と

云ひ、また俺が『敵ふものが嘗て

生まれなかつた』と云つたわが言葉を

汝は訝り、汝の心に水平たり得るやう

打ち開ける言葉にて

説き明かされんことを汝は望む。

されば茲に良く辨へ置かねばならぬ。

奥底に到るまへに一切の

3 ベアトウリチエとダンテを圍むことを廢めて。

4 トムマゾ・ダク井ノ。

5 諸靈は神のうちに人の思ひを見る。八の八七—九。

6 一〇の九六。

7 一〇の一一四。但し兩句に於て *surse* (起ころ) と *naque* (生まる) の相違あり。十三曲の説明を見よ。

8 異本、飾ひ分く (*ricornu*)。

選16びし丘よりくだる流との間に
高き山の豊沃な丘邊きめへんが懸かかる。

そのためペルチアはボルタ・ソレにて17

寒さ暑さを感じ、背後うしろにノチエラが
クワルド18とともに重き軛くわゆゑに哭なげく。

屢しばしばガンヂエ河よりすることく

五 この丘邊きめへんの裂けて最も峻しげしき處より

一の太陽が世に昇あつた。19

さればこの處を呼ぶものに

謂いはと約つめて Aagesiアゲシと云はず

正しくは、Orienteオリエントと呼よばしめよ。

昇あつてより未いまだ幾いくばく干かならざるに

夙はやくも彼はその偉おほいなる徳により

勵はげましを世に感かぜしめた。

即すなはちなほ若わかうして彼は、死にも似て何人も

16 聖リバルド（一六〇年死）が僧庵の地として選16びし
も建立に至らざりしケツピオに近き小山より流るゝ
キアツシ河。

17 Portale (太陽の門)。ペルチアの東の門にして
スバジオ山に面す。この山の上にアツシシ横たはる。
又この山は夏は反射してペルチアを暑くし冬は冬に
て寒からしむ。

18 アツシシの東南にある二邑。「哭なげく」とはペルチアに
隷屬して重税に苦しみしとの謂か、或はスバジオ山
の東方の荒れし丘阪ゆゑに斯く云へるものが。

19 春分に（天地創造と基督の受肉の行はれし神聖なる
季節。地、一の三八註）太陽は眞東即ち東方(Oriente)
より昇る。而して當時の地理學にては東方を印度の

恒河にて表したり。即ち此句の意味は、正義の新し
き太陽(フランチェスコ)の昇りし處は宜しく東方即
ち日の出の里と謂はるべしとなり。

20 アツシシの古名は斯く綴られき。これは「昇る」の意
に通ずる故茲に「東方」と呼べと謂へるなり。

聖フランチェスコを太陽に比らへしは古くよりな
り。フランチェスコ自らも此を愛して自ら「太陽の
頌歌」を作れり。

被造物の眼が壓倒せられる聖旨によつて

三〇 世界を治める攝理は大聲に

呼ばはり尊き血にて娶り給ひし

基督の『新婦』を彼女の悦ぶ者の許に

行かしめ、自ら堅固に又彼に

いよゝ忠信ならしめんため

ふたりの王を彼女のために定め

此方彼方に案内者としたまふた。

一は熱誠に於て全くセラフィニのごとく

他は智慧により地上に於ける

ケルビニの光の輝きであつた。

四〇 いづれを採るも、一人を擧げるは二人を

賞めることゆゑ、俺はその一人のことを語る。

これ彼等の業の目的が一であつたからである。

トッピノ河と祝福まれしウバルドの

9 「三時頃イエス大聲にエリ、エリ、ラマサバクタニと呼ばはりぬ此を釋げば吾神吾神何ぞ我を棄て給ふやと云へるなり」馬太傳二七の四五。

10 教會。
11 基督。

12 聖フランチェスコと聖ドメニコ。

13 セラフィムは熱き愛に燃え、ケルビムは神の智識の射光に輝く。フランチェスコは愛の善行に秀て、Pater Seraphicusと呼ばれ、ドメニコは神學の智識に優る。二八の一〇九—一一。

14 聖フランチェスコ（一二八二—一二六六年）。伊太利亞のアッシジに生まれ、一時歡樂の生活を送りしも尙施與を忘れず、二十五歳頃重病に罹り改心して宗教的生涯に入り、清貧と勞働と愛の實行を主義として繩を帶とし跣足にて歩み、斯くてフランチェスコ教團を創立せり。

ドメニコ派のアクキノはフランチェスコのことを語り、次曲に於てフランチェスコ派のボナゼントウラはドメニコのことを語る。地上にて此兩教團は相嫉視して競争せしが天上にありては相推賞し合ふ。

15 アベンニノ山脈より流るゝ河、アッシジの近くを流る。

これより俺の擴がりゆく言葉の語る

この愛人等はフランチェスコと清貧であると知れ。

彼等の和合とその悦ばしき貌とは

愛と嘆美と優しき人の眺をして

聖き思ひの原因たらしめた。

かくて尊きベルナルドが最初に杳を脱ぎ

この大なる平安を追ふて走り

走りつゝ自ら緩しと感じた。

あゝ省みられざる富よ、あゝ豊かなる實よ。

『新郎』に慣ひてエザデオは杳を脱ぎ

シルエストロも杳を脱ぐほど『新婦』は慕はし。

やがて父にして師なる彼はその貴女

および既に賤しき繩を帯びし

あのが家族とともに道を辿る。

ピエトゥロ・ベルナルドネの子であり

31 聞く人々の心の中に愛や驚嘆や思ひ遣りの念を起さしめ、遂に聖き思ひ即ち改悔に立ち到らしめたり。

32 ベルナルド・ディ・ク井ンタヴレ。アッシシの富める市民にしてフランチェスコが終夜涙を湛へて

Idem meus et Omnia (わが神わが凡てよ)と祈るを見、改心して彼の最初の弟子となり。財産を貧民に頒ち自ら清貧の生涯を送り、フランチェスコの死後教團長に選ばれたり。

33 跣足となり。

34 一〇の一三五。

35 慈悲深き敬虔なる人にして Verba Aurea (黄金の言)の著者。

36 フランチェスコの最初の弟子の一人。

37 清貧。

38 普通の諸教團の僧は革帶を纏ひ居たりしが、フランチェスコ派は繩を帶とせり。故に此一派は又帶繩派とも呼ばれたり。地、二七の九二、三。

快樂の門を開き得ざる一人の貴女のため

○彼は進んで父と争ふことをした。

かくて己が心靈の法廷のまへと

coram Patre とにて彼女に結ばり

その後日に日にますます彼女を愛した。

最初の夫を奪はれてより茲に

千百年以上、げに彼を得るまで

彼女は悔り忘れられて顧みられずにゐた。

かくて全世界を恐れしめた彼が

彼の聲にも彼女の自若としてアミクラテと

共なるを見たとき云ふ傳へも無益でありた。

○またマリヤが下に止まつてゐた時

従容として勇ましく、彼女が基督と

共に十字架に登つたことも無益であつた。

さて話が餘り曖昧に進まざるやう

22 清貧。

23 父の意志に逆ひて清貧に仕へたりき。

24 アッシシの教會法廷。

25 「父の前」。

26 基督。基督の死後より一一八二年フランチェスコの生まゝ迄。

27 チェザレ・シイザアが伊太利亞に渡らんとして、アミクラテの家の戸を叩きし時、この漁夫はこの英雄の聲にも心を動かさず清貧に安んじて敢て他を顧はざりき。この美しき物語も末世の人々の心には何の感動をも與へずとなり。

28 清貧。

29 清貧

30 異本、哭きし (pianco)

澁さを識て、空しく止まらぬやう

伊太利亞の草の果さして歸り⁴⁵

テエレ河とアルノ河の間の粗き巖の

上にて彼は基督より最後の封印をうけ

これを二年間彼の肢體に携へてゐた。⁴⁶

彼に斯くも大なる福を與へた神が

二〇 自らを小さくして獲た報償に

彼を引き擧げんとしたまふた時

正しき後嗣として己が兄弟達に

彼はその最も愛する貴女を薦め⁴⁷

彼女を眞に愛するやうに命じた。

かくて照り顯く魂は彼女の懷より

出で、己が王國に歸らうとあもひ

あのが肉體に此ほかの柩を願はなかつた。⁴⁸

さて今大海に彼得の船を⁴⁹

45 伊太利亞にて多くの改心者を獲んとて歸り。

46 兩河の間なるカセンティノのアルエルニア山にて一二四年聖痕を受けたり。「最後の封印」とは第一第二の法王の裁可と對照して直接に基督より今裁可の印として身に聖痕を得たるを云ふ。後二年にして彼は死せり。

47 清貧。

48 フランチェスコは一二二六年に死せり。兄弟達を祝福せし後彼はその下衣を脱がしめ地上に身を裸かに置かしめたり。

49 教會。

また甚だ見窄^{みすぼ}らしく見えたことも

九〇 心を卑屈にし彼の眉を壓しなかつた。³⁹

彼は王者の如くインノチェンツォに

あのが堅き志を披瀝し、あのが教團に

關る最初の封印を彼より受けた。⁴⁰

宜しく天の榮光裡に歌はるべき⁴¹

生涯を送つた彼に従ふ

貧しき人々が増した時

この『僧院長』⁴²の聖き意志^{おもひ}は

オノリオを通じて『永遠の靈』より

第二の王冠を被らしめられた。⁴³

一〇〇 後殉教を渴望し、彼と

彼に従へる人々は傲然たる

ソルダノの顔前に基督^{くりすと}を宣傳した。⁴⁴

しかし改心すべく餘りに民の

39 富める父の子でありながら斯く自らの賤しき狀に對して罵詈するゝことが少しも彼を屈服せしめざりき。

40 一二一〇年頃法王インノチェンツォ聖フランチェスコ教團の規範を裁可せり。

41 「フランチェスコ派の人々が地上の教會に於て稱へるよりも此處天上にて天使等に歌はるべき」の意か、或は「こゝ太陽天に於てよりも凡ての聖徒等の集なる天堂の榮光に於て歌はるべき」の意いづれにも解せらる。一二の八三。

42 archimandrita. 希臘教會の語にして一個又は數個の修道院の長を云ふ。此處にてはフランチェスコのこと。

43 一二二三年法王オノリオ第三世より第二の規範の裁可を得たり。

44 一二一九年フランチェスコは數人の弟子を伴ひ第五十字軍に従ひて埃及に到り、ダミエッタ附近の陣地にてソルダノの前にて説教したりと。

汝が心を留めて聽いたとすれば

俺の云つたことを汝が心に呼び起こすならば

汝の慾望の一部分が満たされるであらう。⁵⁴

即ち以上の言葉を削り取つた原本を見

かくて『迷はずば彼等は良く肥えるであらう』と

革紐を帶ぶる者の云へる意を汝は識るであらう。⁵⁵

54 ダンテの二疑問の一。

55 革紐を帶ぶるドメニコ派僧（フランチェスコ派は繩を帶ぶ）アク井ノの今迄述べし言葉の根柢たる「迷はずば云々」の意味を能く解し得るならんとなり。
「革紐を帶ぶる者」の代りに異本「叱正」（corregger）とあり。此に従へば「叱正の意を……」^p

正しき目標^{めじるし}に向けた尊き同勞者⁵⁰の

110 いかなる者であつたかを考へよ。

それは即ち我等の族長^{ペリアルカ⁵¹}であつた。

されば命のまゝ己れに従ふ者に

善き商品を積荷するを汝は能く認める。

しかし彼の羊群^{むれ}は新たなる食物に

いかにも貪婪になり、諸處に

跳ねて、散らされざるを得ない。

かくて彼の羊等は遙かにさすらひ

いよ／＼彼より遠ざかれば

ますます乳を空しうして檻⁵³に歸る。

111 げに中にはこの害を恐れて

牧者に縋りつくも、數いと少なく

この小布^{こぎれ}にては彼等の衣を整ふに足らず。

さて俺^{わし}の言葉^{かすか}が微ならずとすれば

50 聖ドメニコ

51 聖ドメニコ

52 世の富貴と權勢の食望。
フランチェスコ派の讃美
終りて以下アケ井ノはドメニコ派教團の腐敗を離
ず。

53 心靈的糧を失ひて。

宛ら太陽の水蒸氣を消すごとく

愛に消される漂浪者の言葉にも譬ふべし。

かくて地上の人々は、神がノエに

立て給ふた世界に關る契約により

もはや世に再び洪水なき豫兆となす。

恰も此に似て極なき薔薇の二つの

二 花冠は、われらを繞つて廻り、かくて

いや端なるものが最内なるものに相應ふ。

歡喜嬌婉の光と光

歌にしてまた焔なる朴舞と

崇高壯大なる祭とが

恰も己を悦ばすものを仰ぎ見んとして

然も兩眼が閉ぢざるを得ざるごとく

一齊にまた一つ意に鎮まつた時。

新しき光の一つの中心より聲が出で、

5 ニムフォのエコはナルチツソに失戀して哀傷の極た

い聲のみとなれり。

6 ノアの洪水後神は再び水にて世を亡ぼさるゝことを

約し虹をその印とせり。創世記九の八一―一七。異教の神話と希伯來の傳説との結合の著しき例。

7 intima. 外より見て最後即ち内なるもの intima の

意なり。

8 新たに現れし十二光の一の中より。

第十二曲

祝福されし^め焔^をが最後の^{はり}

言葉^{ことば}を語らうとするや否や

聖き磨石^{きせき}がめぐり始めた。

かくて廻り全くめぐらざるに

ほかの焔^{えん}が環^{くわん}にこれを圍み

運動に運動、歌に歌を合はせた――

原光^{げんこう}がその反射^{はんし}に優るがごとく

嚟^きたる管^{くだ}に響く地上の

ムウゼやシレネに遙かに優る歌^{うた}。

10 デウノネがその侍婢^{つかひめ}に命ずる時

相駢^{さうへん}びて色あなじき二つの弓が

薄雲^{はくうん}に懸かり

内なるが外なるを生む状^{さま}

聖徒の第二の輪第一の輪を圍みて宛ら虹の如く、妙なる調に合はせてダンテとベアトリチエを取繞る。やがてフランチエスコ派の僧ボナエンツウラ出で、勇猛熱誠なる聖ドメニコを讃美し併せて己が教團の腐敗を慨嘆し、次で有名な神學者學者等の靈を示す。

1 トムマゾ・ダク井ノ。

2 ベアトリチエとダンテとを取繞る諸靈の團。 上

下にあらず水平に廻轉す。

3 咽喉又は樂器の管の中に生ずる一切の歌と節とは天の音樂の微かなる反映に外ならず。煉、三二の六一―三。ムウゼは藝術の九女神(地、二の七)。シレネは羊聲の人魚(煉、一九の二〇)。

4 イリ。虹のこと。以下ダンテは三つの譬喩を重ねて聖徒の二群の狀を述ぶ。

おのが『新婦』^{はなよめ¹⁷}を救ひ、迷ひ行きし人々は

彼等の行と彼等の言葉によつて寄せ集められた。¹⁸

わか葉をひろげ、新粧の

歐羅巴^{ヨーロッパ}を見せんとて

甘美なるツエッフィロ¹⁹の起きるところ²⁰

船路遙かその後^{うしろ}に太陽が

五 しばし²¹凡て²¹の人に身を隠す

立ち騒ぐ波濤²²を去ること程遠からず

獅子が臣^{けらひ}となり又主^{みし}となれる

偉大なる楯の保護のもとに

幸運のカルロガ²³が坐してゐる。

そこに基督の信仰を戀へる愛人

味方²⁴には寛仁敵には殘忍な

聖き闘士²⁵が生まれた。

胎^{みこ}るや直ちに彼の心は

17 教會。

18 一一の三五、六。

19 西風。

20 西班牙。

21 夏至。

22 大西洋。 南洋球には人類住まずと考へらわき。
地、二六の一六。

23 現今の Calahorra にして古代西班牙のカステイリア
の一邑。カステイリアの楯の面の第一第三の部分に
城、第二第四の部分に獅子を刻めり。即ち一方にて
は城に獅子が抑えられ他方にては獅子が城を制御
す。

24 *Papeian exipolis kai Philonati eunehi* Eur.
Med. 809.

25 聖ドメニコ。 一七〇年に西班牙のカラロラの
邑に生まる。幼時より慈善心に富み、飢饉の際書籍
を賣りて貧民を賑はし奴隷の身代となれりと傳ふ。
異端征伐に熱中し、一二一五年説教を國を創設せり。
一二二一年死す。

宛ら星を指す磁針のやうに

三〇 その在處へと私をむけしめた。

かくて彼は始めた「俺を美しくする愛が

俺を誘ひ、茲にわが導者をいかにも良く

語つたいま一人の導者のことを論ぜしめる。

一人のゐる處に他の一人を導さ來たり

かくて結びて闘ひしごとく

共に輝かすは適はしいことである。

大なる價を拂ひて新たに

武裝されし基督の軍勢が

軍旗の後に緩く進んだ時

四〇 永久に統べ治めたまふ皇帝は

軍兵の價によらず専ら『恩寵』により

危きおのが軍兵のために備へし給ふた。

かくて既に云し如く二人の勇士により

9 磁針の智識は十二世紀の終り頃亞刺比亞より歐羅巴に傳はりしが如し。

10 世ボナゼントウラ。一二二一年に生まれ幼にして

重病に罹りしが聖フランチェスコに癒されたり。そ

の時彼 buona ventura (好運) と叫びしによりボナ

ゼントウラと呼ばれるゝに至りしと。長じてフランチ

エスコ教團に入り其團長となれり。神學上の著書多

し。スコラ哲學者中のプラトオンと稱せらる。

11 聖フランチェスコ

12 聖ドメニコ。彼は其弟子アクセルノを通じて前曲に

フランチェスコを讃美せり。

13 一一の四〇一二。

14 アダムの罪の爲恩寵を失ひ、神の子の貴き犠牲によ

りて新しく武裝され選ばれし信徒。

15 十字架。

16 一一の三五。

見えた。即ち彼に現れた初愛は

基督の宣べ給ふた第一の勸であつた。

恰も『我これがために來たれり』と

云はんばかりに彼が地上に黙して

醒めをるを彼の乳母が屢見付けた。

あゝ彼の父は眞に Felice なるかな。

あゝ彼の母は眞に Giovanna なるかな

(この言葉の意味が人々の譯する如しとせば)。

かのオステイア人とタッデオとに従つて

今人々の勞する此世のためならで

眞の滿那を慕ふがため

暫しの間に彼は偉大なる師となり

遂に園丁過たんか忽ち白みゆく

葡萄園の逍遙に身を委ねた。

正しき貧者に慈悲深かりしは今

34 清貧(馬太傳一九の二一)。 トム・マゾ・ダク井ノは基督の戒規と勸告とを區別し、後者は清貧、禁慾、服従の三つなりとせり。即ち第一の勸とは清貧のことなり。

35 祈禱のため。

36 Felice は「幸運」、Giovanna はヂェロムに據れば「神の恩寵」乃至「エホバは恵み深くまします」の意なり。

37 ダンテは希伯來語を知らず、故に人の云ふ處眞なればと云へるなり。

38 オステイアの僧正なるスサのエンリコ(一二七一年死)は布令研究家たり。ゴロニアのタデオ・ダルデロットは一三〇三年に死し、「基督教國に於ける最大の醫者なり」と云はれ、またアリストテレスの倫理を伊太利亞語に翻譯せり。即ちエンリコは法律にタッデオは格言に従ひしものなり(一一の四)。

39 この世の爲ならで眞理の滿那(糧)を獲得せんがため。

40 教會。

活ける力に充ち満ち、²⁶ 體内にあつて

六 母を豫言者たらしめた。²⁷

彼と信仰との婚約が

聖き洗禮盤にて結ばれ

互の救済^{かたみすくひ}を交はした後²⁹

彼の^{うしひ}後見たりし貴女は³⁰

彼とその後嗣^{よつぎら}等より出づべき

奇しき果^みを睡^{なだろ}みの裡に見た。³¹

かくて彼の真相のよく傳へられるやう

こゝより一の靈が進みいで、名づくるに

『神』の所有格³³を以つてし、全く神のものとした。

七 ドメニコと彼は呼ばれた。かくて俺^{わし}は

彼を基督がその園に自らを扶けしめんとて

擇びたまひし農夫のごとしと云ふ。

げに彼は基督^{くりすと}の使者また親しき者のやうに

26 煉、二五の六八―七五。ダンテはアク井ノに従ひ

懐胎と靈魂發生とを同時と信じたり。

27 燃ゆる炬火を咬へ其焔世界を燃やせし一疋の黑白の斑犬を生む夢を見て母は彼を生めりと。黑白は此教團の衣の表象、燃ゆる燈は修道僧の熱誠の表象、此夢よりしてドメニコ派即ち Dominicans は Dominicans (主の犬)の謂なりと解されたり。

28 フランチェスコには清貧が、ドメニコには信仰が新婦たりし。

29 洗禮を受けし後。

30 教母。

31 教母はドメニコの前額に一の星を、また頭の後に一の星を見たり。これ彼より光出て、東西を照らすことを示す。

32 天上より。

33 神(主) Dominus の形容詞所有格 Dominicus (主の)

これによつて加特力の園は灌がれ
かくて叢林は一際活きづく。

聖き教會があのれを防ぎ

また内亂を戰場に征服した戰車の
一輪が既に斯くあつたとすれば
他の輪の卓絶も良く汝に極めて

二〇 鮮かであらう。彼に就ては俺の來る前に

トムマズがいと懇に汝に語つた。

然しその周圍のいと高さ部分が

刻みし軌道は見棄てられ

かくて嘗て薄皮の浮びし處に今や徴が生えた。

彼の足跡を正しく徒歩にて

追ふ一族は全く顛倒し

前に向かふ足を後の方に投ずる。

されば間もなく惡しき耕作の

52 羅馬教會。

53 教會内の異端。ドメニコは異端を勦滅して教會内
を廓清し、フランチェスコ(他の輪)は寧ろ教會外の
人々を改心せしめたり。

54 前曲を見よ。

55 聖フランチェスコの殘せし跡が看過されたり。以下
教團の腐敗を慨嘆す。前曲一二四以下を見よ。

56 佳き酒は薄皮を浮べ、惡しき酒は徴を生ず。

57 聖フランチェスコの足跡の反對の方向に行く。

58 「我收穫時まづ稗子を抜き集めて焚かん爲に此を束
ね……」馬太傳一三の三〇。

59 フランチェスコ教團。

60 カザレのフラテ・サベルティノ(一二五九—一三三八
年)。フランチェスコ派の精神派の首領にして規範
を嚴守せり。

昔となりし位⁴¹より一位そのものならで

た。その上に坐する墮落せる者による——

六に對して二や三を拂ふことを願はず⁴³

また高き空位に幸福をも覓めず⁴⁴

況して *non deimas quae sunt pauperum Dei*⁴⁵

たゞ誤れる世界に向かひ、『種』⁴⁷のために

闘ふ許⁴⁸を願つた。この種よりして

二十四の植物がなんぢを取巻く。

かくて彼は使徒の務⁴⁹とともに

教理と意志を携へて、宛ら奥深き

脈の搾り出だす奔流のやうに出でゆき

100 異端の幹の抵抗最も

大なる部分に彼の猛撃を

極めて鮮かに加へた。

その後彼より小川の數々が出で

41 法王坐。 プティに據れば初代に於て主教 (Bishop)

は教會の收入を區別して(一)自身の爲(二)僧侶等の爲(三)教會の裝飾の爲(四)貧民の爲とせしが、この通りに守られず。

42 法王坐其ものが惡しきに非ず其上に坐する法王(特にボニファチオ第八世)の墮落によりて。

43 不正なる獲得をなして神の用に只その一部分しか用ゐず、六を取りて二或は三のみしか與へる如きことをせず。

44 空位を狙ひて此を占めんとはせず。

45 「神の貧民に屬する十分一税を食らず」 フイリッ

ブ第四世は「十分一税を五ヶ年間佛蘭西の僧侶より受くる契約にて法王クレモンテ第五世を登位せしめたり。

46 異端の世界、殊にアルピ派の跳梁せし當時の世界。
47 神の言葉の種。眞の信仰。「種は神の道なり」路加傳ハの一。

48 十二人宛より成る二組の聖徒。

49 法王インノチエンツォ 第三世が彼に交付せし特典。

50 源遠く水力巨大なる激流。 彼は奔流と呼ばれ弟子等は小川と稱せらる(一〇三行)。

51 プロヴァンス殊にトゥルウズ(トロザ)地方に異端アルピ派猖獗を極めたり。アルピ派とは十二、三世紀に亘り南方佛蘭西アルピに起こりしものにて僧侶主義に反對せしもの。残酷猛烈なる迫害の後絶滅されたり。

また十二の書冊により下界を照らす

ビエトウロ・イスバノも⁶⁹彼等と共にゐる。

豫言者ナタンと⁷⁰大教正^{メトウロポリタン}

クリンストモ、アンセルモ⁷²および

第一學藝⁷³に敢て手を置きし彼のドナト。⁷⁴

ラバノ⁷⁵が此處⁷⁶にゐる。また豫言者の靈を

一四〇 享^チけしカラブリアの僧院長

デオアッキノ⁷⁶がわが側^{カハラ}に灼く。

兄弟^{フア}トムマゾの燃ゆる慰勸と

その聰^{サト}き言葉とが俺^{ワシ}を動かし

かく偉大なる勇士⁷⁸を⁷⁷妬^{ネタ}く思はしめた。

また俺^{ワシ}と共にこの一團を動かし⁷⁹た。

に似たる論法にて神の存在を論ぜる Prologium 及び贖罪論 Cur Deus Homo 有名なり。七の八四註を見よ。

73 文法、修辭、論理、音樂、數學、幾何學、天文學の七學藝中の第一即ち文法。

74 四世紀中葉の人にして彼の編纂せし文典は中世紀を通じて用ゐられたりき。

75 七世紀マインツの大僧正。百科全書的 De Universo (宇宙) 二十二冊の編纂あり。熱心なる正統派信仰を抱きしも豫定説に關しては知らずして異端に陥れり。彼の De Iudicis & Cris (十字架の頌) は星や十字架にて句讀づけらる。

76 一一三〇年頃生まる。聖地に巡禮シトオ派の修道僧となり、フロラにてカラブリアの山中シルラの森林に僧院を建て、「父」の舊約時代「子」の新約時代も去りて全く自由完全な「聖靈の時代」來たると主張せり。餘りに神秘的默示錄的思想家なりしため彼の著書は一二六六年禁止書目に記入されたり。彼は聖フランチェスコに多大の感化を及ぼしダンテも彼を尊び敢て天界に入らしめた。

77 Induo. 元來は拉甸語のことなるも茲にては一般の言葉云ふ。例へば Deutlich (獨逸語) が deute (意味する) と轉用さるゝが如し。

78 聖ドメニコ。

79 ドメニコ派の僧にてありながら其競争教團の創設者聖フランチェスコを甚く讚美せしトムマゾ・ダクサノの慰勸さがフランチェスコ派の僧なるボナエントウラを感動せしめ聖ドメニコを欣慕(聖き妬み)せしめ遂に斯く讚美せしめたりとなり。

收獲時に、莠が箱を奪はれて⁵⁵

二三 唧つさまを汝は見るであらう。

須らく俺は云ふ、一葉また一葉我等の巻物を⁵⁹

探る者は『我ありし儘に我あり』と

讀まれる一枚を尙も見付け得るであらう。

然し此はカザレ⁶⁰からでもアックワスバルタ⁶¹からでもない。

書は此によつて弛められ

彼によつて緊められることになつた。

俺はバニオレチオのボナエントラの⁶²

生命にて、大なる職にあつて⁶³

常に左手の慾望を斥げた。

二三 繩を帶として自らを神の友とし

跣足の貧者の最初のものたる⁶⁵

イルミナトとアゴステイノが此處にゐる。

サン・ギットレのウゴ、ピエトゥロ・マンチアドレ⁶⁶

61 ックワスバルタのマッテオ(一二八七年に團長たり)

62 一行の註を見よ。

63 僧正として又フランチェスコの教團の長として。

64 地上の事物に對する慾望。「その右の手には長壽あ

り其左の手には富と尊貴とあり」箴言三の十六。

65 一の七九以下。

66 アゴステイノと共に一二一〇年教團に加入しフラン

チェスコに伴ひて埃及に赴けり。

67 元來獨逸人なりしが巴里の聖ギクトル僧院の長とな

り、アリストテレスの研究に反對して保守思想家の

頭目たりき。一〇七九年頃——一四一年。

68 一〇の二〇八註。

69 西班牙リスボンの人。その著 Summa logicarum

(論理綱要)は十二冊より成り永く有名なりき。一二

七六年法王となり、デオランニ第二十一世と稱す。

ギテルボの法王宮殿の寢室の天井落ち一二七七年五

月彼は就眠のまゝ死したりき。これダンテが天國に

て遇ひしダンテと同時代の唯一人の法王たり。

70 ウリアの妻と姦淫せしダビデ王を叱責せしもの。撒

母耳後書十二章。

71 大膽にして雄辯なりしたため「金口」と呼ばれし希臘の

教父。君府の教長たりしが宮廷の罪惡を糾弾し皇盾

エウトキシアの爲に追放されたり。三四四年頃——四

〇七年。

72 英國カンタベリの大僧正。一〇三三年にピエモンテ

のアオスタに生まれ一一〇九年に死せり。デカルト



第十三曲

今わが見しことを良く識らうと喘ぐ者に

想像せしめよ、またわが語る間^{あひだ}

堅き巖のごとくこの想像を保たしめよ。

即ちいたく灼^{かじや}きて空氣の

凡ての層を貫き、隈なく天を

煌々たらしむる十五の星を想像せしめよ。

われらの天の胸に夜と晝とを充たし

自らはおのが極の回轉によつて

微かにならざる態星²を想像せしめよ。

一〇 本原の輪³のめぐりゆく

軸の點に始まる角の口が

自^{みづか}から天上に二つの記號^{しごう}となること、

死の冪^ひ寒^{かん}をおぼえた時の

光輝燦爛たる二十四の諸靈二個の輪となりて廻り三位一體の神を讃美す。歌ひ終るやトムマゾ・ダク井ノ再び出て、ソロモン王の卓絶せる智慧に關るダンテの疑惑を解き、轉た人智の儚かなさを説きて斷定に急なる勿れと戒む。

1 諸靈の二圈の光彩と運動の狀を髣髴せんため、天上の最も光の強き星十五と、大熊星の七星と、小熊星の二星と、以上二十四の星を合はせ、これをアリアソネの王冠の如く二個の星座に駢べ、その一を他の一の中に入れて互に反對の方向に廻轉せしめよ。

2 北斗七星は北半球に住める人の眼より没することなし。

3 原動天。

4 小熊星は角の形をなし、その尖端は原動天のめぐる極に接觸す。

ミノイの娘のやうに

かくて一がその光線を

他の一つのうちに放ち

共に相前後して

進む^{さま}狀を想像せよ。

かくして眞^{まこと}の星坐^ほまた

二〇 わが居りし點を繞る二重^{ふたへ}の舞踏の

儼^{えん}しのぶよすがともならう。

蓋しその遠く我等の思ひに過ぐるこ

自餘一切のものを馳け越す天^{てん}の運^{うん}行^{ぎやう}の

キアナの進^{しん}行^{ぎやう}より迅^{しん}きにも似る。

ここに歌はれたのはパッコ⁹にもあらず

ペアナ¹⁰にもあらず、神性の三位

また神性人性の一人格¹¹であつた。

歌と回轉とはその調^{しらべ}を整へ

5 アリアンネ。戀人テセオ(地、十二の一七註)に捨てられしが酒神パッコ彼女を妻とし死後彼女を王冠の星座とせり。

6 二十四人の聖徒のこと。

7 原動天。

8 トスカナ州の最も緩き流。ダンテの時代には沼澤多かりき。地、二九の四六。

9 酒神。

10 アポロロのこと。

11 三位一體と基督の神性人性は基督教の二大秘義にして、ダンテに據れば、これを知るは祝福の窮極なりき。

凡そ人性の抱き得る光を

悉く注ぎ入れたと汝は信ずる。²¹

かくて第五の光のうちに包まる

功德に敵ふものなしと俺が

上に述べたことを汝は怪しむ。

わが汝に答へることに今眼を開けよ。

五〇 然せば汝の所信とわが言葉とが

圓の中心のやうに眞理に結ばるを見るであらう。

滅びざるものも亡ぶるものも

我等の「主」がその愛のうちに

生みたまふ觀念の輝きに他ならず。

即ちかの活ける光は、己を輝かす者より

流れ出づるも、これより離れず。

また彼等と三位一體たる『愛』よりも別かれず

おのが善により鏡に寫すごとく

21 三六行註を見よ。

22 ソロモン王。

23 splendor. 此は反射の光を指す（一の三註）。滅び

ざるもの即ち天使、人の靈魂、又亡ぶるものゝ創造
（七の六七以下）は共に三位一體の神が其愛の中に生
ぜしめたまふ觀念の灼耀たる顯現に外ならず。

24 基督。「父」の中なる光の源より流出する「子」の活け
る光は聖靈の愛と結び三位一體の神秘なる存在を保
持す。

諸の聖き光は我等に心を留め

三〇 念ひより念ひへと己を幸ならしめた。¹²

やがて「神の貧しき人」の奇しき生涯を

私に述べた光が、もろくの相和せる

神々の間にて、沈黙を破り

かくて云つた「一つの藁が打たれ

その種が既に藏められたがゆゑ」¹⁶

甘美な愛は俺を招いて残れるものを打つ。¹⁷

果を味つたため全世界に大いに

禍した彼女の美しき頬を象らんだため

肋骨が抜かれた彼の胸と

四〇 また槍に貫かれ、前また

後を充たし、凡ゆる咎の

衡に勝ちし彼の胸に

此等兩者を造りし「力」が

12 舞踊より歌へと移りダンテに満足な與へることを只

管悦べり。

13 聖ノランヂエスコ。

14 トムゾ。ダク非ノ。

15 神の恩寵に満たされし人々。謂はゞ「彼等は神々の如きものである」(斐理篇四の二〇)。

16 ダンテの二疑惑の一つ即ち「もし迷ひ行かずば彼等は良く肥えるであらう」(一〇の九六)の意味が既に明かにせられし故。

17 残れる疑惑即ち「斯かる知見に敵ふものが嘗て起こらなかつた」(一〇の一四)の意味。即ち人性に可能なる一切の智慧がアダムと基督とに盡されしと云ふに而もソロモン王の智慧に適ふものなしとは如何となり。

18 エゾ。煉、二九の二四。

19 アダム。「エホバ神アダムより取りたる肋骨をもて女を作り」創造記二の二三。

20 基督。基督十字架にかゝり人類の過去及び未來の罪責より救ひ給へり。「衡に勝ちし」とは、人類の罪を償ひて餘りあることを指す。

且つ天の力がいと強からんか

封印の光は全く明らかであらう。

然し恰も技の巧みはあれども

手の顫ふ藝術家のやうに、自然の働きも

此を倣すことが等しく常に不完全である。

さりながら若し熱き「愛」が意を注ぎ

△ 本原の「力」³¹の明らかな像を刻まんか

そこに缺なき完全が獲られる。

斯くして嘗て土が、缺なき完全な

生物に添ひうるものに造られ

かくて「處女」は懷胎つた。

されば人性がこの二人格³³にありし如くに

嘗てあらず、またこの後も

なかるべしと云ふ汝の説を俺は推奨する。

さてこの上に俺が尙も語らぬならば

30 聖靈。

31 父なる「神」。

32 即ち直接神により土より造られしアダムの如き又は聖靈によりて基督を産める場合の如き此なり。

33 アダムと基督。

あの光線を九つの實在²⁵に結び

六〇 自らは永久^{いつ}に一として残る。

その處より此は漸次能^{はたらき}より

能^{はたらき}にくだり、最後の潜勢に及び

遂に單なる偶然²⁶に過ぎぬものとなる。

こゝに云ふ偶然とは廻^{めぐ}る諸天が

種により又は種なしに生ずる²⁷

發生したものを指す。

此等のものゝ蠟²⁸、および此を型^{かた}どるものは²⁹

一樣でない。従つて觀念^{イデア}の

印銘次第にて、貫く光に強弱を生ずる。

七〇 種類よりすれば同じ木より、良き

また惡しき果^みが生じ、また汝等が

異なる天才を携へて生まれるのは茲に由來する。

もし蠟が定かに捺され

25 九天。神の力は諸天を通じて注ぎ降り遂に偶然即ち朽ち果つべきものに及ぶ。而も神は永久に三位一體として存続す。

26 *contingence*. アリストテレスは此を *τύχην καὶ τὸ αὐτομάτως* 自發的偶然 (物理學二の五の一九七) とせるも、ダンテは此を神の攝理に據るとせり。

27 植物は一般に種より生ずるは明かなり。然れども當時或る昆虫と或る植物とは種なしに生ず即ち湧くと信じられき。かゝ、二八の一五—七。

28 物質。

29 諸天の感化力。以下八曲の一二七以下と對照せよ。

わが意向^{つゝ}の箭の追ひ行きし『儔^{たぐひ}なき知見』とは

王たる思慮を指すことが分かるであらう。³⁹

また若し汝が明かな眼を『起こつた』の一語に

向けんか、それは只王達に關することを汝は

見るであらう。王は多いが善き者は稀である。

かく辨へて解せられんか

110 わが言葉は第一の父と我等の『愛する者』に

關るなんぢの信仰に一致し得るであらう。⁴⁰

斯くて此を常に汝の足に鉛の如からしめ

汝の知らざる『然り』『否』いづれにも

渡れし人のごとく汝の進みを緩^{ゆる}からしめよ。⁴¹

蓋し此場合彼場合に何の辨^{わきま}へもなく

一様に肯^{うけが}ひまたは拒む人は

愚人中の最低なものである。

斯くしてしばしば速斷が

39 ソロモンの智慧に敵ふものなしと云へるは王者とし

ての彼の能力を指すものなりとなり。

40 斯く解されんか第一の父即ちアダム及び『愛する者』

即ち基督が完全なりと云ふ汝の説に矛盾せざるを知
るべし。

41 輕々しく斷定を下す勿れ。

『さうらば彼に敵ふものがなかつたとは

如何に』と汝の言葉を始めるであらう。

然し明らかならざる事が良く明らかなるやう

彼が何人であるか、また『求めよ』と

云はれた時、彼の做した求めの原因を思へ。³⁴

俺が語つたのは、彼が王であり

智慧を求めたのは

有爲の王たらんが爲であつて

こゝ天上にある動力の數や³⁵

或は必然が偶然と結ばつて

必然を生ずることありや否や³⁶

100 また si est dare primum motum esse³⁷ でもなく

或は一直角を有せざる三角形が半圓内に造られ得るやを³⁸

知るためでなかつた事を汝に識らす爲であつた。

即ちわが曩に云つたことに心を留めんか

34 神夢にソロモン王に顯れて何を求むるやと語りし時、善惡を辨別する力を與へよと云へり。列王紀略上の三の五―九。

35 諸天を動かす天使の數。プラトオンは「テイメウス」の四に、アリストテレスは「形而上學」八の八に、ダンテは饗宴篇二の五に此を論ず。

36 必然偶然の二前提よりの結論は必然と稱し得べきや。前提の有する制限は結論に於ても免る可からずとの議論。

37 「本原運動は許容され得るや」アリストテレス「物理學」八の一―三。即ち原因を有せざる運動なるものは有り得べきやの議論。アリストテレスは此を肯定す。一の一註。二四の一三。

38 エウクリデ（ユウクリッド）三の三一。

猛々姿を見せてゐるが、やがて其頂の上に
薔薇を着けるのを俺は嘗て見た。

また嘗て船が全航路を通じて眞直に

迅く海を航して駛せながら

遂に港の入口にて没するのを俺は見た。

一人が盗みし他のものが献物をするとも

一四〇 これを見て貴女ベルタやマルティノ卿に

神の聖旨を速断せしめざれ

或は彼が起ち此が倒るゝやも知れざれば」。

48 自負して小賢しく斷定を下す人々を指してダンテは
斯く嘲弄的に云へるなり。

有らぬ方に向かひ

二三 やがて情が智性を縛る。

眞理を漁らんとして而もその術知らぬ人は

出で立ちし時の儘にも歸り得ずして

岸邊を去る狀は空しと云ふも愚かである。

かくてバルメニデ、メリッソ、ブリッソ

及び其他歩みつゝ何處へ行くかを知らざりし

多くの人々は世界に此の顯な證となつてゐる。

サベルリオやアルリオや、またその眞直な顔を

歪め、聖經に對して宛ら劍の如かりし

愚人等も同斷であつた。

二三 稔るまへに畑の穂を

算へる人のやうに、自負の餘り

人々に斷定を下さしめしめよ。

蓋し冬中黒い荆棘が初め硬く

42 希臘の哲學者にしてエレア學派の創設者。前五一三年頃生まる。

43 エレア學派の哲學者。前四五〇年頃。

44 古代希臘の哲學者。圓を四角形に徹し得たりと自稱せり。以上虛妄の三異教哲學者の例。

45 有名なる異端神學者（二六五年頃死）。「父」と「子」とを同一視して三位一體の正統的解釋より離れたり。

46 同異端者にして（三三六年死）「父」と「子」とを全然離別せしめたり。

47 劍の刃に映ずる歪める顔の如く歪める意見を抱く意。或は無暴に切り卷くる意か。

今ある如く永久に汝等とともに

存^{ぞこ}ふや否やを彼に告げよ。

かくて若し存^{ぞこ}ふとすれば、再び

見ゆるものたらん時、光が汝等の眼を
害ふことなきを得るやを告げよ⁵。

輪⁶をなして行く人々が

二〇 増さるゆく悦びに唆られ惹かれて⁷

一齊に聲を挙げ歡喜を態^{しな}に示すやうに

迅^{はや}き虔^{まこと}しいわが願ひに對して

聖き二つの環^{くわん}は振返り、その妙^{たへ}なる

節^しに新しい歡びをあらはした。

天上に生^いさんがため地上に

われらの死すべきを嘆く人は

永遠の雨の清新をこゝに見ないからである⁸。

永久に生くる一にして二また三

5 祝福に入りし者の靈魂は靈魂の射出する光に蔽は

る。やがて復活の日に靈魂が見ゆる體を採る時諸聖

徒より發する光に如何にして眼が堪へ得るぞ。復活

後の靈體に關しては馬太傳一三の四三。哥林多前書

十五章を見よ。地獄に陥りし者の狀に就ては地、六

の一〇三以下を見よ。

6 *rotta*、一種の舞踏の名なりしと見ゆ。

7 眞理を知らんとするダンテの願望を充たし得るを喜

びて。一〇の一三九以下。

8 人もし彼を待てる天上の喜悅を知らば死を哭かざる
べし。

第十四曲

圓き器うつはの中の水は、外そとまたは

内より打たるゝに従ひ、中心より

周圍まわりへ周圍まわりより中心へと動く。

トムマゾの榮光いのちの生命が

沈黙した時この事が直ちに

わが心に浮んだ。

これ彼の言葉とベアトリチエの言葉とが

これに似てゐたからである。¹

彼女は進んで斯く彼の後に始めた

10「この者はなほ一つの眞理の根を

究むべきに、それを汝に告げず

聲にも否思ひにすらも現はさない。³

なんぢらの本體⁴を花咲かす光が

ダンテ諸靈の光耀を見て復活後の靈體に對する疑惑に襲はる。ソロモン⁵の靈これに答ふ。肉體の復活と聞きて諸靈神を讚美す。無數の靈現るよと見る間にダンテは紅く輝く火星大に昇り、凱歌を唱へつゝ諸靈の十字架の形を成すを見る。

1 諸聖徒はベアトリチエとダンテを中心として輪に

聯なる。即ち阿克井ノの言葉は圓周より中心に向かひ、ベアトリチエのそれは中心より圓周に向かふ。

2 ダンテ。

3 而もベアトリチエは此を看破してダンテの爲に阿克井ノに訊ぬ。

4 靈魂。

我等に着せられん時、我等の身は完全になり
一際悦ばるゝものとなるであらう。

されば『至高の善』が我等に價なしに

與へ給ふ光、即ち我等をして彼を

見るに足らしむる光は凡て優り行くであらう。

斯くて我等の幻影は増すべく

吾 これに燃やされて我等の熱誠は増し

これより出づる光線は増さねばならぬ。

しかし石炭が焔をあげながら

焔にも超つて灼熱し

おのが姿を失はずにゐるやうに

既にわれらを取繞るこの灼きは

今は全く土に蔽ひ被さるゝ肉體のため

見劣りするものとなるであらう。

またその光は我等を疲らす力を有たない。

14 「肉體なき靈魂は其性完全ならず」トム・マゾ・ダク井

15 二八の一〇六一一。

16 神曲中最も美しき譬喩の一。

三 包まれずして萬有を包むものを⁹

諸靈が擧つて三度歌つたが

その旋律の妙なる、方に一切の

功徳に酬ゆるに足るであらう。

かくて小さき環のいとも神々しい¹⁰

光¹¹のうちに、マリアに語りし天使の¹²

聲にも似たらん慎ましき一聲が私に聞えて

答へた。『天國の祭のあらん限り』

長くわれらの愛が光を發して

身の周圍まわりに斯かる衣となる。13

四〇 その輝きは我等の熱誠に従ひ

熱誠は幻影に従ひ、幻影は己が功德を

超ゆる恩寵を受くるに従つて大なり。

聖められし榮光の肉が、やがて再び

9 三位一體の神。

10 或は「輝く」。二三の一〇七、二六の一〇。

11 多分箴言の著者と信ぜられしソロモン王の靈。彼は
一〇の一〇九に「我等のうち最も美しい第五の光」と
稱せらる。煉、三〇の一〇、一一參照。

12 受胎告示の天使ガブリエロ。煉、一〇の三六。

13 ダンテの二疑問(一)今該靈を包む光は復活後體を採る時尙存續するや(二)若し然りとせば眼は斯く強き光に堪へ得るや。ソロモンは(一)に對しては然りと答へ、光の強度は神を見る力の度に比例すと云ふ。

そして前の二つの圓周の外に

環をつくるよと私に見えた。

おゝ聖き息吹の眞の閃光よ

いかに速かに輝き、わが眼を

壓倒して堪へざらしめしぞ。

しかしベアトウリチエの表せるいとも

ひろ美しき微笑める姿は、わが記憶の

追ひ得ざる眺のうちに残し置かざるを得ず。²¹

そこよりわが眼は再び力を獲て見上げ

只わが貴女とともに身の

更に高き救拯に移されあるを見た。

火のごとき星の微笑みが、常よりも

紅く見えただので、身の更に

高められたことを私は認めた。

全身を擧げ、また萬人に一なる

21 諸靈の輝きは強かりしもベアトウリチエの輝ける美
は更に此に優り、到底述ぶるを得ず。一の九。

22 saute. 或は社福。「新生」三三の註二を見よ。茲に
ては第五天即ち火星天のこと。火星は戰鬪的精神の
表象たり。

23 煉、二の一三—五。

肉體の諸の機關が強められて我等を

六〇 悦ばず一切のものに堪へ得るからである」。

すると忽ち急に双方の合唱隊が私に

亞孟を稱へ、いかにも彼等がその死せる

肉體を慕ふ心を示すよと見えた。

恐らく此は彼等自らのためのみでなく

母達や父達や、その他彼等が無窮の焔と

なりし前に愛した人々の爲でもあつた¹⁷。

すると見よ、ありし光の彼方に^{かなた}

あなじ輝きの一つの光が、輝きゆく

地平線のやうに四方に現れた¹⁸。

七〇 かくて恰も夕に間近き頃^{ゆふべ}

新しき姿が天上に見え初めて¹⁹

眞とも見え、また見えないうやうに^{まこと}

そこに新しい本體が見え出し

17 彼等が肉體の復活を願ふは只自己の爲のみならず父母朋友等と交通し得んが爲なり。

18 地平線の如く大なる信仰の賢者等の群が更に出現せり。その狀宛ら薄暮空に微かに星の現れ初むるにき似たりき。

19 晝は見えざりし星。

20 靈魂。

蓋しこの十字架が基督を灼き出だし

その状を譬ふるに足るものを私は識らない。

然し己が十字架を採つて基督に従ふ者は

やがて同じ明に耀く基督を見ん時

わがこの省略を赦すであらう。

角より角へと、また頂と

二〇 麓との間に諸の光が進み、共に

遇ひつゝ過ぎ去り、強く閃いてゐた。

その状は往々人々が眼を害はぬやう

考案工夫して蔭を作り、日光を

眺める時、その中に長く又短き物體の

微分子が眞直に又屈曲し、迅く又遅く

姿を更へては更へて動くのが

こゝに見られるのにも似てゐる。

また數々の絃が調を整へて張らるゝ

28 原詩に於て *Ombra* の語が行の終りに置かるゝは此

處共に四回あり。斯かる場合ダンテは他の語を以て
押韻せず同じく *Ombra* の語を以つてせり。一二〇
七一—五。一九の一〇四—六。三二の八三—七。

29 十字架の上下左右の桁のこと。

30 *con ingegno ed arte*、煉、二七、一三〇。

31 地上に。

言葉をもつて、この新しき恩寵に

九〇 適はしい燔祭を私は神に献げた。

かくてわが胸より犠牲の熱情が

まだ盡き果てぬ前に、供物が

納れられ嘉されたのを私は識つた。

即ち輝きが二つの光線のうちに

いかにも照りいかにも紅く現れたので

私は云つた「あゝ彼等を斯く飾るエリオスよ」。

強弱の光に際立つて天の河が

世界の兩極の間に白み亘り

賢者をさへも訝からしむるやうに

100 諸の光は火星の深處に羅集し

四分圓が結ばつて圓のうちに作る

儼かなる記號をつくり出した。

茲にわが記憶が天才を打ち負かす。

24 靈魂の無言の聲。

25 希臘語 *ἑλιος* (太陽神)。ダンテは希臘語を學び居

らざりしも或は其數語を知り居りしならん。デオズ
とエホヴァを同一視せし如くエリオスを希臘來語 *ἑλιος*
(神)と同一視せしものならん。九の九。

26 「銀河に就ては哲學者が説を異にす」饗宴篇二の一
五。

27 即ち⊕の中の十字形にして基督の十字架のこと。

その高さに従つて力を加へることゝ

また私が此に振向かなかつたことを考へる人は

私が已を辯疏^{べんしゆ}んとて自ら責めたことにより私を赦し

また私の言葉の眞^{まこと}なるやを識るであらう。

蓋し聖き悦びはこゝに開き盡^{ひら}されず

上に昇るに従ひ益々純になるのである。³⁷

35 ペアトリウチエの眼。

36 ペアトリウチエの眼を見ざりしことをダンテは自ら責む。

37 是迄受けし喜悦も又ペアトリウチエの是迄現はせし美も今此歌の與へし歡喜には及ぶべくもあらず。斯く云ふはペアトリウチエを貶す如く見ゆるも實は然らず。蓋しペアトリウチエは上昇するに従ひ其美を増す故、若しダンテにして今彼女を振返つて見たりしならば一二八、九行の如き大膽な言を吐かざりしならんとなり。

提琴や堅琴が、人にその譜の聞き

二〇 取れぬほど甘美な音を出だすやうに

そこに私に現れた諸の光より

一の旋律が集まつて「十字架」より出で

恍惚として私に聖歌を識り得ざらしめた。

然し解らぬながら尙も聴く人のやうに

私に「起ちて勝てよ」と聞こえたので

それが尊き讃歌であるのを識つた。

かくて私は慕しさに堪へず

この時まで斯く甘美な紐にて

私を縛つたものが一つもなかつた。

一四〇 恐らくこの言葉は大膽に過ぎ

わが願望が眺めて慰み美しき眼の

悦樂を輕んずるよと見ゆるやも知れず。

しかし一切の美の活ける封印が

32 基督に對して諸靈の云ひし言葉。

33 ペアトゥリチエの眼。

34 「人間の蠟の封印」たる諸天。諸靈は清火天に接近するもの程力大なり。従つて其中に有する喜悅も大なり。

絶えず迅い火がさすらひて

安らけき眼を動かし

恰も星が處を變へるよと見える。

然もその燃え出でし處に何も失はれず

かくて自ら存ふことが束の間である。

その如く十字架の上に輝く星坐の

二〇 一つが右に突き出た角より。

麓へと馳せくだつた。

然しその飾紐より寶石は落ちず¹⁰

射光の條に沿ひて過ぎ

雪花石の後の火のやうに見えた。

エリシオにてアンキエゼの影がその子を識つた時

もし我等の偉大なるムウザが信ずるに足らば

これに似た情をもつて身を差し伸べた¹¹

O sanguis meus, o superinfusa

7 流星。煉、五の三八註。

8 流星は星にあらざれば火の發せし處に星は失はれる筈なく、また流星は止まりて光を持続することもし。

9 十字架の右の桁より。

10 諸靈は十字架の形に結ばりて宛ら寶石を彫めし飾紐の如し。

11 「エネアの歌」四の六八四―七。「偉大なるムウザ」とはギルヂリオのことなり。

やがて彼(アンキエゼ)はエネアが草を越えて彼の方に

進み來るを見た時、直ちに兩手を差し伸べ

かくて涙が彼の頬に滴り落ちたので

叫んだ「汝は遂に來たのか」と。

第十五曲

貪慾¹が不義に滴るごとく

正しく靈感する愛の常に

自ら滴る恵み深き意志が

この甘美な七絃琴⁷を沈黙せしめ

また天の右手^{めて}が弛めては

張る聖き絃を静めた。

相共に沈黙して自らに

祈る意を私に與へた諸の本體⁴は

いかで義しき祈願^{きわん}に聳^{つんば}たり得やうぞ。

10 存^{ながら}へざるものを愛するため

自ら永久^{とこしへ}にこの愛を失ふものは

宜しく限りなく哭くべきである。

澄みて清けき夕空⁶に

神の戰士等聖歌を止め其中の一靈馳せ下る。これダンテの祖先カッ
チアグ^{チアグ}井^井ダ^ダなり。彼徐るに家系^{カキ}のことを述べ、併せてフイレンツェ^{フイレンツェ}の
昔の質朴なりし^{質朴}狀を語り、尙自ら十字軍に出征して勳功を建て、殉
敵して遂に平安の天に昇りし由を告ぐ。

1 cupiditas. 誤れる方向に馳せし愛。煉、一八の六四
一七五。

2 諸靈の讃歌。

3 彼等の讃歌の喜悦を棄てし。

4 諸靈。

5 世の事物。

6 sereno. 煉、五の三七。

や、弛められて、その言葉が

人間の知解の標的^まとして下つた時

私に分かつた最初のこととは「わが裔^{すえ}に

斯くも大いに慇懃なる三^{みつ}にして

一なる汝^{みづ}は崇^{たふと}きかな」であつた。

かくて彼は續けた「白きも暗きも

五^こ 永久^{とこしへ}に變はることなき大なる卷物¹⁵を

讀んで受けた楽しい長い飢^{うゑ}を

わが子よ、汝に斯く語る俺^{わし}を蔽ふ此光のうちに

汝は癒した。これ斯く高く翔りうるやう

汝に翅を着けた彼女¹⁷の恵みである。

一が識られんか此より五や六が注ぎ出るやうに

なんぢの思ひが『本原』なる神を通じて

俺^{わし}に注ぐことを汝は信ずる。¹⁸

されば、汝は俺が誰であり、また何ゆゑに

14 三位一體の神。

15 神の心。人間の書には抹殺と添加あれども（約翰默

示錄二二の一八、九）神の書には此なし。

16 ダンテを見んと欲するカッチアグ^井ダの渴望。ダン

テの天に旅し來たることを神のうちに見て俟ち居り
しなり。

17 ベアトワリチエ。

18 人間の思ひが神の心に反映すること恰も一切の數が

「一」より發生するが如し。従つて神を觀る受福者は

何人の心をも看破するなり。九の七三—五〇日

videt videntum omnia, cuncta videt（一切を觀る

もの【神】を見る者は一切を觀る）。

Gratia Dei, sicut tibi, evi

110 Bis unquam coeli ianua reclusa;¹²

斯くこの光が語つたので私は此に心を留めた。

それより眺^{ながめ}をわが貴女に再び向けたが

此方に彼方に私は愕かされた。

蓋し彼女の眼には云ひ難き微笑みが燃え

わが眼にてわが恩寵及びわが天國^{ブラディツ}の

奥底^{おくそこ}に觸れたと心のうちに私は思ふた。

かくて聽くにも見るにも悦ばしく

靈は初の言葉に加へて何か語つたが

いかにも深遠にして私には分からなかつた。

110 しかし彼が己を私に隠したのは好みてにあらず

止むを得ぬのである。蓋し彼の想ひは

人間の標的^{まて}以上に置かれてあつた。¹³

やがて彼の熱烈な愛情の弓が

12 これダンテの祖先カッチアグ^{カダ}（一〇六一—四七年）の言なり。

おゝわが血よ。おゝ神の溢るゝ恩寵よ

汝のごとく何人に譬て天の門が

二たび開かれしことありや。

茲に「二たび開かれし」と云ひしは、神曲の此旅に於て一度開かれ、やがて又ダンテの死後今一度開かるを以てなり。カッチアグ^{カダ}の生存せし時代には拉甸語を使用し居りし故茲に特に拉甸語を用ゐしものか。カッチアグ^{カダ}に就ては此曲と次の曲に出づることの外傳へらるゝ處なし。

13 カッチアグ^{カダ}の言葉の難解なりしは彼の本意にあらず、天上の事物に關る故に止むを得ざるなり。

なんぢらに現れた時、愛情と智とが

汝等の各に一つ重さとなつた。

これ熱と光とにてなんぢらを

耀かし暖める『太陽』が斯く平等にして

譬ふるに足るものが斯く無いからである。

しかし人間の意志と論とは

二 汝に明かである原因により

異なる羽の翹を有つ。

されば人間なる私はこの不平等を

自ら感ずるゆゑ、汝の父らしい歡待に對し

謝辭を述べずに、只わが心を以つてする。

しかし此貴き寶石を彫む活ける

黄玉よ、なんぢの名を告げて

私を飽かしめんことを汝に祈る」。

「あゝわが葉よ、汝を専ら待つて俺は自ら

23 *voglio ed argomento.* これは七十四行にある受福

者達の愛情と智 (*affetto e senno*) に對應す。ダンテは前の二語を善惡兩義に用ゆるも後の二語は決して惡しき意味に用ゐず。

24 意志は強く而も此を表白する能力弱し。これ人間の力が不完全にて相均衡せざるに據る。

25 黄玉を熱湯に投ずれば水は直ちに冷却す。されば此寶玉は情慾を冷却し、狂亂と狂熱を鎮靜せしむと稱せられき。三〇の七七。

26 後裔。

この樂しめる群の何人よりも俺が汝に

一際悦ばし氣に見えるかを俺に訊ねない。

汝の信ずるところは眞である。即ち

汝が考へぬ前に汝の思ひを既に現す鏡を

この生涯の小なるもの大なる者が眺める。

しかし俺が永久に仰望して胸り

また俺を甘美な願望に渴かす『聖と愛』を

尙も良く充たしめんがため

汝の聲を確く大膽に悦ばしく

意志を響かし、願望を響かせ。

それに向かひわが答へは既に定められてゐる」。

セ 私を身をベアトリチェに向けたが

私の語る前に彼女は聽いて相圖を與へ

わが願望に翼を加へた。

そこで斯く私は始めた『原初平等』が

19 人の心事を照覽する神。

20 ダンテはカッチアグ²⁰の誰であり又彼がダンテを

見んと欲したりし譯を神のうちに見て識る故に訊ね

るに及ばざるなり。然しカッチアグ²⁰はダンテに

云ふ、善を倣ふことを悦ぶ諸靈の光輝と愛を増さし

めんとために敢て汝の願望を披握せよと。

21 異本、arismi とありて「微笑んで相圖をし」。

22 prima equit²² a 神。神にありては其一切の屬性(例

へば智情意)が悉く均衡を保ちて平等なり。三三の

一〇三—六、この神によりて諸靈の愛と直觀は均衡

を保持す。我等人類にありては情餘りて言葉足らず。

彼方にも越えなかつたので³²

娘が生まれて未だ父を恐れしめなかつた。

家族のゐない家はなく³³

室のいかに飾らるゝかを看せんとして³⁴

またサルダナバロが到來しなかつた。

モンテマロはまだ汝のウツチエルラトイオに

110 負かされなかつた。やがて上に聳ゆる

ことには負かされたが、その衰頹の度は軽くあらう。³⁵

ベルリンチオネ・ベルティ³⁷が柔皮と骨とを

着けてゆき、その夫人が顔を彩らずに

鏡を去り來るのを俺は見た。

またネリ家やエッキオ家の人が³⁸

素皮にて満足し、その貴女達が³⁹

紡緋や絲に満足するのを俺は見た。

あゝ福なる女達よ、各あのが墓に

32 現今の如く婚期が夙くなく、嫁入道具も多く要せざりき。或は過重なる嫁入仕度の爲現今の如く婚期を遅る恐れなくの意か。

33 現今の如く住む人もなき不用の家屋を只虚飾の爲に建つる者なりき。

34 「密房に行はるゝ一切の罪惡」と解する人あり。

35 アッシリア帝國最後の王にして奢侈と淫逸にて著名なり。彼は女装して臣下の眼の届かざる密房に多くの妾に圍繞せられて日を送れり。メデアの太守に攻められ遂に多くの妾と財寶と共に己が身を灰燼に歸せしめき。

36 羅馬のモンテマロ即ち現今のモンテ・マリオの眺望は、フィレンツェを距つる五哩のウツチエルラトイオの高處よりの眺望に未だ負かされざりき。即ちフィレンツェはやがて眺望の點に於ては勝ちしが墮落の點に於ても同じく羅馬に勝ちしとなり。

37 フィレンツェの名譽ある市民にして有名な武士(十二世紀後半)。地、一六の三七の「善きカワルドウラダ」の父なりき。

38 フィレンツェの古き二名門。共にゲエルフィ黨。

39 素皮の帶を骨にて止めて。

楽しんでゐた。俺は汝の根であつた。

九〇 かく始めて彼は私に答へた。

かくて彼は私に云つた「汝の一族の

名となり、百年以上も山の

第一の軒蛇腹²⁷をめぐつた彼は²⁸

俺の子で、また汝の曾祖父であつた。

げに汝は彼のため其長い勞苦を

汝の業²⁹によつて短くせねばならぬ。

今なほ第三時と第九時とを聞く³⁰

昔ながらの圍^{かこみ}のうちにフィレンツェは

平安に住み、質朴で慎ましかつた。

100 彼女は鎖も冠もつけず、貴女達は

飾靴³¹をはかず、また本人よりも

眼立たしめる帯をも緊めなかつた。

また時と嫁奩とは度を此方にも

27 煉獄淨罪山の第一臺地傲慢の淨罪地。煉、第十、十一、十二曲を見よ。

28 アリギエリ（一二〇一年に生存せり）。ダンテは彼より其名と共に傲慢性を繼承せり。

29 祈禱。煉、三の一四五の註。

30 Ia Bidin（九七八年建設）と稱せらるゝベネデット派の僧院の鐘。此僧院はフィレンツェの古き城壁近くにありて毎日鐘を鳴らして勞働と禮拜の時を告げ知らしたりき。第三時とは午前六時より九時迄、第九時とは正午十二時より三時迄。地、三四の九六註。

31 configiare. 單に「飾る」の意とする人もあり。古註に「飾靴」とあり。

生かした。かくて汝等の古の洗禮盤にて

一度に基督教徒となりカッチアグ⁴⁹ #ダとなつた。

モロントとエリセオは俺の兄弟であつた。⁵⁰

妻はボオの谿より俺のところへ來たので

彼女の名より汝の姓が出た。⁵¹

後俺は皇帝コ⁵²ラドに従つたが

一四〇 彼はその軍勢の帶を俺に纏はし

勳功によつて俺は彼に悦ばれた。

彼に従つて俺はかの牧者達の過に乘じ

汝等に屬する統治權を冒した人民の

不義な律法に逆つて進んだ⁵³

彼處にてこの卑陋な民により俺は

多くの魂が慕ふて醜くなれる

偽り多き世界より解かれ

殉教してこの平安に來たのである」。

48 ダンテが「我美しき聖約^{サオヴァンノ}翰」と呼べる(地、一九の一

六、七)フイレンツェの會堂にあり。

49 洗禮を受けた。斯くカッチアグ #ダと命名せられたり。

50 此兩人に就ては何事も傳はらず。

51 アリギエリ (Aldieri)

52 スアビアのコ⁵²ラド第三世(一三七一—一三九二年)。聖

ベルナルドの熱辯に動かされて一四七七年慘憺たる第二十軍に加はれり。彼はカッチアグ #ダを勳爵士とせり。

53 サラチノ人。基督教徒の正當に統治すべき聖地パレ

ステイナは法王等の怠慢無能によりサラチノ人に占領せられたり。九の一、二四、五。

54 マオメットの律法即ち宗教。

安らけく、また佛蘭西^{ふらんす}さして

二二〇 まだ一人も寢床^{ひとど}を見棄てられなかつた。⁴¹

或る者は搖籃を熱心に見守つてあやし

父達母達をまづ嬉しがらす

片語^{かたこと}を使つてゐた。

他の者はその絲卷より結髪^{もよどり}を引きだしつゝ

家族のものにトロイアの人々や

フィエソレや羅馬^{ろま}の物語をした。

一チアンエラ⁴³、一ラボ・サルテレ⁴⁴ルロは

チンチン⁴⁵ナトやコルニリア⁴⁶が今驚異であるやうに

當時大なる驚異と思はれたであらう。

一三〇 かく安らかな、かく美しい

市民の生活に、かくも誠實な

市民社會に、かくも甘美な宿に

マリアが大なる叫びに呼ばれて俺⁴⁷を

40 夫と共に他國に行きて死する要なく。

41 夫が田稼に佛蘭西や其他の外國へ行き妻を残し去るにも及ばざりき。

42 共にフィレンツェの基礎となりし町々。

43 ダンテと同時代に住みし華美淫蕩な寡婦なりしと。

44 法律家にして粗暴なる人物なりしと。一三〇二年三月五日ダンテと共にフィレンツェより追放されたりき。一七の六一—二。

45 羅馬の執政官となり敵平定後田園に歸りし有名なる愛國者。六の四七註。

46 スシビオ・アフリカノの娘にしてクラッコ兄弟の母。己が子等を寶石と稱し羅馬市民を熱愛せり。地、四の一二八。

47 分娩の際異教時代にディアナの名が呼ばれし如く當時聖母マリアの名を産婦は叫びたり。煉、二〇の二〇、二一。

微笑^{ほくそ}みつゝ、デネヅラ物語にある

初咎^{はつとが}を見て咳^{せき}をした女のやうに見えた。⁴

私は始めた「卿^{おんが}はわが父である。

卿は全く大膽に私に語らしめる。

卿は私を高めて我を我以上たらしめる。

夥^{おほ}しき流^{りゅう}にてわが心を歡喜に

二 充たし、能くこれに堪へて

破裂^{はくはつ}せざることを自ら悦^{よろこ}ぶ。

されば慕^もはしきわが元祖よ、汝の先祖達が

誰であつたか、また汝の少年時代を

劃^きする歲月^{さつげつ}のありし狀^{さう}を私に語れ。

當時聖約翰^{セント・ジョン}の羊檻^{やうがん}の大きいさ如何なりしか

またその中にて最高の坐を占めし

人々の誰であつたかを私に告げよ」。

石炭が風に煽^ふられて焔^{えん}を

4 神學の表象たるベアトウリチエは斯かる會話に必要な
き故に側に離れ居りしなり。而して彼女はダンテの
虛榮心を見て、恰も女王ケネギアがランセロット
の最初の接吻を受くるを見て(地、五の一二七八)ダ
ム・ドゥ・マルオリが咳せし如く微笑せしなり。

5 斯く大なる歡喜に堪へ得る力を自ら得たるを喜ぶ。

6 フイレンツェ(二五の五)。洗禮者約翰は同市の守護
聖徒なりき。

第十六曲

あゝ我等の血の瑣々たる尊嚴よ

我等の愛情の衰ふ此處下界にて

汝人々になんちを崇めしむとも

最既^{もはや}われには怪しむに足らず。

蓋し慾望の曲がらざる彼方

即ち天にて我自ら此を崇めたればなり。

げに汝は速かに短くなる外套なれ。

されば若し日毎に綴り足さざれば

「時」が鉸^{はさみ}刀にて周圍^{まわり}を繞るならん。

10 羅馬が初めて容れ、その一族が

殆んど保存しなかつた^エをもつて

わが言葉をふたゝび始めた。

すると少し離れてゐたベアトリチ^エは

ダンテの祖先カッチア^非ダ徐ろに己が誕生より脱き起こして故郷
フィレンツェの沿革に及び、移住民の齎^{あづか}らせし禍^{わざはひ}を慨^{かな}し、古き名門の
滅亡を回顧し、遂に婚約破棄のことよりして互に怨恨を抱くに至り
しアミテイ家とブオンデルモンテイ家のことを語る。

1 血統の誇は瑣々たるものなれども而も人間の此を誇
るは無理ならずと知りき。蓋し虚妄の滅すると云ふ
天上に於てダンテ自ら祖先カッチア^非ダに就て誇
を感じたればなり。

2 血統の尊貴も勳功も綴らざれば遂には消滅せん。

3 第二人稱の複數代名詞。敬稱なり。羅馬帝國時代に
使用されしも後廢止されたり。ダンテは此敬稱をブ
ルネット・ラティニに用ゐ(地、一五の三〇)またベア
トリチ^エに用ゐたり。

彼等の名、また何處いづてより彼等が此處こゝに來たかは

述べるよりも宜しく黙すべきである。¹⁴

當時マルテと『洗禮者』との間にあつて

武器を採り得る者は、凡てにて

現住民の五分の一であつた。

然し市民は、今はカムビやチエルタルドや

五〇　フィギネの人々と混じをるも

當時は最も賤しい職工等も純粹であつた。¹⁷

わが云へる此等の人々を隣人とし¹⁸

またカルルツオとトゥレスピアノを汝等の¹⁹

境界としたらん方、彼等を市に入れ

かくてアグリオネの野人や、また夙つとに眼を

收賄に鋭くせるシニアの醜漢しやうかんを耐しのばんよりは

汝等のために、おゝ如何に善かりしぞ。

世界の中最も墮落せる人達²²が

14 これ謙遜に據るか、其ともダンテ自ら祖先のことを

詳しく知らざりしに據るか。

15 軍神マルテの立像のある（地、一三の一四六註）ボンテ・エッキオと町の北方にある聖約翰會堂との間。この二箇所は古代の城壁の跡なり。

16 共にフィレンツェ地方にある小さな町にして、その處より人民が移住し來たりてフィレンツェの禍となれり。

17 混血ならざりし。

18 此等の人々を隣人として（同胞市民とはせずに）遠ざけ。

19 共にフィレンツェより二三哩の邑々。依然として昔ながらの狭き範圍に止まりし方福なりしならんとなり。

20 アケリオネ（フィレンツェ附近の城）のバルド。一三一年フィレンツェの長官たりしことあり。

21 フィレンツェより約十哩の邑シニアのボンファチオと呼ばれしものと想像さる。彼は恩義と職務とを賣りしと。

22 僧侶等。煉、六の九三註。

舉げるやうに、私の媚により

三〇 その光の灼くを私は見た。

かくて私の眼に一際美しくなるにつれて

その聲も一際甘美に柔しくなつたが

この今の世の言葉を用ゐずに、

私に答へた「^{アエ}Ando」と云はれた其日より

今や聖徒となれる我母が

その負ひゐたりし俺を生み落した時まで

この火は己が獅子宮に五百五十と

三十度歸り來たり

その黥の下に己を焔にした。

四〇 俺の先祖達と俺とは、汝等の年中競戯に

加はり走る者が先づその最端の

第六區に來るその處に生まれた。

俺の祖先等に就ては此にて満足せよ。

7 カッチアグ^{サダ}が十五曲の二八一三〇に於けるが如

く拉句語を用ゐしとはあらず、彼の存命時代の古
きフイレンツエの方言を用ゐしなり。

8 天使ガプリエロがマリアに「^{めでた}慶し」と云ひし日よ
り。即ち基督の降世以來。路加傳一の二八。

9 火星。

10 獅子宮は火星（軍神にしてフイレンツエの古代の守
護神。地、一三の一四四註）に照應す。これ兩者の
性質（勇敢）が一致すと思はるに據る。

11 六百八十六日二十二時二十四分に一周する火星の五
百八十の回轉は一千〇九十年と數箇月になる。時に
カッチアグ^{サダ}は五十六歳なりき。

12 毎年六月二十四日洗禮者約翰の祭日に行はれし競
走。勝者は ^{Pulho} Pulho とて紅の絹の天鵞絨の外套を受
けたりと。

13 フイレンツエ市は最初四區に分かれたれしも後に六區
とせられたり。此第六區附近には古き名門の家多く
ありき。

過ぎ去り、またその跡をキウジと³⁰

シニガリア³¹がいかにかに追ふかを観んか

市³²にも期限がある以上

種族の滅亡を聞くは

汝に珍らしくも難きことでもなくなる。

汝等の一切萬事は汝等自らのごとく

滅びる。しかし長く続くものに死が

蔽はれる。これ人の生命^{いのち}の短きによる。³²

さて月天の運行が止む時なく

岸を蔽ふては剝ぐやうに³³

運命はフィレンツェを玩弄す。

されば時に名聲を蔽はれる貴さ

フィレンツェ人に就きわが語ることが

汝に怪しきものとは見えぬであらう。

俺^{わし}はウギ家³⁴を見た。またカテルリニ家、フィリッピ

30 古都クルシウム。フィレンツェと羅馬の中途にあ
り。

31 古都セナ・ガリカ。

32 地上の事物は悉く亡ぶ。然し町々や家々の亡びざる
やう見ゆるは、人命短うして能く此を具届け得ざる
に據る。

33 月の潮との關係を指す。

34 以下の名の大部分はグエルフィ黨なり。

チヱザレに對して繼母ならず、おのが子に

六〇慈愛ぶかき母のやうであつたならば²³

フィレンツェ人になり濟まして兩替をし

商^{あきな}ひをする彼は、その祖父の乞食し廻る

シミフォンティへ追ひ遣^やられたであらう。

モンテムルロは尙もその伯爵達²⁵に屬し

チエルキ家はアコネの教區にあり、かくて恐らく

ブオンデルモンティはブルディグレエにゐたであらう。²⁶

人々の混合が常に市の災ひの

原^{もと}なるは、重^{かさ}ねし食物の²⁷

肉體に惡^{わる}きにあなじ。

七〇また盲の牡牛は盲の羔よりも

迅く斃^{ひとまり}れ、しばしば一振^{つるぎ}の劍が

その五つよりも良く切れる。²⁸

汝²⁹もしルミとウルピサリアとが如何に

23 もし彼等が皇帝と争ひてフィレンツェを分裂せしめ

ざりしならば、肝心なフィレンツェ人が流浪して他

國人が入り込む如きことは無かりしならん。

24 何人か不明。シミフォンティはエルサの谿にありて

一三〇二年フィレンツェ人に占領されし堡砦なり。

25 伯爵グヰド一家はビストイア人に攻撃されてモンテ
ムルロを防ぎ得ず、遂に此をフィレンツェ人に賣りた
り。一二五四年。

26 チエルキ家とブオンデルモンティ家とはフィレンツェ
に城寨を奪はれて降伏し、フィレンツェに住みて遂
に勢力を得、市の紛亂の基を成せり。

27 亂食。

28 茲にダンテの政治的確信が仄かに見ゆ。

29 共は嘗ては偉大なる都なりしが今は衰頹せり。

フィフンティおよびバルッチとカルリ並びに

樹に對して赤面すべき人々が既に偉大になつてゐた。
カルフッチ家の出た株が既に

偉大になり、シジイ家とアルリグッチとは

既にクルレに据ゑられてゐた。

あゝ己が傲慢ゆゑに滅ぼさるゝ人々の如何に

二〇 偉大なりしを俺は見しぞ。黄金の玉は

その一切の偉業にてフィレンツェに花咲かせてゐた。

汝等の會堂が空位になる毎に高僧院に

居ながらにして肥える人々の父達も

おなじく當時は榮えてゐた。

逃ぐる者を追ふては龍のごとく

齒か財布を見せるものには

羔のやうに靜まる不遜な一族は

既に頭を擡げてゐたが、賤民の出のため

42 共にフィレンツェの貴族。

43 キアラモンテシ家。昔その一人鹽を賣る職にありしが僞りの樹を造りて市民を欺きしと。煉、一二の〇四、五。

44 ドナティ家。ダンテの妻ジェンマは此一家に屬したりき。

45 市の高官。

46 ウベルティ家。フアリナタは此一家の中最も有名なりき。地、一〇の三一以下を見よ。

47 ラムベルティ家。楯に黄金の玉を描けり。此一家のモスカに就ては地、二八の一〇七を見よ。以上二家は其名の示す如く獨逸系のものゝ如し。皇帝オットネ第一世の時フィレンツェに來りしならん。

48 ズスドミニ家とトシンギ家。共にフィレンツェ教區の監護者にして僧正空位の間收入を司る權を有たりき。されば僧正死するや故意に後繼者の任命を延引して己が懷を肥やせしと。

49 アディマリ家。此一家のボッカチノなる者ダンテの追放後その財産を掠め以後ダンテの仇敵たりしと。

グレチ、オルマンニ、およびアルベリキ等
九〇 榮えある市人達の既に衰ふを俺は見た。

またラ・サンネラの彼と共にラルカの彼と

ソルダニエリとアルディンギとボステイキを見た。

彼等はその舊さがごとく偉大であつた。

間もなく帆船をして荷を

投ぜしむるやうな如何にも重い

新しい大罪を今負ひをる門の上に

ラギニアリ家がゐた。此より伯爵グ

及びその後貴さベルリンチオネの名を

採りし人々が出た。

一〇〇 ラ・ブレッサの彼は既に統治の術を知り

ガリガイオは既におのが家に

欄と欄頭とを光らしてゐた。

Vanoの圓柱、サッケッティ、ヂウキ

35 以上皆嘗ては赫々たる名門なりしも今は斷絶若しくは衰頹せり。

36 一三〇二年の白黨放逐を指す。

37 聖彼得の門。ダンテの時代にチエルキ家の邸宅この門の上にありき。チエルキ家は舊家ならざりしも大なる富と權勢を擁して白黨の頭目となれり。

38 伯爵グはベルリンチオネ・ベルティの娘クワルドウラダと結婚せり。一五の一一二。地、一六の三七。

39 ラ・ブレッサと共にフィレンツェのギベルティ黨。一二八五年追放さる。

40 勳爵士たる表象。武器に黄金を用ゆるは勳爵士に限られき。

41 ビリ家。ギベルティ黨にして多く白黨に組せり。その紋章は「」即ち灰色の豎の條紋ある赤き楯なりき。

彼等能く新來の隣人達を斷ちしならんには

ボルゴは今尙ほ一入平安であつたであらう。⁵³

正しき義憤ゆゑに汝等を死なしめ

汝等の樂しき生活に止めを刺し

かくて汝等を哭げかす基となりし一家は⁵⁹

當時その連類者らと共に尊ばれてゐた。⁶⁰

一四〇 ふゝブオンデルモンテよ、他人の勸に従ひ

婚姻を逃げしは如何に惡かりしぞ。⁶¹

汝が初めてこの市に來た時、

神汝をエマ河に委ね給ひしならんには⁶²

今悲しむ多くの者が悦び居るを得たであらう。

遮莫^{さむのちばあれ}フイレンツエはその平和の最期に⁶³

橋を護る彼の毀たれし石像に

犠牲を献げねばならなかつた。

此等の民並びに他の人々により

58 以上兩家の住みしボルゴ・サン・タボストロ。もし一
一三五年モンテブオノ城砦の陥落後ブオンデルモン

テイ家（新來の隣人達）が來たり住まざりせばフイレ
ンツエは平和なりしならん。

59 アミテイ家。

60 ウツチェリニ家とゲラルディニ家。

61 ブオンデルモンテはアミテイ家の一人の娘との婚約
を破り、ドナテイ家の美しき娘と結婚せり。彼に此
結婚を勧めしは此娘の母なりき。この事よりしてア
ミテイ家とブオンデルモンテイ家の確執始まれり。
62 モンテブオノよりフイレンツエに至る途上にある小
河。この河に溺死したらんには。

63 ボンテ・エッキオの橋頭に立てるマルテ神像（四六行
註を見よ）の下にて怒られるアミテイ家の人々はブ
オンデルモンテを殺戮せり。爾來フイレンツエに平安
あらずなりぬ。

後ウベルティノ・ドナティは舅の關係により
彼と親戚になるを快しとしなかつた。⁵⁰

既にカボンサッコ家はフィエソレより

市場へくだり、デウダとインファンガトは⁵²

既に善き市民となつてゐた。

信じ難くして眞なることを俺は告げやう。

ペラ家の⁵³人々の名を有する一の門より

人々は小さき圍へ入つた。⁵⁴

その名と威光とをトムマゾ祭が

鮮かならしめる大なる男爵の⁵⁵

美しい旗印を携へる人は悉く

彼より武士格と特典とを受けた。

但しこの日この旗印に縁をとる彼は⁵⁶

己を民衆に結びつけてゐる。

グアルテロッティとイムボルトゥニとは既にゐたが⁵⁷

50 ウベルティノはベルティの娘と婚せしが、ウベルティの他の娘がアミデイ家に婚せしを見て大いに快からず思ひたりき。

51 Caponsacco (囊中の頭の意) 家。元來はフィエソレより來たりしフィレンツェの古き名門。Mercato Vecchio (古き市場) と云へる處に住みたり。ベアト

ウリチエ・ボルティナリの母は此一門に屬したりき。

52 共にフィレンツェの名門なりしが當時衰頹しゐたり。

デウダは基督を賣りレイスカレオテのユダの名と等しく Infingato は「泥を塗る」の意なり。

53 梨を紋章とせし故 Tia Pera と呼ばれたり。門の名が此賤しき一家の名を採りしとは信じ難き話ならんとなり。

54 フィレンツェの古城壁の圍のこと。

55 トスカナ州に於ける皇帝の代理者にて「偉大なる男爵」と稱せられしウコ・ディ・ブランディボルゴ。彼は

一〇〇六年聖トマスの日(十二月二十一日)に死し、その母が九八七年に建てしバイダ僧院(一五の九七註)に葬られ、毎年同日彼の記念祭行はる。

56 デアノ・デルラ・ペルラ。十三世紀の終り頃フィレンツェ庶民の有力なる首領。彼は前記ウゴの紋章に黄金の縁を採りしものを挑へたり。

57 共にフィレンツェの古名門にしてグエルフィ黨。

第十七曲

ダンテ進んで己が運命に就て訊ぬ。カッチアグ井ダ斷乎として流竄の豫言を做し「他人の麴麴の如何に味鹹く、他人の階の下り上りの如何に辛き徑なるかを汝は閑し盡さん」と述べ、更に三界遍歴の教訓を勇しく人民に告げよと命ず。

己に就て聞きし譏りを確めんとて

クリメネのもとに來たり、今尙父達を

子等に對して吝かならしむる彼にも似たる思ひを

私は抱き、斯くわが思へるを

ベアトリチエも、曩にわがため

位置を換へし聖き燈も識つた。

斯くてわが貴女は私に云つた「哀なる印銘を

哀く捺して出づるやう

なんぢの願望の焔を送り出だせ。

一〇 これ汝の言葉によつて我等の智識を

増さんとにあらず、汝自ら渴きを語るに慣れ

人の汝に注ぎ得んがためである。」

「あゝ慕はしさわが芝土、自らを高うし

1 エバフオにアボルロは汝の父にあらずと云はれて無念に堪へず母クリメネの頸を抱きて此事を訊ね父

アボルロに太陽の車を一日彼に驅らしめんことを乞へり。然るにその結果は遂に悲惨なるものとなり父

アボルロは大いに患ひたり。以後一般に世の父等は平等の要求を容易に受諾せざるに至れり。此句の意

味は、ダンテも己が運命の真相を識りたく思へりとなり。ダンテはフエトンテの物語を好みしと見ゆ。

地、一七の一〇六。煉、四の七三。同、二九の一八、九。

2 カッチアグ井ダ。

3 汝に水を飲ましめて渴を癒さんためなり。

4 異本、木 (vintin)。以下一五の五五一六九參照。

フィレンツェが全く平安に歸し

一五〇 哭くべき譯のないのを俺は見た。

此等の民により、その人民の

いと尊く義しきを俺は見、百合花は

旗竿の上に顛倒せしめられず

また分離の爲朱くせられなかつた。

64 フィレンツェの旗は決して敵手に渡らず、嘲笑の印

として顛倒せしめらるゝことなかりき。此旗は昔は
赤地に白百合花なりしが一二五〇年ギベルティ黨の
追放されし時ゲルフィ黨は此を白地に赤百合花とせ
り。

かくてベアトウリチエの意のごとく

三〇 わが慾望^{ねがひ}を告白した。

罪を除きたまふ「神の羔」の

殺されし前の愚かな人々が

嘗て惑はされし臃^{おぼろ}な言葉ならで¹³

明かな言葉定かな語にて

「父なる愛」¹⁴が包まれながら

微笑^{ほほえ}み、己を表して答へた。

「なんぢらの住む物質の書」¹⁵

越えて擴がらぬ偶然は

善く『永遠の眺』¹⁶のうちに描かれる。

四〇 然も此がため偶然が必然とならざるは

流をくだり行く船の

その眼に映るにあなじ。¹⁷

洋琴^{オルガン}より耳に快き諧調^{アルモニア}が

13 基督の降臨前の異教の神託などの與へし謎の如く朦朧たる言葉ならで、異教の神々の託宣は基督磔殺の瞬間よりして止みしと信じられき。

14 カッチアグ井ダ。

15 物質的世界。偶然は只此物質の世界に限らる。此を越えては一切のものが必然なり。

16 神。三二の五二以下。

17 神は地上に起こる一切事を豫知したまふも一々此に干渉し給はざること（即ち地上の事象が必然とならざること）恰も船が人の眼に映ずるも眼より何の影響をも受けざることが如し。

恰も地にある心が三角のうちに

二つ 鈍角を容れ難さを識るごとく

一切の時が現在である『點』⁵を眺めて

もろ／＼の偶然事象をその自ら

存せざるに先立ちて見るものよ⁶

并ルデリオに伴はれて私が

二 魂を癒す山⁷の上を辿り

また亡者の世界にくだつた時

わが將來の生涯につき酷⁸き言葉⁹を

私は云はれた。然し私は偶然に對し

自ら全く四角なるを感ずる¹⁰。

されば如何なる運命が私に近づくかを

聞いてわが願望¹¹は満足するであらう。

蓋し豫め見える箭は來ることが稍遅い¹¹。

曩に私に語つた光に斯く私は云ひ

5 神。

6 諸靈は幾何學的公理の如く精確に一切の事象を見る。二の四三—五。六の一九—二一。二九の一二等參照「幾何學には誤謬の汚點なく、其自身にて最も精確なものである」樂宴篇二の一四。

7 煉獄淨罪山。

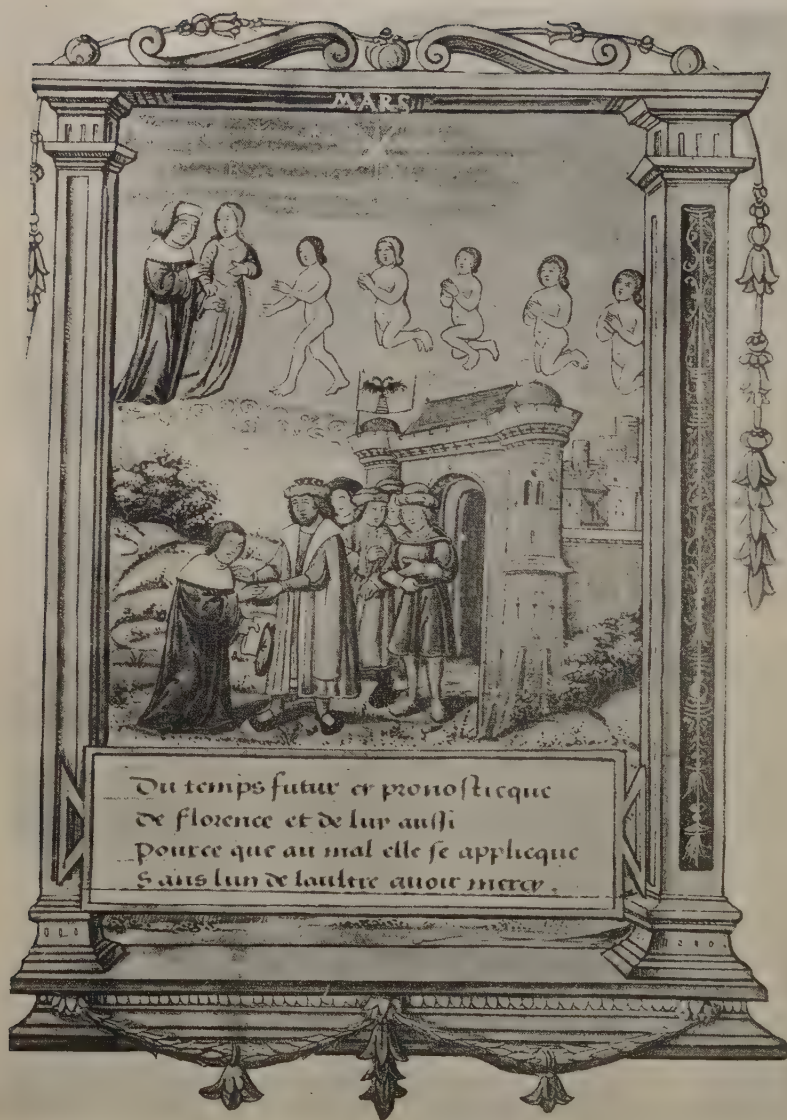
8 地獄。

9 ダンテの流覽に關する豫言。地、一〇の七九—八一。同、一五の六一以下。煉、八の一三三以下。同、一の一四〇、一四一。

10 四面體は如何様に放擲さるゝも安固たり。有徳の人は何日にても何處にても幸運と悲運とを恰も正方形の如く慎んで耐ふ。アリストテレス倫理一の一〇。

11 此は當時用ゐられし俚諺と見ゆ。Nath. Trev. sa minus inedere tala solent.

12 カツチアゲ井ダ。



來るやうに、汝のために

備へられる『時』¹⁸が其處よりわが眺^{ながめ}に來る。

その情なき不實な繼母ゆゑに

イッポリトがアテネを去つたやうに

汝はフィレンツェを去らねばならぬ。

日々基督の買賣される彼處にて

五〇 これを思ふ彼が、これを願ひ

既に企てたので間もなく果たされるであらう。

例のごとく罪は大聲に

害はれた側に負はされるであらう。²³

しかし復讐はこれを果たす眞理の證となるであらう。²⁴

汝は最も厚く愛せし

一切のものを棄てるであらう。

これ流竄の弓が射る初の箭である。

他人の麪^ヌ麪^ネのいかに味鹹^{しはから}く

18 ダンテの將來。

19 「永遠の眺」(三九行)より。

20 テセオと女軍の女王イッポリテの間の子なり。テセオは後にファドウラを妻とせしに彼女はイッポリトに戀ひし、拒絶せらるゝや反つて罪を彼に着せ夫テセオをして彼を雅典より追はしめて死なしめたり。斯くの如くダンテは無實の罪を負ふてフィレンツェを去らざるべからず。

21 羅馬。

22 法王ボニファチオ第八世。地、一九の五三。一三〇二年三月に白黨をフィレンツェより追放せり。

23 勝てば官軍負ければ賊。

24 白黨追放後フィレンツェには一三〇四年に大火災あり、又ボンテ・アル・カルライア破壊し、コルツ・ドナタイの横死等災害頻々たりき。但しダンテは一般の意味にて斯く云ひしものならん。

他人の階きざはしの下り上りの如何に辛つらき

否 徑みちなるかを汝は閱けみし盡すであらう。

また汝の肩をいと重く壓するは

汝が相携へてこの谿25に陷るべき

邪惡魯鈍な伴侶等ともであらう。

志恩を極め狂亂兇惡をつくして彼等は

汝に逆ふであらう。然し後間もなく

これが爲汝にあらず、彼等が顛顛こめがみを赧あかめるであらう。²⁷

彼等の行動ふるまひが彼等の獸性を曝露するであらう。

されば一身一黨たることが

いかにも汝に佳うはしいことであらう。

否 階きざはしのうへに聖き鳥を置く

かの偉大なるロムバルディア人28の慰勸が

汝の初の隱家、初の宿やどとなるであらう。

彼は汝に對していとも慈愛深き心を抱き

25 不幸と流竄の谿。

26 ダンテは共に追放されしフイレンツェ白黨の人々とも衝突せしが如し。ラボ・サルテルロ（一五の二六）は其一人にしてダンテと争ひしが如し。

27 羞ぢて赤面。

28 ゼロナの領主バルトロメオ・テルラ・スカラ（一二三〇—一四）。彼の紋章は階（scal）の上にとまる黒鷲なりき。

彼により多くの人々が變へられ

富者と乞食とは境遇を換へるであらう。

彼のことを汝の心に記して携へよ。

人にこれを語る勿れ。かくて彼は

親しく聞きし者にも信じ難きことを語つた。

やがて彼は加へた「子よ、これ汝に就き

語られしことの註解である。

數廻轉の後に蔽されある畏を見よ。

然も汝の隣人等を汝が怨まざらんことを願ふ。

蓋し汝の生涯が不信なる彼等の刑罰を

越えて遙かに遠く未來に及ぶからである」。

109 わが差し出した織の經に

緯を入れ終はつたことを

默して聖き魂が示した時

惑ひながら、正しく見て志し

32 直接聽きし者さへ事實とは信じ難き程の驚くべき勳功。

33 汝の流竄に關る豫言。

34 數年後。

35 三の九五。煉・三三の一三九、一四〇。カッチアク井ダは謂はゞ織物をする如く、ダンテの生涯の將來に就て語れり。

爲すこと願ふこと、他の人々の間にてはいと緩きも

汝等ふたりの間には最先になされるであらう。

生まれるや此強き星に深く刻まれ

やがて其業の顯れるものが

彼とともにゐるを汝は見るであらう。

若年のゆゑに民はまだ彼を識らず

蓋し此等の輪は彼の周圍を

九年めぐつたのみである。

然しかのグスコニア人が氣高いエンリコを

欺く前に、彼の徳の閃きは、銀や苦勞を

意とせざることに現れるであらう。

彼の威嚴が汎く知られて

彼の敵すらもこれに就き舌を

沈黙せしめ得なくなるであらう。

汝彼を見、彼より恩澤を受けよ。

29 戰鬪的精神の表象たる火星。

30 バルトロムメオの末弟カン・グランデ・デルラ・スカラ

(一二九一—一二三九年)。彼は火星の下に生まれ一三二二年ゴロナの領主となれり。麥美しく勇敢なる人物にして一三二一年皇帝代理となりギベルリニ黨の望み懸かりて彼にありき。ダンテを甚く庇護し天國篇は彼に献げられたり。地、一の一〇一。

31 法王クレメンメ第五世。彼は法王廳をアザニオンに遷したり。また援助すと約しながら皇帝エンリコ第七世を欺き、一三二〇年私かに皇帝の伊太利亞遠征を阻止せんとせり。三〇の一四三。

この時を昔と呼ばはる人々⁴²の間に

二二 わが生命^{いのち}を失はんことを恐れる⁴³。」

彼處^{かしこ}にて見たわが寶^{たから}がうちに

微笑^{ほくそ}んでゐた光は、まづ日光に

灼^{かじや}く黄金の鏡のやうになり

やがて答へた「おのれ又は他人の

羞耻^{はづ}ゆゑに暗き良心は

げに汝の言葉を苦し^{にが}しと感じやう。

さりながら一切の虚偽を除き

汝の全幻想を現し、かくて専ら^{ひたす}

痲^{かき}のある處を搔かしめよ。

二三 蓋し汝の聲は假^よし初味^{はつあじ}苦^{にが}くとも

後消化^{ごじか}される時には

生^{いき}ある營養を殘すであらう。

汝のこの叫びはいと高き頂^{うたぎ}ほど

42. 後世の人々。

43. 語れば人々の耳に苦く黙すれば自己を没却す。

また愛の有る人より勸^{すいめ}を

願ふ人のやうに私は始めた

「わが父よ、自棄甚しき人に

最も重き打撃³⁷を私に加へんとて

『時』が私の方へ如何に來るかを良く私は見る。

されば私は先見^{かん}に身を固め

110 かくて最愛の處³⁸が私より奪はれるとも

わが詩によりせめて他の處³⁹を失ふべきでない。

盡さざる苦惱⁴⁰の世界をくだり

またわが貴女の眼が私を

その佳^{うるほ}しき頂より引き挙げし山⁴¹を越え

斯くて天を通じて光より光へと廻^めつて

わが學んだことは、もし述べ傳へんか

多くのものに味が強く澁いであらう。

また私が眞理に對して、怯懦な友たらんか

36 理解、善意、愛。これ善行に缺くべからざるものなり。

37 自棄して備へせざる人は大なる禍を招く。

38 フイレンツエ。

39 隠れ場。

40 地獄。

41 煉獄。

第十八曲

ダンテ美しき優りゆくベアトウリチエの眼に恍惚たりし時彼女に「わが眼にのみ天國あるにあらず」と云はれ再び信仰の戰士等を見る。やがて赤色の火星を去つて白色の木星に登り、正義の諸靈の飛翔を見、靈鷲の形を空中に描くを仰ぎ、遙かに地上の不義を慨嘆す。

既にして祝福まれし鏡は私に

あのが思ひに耽り、私は苦さを

甘さに和げつゝ己が思ひを味つてゐた。

すると私を神に導く貴女が云つた

「思ひを變へ、一切の邪惡の荷を

あろす者にわが近づくを思へ」

わが「慰藉」の戀ひしき響さに私は身を

廻らしたが、その時聖き眼のうちに

何たる愛を私は見たか、茲に私は語るを廢める。

10 これ我自らの言葉を信任しないのみならず

他に導くものなくば、記憶が斯く遙か

高くに己を歸し得ぬからである。

その瞬間に就きわが述べ得るは

1 カツチアグネダ。一七の一二三。祝福に入りし靈は神の榮光を反映し、神の心のうちに見るものを亦反映す。

2 原語 *l'occhio* (言)。「心の内部の觀念は言と呼ばれる」神學綱要一の三四。

3 流竄の苦き豫言と、名聲の甘き豫言とを混じつゝ。

4 神。

5 ベアトウリチエ。

6 一の六。二三の四八。

烈しく撃つ風のやうであらう。⁴⁴

斯くて此は些かならざる名譽の論である。

この諸の輪のうちに、⁴⁵かの山のうへに⁴⁶

また憂ひの谿に⁴⁷ゐる只名の著しき魂のみが

汝に示されたのも此がためであつた。

蓋しその根の知れずに蔽はれる模範や

（四）
または明かならぬ論により

聽く者の心は安んぜず

確信せしめられもせぬからである。⁴⁸

44 ダンテの言葉は堂々たるもの故従つて世の偉大なる人物を撃つことゝならん。

45 天國に。

46 煉獄に。

47 地獄に。

48 地上に歸りて述ぶる時人々に感動を與へしめん爲、特に有名なる人物の靈魂のみがダンテに示されき。蓋し卑賤なる人物乃至著名ならざる事柄は以つて人の心を動かすに足らざればなり。

常に果^みを結び、永久^{とこし}に葉を

三 失はぬ樹^いのこの第五¹²の坐に

祝福^めまれし諸靈^{あま}がある。下界^{あき}にあつて

まだ天に來ぬ前^{まへ}には彼等の聲望は

大にして凡ゆるムウザの富であつた。¹³

されば『十字架』の角^つを見よ。

わが名指す彼は迅き火¹⁴が雲のうちに

爲すごとき技^{わざ}をそこに爲すであらう。

デオズウエ¹⁵が名指されるや否や直ちに一の光が

「十字架」に添ひて動くを私は見たが

言葉^{ことば}を私が識るに先立つて事が行はれた。

四 また尊きマッカベオの名に¹⁶

他の光^{ひかり}がめぐり進み

喜悅^{こゑ}が獨樂¹⁷の鞭^{むち}となりをるを私は見た。

かくてカルロ・マニオ¹⁸とオルランド¹⁹の名に

10 煉、三二の七三。約翰默示錄二二の二。

11 天國のこと。天國の葉(聖徒)は永久に落つることなく、新しき果(新しく救はるゝ魂)は永久に竭くることなし。

12 下より算へて第五天なる火星。

13 ムウザとは元來詩音樂の九女神のこととなるが(地、二の七)茲にては一般に詩人を指す。一五の二六に「ゼルデリオを」偉大なるムウザ」と云へり。此句の意味は、一人々々皆詩人の豊富なる材料となることなり。

14 電光。

15 摩西に繼ぎて猶太人の統率者となりし約書亞。以下信仰の善戰者八人を擧ぐ。中二人は舊約時代的人物なり。

16 「地の涯までも有名なりし」猶太の勇將。

17 獨樂を廻はす繩。

18 シヤルマニオ。

19 カルロ・マニオの甥にしてサラチノ人との戰に死せりと傳へらる。地、三一の一七。

再び彼女を眺めた時、わが情意が

一切他の願望より解かれた一事である。

ベアトリチエに直接照つてゐた「永遠の悦樂」が
彼女の美しい顔よりする

第二の貌に私を充たしてゐた時
微笑みの光にて私を壓倒して彼女は

三 私に云つた「振りかへつて聴け

わが眼にのみ天國あるにあらず。

情意いと大にして全靈魂を

奪ふほどであれば、往々こゝに、

それが貌にあらはれるやうに

私が身を向けし聖き焔のうちに

なほ私と語らうとする

意志のあることを私は認めた。

彼は始めた「生命を頂より受け

7 諸聖徒の永遠の悦樂たる神。

8 神の姿の反映。

9 地上に。

人が日に日にその徳の

進むを感じるやうに

この奇蹟のいよ／＼飾られるを見て

天とともにするわが廻轉が

その弧を増大したことを識つた。

束の間に自ら羞耻の荷を

おろす時、貴女の顔が

白く變はるやうに

振返つた時わが眼に變化が起つた。

即ち節制の第六星の白色のうちに

私は容れられてゐたのであつた。

木星の燈のうちに愛の閃が

われらの用ゆる言葉の形となつて

眼に記されるのを私は見た。

鳥の群が岸邊より飛び立ち

24 ベアトウリチニ。 Si è nuovo miracolo gentile (彼

女は奇しく優しき奇蹟のみ)「新生」二一。

25 高き天に昇る故に。

26 女の顔の赭みて直ちに蒼白くなる如くダンテは束の

間に火星の赤き光より木星の白き光に入りたり。木星は卜星者により、火星の熱と土星の冷寒の間に横たはる中和なる星と稱せられき。饗宴篇二の一四。

二二の一四五、六参照。

私は二つの光に眼を注め、飛びゆく鷹を

追ふ眼のやうに彼等を追ふた。

次でグリエルモ、リノアルド²⁰

ゴッティフレディ公及びロベルト・グ²¹スカルドが

「十字架」に沿ふて私の眼を辿らしめた。

やがて私と語らうとしてゐた魂は

吾 他の諸の光の間に動き混り、天の歌人のうち

いかに大なる達人であつたかを私に示した。

ベアトウリチエのうちに言葉または

身振にて示されるわが義務を見んとて

右側へ身を私はめぐらした。

かくて彼女の眼のいかにも清く

樂しげに、ありし今までの何^{いづれ}の

貌^{すがた}よりも超^まつてゐたのを私は見た。

善行にます／＼歡喜を覺えて

20 共にカルロ・マニオの勇士。

21 十字軍の指導者にしてエルサレムの王に選ばれしも
辭して單に「聖墓の防禦者なる男爵^{バロネ}」てふ謙遜なる稱
號を採りたりき。一〇六〇年頃生まれ一一〇〇年死
して聖墓の會堂に葬らる。

22 プリア及びカラプリアの領主。一〇一五年頃生まれ
一〇八五年死す。地、二八の一三。

23 ベアトウリチエの美は高く登るに従ひて美しさ優る。

子音とを自ら示した。そして語るにつれて

90 その諸の部分を私は心に留めた。

Diligite iustitiam が全幅の畫の最初の

働詞と名詞とであり、*qui iudicatis*

*terram*³² がその最後であつた。

かくて第五の言葉のMに組んだまゝ、

彼等は止まり、そこに木星は

黄金を彫めた銀のやうに見えた。³⁴

そして他の諸の光がMの頂のある處に降り

その處に靜まるを見たが、その歌ふは

彼等を己に招く「善」³⁵であらうと私は信ずる。

100 やがて、燃ゆる丸太をうつや

愚か者らが豫兆を判ずる

無數の火花が上がるやうに³⁶

これより更に千餘の光が起こり

32 以上拉甸語の句は「地の審判者等正義を愛せよ」〔*ン*

ロモン智慧一の一〕。

33 Mは拉甸語並びに伊太利亞語の字母の眞中にあり。

Mの古き字形はMにして鳥の姿に似たり。

34 「凡ての星のうち白く見え宛ら銀の如し」變哀篇二の一四。

35 神。

36 「幾匹の羔、幾千の貨幣、何日までの壽命を有するか」と唱へて二本の燃木を打ち合はせ、火花の數を算へて判ずるなり。

恰もあのが牧場に歡びあふごとく

或は圓き或は他^{ほか}の形に自ら隊をなすやうに

光のうちに聖き被造物^{ひざうぶつ}等は²⁷

翔りつゝ歌ひつゝ、自ら或はD^{デー}

或はI^イ、或はL^{エル}の文字を作つた。²⁸

まづ歌ひながら彼等は己が節^{ふし}に

合はせて進んだ。やがて此等の記號^{しるし}が

一つとなるや暫くともまつて沈黙した。

あゝ畏^{かしこ}さべガセオよ、汝は²⁹

天才に榮を與へて此を不朽たらしめ

天才は汝により都と王國を不朽ならしむ。³⁰

願くは汝自ら我を照らし、かくて我抱きし儘に

彼等の像^{かたち}を呼び起すことを得しめたまへ

汝の力をこの短き句に現したまへ。

彼等は斯くて七を五倍する母音³¹と

27 諸聖徒。

28 九十一に出づる Diligite (汝等愛せよ) の初の三字母。

29 詩音樂の九女神の翼を有する馬。その蹄にて有名な泉 *Fonteyne* (馬の泉) を作れり。煉、二九の四〇。茲にてはムウゼを指す。

30 ムウゼによりて詩人不朽の名を得、詩人によりて王國と都とは歌はれて不朽に傳へらる。

31 即ち三十五字。九十一―三行に記さるゝ拉句詠の句の總字母數なり。

創始なる「心」に祈る、汝の射光を

二三 害ふ煙のいづるところを眺め

かくて血と殉教とを城壁とせる

神殿に行はれる買賣を

今一度怒り給はんことを。

あゝわが瞑想する天の軍勢よ

惡しき範に従ひて全く迷ひゆさし

地上の人々のために祈れ。

嘗ては劍にての戦ひが慣なりしに今や

隣み深き「父」が何人にも鎖し給はぬ麴麴を

此方彼方に奪ひ去ることゝなつた。

二三 然したゞ抹殺せんために記す汝

汝が荒らす葡萄園のために死せる

彼得と保羅とが尙活けるを思へ。

宜しく汝は云へ「孤獨に活さんと欲し

43 神。

44 法王廳。或は一般に此世のこと。煉、一六の五八以下。

45 「殉教者の血は教會の種なり」テリトゥリアン。異本、記徴 (signo)。

46 「イエス神の殿に入りて其中なる凡ての賣買する者を逐ひ出だし兌銀者の臺鳩を賣る者の腰掛を倒し、彼等に曰ひけるは我家は祈禱の家と稱へらるべしと錄さる、然るに汝等これを盜賊の巢となせり」馬太傳二一の一二、一三。

47 caelestis habitus 基督降誕の際彼等は人類の爲に祈りて「いと高き處には榮光神にあれ地には平安人には惠あれ」と云へり。路加傳二の一四。

48 僧侶の。煉、一六の一〇〇以下。

49 破門等によりて人々を教會の聖餐に與らざらしむ。

而も此は聖禮典の神聖を思ふてには非ず、やがて金錢を獲て此を取消さんが爲に破門懲戒の宣告書を記すなり。

50 教會。

彼等を燃やす太陽の定めるまゝに³⁷

或は多く或は少しく上^あがるのが見えた。

かくて各ものが處に静まり

際立つ火により鷺の頭^{かしら}と

首とを表したのを私は見た。

ここに描くものは己³⁸を

二〇 導く者を要せず、只自ら導く³⁹。

また巢に於ける形成力を心に浮ばしめる⁴⁰。

最初^{はじめ}自らM^{エム}の上に百合花たるを⁴¹

満足げに見えた祝福^{めづ}まれし他の諸靈は

微かに動いてこの印銘^{しるし}に續いた。

あゝ甘美なる星よ。われらの正義が

汝の彫む^{ちりば}此天の業^{わざ}なることを

何^{なん}なる彫しき寶玉が私に示したかよ⁴²。

されば汝の運動と汝の力との

37 神に對する愛の多寡によりて。

38 神。

39 神は此鷺の形を描くに自然を模する要なし、自然こそ神を模するなれ。

40 神曲中離解の句の一なり。神が鳥の本能を刺戟して巢を造らしむると同じく、諸靈は神に靈感せしめられて此等の文字を形成せりとの意ならんか。

41 Incipit. ダンテの創造語なり。諸靈は最初M字形の上に百合花となり居りしが、やがて降り來て鷺の頭と頸とを形成する爲に結合せり。鷺は帝國の表徴。帝國は正義を地上に維持する神聖なる制度なりとはダンテの主張なりき。

42 火星が地上に戰鬪的精神を靈感する如く木星は正義の精神を靈感す。

第十九曲

甘美な果^みを悦びて結びあへる

諸の靈の造る美しき像^{かたち}が

翼を開いてわが前にあらはれた。

いづれも小さき紅玉のやうに見え

日光は強く燃えて灼^{かじや}き

眼にこれを反射せしめた。

今しわが述べべきは嘗て聲も傳へず

墨も記さず、想像にだに

嘗て浮びしことなきものである。

10 即ちその嘴が響かしてゐ、とも mio⁴とも

語るを私は見もし聞きもしたが

意味は noi⁵であり nosto⁶であつた。

斯くてこれが始めた「正しく敬虔であつたので

鷲の形と成れる正義の諸王の靈一の聲を出だす。ダンテ即ち有徳の異邦人の救済に關する疑問を解かれんことを望みしが、輕々しく神意の付従すべからざるを戒められる。次て諸靈は基督教國の諸王の罪惡を糾彈す。

1 鷲。帝國の下に世界を統一せんとするダンテの信念茲に表はさる。

2 二の三一一三。

3 「録して神の己を愛する者の爲に備へ給ひしものは目未だ見ず耳未だ聞かず人の心の未だ念はざるものなりと有るが如し」哥林多前書二の一〇。

4 io (我)。⁴ mio (我の)。

5 noi (我等)。⁵ nosto (我等の)。

6 多くの諸靈より成るもの者の如く語る。「正義」の一致せる意志、乃至「帝國」の下に一致せる「正義」の表象。

また一跳^{ひととび}のために曳^ひかれて殉教せる

彼⁵¹の上にわが願望^{ねんぼう}が全く注^つがれるゆゑ

『漁夫^{すなどりびと}』も保羅も識^しつたことではない』と。

51 洗禮者約翰。彼は荒野に住みて説教し後へロデアの娘の舞踏のことよりして斬首されたり。馬太傳一四の一一一。

52 洗禮者約翰の像が貨幣に彫まれありし故にダンテ斯く云へるなり。即ち法王僧侶等は金錢に熱中して「漁夫」即ち彼得（煉、二二の六三）や保羅に關り得ずと云ふと。

あのが鏡とする以上、汝等の鏡も

三面^{かほおほひ}面^{かほおほひ}なしに此を識ることを私は良く知る。

聽かんとて我いかに熱心に身構ふかを
なんぢらは知る。いと古き斷食なる

この疑惑の何たるかを汝等は知る。」

頭巾より出づるや鷹は

その頭を動かし、その翼を羽搏きして

意氣を示し、自らを美はしくする如く¹²

彼方^{かなた}天上に歡ぶものゝ識れる歌につれて

神の恩寵の讚美¹³にて織りなす

この記號^{しるし}も美しくなるを私は見た。

四〇 やがてこれは始めた「世界の涯^{はて}に六分儀を

廻はし、そのあひだに斯くも秘かな^{ひそ}

また明^あはな分ち^{わか}をなした彼も¹⁴

あのが力を全宇宙に印し盡くさず

11 土星天を司配する「慧智」なる天使「位」の階級。九

の六一、六二にクニツア云へり「上方に鏡がある。

汝等は此を位と呼ぶ。そこより神の審判が我等に灼

く。」

12 煉、一九の六四―六。ダンテは鷹の例を好んで使用

せり。

13 諸聖徒。ペアトゥリチエは「神の眞の讚美」と云はる。

地、二の一〇三。

14 「かれ天をつくり海の面に寫^{うつ}蒼^{そう}を張り給ひし時……

……」箴言八の二七。失樂園七の二二四―七。

俺はこゝに擧げられ、願望に

勝たるゝことなき榮光⁷を享けてゐる。

下界の惡しき人々は此⁸を獎めつゝ

その訓に從はぬといふ記憶を

俺は地上に残して來た」。

多くの燃える石炭がたゞ一の熱を

二三 感ぜしめるやうに、この像の

數多の愛より只一つの響さが發した。

かくて私は直ちに「あゝ永遠の喜悅の

朽ちざる諸の花、汝等凡ての匂いを

たゞ一の香と思はしめるものよ。

願くは少しの食物すらを地上に見ずして

長くわれを飢ゑ續けしめし大なる斷食¹⁰を

汝等息吹してわが爲に解け。

神の正義が天の他の王國を

7 滿ち足りて此上願ふべくもあらぬ程の榮光。

8 正義。世人は正義を口にするも實行せず。

9 煉、七の八〇、八一。

10 基督を知らずして死せし人々の救済如何に關る疑惑（七〇行以下）。此に對する解答は結局神意測る可からずと云ふにあり。

汝等の世界の享くる眺は^{ながめ}20

六 恰も海に見入る眼にも似る。

即ち眼は濱邊より底を見るも、大洋にては此を見るを得ず²¹。然も依然として底はある。

たゞ深さが此を蔽すのである。

永久に亂されぬ清明よりせざれば²²

一の光もなく、否肉の影かまたは

その毒か暗黒あらんのみ。²³

數多度汝が訊ねた活ける『正義』を^{あまたたび}

なんぢより蔽ふた隠處が^{かくれはた}

いま汝に全くうち開かれた。

七 即ち汝は云つた『或る人は印度人の

岸邊に生まれ、基督のことを語るものも

讀むものも、書くものもない。

然も人間の理性の見うる限り

20 神より受くる眺。

21 煉、八の六七―九。

22 蒼空。

23 神より出でざる光とては一もなし。即ち啓示の光缺
かんか人類は肉の陰影、若くば肉の害即ち罪の陰影
たる無智の暗黒沈淪あるのみ。

24 人智が神意の深處に貫徹するに足らざること、これ
隠場なり。

依然として彼の『道』は

無限に優らざるを得ず。¹⁵

凡ゆる被造物の頂でありながら

光を俟たなかつたため澁きまゝ墮ちし

最初の傲慢者が此事を確かにする。

されば更に低き一切の自然が極みなく

己によつて己を量る『善』を

容るゝに足らぬ器なることが分かる。¹⁷

そこで萬象を充ち足らす

『心』の一光線たる

われらの眼は

その性質として力足らず。¹⁸

その本原が眼に見ゆるものを

遙かに超越するを認めざるを得ない。¹⁹

されば永遠の正義に對して

15 造化に示さるゝ神の像は『道』即ち神の思ひと智に比しては數ふるに足らざる程微少なり。

16 ルチフェロは天使なりしとは云へ被造物にて有りながら不遜にも造物主に對抗せんとして墮落せり。彼もし神の慰寵の全き光を待ちしならんには自らの劣弱を悟りしならん。煉。一二の二七。ルチフェロ、アダム、エブ共に知識を願ひしことが罪にあらず、時に先立ちて此を得んとせし故なりとアンセルム云へり。

17 天使既に然りとせば、此より低き人類が無限の神の聖旨を量り得ざるは明白なり。

18 二〇の一三四―八。二一の九一―三。

19 我等の視力は不充分にして自らの出でし本原(神)に達し得ず。蓋し視力の進むに従ひて神は更に彼方へと遠のき行けばなり。

被造^{つくられ}し善は一として彼を己に引寄せず

九〇 彼輝き出で、此善の原因となる」。

雛に餌をやつた後鶴は

巢の直ぐ上をめぐり

餌を食らつたものが此を見上げるやうに

いと多くの勸^{すすめ}に促されて

祝福^{りふく}の像^{すがた}は翼を動かし²⁸

私はまた眉を擧げた。

廻りつゝ歌ひ、かくて云つた「わが註解の

遂になんぢに分からぬごとく

『永遠の正義』は汝等人間に分からない」。

100 聖靈の燃ゆる諸の焰が

なほ羅馬人を世界に

尊^{しるし}からしめた記號^{しるし}に鎮まつた時

それが再び始めた「木に釘^つけられ給ひし

28 鷺となれる諸靈の群衆は一の意志となりて勸む。鷺の雛は服従の表象たり。

29 鷺の形に。

彼の欲望みちひと行おこなひは悉く善く

生活にも言葉にも罪がない。

洗禮を受けず信仰なしに彼は死する。

彼を罰するその正義は何處いづくにある。²⁵

信ぜずとも彼の罪はいづくにかある」と。

あゝ尺寸の近眼でありながら

る 床几に坐して千哩ミロの遠きを

審さばかうとする汝は抑誰なるぞや。²⁶

聖經もし汝等を超越せざれば

俺わしと論を究むる者にとり

確かに怪しみて疑ふ譯があらう。

あゝ地上の動物よ、あゝ魯鈍の心よ。

自足善なる『本原意志』は至高善なる

己より永久に離れたことがない。

彼と和合するかぎり物みな正し。²⁷

25 四の六七—九。

26 神の正義を知らんとする。

27 正義の窮極の吟味は神意に一致するや否やにあり。
帝政論二の二。

貨幣贋造によりセツナの上に

二三 齋らす災ひがそこに見られるであらう。

やがて蘇格士人^{スコツイア}と英吉利人^{イギリス}を渴かし

狂亂せしめ、共におのが境のうちに止まり

難からしめる傲慢がそこに見られるであらう。⁴⁰

西班牙人^{スペイン}および勇氣を嘗て知らず

また此を欲はぬ^{ねが}ブエメ⁴²の人の

奢侈と墮弱な生活とが見られるであらう。

ヂエルサレム⁴³の『蹇』^{ひざり}の善は

I⁴¹にて記され、而もその裏は

M^{エム}にて記されるのが見られるであらう。

二三 アンキエゼがその永き一生を終へし

火の島を護るものゝ貪婪と⁴⁵

卑屈とが見られるであらう。

かくて彼のいかに卑屈なるかを識らさんため

40 エドゥワド第一世と第二世との戦争。十四世紀の

初二十年間蘇格蘭土人と英吉利人は殆んど間斷なく
戦へり。

41 カステイリアのフェルディナンド第四世（一二九五—
一三二二年）のことか。

42 「奢侈と懶惰とが養ひし」ギンチスラオ第四世（一二
七八—一三〇五年）ブエメの王たり。煉、七の一〇
二。

43 カルロ第二世。ナボリの王（一二九五—一三二二年）
にしてヂエルサレム⁴³の名義上の王たりき。彼の徳は
些少にして羅馬數字I（一）にて記され、惡は多くし
てM（千）にて記さる。彼の唯一の徳は寛容なりしと
見ゆ。八の八二。九の一—六。

44 シチリア島。此島の火山エトウナの爲にアンキエゼ
は死せり。

45 アラゴナのフェデリゴ（一二九六—一三三七年）。彼の
罪惡を列擧すべく餘りに彼は數ふるに足らざる者
なり。

前にもせよ後にもせよ、³⁶基督を信ぜざりし

何人も嘗てこの王國に上つたことがない。³¹

然し見よ、基督^{くりすと}と叫ぶもの多しと雖

基督を知らざる人々よりも彼等は

審判の時、彼に遠きこと遙かであらう。³²

且つ斯かる基督教徒^{くりすとかやうと}をエテイオピア人が³³

110 罰する時、二人の儻は分かたれ

一人は永久に富み一人は乏しくあるであらう。³⁴

汝等の王達にむかひ、その凡ゆる譏りの

記される卷物の開かるるを見る時

波斯人等は何ごとを云ふであらうぞ。³⁵

やがてアルベルト³⁶の業のうち

直ちに筆を動かしめ、ブラガの王國を

荒野^{こうや}とすることが其處^{そこ}に見られるであらう。

やがて猪に打たれて死すべきものが³⁹

30 基督磔殺の前にもせよ又後にもせよ。即ち舊約時代の
人新約時代の人の差別なく。

31 二〇の一〇五。

32 「我を呼びて主よ主よと云ふ者悉く天國に入るに非
ず……其時彼等に告げて我嘗て汝等を知らず惡をな
す者よ我を離れ去れと云はん」馬太傳七の二一—二
三。

33 茲にては「異邦人」の代表。

34 「その時二人田に在らん一人は取られ一人は遺さ
るべし、二人の女白ひきならん一人はとられ一人
は遺さるべし」馬太傳二四の四〇、四一。

35 基督を知らざる波斯人、最後の審判の日生命の書の
開かるゝ時、公然基督教徒なりと稱する王等の罪を
非難せん。約翰默示錄二〇の一二。以下ダンテの記
す非難は必ずしも悉く歴史的事實と一致せず。煉、
八の九一—一三六參照。

36 「獨逸のアルベルト」煉、六の九五。一三〇四年に
プエムを侵略せり。ブラガとはプエムの首府。

37 生命の書に記す天使の筆。

38 原語 colenna. 猪の皮。

39 フイリッポ美王。一三二四年フォンテイヌブラウの林
にて野猪に襲はれ落馬して死せり。彼は戰費調達
の爲佛蘭西(即ちセイヌ河の流るゝ)の貨幣の質を三分
の一に減せり。歐洲最大の商業市フイレンツェ市民
たりしダンテは貨幣匱乏弊を良く知悉しをれり。地
獄篇第二十九、三十曲參照。

第二十曲

全世界を照らすものが¹

われらの半球より没し

かくて日が四方に暮れはつる時

今まで彼獨りに燃やされてゐた天が

急に一の光の反射なる

多くの光を伴ふて再びその姿を表す。

世界とその導者等の徽章が⁴

祝福まれし嘴のうちに沈黙した時^め

わが心に浮んだのは天のこの動作であつた。^{はたらき}

一〇 即ちこの諸の活ける光は凡て遙かに

輝きを増し、わが記憶より

滑り落ちし歌を始めた。

あゝ微笑みを上衣とする甘美なる「愛」よ^{ははさ}

太陽没して満天諸星に輝く如く、正義の諸靈輝き優りて天使の歌に調を合はせ、やがて潺湲たる流の嘶きの如く静まりて一の聲となり、鶯の眼となれる正義の王者ダビデ、トウライアノ、エツエキア、コスダンテイノ、及びリフニロのことを述ぶ。

1 太陽。

2 太陽。

3 星。星は一の光即ち太陽の反射なりと信ぜられき。

4 王者等。

5 鶯の形。

6 太陽没して衆星現るゝ如く鶯が語り了へた時鶯を造り成す諸靈一際輝き優り、天使の歌を合唱し始めた。

彼の記事は些かの紙面に多くを

記すやう、文字が略されるであらう。

また彼の叔父と彼の兄弟の愚行が凡ての人に

明かになるであらう。彼等は斯くも

卓れた國民と二つの冠とを辱めた。

また葡萄牙の^{ポルトガル}人と^{ポルトガル}諸威の人^{ポルトガル}

一四〇

および不幸にもエネツシアの貨幣を

見たラシアの人がそこに見られるであらう。

この上虐待に身を委ねざらんか、おゝ幸なる

匈牙利よ。また取り繞る山にて身を

鎧はんか、幸なるナヴルラよ。

されば此ことの^{てつけ}手付としてニコシアと

フアマゴスタとが既に、その獸ゆゑに

哭き嘔ぐと萬人は信ずべきである。

彼は同類者の側より離れず。

46 原語 *Barba* は元來「鬚」の意にして年長者のこと。

47 マイオリカ嶋とミノルカの王デアコモ及びアラゴナの王デアコモ(不肖の子なりき。煉、七の一一九)。

48 *Lozsa*. 姦せり。

49 葡萄牙王デイオニシオ(一二七九—一二二五年)。金錢に貪婪なりしと。

50 恐らくアコネ第五(七)世(一二九九—一三一九年)のことならん。丁抹と殘忍なる戰爭を起こせり。

51 中世紀の塞耳比亞にして現今の塞耳比亞、ボスニア、クロツィア、及びダルマシアを含む。その首府は當時ラサ(*Rascia* 或は *Rasid*)なりき。一二七五—一二二一年の王たりし *Ottob* はエネツシアに倣ひて貨幣の質を悪しくせり。

52 ビレネイ山脈にて佛蘭西を防がんか。然しナヴルラは一三〇四年佛蘭西王の手に落ちたり。

53 チロ嶋の二市。アンリ第二世の下に慟哭す。彼は他の人々と惡行を共にする獸なり。以上兩市の現狀は諸市の運命に對する手附(豫言)なり。

言葉の形をなして發したが

三〇 これを我心に記して待ちをりしものであつた。¹²

これが私に始めた「死すべき鷺」¹³

太陽を見て此に堪へるわが部分¹⁴を

なんぢは今凝視めねばならぬ。

蓋しわが形をなす諸の光のうち

頭なる眼に灼くは、その位に於て

凡てのものゝ主である。¹⁵

中央に瞳として輝くは

聖靈の歌人にて、町より町へと

櫃^{はこ}を移したものである。

四〇 今や彼はおのが歌の功德を識る。

即ちおのが念ひより出でし言葉なる限り

これに適しい報償^{むくい}を受けてゐる。¹⁷

環を描いてわが眉となる五光のうち

12 諸靈の何人なるかを知らんとの願望。

13 地上の鷺。

14 眼。一の四八参照。

15 鷺を形造くる諸靈のうち眼となれる者最も貴し。

16 ダゲデ王。撒母耳後書六章。煉、一〇の六四―六。

17 詩篇が彼の自由意志より出でし限り報償を受く。靈感の部分は彼の功德にならず。

聖き思ひをのみ吐きし諸の笛⁷のうちに

汝はいかに熱して見えしぞ。

第六の光⁹を彫^{ちりば}むをわが見し

貴き灼^{かじや}く諸の寶石¹⁰が静まつて

天使の諧調^{しるべ}をやめた時

源の豊けさを示しつゝ

二 岩より岩へと清らかに落つる流の

囁きが私に聞えたやうであつた。

かくて琵琶の頸に節^{ふし}となる響き

または管¹¹の孔を

通る風のやうに

待つ間もあらせず

驚の囁きは宛ら洞^{ほら}のやうに

頸をつたふて上^{のぼ}り來た。

そこにて聲となり、其處^{そこ}より嘴を通り

7 歌へる諸靈

8 議論ある句なり。「音楽者の息氣によりて笛か音を
出す如く諸靈は已が聖き思ひによりて歌ふ。これは歡
喜の微笑む輝きに彼等を蔽ふ神の愛の吹き入るゝも
のなり」の意味ならんか。

9 第六天即ち木星天。

10 諸靈。

11 *symphona*、希臘語 *organo* にして古き管樂
器、但以理書三の五に出づ。邦譯には箏樂とあり。

ために世界は毀られたとは云へ

ろ 己を害ふものでないことを今彼は識る。²⁵

また傾く弧の上に汝²⁵の見るは

グリエルモにて、活けるカルロと

フエリゴの爲哭く地が彼を痛む。²⁶

今や彼は天が正しき王をいかに

戀ふかを識り、彼の輝きの

貌^{すがた}によつて尙ほこれを示す。

トッロイア人リフエロ²⁹がこの圓の

第五の聖さ光であるとは

誤れる下界にて誰が信じやう。

セ 今や彼はその眺^{ながめ}よく底を

認め得ずとも、世界の見るを得ざる

神の恩寵の多くを識る。

小さき雲雀^{ひばり}がまづ歌ひ、やがて

25 コスタンティノ大帝。彼は羅馬を法王に譲與し皇居

を君府に遷し謂はゞ自ら希臘人となれり。ダンテは此事を世界歴史中の最大不幸事と考へ、地上の権力は皇帝此を棄つるを得ず、法王此を受くるを得ずと主張せり。帝政論三の一〇。地、一九の一五—七。煉、三二の一四以下。

26 眼臉の頂より少しく後方の部分に。

27 シテリアとプリアの王（一六六—八九年）にして

「善王」と呼ばれしグリエルモ第三世。三の一八一—二〇。九の一六。一九の一三七。

28 前曲一二七—三五を見よ。

29 *Elipens, iustissimus unus*

Qui fuit in Tenoris et servanissimus nequi

「トッロイア人のうち正義を奉ずること最も厚く

いと正しき者リフエロ」エネアの歌二の四二六、七。

わが嘴に最も近きは、貧しい寡婦^{ぐわふ}を
その子ゆゑに慰めたものである。¹⁸

いま彼は、この嬉しい生涯と

その裏なる生涯を経験し、基督に

従はざるの如何に重大なるかを識る。¹⁹

わが語る圏線の高まる弧に²⁰

五〇 次に來たるは、眞の改悔により

死を延ばしたものである。²¹

下界にて力ある祈が今日のものを

明日のものにするとも、永遠の審判^{さはん}が

變へられたのではないことを今彼は識る。²²

續いて來るは惡しき果^みを結びし意志により

法律^{おきて}と俺^{わし}を携へ、『牧者^{みぎや}』に譲つて

あのれを希臘人としたものである。

おのが善行より如何に惡がいで

18 トゥライアノ皇帝。煉、一〇の七三—九三。彼地獄

に陥りしが後法王グレゴリオの祈禱によりて救ひ出
だされ天に昇れり。即ち彼は嬉しい天國の生涯と其
裏即ち地獄の生涯を経験せり。

19 天國と地獄の生涯の對照により。

20 鷲の眼臉の上邊に。

21 猶太のヘゼキア王。彼死に瀕し落涙して懺悔せしか
に更に神により齡十五年を増し加へられき。列王紀
略下二〇の一—七。以賽亞書三八の一—五。

22 煉、六の三〇の註。

23 羅馬帝國の表象としての鷲草旗。六の三。

24 法王。

信ずるを見る。然しその譯を汝は識らず。

かくて汝は信ずるも彼等は蔽れてゐる。

汝は恰も名にて物を能く識るも

人これを説き明かさざらんか

眞相を識り得ない人のやうである。

*Regnum colorum*³⁴ は熱き愛より

また神の意志を壓倒する

活ける望みより強襲を受く。

人が人を征服するときにあらず

壓倒せられんことを欲ひ、壓倒せられつゝ

あのが慈愛によつ壓倒する。

100 盾の第一第五の生命が

天使の國を彩るを見るにより

なんぢは愕く。

彼等は汝の信ずるごとく異邦人にあらず

34 天の王國。

35 馬太傳 一一の一二。 *Beati etati* は拉甸譯聖書には *vin patitur* 英譯聖書には *suffereth violence* 邦譯には「勵みて取る」と譯せる。ダメテは茲に *violenzia* *late* と譯せり。いづれも原語を精確に譯出し居らず。

36 トウライアノ皇帝とリフェロ。

おのれを飽かす最後の妙なる調に

充ち足りて空中に黙して漂ふごとく

萬有を己が願望のまゝに有らしむる

『永遠の悦樂』の印銘の像が

默するやうに私に見えた。

さて茲にわが疑惑は恰も

二〇 纏へる色に對する硝子のやうであつたが

默しつゝ時を俟つを許さず

その壓力により「此は何事ぞ」と

わが口より押し出さしめた。すると

灼耀の大なる祭を私は見た。³³

やがて直ちに眼を一際燃やして

祝福まれし徽章は私を驚愕の恍惚に

置かざらんとして私に答へた

「俺が告げたので汝が此等のことを

30 神。

31 驚。語るも默するも神意のまゝに従ふこと此萬有の悦びにして又社福なり。

32 天國には基督を信ぜざりし者一人もなし（一九の一〇三—五）、然るに基督降世前のトゥライアノ皇帝とリフェロのゐるは如何。

33 ダンテの疑問を解くを悦びて。五の一二六。

嘗て眼を遠くその初の波に

一三〇 留めしことなき泉より注ぐ恩寵により⁴³

おのが全愛を下界にて正さに置いた。

されば恩寵より恩寵へと神はその眼を

われらの未來の贖罪に向かつて開き給ひ

かくて彼はこれを信じ、以後既早

異教の臭氣を容さずして

異教に曲がれる人々を叱責した。

汝がその右の輪にゐたのを見た彼⁴⁴の

三人の貴女⁴⁵が、洗禮に先立つこと

千有餘年、彼にとつて洗禮となつた。⁴⁶

一三一 あゝ豫定よ、第一原因を

全く見ざる人々の眼より

汝の根のいかに遠のけるかよ。

されば人類よ、神を見る我等も

43 人心の量るべからざる神意。

44 クリフォネに曳かるゝ車の輪。

45 信、望、愛。煉、二九の一二。

46 洗禮の儀式の制定されし以前に三人の貴女即ち信望愛が彼の洗禮の代りとなれり。

一人は恵^あむべき、一人は恵^あみし足を

固く信じた基督教徒として肉體^{にくたい}を出た。³⁷

蓋し一人は永久^{とこしへ}に善き意志に歸ることなき

地獄より己が骨に戻つた者である。³⁸

これは活ける望―彼を甦らしめ

彼の意志の動かされ得るやう

110 神に捧げられた祈³⁹に力を注ぎし

活ける望みの功德であつた。

わが述ぶるこの榮光の魂⁴⁰は

肉に歸り、住むこと暫くにして

おのれを扶け得る『彼』⁴¹を信じた。

信じてこの眞^{まこと}の愛の火に燃やされ

かくて第二の死の時彼は

この歡樂に來るに足るものとなつた。

他の一人は、いと深うして被造物^{つくりもの}の

37 リフエロは紀元前に生存せし十字架に手足を磔け

らるべき基督を信じ、トゥライアノ皇帝は既に十字架の死を遂げし基督を信ぜり。

38 四十五行註を見よ。以下ダンテは信望愛の三神徳を解明す。

39 法王グレゴリオの祈。

40 トウライアノ皇帝。

41 基督。

42 リフエロを天國に於きしはダンテの獨創の如し。

第二十一曲

わが眼は既にわが貴女の容に^{すがた}

再び注がれ、心もこれに伴ふて

一切他の意向^{おもひ}を省みなかつた。¹

然し彼女は微笑^{ほしゑ}まずに私に始めた。

「われ若し微笑^{ほしゑ}まば、灰となりし時の

セメレ³のやうに汝はならう。

蓋し汝の見たやうに、永遠の宮殿⁴の

階^{きざし}に沿ひ、登ること高さに従つて

いよ／＼燃やされ、わが美は

いかにも灼き、もし和げられずば

その輝きに人たる汝の力は、雷^{いかづち}に

打ち碎かれる簇葉のやうになるであらう。

燃ゆる『獅子』の胸の下に

ダンテ瞑想の土星天に登ればベアトウリチエ微笑まず音楽も亦止む。
ひとりヤコブの金櫓高く聳えて無數の光の此より下るを見る。その
中聖ダミアノ近寄りて「豫定」の大難問を説き近代僧侶の腐敗を非難
す。

1 此曲の冒頭は煉獄篇第三十二曲の其に似たり。

2 土星天は節制と瞑想の表象にして、満天清冽の氣を帯
ぶ。此天に至りて微笑遂に見るべからず、又音楽も
なし。

3 テエベ王カドゥモの娘。デオゴ神の彼女を愛するを
見て妻デウノネ嫉妬し、彼女を誑かしてデオゴ神の
光(電光)に觸れしめ、これを灰と成らしめたり。地、
三〇の一—三。

4 諸天。

5 一四の一三〇以下。

まだ凡ての擇ばれし者を知らざれば

汝等自らも審くことを差し控えよ。

且つこの缺乏はわれらに嬉しきものである。

蓋し我等の徳はこの徳のうちに潔められる――

神の意志し給ふものを我等も亦意志す」。

かくわが近眼を明らかに

一四〇 せんとて神々しい像が

甘き藥を私に與へた。

巧みなる彈琴者が巧みなる歌者の

伴奏をなし、絃を顫はし、かくて

歌が一際快さを増すにも似て私は

その語る間に二つの光が

宛ら共に瞬く兩眼のごとく

その焔を詞にあはせて

動かすを見たことを記憶する。

47 三の八五。

48 トウライアノ皇帝とリフエロの靈。

49 一二の二六。

わが眼の追ひ得ぬまで高く

三 直立するのを私は見た。

かくて天に現れる凡ての光が其處より

注ぐかと思はれたほど夥しい輝きが

段に沿ふて下り來るを私は見た。

日のはじめ鴉が

その凍えた羽を暖めんとて

自然の慣ひにより共に動き廻り

かくて或るものは去つて歸らず

或る者は立ち出たところに歸り

また他の者は廻りつゝ止まる。¹²

四 一緒になつて來た閃光が¹³

或る段を打つや否や

斯くの如き狀を私に現した。

そして我等にいと近く止まつたもの¹⁴が

12 圓を描きて飛翔し續ける。

13 輝く諸靈の群。

14 聖ダミアノの靈。一二一行を見よ。

今その力と混じつて下界を照らす

第七の灼光^{かじやき}へ我等は擧げられた。

心をして汝の眼の後^{うしろ}を追はしめ

やがて此鏡⁷のうちに汝に

示される像^{すがた}をうつす鏡とせよ」。

わが眼がいかに此祝福^{めづ}まれし姿を

二 飽かず眺めたかを知るものは

他の思ひに身を移して

わが天來の護衛者に従ふことの

いかに私に樂しかつたか、此方彼方を

釣合はせて識^しることが能さるであらう。⁸

一切の邪惡が死んでその脚下に

横たはる榮ある導者の名を帯びて

世界をめぐる結晶¹⁰のうちに

日光燦爛たる黄金色の梯^{はし}が¹¹

6 第七天即ち土星天。神曲の年代一三〇〇年の春土星は獅子宮にありて共に光を交へ地上を照らせり。即ち冷き土星と熱き獅子宮との光が結合せしなり。一六の三七註。

7 反射の光にて輝く遊星(煉、四の三註)或は此を動かす慧智(天、九の六一)。こゝにては土星のこと。

8 ペアトゥリチエの顔を飽かず眺めることは(瞑想)は、彼女の命に従ふこと(活動)と等しく嬉し。此兩者は何れも悦ばしくして謂はゞ均合へるものなりき。

9 サトゥルノ神。極めて質朴にして節制に富み平安と正義の黄金時代を支配しゐたり。これ古典詩人の所信なりき。ギルヂリオの「牧歌」四の六。同「農歌」二の五三八。煉、二八の一三九—一四四。

10 土星天。

11 ヤコブの金梯。「日暮れたれば即ち其處に宿り其處の石をとり枕となして其處に臥して寝ねたり。時に彼夢みて梯の地に立ちゐて其頂の天に到れるを見又神の使の其に上り下りするを見たり」創世記二八の一、一二。天、二二の七〇。火星大には殉教の表象たる十字架を、木星天には帝國の表象たる鷲を、而して此處土星天には瞑想により神に登る表象としてダンテは金梯を描けり。

響く天國の甘美なる交響樂が

何ゆゑにこの輪に沈黙するかを告げよ」

この光が私に答へた「汝の聴覺は

汝の視覺と同じく未だ人間のものである。

されば茲に歌なきはベアトウリチエの微笑ほしゐまぬ譯に同じ。¹⁹

聖き梯はしどの段に沿ふて斯く下つたのは

たゞ言葉と俺わしの外套なる光とにて

なんぢを歡待もてなさんがためであつた。²⁰

優れる愛が俺わしの速度を優らしたのではない。

蓋し焰が汝に啓示しめすごとく、優る

またいや優る愛が高く彼處かしこに燃えてゐる。

セ〇 しかし世界を治めたまふ『聖旨みむね』に

侍かしづく僕と我等をする高き慈愛が

汝の看るごとく、茲に役を當てがふ。²¹

私は云つた「聖き燈よ、この宮居にて

19 ベアトウリチエが微笑を控えしは人間たるダンテの此艷美に堪へざるに據る（四一二行）。音樂の止みしも此と同じく人間たるダンテの耳の此に堪へざるに據る。

20 聖ダミアノの靈の降り來たりしは神の命によるものにして特に彼の愛深しとは非ず。諸靈の愛は等しく皆強し。

21 諸靈を靈感する深き愛は、神の意志に従ひて各にその役割を當てがふ。

いたく輝いたので私は心の衷に云つた

「汝の私に示す愛を良く私は識る。」

然し語り且つ黙する場合と時とを

私が學ぶ彼女は佇む。故に願望に

背つて私は敢て訊ねない」。

すると一切を見給ふ神の眼のうちに

私の沈黙を見た彼女は私に云つた

「汝の熱き願望を解けよ」。

そこで私は始めた「おのが歡喜のうちに

蔽れをる祝福まれし生命よ、わが功德は

汝の咎を受くるに私を足らしめぬが

願くは汝を斯く私に近づけしめた譯を

訊ぬることを私に容せし

彼女ゆゑに私に知らせよ。

また下方諸天を通じていと虔しく

15 輝き優るを見てダンテを愛し其智的渴望を充たさんと欲するを識る。

16 ペアトウリチエ。

17 五の一三三—九。

18 ダンテに二疑問起これり。(一)何故に此靈が他の諸靈を措いて近づき來しや(二)諸天に聞こえし音楽が何故に此天にのみ沈黙するや。

即ちわが眺^{ながめ}の明かなるに準じて

わが明^{あか}るさを整へる。²⁶

しかし最も輝かされる天²⁷の魂

神に眼を最も注ぐセラフィノも²⁸

なんぢの要求^{もめ}を充たし難し。

蓋し汝の訊ぬることは

永遠^{きんめ}の制定^{さだめ}の深淵^{ふかみ}を超えゆき

一切^{いっけ}の被造^{つくれ}—眼より斷たるゝに據る。²⁹

されば汝が人間世界に歸らん時

このことを携へゆき、かくて以後

斯かる目標^{めあて}に敢て足を運ばざらしめよ。

100 心は此處^{こゝ}に輝くも地上^{ちやうど}にては烟^{けむ}る。

されば天に容れられてすら爲し難きを

いかで下界にて爲し得るやを思ひみよ」。

彼の言葉が斯く私を制したので

26 靈魂の歡喜は其輝きの度に準じ、輝きは神の榮光を

眺め得る力に準ず。一四の四〇、四一、二八の一〇
六以下。

27 神の光に輝かざるゝ。四の二八。

28 天使の最高階級。

29 豫定の神秘は天上の諸靈否最上の天使すら認識し得
ず、況んや地上の人間に於てをや。煉六の一二三。

自由の愛が如何に永遠の攝理に従つて
過たぬかをよく私は識る。

22 自由意志と云ふ程のこと。受福者等の意志は只愛に
よりてのみ導かる。

しかし汝の同僚のうち何ゆゑに

汝のみがこの務に豫定せられたのか

これ解するに難しと私に見えるものである」。

私がまだ最後の言葉に到らざるに

ハ
光はその眞中を中心とし

迅き磨石のごとく自ら廻轉した。

23 一二の三。

かくてその中なる愛が答へた。

「神の光が俺に差し向けられ

俺を包むものを貰いた。

24 光。

その力がわが視覚と結ばり

俺を俺以上に舉げ、遂に

この光の搾られし『至高本質』を俺は見る

25 神。

俺を焔にする歡喜は彼處から來る。

齋らしたのに、今はいかにも空虚になり

二二 間もなく曝露されねばならぬ。³⁴

われビエル・ダミアノはこの處にゐた。

またわれ罪人ビエトゥロはアドゥリアティコ海の

濱邊なる『ノストゥラ・ドンナ』にゐた。

俺が採がし出されて曳き摺られ

たゞ惡より優れる惡へと渡される帽子を³⁸

被つたのは、わが餘生幾干もない時であつた。

焦れて跣足になり、宿を選ばずに

食を採りつゝ、ケファスが來たり³⁹

また聖靈の偉大なる器が來た。

二三 今や近代の牧者達は此方彼方に己を

支へる者や、己を手引する者⁴¹

また後より擧げる者を要する程に重い。

彼等は外套にて乗馬を蔽ひ

34 嘗て善人と善行とに豊かなりし我が僧院は今や墮落し遠からず公然其真相曝露せしめられん。

35 一〇〇七年頃ラゼンナに生まる。貧しさ両親に棄てられ豚飼ともなり、艱苦のうちに生育し約二十歳にしてカトゥリチ（一〇九行）のベネデット僧院に入り、一〇四三年頃僧院長となる。一〇五八年心ならずも「カルディナレ」に任じオステリアの僧正と成りしが一〇六七年に此を辭せり。彼の一生は教會訓練の改革に費され、一〇七二年に死せり。

36 ビエトゥロ・デリ・オネスティ。一〇九六年ラゼンナに「サンタ・マリヤ」の修道院を創設し一一一九年に死せり。或は此僧院をボムボサの僧院（ダミアノの二年間住みしと云ふ）として「われビエトゥロ・ダミアノはフオンテ・アゼルラナにありて罪人ビエトゥロとして知られ、また私はアドゥリアティコの濱邊なるボムボサの「サンタ・マリヤ」僧院に住んでゐた」とする人もあり。

37 nostra donna. 「聖母」僧院の名。

38 「カルディナレ」の帽子。

39 聖彼得。「汝はケバと稱へらるべし、ケバを釋けばペテロ（巖）なり」約翰傳一の四二。

40 聖保羅。「彼は異邦人及び王とイスラエルの子孫の前に我名を擔はしめんために我選びし器なり」使徒行傳九の一五。地、二の二八。

41 rincalzare. 煉、九の七二。

訊ぬることを廢め、退いて

その誰であつたかを謙卑へりくだつて問ふた。

「伊太利亞の兩岸の間、汝の故郷を

距つること遠からず、巖石聳31え

高うして遙か下方に雷霆轟く。

巖石はカトゥリア32と呼ばれる、隆起りゅうちをなし

10. その麓に禮拜の爲にのみ

用ゐらるゝ僧庵が建てられてある」。

かく彼はまた三度目の話みたびめを私に始め

やがて續けて云つた「そこにて

俺は道心堅固に神に仕へ

橄欖液の食をのみ採り33

瞑想思索に満足して安らけく

暑さ寒さを過ごした。

この僧院は豊かな果みを常に此等の天に

30 地中海とアドウリアティコ海の間。

31 或は云ふ、二十一曲より二十五曲（フィレンツェ歸還を歌へる）までを作りしはダンテが屈辱的條件の下にフィレンツェ歸還を許可する提議を受けし頃なりきと。現に此處の僧院にダンテが宿り峯の森越に故郷を眺めて慕郷の念を湛へしとさへ傳へられき。

32 アベンニノ山脈中最高の峯の一。ウルビノとグッピオの間にある高き丘。カマルドリ派教團に屬するサンタ・クロチエ・ディ・フォンテ・アエラナ修道院ありき。

33 豚脂や牛脂にあらず橄欖液を用ゐて料理せしものみを用ゐたりき。

第二十二曲

昏迷し抑壓されて私は、最も

頼みとする方¹へと常に馳せ歸る

小兒のやうに身をわが導女に向けた。

すると彼女は、蒼白く喘ぐ子を

いつにても落付かす己が聲にて、

直ちに宥める母のやうに私に云つた

「汝が天にゐることを知らぬのか。

また天が全く聖く、且つこゝに起こることが

凡て『善き熱誠』に據ることを知らぬのか。

一〇 叫びが斯く汝の心を動かしたからには

歌とわが微笑^{ほゑ}みとが汝をいかに變^かへたかを

なんぢは今考へることが能きやう。

叫びのうちの祈を汝が識^{さと}つたならば。

聖ベネデクト現れて瞑想の生涯に就て語り、己が教團の起原を述べ、修道僧等の腐敗墮落を非難す。また遠く神の聖前に達するヤロブの企鵝に上る者なきを慨嘆す。やがて恒星天に入らんとして先づ七星を瞰下し地球の倭小なる姿を蔑ずむ。

1 母。

2 煉、三〇の四四。

3 相互に傷つけ合ふ如きことは天に起こることなし、皆愛より出づ。

4 二一の四以下。同五八以下。

5 叫喚は復讐の祈願なりき。前曲一四〇一二。

斯くて一つ皮の下に二正の獸⁴²が行く。

おゝ斯く迄もしのぶ『耐忍⁴³』よ』。

この聲に尙多くの煩⁴⁴が

段より段へと降りつ廻⁴⁵り

廻⁴⁶る毎に美しくなるのを私は見た。

彼等は此者の周圍⁴⁷に來て止⁴⁸まり

一四〇 比⁴⁹ぶべきものとはなき

大音聲⁵⁰の叫びを擧げたが

雷⁵¹が私を壓したので何ごとか分からなかつた。

42 馬と僧侶。

43 神の。

最大のものが、彼に關る私の願望を

三 満足せしめやうとして前進した。

やがて其中に私は聞いた「われらの裡に

燃える慈愛を、俺とおなじく汝も見得たならば

汝の念は既に現されたであらう。¹¹

然し俟つため汝が高き目的に遅れんこと恐れ

俺は斯く自ら差し控える

汝のその思ひに進んで答へやう。

山腹にカッシノを有する

彼の山へは、嘗てはその頂へ

虚妄邪惡な人々が群集した。¹³

四 われらを斯くも高める真理を

地上に齎らした『彼』の名を始めて

其處へ携へ上つたのは俺である。

かくて大なる恩寵が俺のうへに輝き

10 聖ベルナルド。羅馬教會最初の教團創始者にして四八〇年頃に生まる。羅馬の學校に學びしも逃れて數年間スパジオに近き山中に隱遁し、五二九年有名なモンテ・カッシノの修道院を建設し、五四三年頃死せり。

11 人の疑を解かんことを悋ぶ諸靈の心を悟り得たらんにはダンテは質問を差し控えずに發せしならん。

12 ナポリと羅馬の間にあるカイロ山の一角にあり。聖ベネデット此異教的禮拜の中心地を選びて住み、五二八年に頂上なるアボルロ神殿を毀ち、エネレ女神（ギナス）に獻げられし林を破壊し、遂に彼の僧團中の最も有名なる修道院を此處に建つるに到れり。

13 異教徒。
14 基督。

生前に汝の見るべき復讐⁶を。

汝は既に茲に識り得た筈である。

こゝ天上の劔は斷つこと急ならず

また緩^{くわん}ならず、たゞ望みつゝ或は恐れつゝ、

俟^まつものに然^{しか}見えるのである。⁷

さて今身を他のものらの方に向けよ

二〇 蓋しわが云ふまゝに汝の顔を回^{かへ}さんか

榮光の多くの靈を見るであらう」。

彼女の意のまゝに私は眼を向け⁸。

互^{かたみ}に光線を交^かはして益々身を

美しくする百の小さき圈⁹を見た。

云ひ過ぎんことを恐れ、己が願望^{がんぼう}の

尖端^{せんぽん}を心のうちに抑えて訊ねやうと

企てざる人のやうに私は立つてゐた。

やがて諸の眞珠のうち最も輝く

6 アナニヤに於ける法王ボニファチオ第八世の生擒

(煉、二〇の八六)か、アギニオンへの法王廳移轉(煉、三二の一六〇)か、或は、漠然救世主の出現を指すものか。煉、三三の四一—五。

7 神の復讐は常に時を違へず。只これを願ひ求むる者に遅く、此を恐るゝ者に迅しと思はるゝのみ。煉、

二〇の九四—六。

8 金楯の方へ。

9 諸靈。

恩寵を受けて、汝の蔽はれざる貌を^{すがた}

六〇私が見得るや否やを確知せしめ給へ²⁰。

すると彼は「兄弟よ、汝の高き願望は

最後の圈に登つて叶へられるであらう。

彼處にて凡て他のもの並びに俺の願望が叶へられる。

彼處にては一切の願望が成就し

成熟し十全する。そのうちにのみ

あの／＼の分がその常にありし儘にあり。

蓋しそれは空間に存せず、また軸をも有せず²²。

われらの梯子は遠くそれに届き

かくて汝の眼より逸し去る。

七〇數多の天使を負ふて梯子が現れた時

遙か彼方にまで高くその上部の

達するを族長ヂャコッペが見た。

然し今や何人も登らうとして地より

20 聖ベネデットは今光に蔽はれてダンテに現る。光を

除きて彼の眞の姿に接せんことをダンテは願ふ。然

しこれは只清火天に於てのみ叶へらるゝ望なりと答

へらる。これ受福者は凡て神の聖前に坐を占むるも

のにして、その諸天に現れてダンテに遇ふは彼等の

受くる祉福の度合を示す表象的現示に過ぎずとの言

(四の二八以下)に一致す。ダンテは第三十二曲の三

十四行に於て現實にベネデットを見る。

21 清火天。

22 「軸をも有せず」の原語は一字にして *non ha* 清火

天は不動にして他の被造の諸天の如く廻轉せず(幾

宴篇二の六)従つて軸(極)の要なし。

23 ヤコブ。前曲二十七行。

世界を拐^{かど}かした不虔な禮拜¹⁵より

その周圍^{まはり}の邑々^{むら}を俺は救ひ出した。

此等の火は悉く聖き花と

果^みとを生ぜしめる熱¹⁷に

燃やされし瞑想の人々であつた。

こゝにマツカリオ¹⁸がある。こゝにロモアルド¹⁹がある。

五〇 こゝに僧院内に足を止め、心を

定かに保つ俺の兄弟達がゐる」。

そこで私は彼に「私との話に

汝の示す愛情と、汝等の全灼熱のうちに

私が見て識る善き貌^{すがた}とが

恰も太陽が照らす時

薔薇が有らん限の力に廣く開くやうに

私の信賴の心を擡げた。

されば父よ私は汝に祈り、大なる

15 偶像禮拜。

16 花(思想)、果(行爲)。八の五七。

17 神の愛の熱。

18 アレキサンドリアの(恐らく小)聖マカリウス(四〇五年死)。聖ベネデットが西方教會即ち羅馬教會の修道院創設者なりしが如く、彼は東方教會即ち希臘教會の修道院創設者なりとせらる。「汝の住處を天上に置きて神とその聖き天使等と語らひ、そこより降らざるやう心せよ。地上のものを顧る勿れ」と彼は己が靈魂に云ひ居りしと。

19 聖ロムアルドウス。改革ベネデット派即ちカマルドリ派(煉、五の九四)の祖なり。ラゼンナのオネスティ家の者にして九六〇年頃生まれ一〇二七年頃死せり。彼は奢侈安逸の中に育ちしが、幼少の折父が決闘して敵を殺せしを見てベネデット派の修道院に入りしと。

また俺は祈禱と斷食とを以つてし

グルンチエスコは謙虛を以つてした。

さて若し何れもの始まりを見

次でその迷ひ行きし處を顧みんか

白が鼠色になつたのを汝は見るであらう。

げに神の意によりデオルダン河が退さ

海の逃げ失せたのは、茲に救ひを

見るに優つて奇しむべきであらう。

かく彼は私に語り、斯くて己が

同僚へ歸り、同僚は互ひに相寄つた。

やがて旋風の如く皆上方に集まつた。

100 甘美な貴女はたゞ相圖をし、この梯を

越えて高く彼等の後に私を追ひ立てた。

かく彼女の力はわが性を壓倒した。

しかし自然に従つて人の上下する

31 アッシシの聖フランチエスコ。第十一曲を見よ。

32 約書亞記三の一六、七。

33 「モオゼ手を海の上に伸べればエホバ終夜強き東風をもて海を退かしめ海を陸地となし給ひて水遂に分かれたり」出埃及記一四の二一。詩篇一一四の三。
34 教會の罪惡を矯めんとして今神干渉し給ふとも、それは以上の古代奇蹟ほど怪しむべきにあらず。蓋しその必要一層切なればなり。

35 人性。ベアトウリチエはその力をもつて未だ肉體を離れざるダンテを空中に上昇せしめたり。

足を擧げず、また俺わしの規範は

下界にて反古同様になつてゐる。²⁴

僧庵たりし障壁は

巢窟となり、僧帽は

忌まはしき食物に充つる袋となる。

誅求さるゝ重き高利も

八〇 修道僧等の心を斯くも狂愚くるはしめる

果みほどには神の意に悖もとらず、

蓋し教會の保管物は凡て神の名に於て

乞ふ人々の爲にて、親屬27や

または更に穢らはしき者等28の爲にあらず。

人間の肉はいかにも柔弱にて

下界にては始まりが善くも

榨29の萌芽より結實まで能く續かず。

彼得ビエルは金銀なしに彼の30一團を創はめた。

24 異本、「下界にて」を除く。

25 聖ベネデクトは聖ダミアノ聖トムマゾ・ダク非ノ聖ボナゼントウラ 同様に己が教會の奢侈貪婪に満ちて墮落せるを慨嘆す。

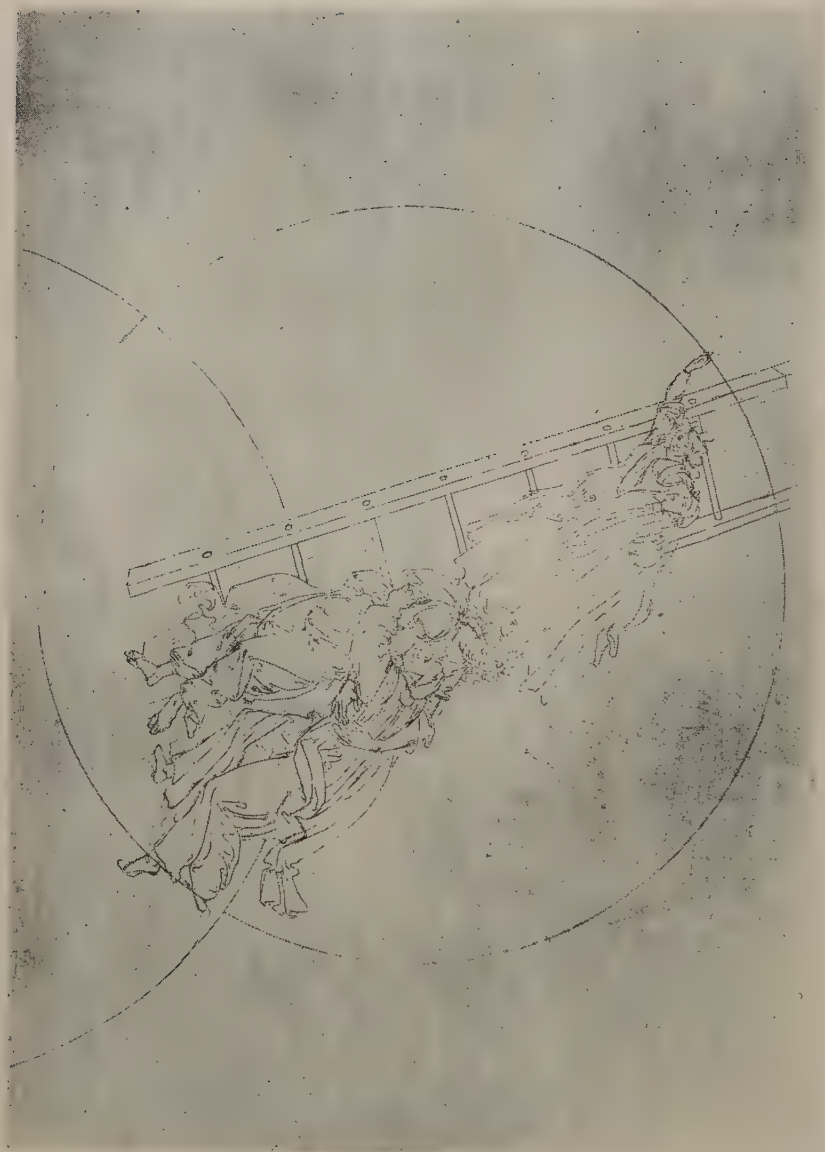
26 七十九行の「高利」と對應して「利殖」の意なり。

27 一二の九三。

28 妾婦等。

29 善き制度も果を結ぶ迄永く純粹を保たず、創業間もなく腐敗が忍び入る。

30 エルサレムの神殿の美くしと名づくる門に坐せる跛に向かひて彼得は「金銀は我になし只我に有るものを汝に與ふナザレの耶穌基督の名によつて起ちて歩め」と云へり。使徒行傳三の一—一〇。



こゝ下界には、わが翼に比べらるべき

かく迅き運動が嘗てなかつた。

讀者よ、願くは屢わが罪を哭き

またわが胸を打つて慕ふ

この敬虔なる凱旋にわが歸り得んことを。

金牛宮に従ふ宮を見、その中に私が

110 達し得た速かさは、汝が火に指を

入れて出すのにも優つてゐた。

あゝ榮光の諸の星よ、大なる力を

孕む光よ、有りとある我一切の

天才を、われは汝より承けたり。

始めて私がトスカナの空氣に觸れた時

一切の死すべき生命の父なるものが

汝と共に生まれ汝と共に身を蔽ふた。

やがて恩寵が私に與へられて

36 *trionfo*. 世と肉と惡とに勝ちし天國の榮光。

37 雙女宮。太陽と此宮との結合は名聲を與ふと信じられき。

38 原文 *tratto o messo* (出して入れる)。言葉の此逆用は極度の迅速さを示さんとてなり。二の二三、四。

39 恒星天の多くの星。

40 ダンテは太陽の雙女宮にありし時生まれたり。即ち

五月十八日より六月の十七日の間なりき。

41 太陽。

42 共に昇り共に没したりき。

汝等を廻す高き輪⁴³のうちに入つた時

二三 私に當てがはれたのは汝等の領域であつた。

汝等に向かひ今わが魂が度しく

嗟嘆^{なめいさ}し、魂をおのれに引き寄せる

難^{みち}き徑に堪へうる力を得んことを願ふ。

ペアトウリチュは始めた「汝は

窮極^{すひ}の救済⁴⁴にいたく近づくゆゑ

汝の眼は明らかに又鋭かるべきである。

されば進んでその中^{うち}に入る前に

下方を眺め、いかに大なる世界を

既に妾^{わたし}が汝の脚下に置いたかを見よ」。

一三〇 これこの圓き精氣^{エテラ}を通じて悦び來る

凱旋⁴⁵の群に向かひ、汝の心がその歡喜の

極みの姿を表し得んがためである」。

わが眼にて七つの圈⁴⁵の凡てを

43 第八天即ち恒星天。恒星大の慧智はケルビニにて智識に卓絶す。神の幻影を充分述べ傳へ得んためにダシテは彼等の光明を懇願す。

44 *ultima salute* 神の幻影に接すること。salute の意義に就ては「新生」三三の註二を見よ。

45 次曲を見よ。

46 土星天以下の七天。

彼等の大いさと速度と

一五〇 またその住處^{すみか}の距離が示された。

永遠の雙女宮と共に私が廻^{めぐ}つてゐた時

我等をいたく猛^{まう}からしめる小さき打殼^{うちば}庭^ばが

その丘^{おか}より河口^{かほぐち}まで悉く私に現れた。

やがてわが眼を美しき眼^めに再び向けた。

55 人類の住める地球。二七の七六―八七。

56 ペアトウリチエの。

悉く見返し、またこの地球を見

そのいかにも憐な姿に私は微笑み⁴⁷

これを賤しとする訓の最善なることを

認めた。これ以上のことを思ふ人は

げに正しと呼ぶべきである。

嘗て稀薄濃厚によると私に

一四〇 信ぜしめた原因であつた陰影なしに

ラトナの娘の燃えをるを見た。

イペリオネよ、汝の子の姿をこゝに

私は堪へ、いかにマイアとディオネが⁵²

彼に近く周圍に動くかを見た。

次におのが父と子との間に

デオエの緩和が私に現れ、やがて彼等の

位置にて示す變化が私に明らになつた。

かくて七星が悉く私に示され

47 失樂園二の一〇五一、二。

48 天上の事物。

49 月。地球より見るを得ざる月の他面を今ダントは恒星天より瞰下せり。此面には暗斑點なく圓かに照り輝けり。二の五九。

50 巨人イペリオネは海神と地神の間の子なり。

51 エリオス(太陽)。

52 マイアはゾネレ(金星)の母、ディオネはメルクリオ(水星)の母。こゝにては各金星と水星を指す。

53 木星。サトウルノ(土星)は彼の父にしてマルテ(火星)は彼の子なり。此句の意味は、冷き土星と熱き

火星の間に中和なる木星懸るとなり。一八の六八。

54 七遊星の異なる軌道。

私は他の事を願ひ求めつゝ

望んで充ち足る人のやうになつた。

しかし「時」と「時」即ちわが俟ちし時と

諸天のいや増し輝きゆくを

見た時との間に殆んど間がなかつた。

やがてベアトゥリチエは云つた「基督の

二〇 凱旋の軍勢、および諸の圈の廻轉によつて、

收獲れた凡ての果を見よ」。

形容もせずに私が過ぎねばならぬ程

彼女の貌が全く燃え、また眼が

喜悅に充ち溢るゝやうに私に見えた。

澄みわたる満月に満天隈なく

彩る永遠のニンフ達の間に

トカリニアが微笑むやうに

數千の燈のうへに一つの太陽が、有りとあるものを

3 諸遊星の恵みある感化によりて。

4 聖徒。ダンテは以上七星天に於て受福者の種類を見たり。今恒星天に於て彼等の集合せるを見る。

5 星。煉、三一の一〇六。

6 ディアナの一名にして月のこと。

7 榮光の基督。一四の五二。

第二十三曲

萬象をわれらに蔽す終夜^{よるすがら}

なつかしき葉蔭にて

いとしき雛の巢に籠る鳥は^{こも}

その憧る^{おもが}ゝ顔を見

またこれを養ふ餌を尋ねんと

切なき勤勞^{きんらう}も彼女^{かのぢよ}には楽しく

時に先だち、擴がる梢^{こすえ}の上に

熱い愛情を抱いて太陽を俟ち

曉の生ずるゝを専ら胸^{みつ}めてゐる。¹

一〇その如くわが貴女は直立して

心を注め、太陽の疾驅の最も

緩さを示す天涯^{てんや}さして振り向いた。

そこで恍惚として憧がれる彼女を見

基督の凱旋近づきて満天輝き、基督の光彩一際陸離たり。續いて聖母の薔薇、使徒聖徒の百合花現る。やがて基督上に昇り天使がブリエルロ下り來たりて聖母に戴冠す。聖彼得は舊新兩約書の聖徒と殘る。

1 失樂園三の三八―四〇。

2 子午線。地球を毬下せしヘアトウリチエは今直立し、

エルサレムより見て子午線詳しくは天頂を仰ぐ。太陽天頂にある時其歩み最も緩しと見ゆ。煉、三三の一

〇五。



燃やすこと、恰も我等の太陽が

三〇 天上の觀物^{みぶつ}を燃やすが如きを私は見た。

そしてその活ける光を通して

燦爛たる「本體」が甚くわが顔を照らし

私はこれに堪へ得なかつた。

おゝへアトウリチエ、なつかしくも慕はしき導女よ。

彼女は私に云つた「汝を壓服するは

何ものも自らを防ぎ得ざる力である。

嘗ていと長き間願ひ求められし

天と地の間の途を開いた「智慧」と

「力」¹¹とがこの中にある」。

四〇 容れ切れざるほど擴がつて火が

雲より解かれ、おのが性に逆つて¹²

地上に落下するやうに

わが心はこの諸の饗宴¹³のうちに

8 星。太陽の光によりて凡ての星輝くとは當時の説なりき。饗宴篇二の一四。

9 榮光の體に於ける基督。

10 アダムの墮落以來。煉、一〇の三四、五。

11 「キリストは神の力また神の智慧なり」哥林多前書一の二四。

12 上昇すべき火の性に逆ひて。一の二四〇。

13 天國の歡喜。

増大して己れ自らを忘れ、かくて

遂に如何になりしか記憶するに由なし。

「眼を開けてわが有る状を見よ。

汝を能くわが微笑に

堪へしむるものを汝は見た¹⁴」。

過去を録す書¹⁵より

五 永久に消えざる感謝に

價ひするこの提言^{ていげん}を聞いた時

私は忘れし幻より我に歸り

徒らに幻を心に引き返へさんと

焦慮^{あせ}る人のやうになつた。

例へ今ポリンニア¹⁶がその姉妹達と共に

己がいとも甘美な乳にて豊かにせし

舌が凡て響きて私を扶くるとも

聖き微笑^{せいふみ}とまたその聖き顔^{かんばせ}を

14 疊にベアトウリチエはダンテにわが微笑に堪へ得ざるべしと云へり(二一の四)。然し今基督の榮光を見

しダンテは此に劣るベアトウリチエの榮光を見るを得。

15 記憶。「新生」の冒頭に「わが記憶の書」とあり。

16 ムウゼ九女神の一にして抒情詩を司るもの。

こゝにある。その香により善き途の
標した百合花がこゝにある」。

かくベアトウリチエは云つた。そこで

彼女の勸に専ら従はうとする私は
再び身を微弱き眉の戦ひに投じた。

嘗て影に蔽はれてわが眼が

雲の裂目より清らかに出づる

日光の下に花の野邊を見たことがある。

そのごとく灼きの源は見えねど

燃ゆる光線に上より照されて

輝く衆群を私は見た。

あゝ彼等を斯く印銘する慈愛の深き力よ

力なきわが眼に餘地を與へんとて

なんぢ自らを高く擧げたまひぬ。

朝な夕なわが常に祈願する

21 使徒と聖徒。哥林多後書二の一四より出づ。

22 眼と煌々たる光輝との戦ひ。

23 基督。

24 基督の榮光の體を見るを得ざりしダンテの眼は、基督上に登り給ひしたため基督の照らす諸聖徒を眺むるを得たり。

研^きえしめた狀を歌つて、能く實景の

六〇 千分の一にだに到り得ないであらう。

されば天國^{ヘヴン}を寫さうとして

聖猷^{せいこう}の詩は、おのが道の斷たるゝを

見る人のごとく飛躍せねばならぬ。

しかし重大なる題材とこれを負ふ

人間の肩とを思ふ人は、假^{よし}この荷の

下に肩がよろめくとも責めないであらう。

わが勇敢なる舳^{へき}の裂きゆく

この航海は、小さき船や、命を惜しむ

水夫^{かこち}等の能くし得るものにあらず。¹⁷

七〇 「何ゆゑにわが顔に斯く汝は愛着し

基督^{くりすと}の光線の下に花咲く

花園^さに身を向けないのか。

美しき『神の道^{ことば}』の肉を採りし『薔薇⁰』が

17 第二曲の冒頭を参照せよ。

18 諸聖徒。

19 基督。

20 聖母マリア。彼女は Rosa Mundi (純潔の薔薇)
Rosa Mystica (神秘の薔薇)と稱せらる。

我等の願望^{ねんぼう}の仕處^{すまか}なる胎^{たま}より

吹き出^いづる高き喜悅^{よろこび}をめぐる。

かくて天の貴女^{きよめ}よ、汝^なが聖子^{みこ}に従^{したが}ひ

汝の入ることにより、至高^{しこう}の圈^{きん}の

神聖^{しんせい}を彌^い増^やすまで我^{われ}は廻^{めぐ}らん^し。

廻^{めぐ}れる旋律^{メロディ}は斯^{かく}く自^{みづか}らを

二〇 封^{ふう}じ、他^たの凡^{みな}ての光^ひは

マリアの名^なを響^{ひび}かした。

世界の凡^{みな}ゆる廻^{めぐ}轉^{てん}を蔽^{おほ}ふて

最^もも熱^{ねつ}し、また神^{かみ}の息^{いき}吹^ふと神^{かみ}の意^いとに

活^いかざるゝこと^{こと}の最^もも多^{おほ}き壯^{さう}大^{だい}なる外^{がい}套^{たう}は^は

われらの頭^{づか}上^{がみ}いと遙^{とほ}かに

その内^{うち}側^{がは}を横^{よこ}たへ、その姿^{すがた}は

私^{わたし}のゐた處^{ところ}に未^まだ見^みえなかつた。

かくて焰^{えん}の冠^{かん}を戴^はき、おのが裔^{ゑい}に

31 基督。

32 清火天。

33 或は、輝き。一四の三四。二六の二〇。

34 言葉^{ことば}を了^はたり。

35 第九天即ち原動天。他の八天を蔽ひ此等に廻轉する力を與ふ。

36 清火天に最も近き處にして今基督を追ふて聖母の昇り行く處。

37 基督。

25 聖母マリアの名。

美しき花の名¹⁵がわが心を全く捉へ
優¹⁶れて大なる火を眺めしめた。

斯くてこゝ下界にて勝つごとく

天上にても勝つ活ける「星」²⁶の

質と量²⁷とがわが兩眼に彩られた時

一つの炬光²⁸が圓く王冠の形に象²⁹られて

天の央³⁰より降り、彼女を取り卷き

彼女の周圍をめぐつた。

いかに快く響き、魂を惹き

寄せでは措かぬ下界一切の旋律も^{メロディ}

いたく輝く天を碧玉とせる

100 美しき碧玉²⁹に冠を戴かしめんとて

響きし七絃琴³⁰にくらべては

千々に裂けて轟く雲のやうである。

「われは天使の愛にて

26 凡ての天軍中最も輝く聖母マリア。

Stella Maris, della Matutina (曉の星なるマリア)
Ave Maris, Stella dia. (慶^{あや}だし星なるマリア)

彼女の榮光はその地上に於て萬人に優りしが如く、
天上に於ても諸聖徒に優る。

27 光度と大きさ。

28 受胎告示の天使ガブリエル。路加傳一の二一。煉、
一〇の三六。廻轉速かなる故に冠の如く見ゆ。

29 聖母マリア。古代の畫家は聖母を碧玉の色に描けり。
煉、一の二七。碧玉は寶石中の最も優れたるもの
にして、健康を表象し、災害を避けしめ、嫉妬を招か
しめず、恐怖を去り、俘虜の鎖を斷ち、門を開き、
人を自由ならしむる力ありと稱せられたり。

30 ガブリエルの歌聲。

バビロンの流竄に哭きし間に

獲たる寶を彼等は樂しむ。⁴³

こゝに神とマリヤの高き聖子の下に

いとも大なる榮光の双鍵を握るもの⁴⁴

舊新二つの集團もろともに

勝利のうちに凱旋す。

42 地上の生涯。煉、一三の九四一六。

43 「盡くひ鏑び腐り盗人穿ちて竊まざる所の天に寶を蓄ふべし」馬太傳六の二〇。

44 天國の鍵を基督より受けし聖彼得（馬太傳一六の一九）。舊約新約の諸聖徒を携へて教會の勝利に凱旋す。

従つて昇る冠を戴ける³⁵ 燐を

一二〇 追ふ力がわが眼になかつた。

また乳を飲んだ後³⁶ 嬰兒の心が

つひに外面にまでも燃えいで、

母の方へ腕を伸ばすやうに³⁹

諸の燈はいづれも其燐の上に

伸ばし、マリアに對して抱く

彼等の高き愛情を私に表した。

やがて彼等はわが眼前に止まり

いかにも快く *Regna coeli* を歌つたが⁴⁰

その悦びは嘗て私より去つたことがない。

一二一 あゝいとも貴き此等の⁴¹ 櫃に

積まるゝ富のいかに大なるよ

下界にて播種に⁴² 彼等は善地なりし。

こゝに彼等は生き、黄金を顧みずして

38 聖母マリア。

39 煉、三〇の四三、四。

40 「天の后よ」復活節後の晩禱に用ゆる聖母禮拜の交唱聖歌の起句なり。

Regina coeli, laetare ! Alleluia.

Quia quem meruisti portare, Alleluia.

Resurrexisti, sicut dixit, Alleluia.

Ora pro nobis Domini Alleluia.

天の后よ、歡へ、アルレルイア

そは汝の生むを得し彼、アルレルイア

約束のごとく甦りたればなり、アルレルイア

我等のため神に祈れ、アルレルイア

41 受福の諸靈。彼等は地上にては義の種を播かれて多くの果を結びし善き地なりき。

心を留める人に、最初のものが静止し

最後のものが馳せ去るよと見える。

その如く或は迅くまた緩く

とりどりに踊る諸の歌踊は⁷

その豊けさを私に思はしめた。

いと美はしと私の見たものより

二〇 いとも幸なる火が發し、これに優つて

輝くものが其處に残つてゐなかつた。

そして此は歌ひつゝ三度^{みたび}ベアトゥリチエ^エの

周圍^{まわり}をめぐつたがその神々しさは

わが幻想の辿り得るところでない。

斯くてわが筆は跳ねて私は此を記さず。

蓋し我等の想像力、況してや我等の言葉は

かゝる襞^{ひだ}を彩るに色が輝き過ぎる。¹⁰

「おゝ斯く^{うやう}度しく我等に祈るわが姉妹よ

7 carole. 古代佛蘭西語の koro'e にして歌に合せて

踊る舞踏。失樂園五の六一九。"in song and dance".

8 諸聖徒の運動に遅速あるは彼等の受くる祝福の度合に據る。

9 聖彼得。

10 譬喩稍朦朧たり。餘りギラ／＼せる色が經衣の襞を

描くに不適當なるが如く、我等の想像力と言葉とは此神々しき歌の如き無上の歡喜を述ぶるに足らずとの意ならん。

第二十四曲

恒星天の諸靈ベアトウリチエの懇請を容れ、聖彼得の靈川で來りてダントに信仰のことを試問す。ダント即ち新約聖書の句に基づきて答へ、又アリストテレスと聖書とに據りて己が信仰の根據を述ぶ。彼得悦びて彼を祝福す。

「あゝ汝等崇むべき『羔』の大なる晚餐に

選ばれて與かり、これを食らひて

その願望の永久に充たさるゝ一團よ²

死期至らざるに此者が來たつて汝等の

食卓より落つる屑を豫め味はふは

神の恩寵によることなれば

彼の盡さざる熱望を顧み、少しく

彼に露を注げ。彼の思ひの源なる

泉になんぢらは永久に飲む⁴。

10 かくベアトウリチエが云へば、悦べる

諸の魂は定かなる軸の上に自ら圈を描き

宛ら彗星のやうに強く焰を擧げた。

時辰儀の中にめぐる車輪は

1 基督。

2 「天の使われに曰ひけるは羔の婚姻の筵に招かれたる者は福なりと書きしるせ」約翰默示錄一九の九。馬太傳二二の一—一四。

3 ダント。

4 彼の心の向けらるゝ眞理の源なる神の泉に汝等は永久に飲む。されば汝等彼の心を開きて此泉を知らしめよ。

5 輝き麗るは歡喜の増加を示す。

6 orindi. 當時時計は未だ物珍しき時代なりしと見ゆ。一二三二年「ソルダノ」は鐘と車輪より成れる地球儀形の時計をフェデリゴ第二世に贈れり。

信仰に據るがゆゑ、敬ひて宜しく

彼は此に就いて先づ語るべきである。¹⁷

自ら備へするも、然し師が

斷定にあらず、立證せしめんために

問題を提出するまで語らぬ學士のごとく

私は彼女の語つてゐた間

五〇 この質問者に答へ、いかに宣明すべきか

智を凝らして身構へてゐた。

「善きくристианство基督教徒よ、語つて自ら明らかにせよ

信仰とは何ぞや」と。そこでこの言葉の

吹き出でた光に私は額を擧げて

身をベアトリチエに向けるや、彼女は

わが衷なる泉より水を注ぎ出させやうとして

素早い眼配を私にした。

私は始めた「私を恵みて高き隊長に²⁰

17 彼が眞の信仰を有するを汝は識る。而して信仰によりて人は此王國の市民たるを得るなり。されば宜しく彼に此を敬はしめよとの意ならん。

18 baccellier. 大學より博士號を得んとする時學士は試問に答へざるべからざりき。其際提出さるゝ課題は既に決定され居るものにして斷定を下す要なきも此を立證すべきものなりき。

19 彼得。

20 principio. 拉甸語の primus plus にして純率者の意。こゝにては教會の純率者の意にして彼得のこと。

なんぢの熱する愛情により

三 かの美しき圈わより俺わしを解とき放はなつ。¹²

かくて祝福めづまれし火かは止とまり

息吹いよきをわが貴女に向けて

今私の述べた此等の言葉を語つた。

そこで彼女は「ふゝ我等の主が此奇しき

歡喜を去つて下界に携へ降りし鍵を

委ね給ひし偉大なる人の永遠の光よ

汝に海上を歩ましめた『信仰』に就きき¹⁴

輕き點また重き點、なんぢの

意のまゝに此者を吟味せよ。

四 彼の愛する處正しく、望み又信ずる處

正しきや否やは汝に隱ひそされず¹⁵

蓋し汝の眼は萬象の描かれて見ゆる處に注つがる¹⁶

然しこの王國の市民たるは眞まことの

11 諸靈の群より。

12 ペアトウリチエに對する彼得の言葉なり。

13 彼得。

14 馬太傳一四の二二—三三。

15 信望愛三神徳に於て缺なきや否や。

16 鏡の如く神のうちに一切のものを受福者は見る。一五の六二。一七の三九—四五。

この信仰の上に高き希望が建てられる。
かくて希望は本體てふ意義を採る。

かくて此うへは直観を用ゐずに

この信仰より推論し行かねばならぬ

これ證據といふ意義を採る所以である。²⁴

すると私は聞いた「下界にて教理により

ハ○ 獲られる事柄が斯く解されんか

詭辯派の智を施す餘地がない筈であつた」。

斯くこの燃ゆる愛から吹き出され^{いた}

また付け加へた「この貨幣²⁵の合金と

重量とは甚だ良く既に合格したが

然し汝の財布の中に此を有するや否やを語れ」。²⁶

そこで私は「然り、その印銘^{しるし}に何の疑のない程²⁷

いかにも灼き^{かき}いかに圓^{まる}かなのを私は有つてゐる」。

すると其處^{そこ}に輝^{かがや}いてゐた深奥^{しんおう}な

24 心靈上の事柄は地上にて眼に見ゆる存在を有せず。

されば社福の希望は只物質的證明によりて支へられざる信仰に據らざる可からず。斯く我等の高き希望が信仰の上に置かるゝ故に、信仰は希望の本體 (sustanza) と稱せらる。又信仰は心靈的事物に關る我等の推理に材料を供する故に信仰は宜しく論證 (argomento) とも稱せらるべきなり。

25 「淨められて義しき人は主の貨幣となり、身に己が主の印銘を受けしなり」テルトウリアヌス。

26 信仰に關る論議既に好し、然し實際信仰を抱きをる

や。

27 減せざる。

自ら告白せしめ給ふ『恩寵』よ。

六〇 願くはわが念を表はさせ給へ。』

かくて私は續けた「おゝ父よ、汝と共に

羅馬を善き途筋に置きし汝の愛する兄弟の

眞實な筆が此に就ては我等に記すごとく

信仰とは希望の本體にして

未だ現れざるものを證據とすることである。²²

これがその實質のやうに私に見える。』

すると私は聞いた「彼が希望をまづ

本體の中に置き、次いで證據の中に置いた譯を

汝が良く了解せんか、汝の考へは正しう。』

七〇 そこで私は「奧義は此處にその姿を

私に示したが、然しこれは下界の

人々の眼に全く隠され、彼處にては

たゞその存在を信ずるのみである。

21 使徒保羅の筆に成れりと信ぜられし希伯來書。彼得

は改宗せる猶太人の教會を、保羅は異邦人の教會を
代表し、共に基督又は聖母マリアの兩側に置かれて
全教會を總括せり。

22 「それ信仰は望む所を疑はず未だ見ざる所を眞とす
るものなり」希伯來書一一の一。羅馬教會の信條に
よれば信仰とは智的のものなり。加拉太書乃至羅馬
書に基づく新敎の謂ふ信仰をダンテは神曲の他の部
分に現し居るも此處にては羅馬教會の謂ふ信仰に従
へり。

23 quidditate. スラ哲學の用語にては事物の實質を
指す。

確めたかを語れ。汝を確信せしめる此ものが
まづ證明を要するものに他ならない。」

私は云つた「もし奇蹟なしに世界が

基督教に改宗せしめられたとせば、他の多くの

奇蹟は此の百分の一も不思議でなくなる。

蓋し汝は貧しく食を斷つて野に入り

二〇 善樹の種を蒔いた。これは嘗て

葡萄の樹であつたが今や荆棘になつてゐる」。

これが終るや、高き聖なる「宮居」には

諸の圈を通じて、天上に歌はれる

旋律のうちに Dio Laudamo が反響した。

かの男爵は斯く枝より枝へと

試問し、私を導いて遂に

最後の葉に我等が近づいた時

再び始めた「汝の心と思ひ交はせし

32 基督教的信仰。

33 「我等神を讃めたまふ」。

34 Barone. 中世紀時代に此稱號は屢聖徒中の優秀な
者進んでは基督自身にさへ用ゐられき。此處にて
は彼得のこと。次曲にて雅各にも用ゐらる。

35 「思ひ交はせし」の原語 donna. フロザンス語の
donneur にて古代佛蘭西語の desnoier なり。即ち
勳爵士の己が貴女に對する慇懃を指す語なり。

光から發した「一切の徳の樹てらるゝ

た⁹⁰基礎なる此貴き寶石は²⁸

何處より汝に來たか」と。そこで私は

「舊い又新しい羊皮紙のうへに汎く

注がれる聖靈の大なる雨が

論證となつて私をこの結論に導き

その鋭きこと此に比しては一切の

證明が私には愚鈍に見える」。

すると私は聞いた「汝にとり斯くも

決定的な舊新兩公理を、汝は何の

理由によつて此を神の言とするか」。

100 そこで私は「眞理を私に指し示す證明は

これに繼ぐ事蹟である。これに對して自然は

嘗て鐵を熱し、また鐵砧を打つこともなし」。

その答へとして私に「何が汝に此事蹟の事實なるを

28 信仰。 *inter omnes virtutes prima est fides* (凡ての徳の第一は信仰なり)「神學綱要」二の二。

29 舊新兩約聖書。一一の二三

30 *sillogismo*. 三段論法。

31 奇蹟。奇蹟の事實が聖書の神の言葉たる證據たりとなり。然し彼得は云ふ、奇蹟そのものを汝は聖書より採れるに非ずや、斯くては順環論法ならずやと。ダシテは答ふ、奇蹟なしに世界が基督教に改宗したりしとせば此は聖書に記さるゝ凡ての奇蹟よりも不思議なる奇蹟なりと。聖アウグステイヌスも同じ論法を用ゐたりき *hoc nobis unum grande miraculum sufficit, quod eis terrarum orbis sine miraculis credidit.*

形而上學的證明を私が有するのみならず

モイゼ⁴⁰を通じ、豫言者達を通じ、また詩篇を通じ

福音書を通じ、更にまた汝が焔の靈により

尊くなつた後に書いたものを通じて⁴¹

こゝより降る眞理も亦これを私に證す⁴²。

また私は永遠の三位を信じ

一四 その一體なることを信ずる。これ即ち一にして三

sono と este⁴³ を能く結合するものである。

私か觸れるこの神の

深奥な状態を、數多度⁴⁴

福音的敎理がわが心に封印した⁴⁵。

これ後に擴がりて炎々たる焔となり

天の星の如くわが衷に灼くに

至りし始めであり又火花である」。

自らを悦ばすことを聞くや

39 疑ひもなくアリストテレスの「形而上學」と「形而上學」を指す。

40 モオゼ。

41 ヘンテコステの聖靈降臨(使徒行傳第二章)後の使徒等の書翰。

42 sono は複數 este は單數の働詞にして「有る」の意なり。

43 スコラ神學者は三位一體論の根據として舊約聖書よりは創世記一の二六にある神の名の複數形、以賽亞書六の三にある「聖なるかな」の三唱等を挙げ、又新約聖書よりは馬太傳二八の一九にある「父と子と聖靈」の名に據る洗禮の唱句、約翰第一書五の八「證をなすものは三……」、羅馬書一一の三六「それは萬物は彼より出で彼に倚り彼に歸ればなり」等を採れり。

『恩寵』は、方に開かるべきほど

二三 斯くなんぢの口を開けた。

そこで汝の發した言葉を俺は嘉みするが

然し今宜しく汝の所信とまたその汝の

信仰となりし譯を表白すべきである」。

私は始めた「お、聖き父、墓に向け

いと若き者の脚を追ひ越したと嘗て

固く信じ今その真相を見る靈よ

汝はわが熱き信仰の真相を

こゝに我示さんことを望み

かつ又その原因を訊ねた。

一三〇 そこで私は答へる。動かずして

愛と願望により凡ての天を動かし給ふ

唯一永遠の神を私は信ずる。

この信仰に對して只に物理的乃至

36 汝の信仰と其根據

37 「他の弟子ペテロより疾く走り」しも、第一に墓に至りしは彼なりき。約翰傳二〇の三一—一〇。

38 一の七六。

第二十五曲

天と地とが手を置き¹

多年の間私を憐れしめた。此聖詩が

かの戦ひを齎らす狼どもの敵なる

一疋の羔として私が眠つてゐた美しい

羊檻より私を閉めだした残忍に

もし勝ち得ることもあれば

その時異なる聲、異なる羊毛の

詩人として私は歸還し

わが洗禮盤にて花の冠を戴くであらう。

10 蓋し魂を神に知らす信仰に私が

入つたのは其處であつて、後その爲

彼得は斯く私の額に冠をめぐらした。

やがて己が代理者の初穂として

ダンテ暫し題意を離れて歸郷の切々たる願望を披瀝す。聖雅各現れて希望に就きダンテに試問す。此に答ふるや更に聖約翰現れ、その燦爛たる光輝にダンテ眼眩みて暫しベアトリチエを見るを得ざりき。

1 人間と天界のことを歌ふ「神曲」。

2 煉、二九の三七—九。「新生」四三。

3 ファレンツェの民。煉、一四の五一。

4 ファレンツェ。一六の二五。

5 戀愛にあらず神のことを歌ふ聲。或は「聲」とは名聲の意か。

6 年老いて髪の色異なるる。

7 聖約翰會堂にあり。地、一九の一六、七。

8 洗禮を受けしは。

9 前曲一五一—四。神曲の此部分を作りし頃はダンテも漸く晩年に近づき、或は流竄の生涯より再び故郷フィレンツェへの門が彼の爲に開かるゝこともあらばやとの希望を抱きし狀茲に見えて惻々人に迫まる心地ず。然し此希望は遂に實現されずして終りぬ。

10 法王。彼得は最初の法王たり。

主君はその報知を悦んで

一五〇 僕が黙するや、直ちに此を抱く。

その如く私に命じて語らしめた使徒の

光は歌⁴⁴ひつゝ私を祝福し、私が黙するや

否や三度私を取り巻いた。私の言葉は

斯くまで彼を悦ばしたのであつた。

44 彼得。

われらの殿堂¹³の恵みを

三 記した榮光¹⁴の生命¹⁵よ

この高き處に希望を響き亘らせよ。

耶蘇¹⁶が輝きの極みを三人に示し給ふた時

汝が毎にこれを代表してゐたのを汝は知る¹⁵」。

「頭を擧げ、心を確かにせよ

蓋し人間世界より此處¹⁷に登り來る者は

我等の光線のうちに熟せしめらるべきである」。

この勸¹⁸が第二の火¹⁶より私に來た。

そこで過度の重さゆゑに曩に眼を

垂れしめた山¹³へと私は眼を擧げた。

四〇 「死する前に恩寵により深秘の宮殿にて

その伯爵¹⁹達に面することを

我等の『皇帝¹⁹』が汝に許し給ふたのは

この宮居の眞相を見、かくて

13 天の宮居。

14 雅各書のこと。特に同書一の五及び一七。

15 彼得と雅各と約翰とはヤイロの娘の誕生（馬可傳五の二一―四三）基督の變貌（馬太傳一七の一―八）ゲツセマネの園の基督の祈禱（同、二六の三六―四六）等に彼に伴ひ居れり。彼得は信仰を、雅各は希望を約翰は愛を常に代表したりき。

16 雅各。

17 過度の光の壓迫。

18 彼得と雅各。「われ山に向かひて目を擧ぐわが扶けは何處より來たるや」詩篇一二一の二。

19 基督。基督は皇帝、使徒は男爵たり伯爵たり。

基督が殘し給ふた者が出たこの圈より

一つの光がわれらの方へ進んで來た。

するとわが貴女は喜悅に充ちて云つた

「看よ、看よ、かの男爵を見よパロネ

下界ガリツィアまうで詣は彼あればこそである」。

鳩が近く伴侶ともの傍に飛びおり

二〇 めぐりつ鳴きつあのく

あのが愛情を他のものに示すやうに

ひとりの榮光の偉大なる公が

天上にて己をもてなす糧かてを

稱へる者等に迎へられるのを私は見た。

しかし挨拶が濟むや *coram me* ¹²

いづれも沈黙して立ち止まり

その炎々たる姿がわが顔を壓倒した。

すると微笑ほゑみつゝベアトリチエは云つた

11 雅各。彼は西班牙のガリツィアのコムポステルレアに葬られたりと信じられ、多くの巡禮者を引き寄せたりき。「新生」四一。「男爵」に就ては前曲の一一五註を見よ。

12 「わが前に」。此外にも一見不必要と思はるゝ處にダントは拉甸句を挿入せり 理由不明。

悦ばしたことの如何許りなるかを

六〇 傳へ得るやう、汝の訊ねた他の二點は²⁸

彼に妾^{わなし}は委ねる。これ彼にとりて難事でも

自慢でもない。彼をして此に答へしめよ。

願くは神の恩寵此を彼に容し給はんことを」。

恰も熟練せることには勇み

立ちて悦び、あのが技倆を

示さんとして師に應ずる弟子のやうに

私は云つた「希望とは神の恩寵が生じ

而して^{しか}功德にいや^{まさ}優る未來の

榮光に對する確乎たる期待である。²⁹

七〇 この光は多くの星より私に來たが

然し至高の導者の至高の歌人たりし彼が³⁰

まづ此をわが心に注いだ。

『汝の名を知るものをして汝を

28 「希望とは何ぞや」及び「希望は何處より來たりしや」の二問。

29 これ J. H. トム・ロバート (1861-1928) の

Liber Sententiarum II, 26 なる *Est enim spes*

certa expectatio futurae beatitudinis, veniens ex

Dei gratia et ex meritis praecedentibus の翻譯なり。

羅馬教會の希望とは主觀的に希望に充つる心を

指すに非ずして、客觀的に天上の祉福に對する特種

の希望を謂ふ。

30 ダギデ。

愛を良さに導く『希望』を汝自身

あよび他の人々に固がらしめん爲である。²⁰

されば希望とは何ぞや、汝の心が此により

如何に花咲きしかを語り、また何處より此が

汝に來たかを語れ²¹。かく第二の光が尙も續けた。

そしてわが翅の羽を導いて斯く高く

五 翔らしめた彼の憐み深きものが

先んじて次のごとく答へた

「われら凡ての軍勢を照らす『太陽』に

記される如く、この者に優つて希望を抱く

いかなる子をも戦闘の教會は有してゐない。²⁴

そこで定められた軍務の終はる前に²⁵

埃及よりヂエルサレムを見に

來ることが彼に容された²⁶。

知らんが爲にあらず、この徳が汝を

20 ダンテ三界遍歴の目的は自らを救ひ併せて己が見聞せしことを記して世人を救はんがためなりき。

21 前曲五二、八五、九一に出づる三質問。ベアトウリチエはダンテに代りて第二問に答へ、他の二問はダンテに答へしむ。

22 ベアトウリチエ。

23 神。二四の四二。二六の一〇六。

24 *L. Chiesa Militante*、地上の教會。

25 死する前。

26 猶太人が多年苦惱の埃及を出て、バレスティナに入りし如く、ダンテは今罪惡の束縛を脱して天國に入るを得たり。煉、二の四六。

27 一七の一〇一二。

掲げてこれを私に指し示した。³⁶

九〇 神がおのが友とし給ふた魂につき

いづれも故郷にて二重の衣を³⁸

着せしめらると以賽亞は云つたが

故郷とはこの甘美な生涯を云ふ。

また汝の兄弟は白衣のことを

叙する處にて更に一層詳しく

この啓示を我等に示してゐる」。

此等の言葉の終り間際に先づ

Spent in te が我等の上に聞こえ

合唱隊が一齊にこれに答へた。

100 やがて其中の一つの光が甚く輝いた。

もし巨蟹宮に斯かる晶光あらんか

冬の一月はたゞ一日となるであらう。⁴³

また悦べる處女が立ちあがり、行きて

36 意味明かならざるも、聖書は我等の望むべきものを

表象的言辭を用ゐて示すとならん。以下ダンテは其

二例を擧ぐ。

37 「彼(アブラハム)は神の友と呼ばれたり」雅各書二の二三。

38 復活後の靈と躰と。

39 以賽亞書六一の三、一〇。

40 約翰黙示録七の九「諸國諸族諸民諸音の中より誰も

數へ盡すこと能はざる程の多くの人白衣を着手に椶

櫚の葉をもち寶位と羔の前に來たりて立てり」でダン

テの希望の内容は靈魂の「不滅と肉體の復活に在り

き。一四の六一—六。

41 「なんちに依り頼まん」詩篇九の一〇。七四行註を見よ。

42 聖約翰。

43 初冬の頃夕暮に昇る巨蟹宮が此光の如く輝く星を有せんか、夜も晝の如く照り輝き、一月は謂はゞ連續せる晝とならん。

望ましめよ』と彼はその神歌の中に云ふ。

又我信仰を抱きながら此を知らぬ人が何處にあらうぞ。

後なんぢは書翰により彼の滴りを

私に滴らしたので、私は満たされて

汝の雨をまた他の人々に注ぐ」。

私が語つてゐた間、一閃光が

その燃焼の炎々たる胸のうちに

恰も電光の如く急激に顫ふてゐた。

やがてそれは息吹を吐いた「俺に従ひ

機欄を獲て野を立ちいづる時まで

及びし徳に對し今尙俺を燃えしめる愛が

これを悦ぶ汝に向かひ俺の再び息吹せんことを

欲する。そして希望が汝に約束したものを

なんぢが語ること、これわが願ひである」。

そこで私は「新舊の聖經が記標を

31 詩篇九の一〇。邦譯「聖名を識る者はなんぢに依り頼まん」。拉甸譯 *spereant in te qui n re-unt nomen tuum.*

32 ダビデの教訓と結びて。雅各書には直接希望に就て述べし處なきも全書此精神に充つ。一例を擧ぐれば五の八「汝等も忍べ汝等の心を堅うせよ蓋主の來たり給ふこと近づけばなり」。

33 殉教と死。傳説によれば雅各はヘロデ・アグリッパの治下に殉教して死せりと。

34 希望。

35 凡ての「神の友」の標的なる天國。雅各書一の一二。

努めて眺め、見るうちに

一三 眩む人のやうに、最後に來た

火に對して私が眩んでゐる時

「こゝに有らぬものを見やうとして」⁴⁹

何ゆゑに汝自ら眩むぞ。

わが肉體は地上にて土となつてゐる。

そして我等の數が永遠の目算に適ふまで

それは他の肉體と共に彼處にあるであらう。

祝福まれし集團のうちに二つの衣を纏ふは

たと昇天せし二つの光のみである。

此事を汝の世界に齎らし歸れ」の言葉を聞いた。

一三〇 この聲を聞き、焰の廻轉は

鎮まり、三重の息吹の響きは⁵³

甘美に融けあひ、その狀

宛ら今まで水を掻きし權が

49 約翰傳二一の二二、三の言葉に基づきて約翰の死は

外面的にして實は肉體を携へて天に擧げられたりと
の傳説生じたりき。今ダシテは此事の眞なりや否や
を確めんとて眼を注ぎしため眩みしなり。

50 選ばるゝ者の豫定の數滿つる迄。約翰默示錄六の一
一。

51 肉體と靈魂。九一行註を見よ。

52 肉體と靈魂とを携へて昇天せしは耶蘇とマリヤの
み。エノクとエリアは昇天せしも、それは天に非
ず、地上樂園になりと當時一般に信ぜられき。

53 三使徒の聲。

舞踏に加はるが、これは全く新婦の

譽のためにて、はしたなき心からではな⁴⁴。

その如く燦爛たる灼きが來て

燃ゆる愛のまに／＼輪をなして

廻つてゐた二人に加はるを私は見た。

やがてそれは歌にまた節に自らを合はせ

わが貴女は恰も黙して動かぬ

新婦のごとく彼等の上を眺めてゐた。

「これ我等の『塘鵝』の胸に臥した者⁴⁷

また選ばれて十字架上より

大なる務を受けた者である」。

斯くわが貴女が云つた。然し言葉を

發した前と同じく依然として彼女は

眼を凝視して放さなかつた。

少しく蝕けた太陽を見やうと

44 虛榮心又は浮きたる心よりに非ず。

45 彼得と雅各。

46 基督。此鳥は自らの血にて雛を生きかへらしむと云ふ傳説に據れり。アクサナスの有名な聖餐歌に

‘Pie Pelicane, Jesu Domine’, といふ句あり。

47 約翰。イエスの愛する一人の弟子イエスの胸に倚りてありしが」約翰傳一三の二三。

48 基督十字架より約翰に向かひマリヤを指して「これ汝の母なり」と云へり。約翰傳一九の二七。

第二十六曲

眼が眩んだので惑つてゐた時

これを眩ました灼く燐より¹

一息が發し、私の氣を引き立て、

云つた「俺を見て眩んだ眼の

感覺を回復するまで、宜しく

償として談しあふべきである²

まづ汝の魂が何處へ集注されたかを

語り始めよ。また眼が汝のうちに

惑亂したのみで死滅しないことを悟れ。

一〇 蓋しこの聖域を通じて汝を導く貴女は

アナニアの手にありし力を

その一瞥のうちに有つてゐる」。

私は云つた「わが永久に燃ゆる火を携へて

聖約翰眩暈せるダンテに愛に就て試問す。これに答へ終るや甘美なる聖歌天に響き亘り、ダンテの視力回復す。忽ちアダムの靈現れて己が身のこと及び原始人類の狀態に就きて種々なる疑問を解く。

1 聖約翰。

2 彼得が信仰、雅各が希望に就て試問せし如く、約翰は愛に就てダンテに訊問す。信仰及び希望に就ての試問の順序は第一に其性質、第二に汝此を所有するや、第三に何處より此を得しやなりき。然し愛に就ては此順序を踏まず。蓋しダンテの道德説に據れば一切の行爲の基礎は愛にして、これは自明の事實なりき。従つて定義する用もなく又普遍的のものなる故此を所有するやとも訊る要なきものなりき。依りて聖約翰は愛に就ては様式を變へて（一）愛の窮極的對象は何ぞや、（二）如何にして此を獲せしや、（三）如何にして此を確定せしやと訊ぬ。ダンテは（一）に對しては神なりと云ひ、（二）に對しては哲學と天啓より獲たりと答へ、（三）に對しては善は善なる故に人の願望を喚起す、然るに神は善の窮極なるが故に愛の本來の對象たりと稱す。

3 *div. region.* 或は、輝く國（一四）三四、二三（一〇）七。

4 視力回復の力。アナニアは使徒保羅の視力を回復せり。使徒行傳九の一——八。

疲勞または危險を避けんとて

笛の音に一齊に止まるやうであつた。

あゝ福ひなる世界にあつて而も

その近くにゐた私がベアトウリチエを

見んとして振り返り、そして彼女を

見るを得なかつた時、⁵⁴私はいかに心惑ふたかよ。

54 聖約翰の極度の光に眩暈してなり。

斯く愛を燃やし、また自ら善を

三 包容すること多きに從つて燃える。⁹

されば凡そこの論證の基なる

眞理¹⁰を辨へる者の心は

他のものに對するにも優つて

かの已れ以外にある一切の善は

あの光線の輝きに過ぎずと云ふ卓絶せる

本質に向かひ此を愛して進むべきである。

これ無窮の凡ゆる本體¹¹の

原愛¹²を¹³示す者が

わが智性に説き明かした眞理である。

四 己れのことを語つて『われ諸の力を

汝に見せしめん¹⁴』とモイゼに云ひ給ひし

眞實¹⁵な『著者¹⁶』の聲がこれを明らかにする。

汝もまた此を私に明らかにし¹⁶

9 三十八行註。一四の四〇以下。二八の一〇六一一
一。

10 神が至高の善なりと云ふことは、神が愛の至高の對
象なりと云ふ論證の基礎眞理なり。凡そ善なるもの
は愛の心を起して自らを慕はしむ。善いよく大
にして愛いよく深し。神は至高の善なれば從つて
愛の至上の對象たり。

11 天使。

12 *primo amore*。

13 アリストテレス。永劫にして不動の第一原因は己を
慕ふ心により不朽の本體即ち諸天を運行せしむと彼
は教へたり(形而上學Ⅱ、八)。二四の一三〇。ダン
テは此所説を天使に及ぼせり。

14 出埃及及記三二の一九。ダンテは拉甸譯聖書の本文
ego ostendam omne bonum tibi に據る。

15 神。

16 約翰第一書四の一六。約翰傳一の一—五。約翰默示
錄一の八等。

彼女の入りし門であつた眼に速かれ遅かれ
彼女の意のまゝに醫療を來たらしめよ。

この宮居を充ち足らす『善』こそ

『愛』が或は軽く或は強く私に讀み聞かす

一功の經典のアルファでありオメガである。』
違な眩暈ゆゑの恐れを私より除さし

二 その同じ聲が、尙も私を促し語らしめて

云つた「げに汝は更に目の

細き篩にてふるはるべきである。

何が汝の弓を斯かる標的に

向けしめたかを語らねばならぬ。』

そこで私は「哲學的論議により

また此處より降る權威により

斯かる愛が私に印銘されでは措かれず。

蓋し善が善たる以上、その理解さるゝ限り

5 ベアトウリチエに對する愛は先づ眼よりダンテに入
れり。

6 「主たる神云ひ給へり我はアルバなりオメガなり始
なり終なり今あり昔あり後ある全能の者なり」約翰
默示錄一の八。或は此句を「凡て經典が或は軽く或
は強く私に讀み聞かす『愛』のアルファでありオメガ
である」とも譯すべし。「或は軽く或は強く」を「理
性と天啓」の意なりとする人あり(フィラレデス)。

7 第二問「如何にして愛を獲しや」

8 天より靈感を受けて記されし聖書。

我を活かさうとして彼の受け給ふた死²¹

また私と同じく凡ての信ずる者の望むものが

前に云へる活ける自覺²²に結び

曲²³がれる愛の海より引き出だして

正しき愛の岸邊に私を置いた。

永遠の園守の花園に亘く

茂る葉を、これに注がるゝ

神の恵みに準じて私は愛する²⁴。

私が沈黙するや否や、いとも甘美な歌が

天に響きわたり、他の者等と共にわが貴女は

云つた「聖なる、聖なる、聖なるかな」²⁵

さ 鋭い光を受けるや、膜より

膜へと進む輝きに逆つて

走るため、睡眠が破れ

かくて醒めながら人はその俄かな

21 基督の贖罪的死。

22 「神は至高の善なり、故に愛の至高対象なり」との自覺。三十二行註を見よ。

23 煉、一七の一〇〇。

24 花園は世界にして葉は被造物を指す。神の恩寵に浴する度に準じて萬象を愛すとダンテは云ふ。

25 約翰默示錄四の八。以賽亞書六の三。三神徳に對する質問の答了を祝して斯く歌へるなり。二四の一一三。二五の九九。

26 膜より膜へと通過する光に遇はんとて視神經は外に馳せゆく。當時の生理學に據れば感覺と運動とは夫々 spirit (靈) によりて起こると考へられき。「新生」三及び一四を見よ。この思想はアリストテレスの *psyche aisthetos* 或は *epithetos* (注ぎ入れられし諸靈) より展開せられしものと見ゆ。

かの高き頌歌を始めて、この處の奧義を

下界に叫ぶこと、他の一切の布告に優る」。

そこで私は聞いた「人の智性により

また此に添ふ權威により¹⁷

汝の至高の愛が神を觀る。

さて進んで汝を神に引く他の網を

五〇 感ずるや否やを述べ、かくて此愛が

幾個の齒にて汝を嚙むかを告白せよ」¹⁸。

基督の驚の聖志は隠されず¹⁹

却つて私に如何なる誓約を

倣させやうと欲ふかを私は識つた。²⁰

そこで私は再び始めた「心を嚙んで

神に向けしめ得るものが皆

一齊にわが愛に起こつた。

即ち世界の存在と我の存在と²⁰

17 哲學的論議と聖書の權威とにより。

18 第三問「理性と天啓との外に何ものが汝の愛の神に向けしめしや」。

19 聖約翰の表象。神の奧義に對する彼の高邁なる直觀力を示すものなり。約翰默示錄四の七。煉、二九の一〇二註。

20 天地の創造と人類の創造。

愕然としてゐたが、やがて語らんと

ち願望に再び燃やされ力づけられて

私は始めた「あゝ汝熟して生ぜし

唯一の果よ、あゝ新婦は

みな娘たり嫁たる古の父よ

私に語るやう、力のかぎり度しく

汝に祈る。汝はわが意を識る。

されば直ちに汝に聴く爲私は此を語らず」。

往々物を被つた動物が搔悶さ

あり／＼と包みに見える運動により

おのが意を現さざるを得ない。

100 これと同じく最初の魂は、いかに

私を楽しませんとて悦んで來たかを

蔽ひを通して私に明らかにした。

やがて此が息吹きした「汝が俺に打ち明けなくも

29 アダムは幼年少年時代を経ずして直ちに壯年の人間

として造られき。アダムは造られし時三十歳乃至三十歳なりきと信じられき。

30 他に人間あらざりし故アダムの息子と娘とは互に結婚せりと考へざるべからず。

31 一七の一二九と同じく天國篇には適はしからずと見

ゆる一見野卑なる引例。

32 アダム。

覺醒の譯を全く知らず、判斷が彼を扶けるまで見廻して怯ぢをのゝく。

その如くベアトウリチエは一千哩^{ミリア}以上も灼くその眼の光線にて

私の眼より埃を悉く逐ひ除け

私は前よりも能く見えるやうになつた。

〇〇 そこで昏迷せる者のやうに私は

我等と共にるを見た第四の光の²⁷ことを訊ねた。

するとわが貴女は「この光線のうちには

『原力』²⁸の嘗て創造し給ふた最初の

魂が造主を慕ひ喘いでゐる」。

風が過ぎるや簇葉は

頂^{ぐたじき}を垂れ、やがて高める己が

力によつて自らを起こすやうに

彼女が語つてゐた間私は

27 アダム。

28 *prima virtus* 神。

俺は太陽の四千三百二の廻轉の間³⁹

二二〇 この集團に加はることを俟つてゐた。

また地上にゐた間に太陽が

その途の凡ゆる光⁴⁰に

九百三十回歸つたのを俺は見た。

俺が語つた言語は、ネムプロットの民が

成し遂げがたき事業を企てし

長き以前に全く消え失せた。⁴²

蓋し理性の業が永久に存へた

例がない。⁴³これ人間の氣心が

天のまにまに更なるに據る⁴⁴

二二一 人の物云ふは自然の業である。

然しそれ以上斯く斯くにと云ふ方法は

佳しと思ふまゝに汝等の做すに委す。

俺が地獄の苦惱に降つた前

39 四千三百〇二年。これは天地創造より基督の十字架

迄が五千二百三十二年なりきとの計算に基づく。ア

ダムは地上に九百三十年生存せりと云はるゝ故に

(創世記の五の五)地獄に止まりし期間は此を差引き

て四千三百〇二年となるなり。

40 獸帯を通じてその軌道を過ぎ。

41 バベルの塔。創世記第十一章。ネムプロット(ニムロ

デ)はクシの子にして力ある獵夫なりき(創世記一

〇の八以下)。彼は一般にバベルの塔の建設者なりと

想像されき。地、三一の七七。煉、一二の三五。

42 ダンテは「俗語論」一の六にアダムは希伯來語を用ゐ

たりとせり。然るに何等かの理由に據りて此を誤り

とし茲に記さるゝ見解を採るに至りしものか。煉、

一八の五五以下に出づる道德の起原に關るダンテの

所説と對照せよ。

43 一六の七九。

44 人智の産物たる言語は、諸天の感化に依り絶えず變

化する人間の意のまゝに變はる。

汝の意を俺が見分けることは

最も確かなことを汝が見分けるのにも優る。

蓋し自ら一切萬象の反射となりながら

何ものをも己が反射たらしめざる

眞の『鏡』のうちに此を俺は見る。

彼女が汝をいかにも長さ階に

二〇 向かはしめた彼の尊き花園に

神が俺を置き給ふて以來幾干になるか。

また何日までこれが俺の眼に喜悅となつたか。

大なる忿怒の本來の原因、また俺が自ら作つて

用ゐた言語のことを汝は知らうと願ふ。

わが子よ、かくも大なる追放の原因と

なつたのは、樹の果を味つた其事でなく

たゞ制限を超えたと云ふことであつた。

なんぢの貴女がヰルヂリオを出だした處にて

33 puregio. 「一對」又は「一組」等の意なり。

34 恰も鏡に物の反映する如く神のうちに萬象が反映す。然し萬象は神の像を斯くは反映せず。二の四三—五。六の一九—二一。三三の一〇〇—五。

35 地上樂園即ちエデンの園。ダンテは淨罪山の七臺地を過ぎて此樂園に到リベアトリチエに遇ヘリ。

36 アダムは四つの疑問に答ふ。(一)アダムの天國に昇りしより幾年になるや、(二)アダムの地上樂園にありし期間如何、(三)人類に對する神の怒の眞因如何、(四)アダムの用ゐし言語如何。

37 異本、聞かうと (udir)。

38 地獄の邊疆。地、四の五五。

第二十七曲

「父と子と聖靈とに榮光あれ」と

全天國がはじめ

かくて甘美な歌が私を酔はしめた。

わが見しものは宇宙の微笑のやうに

見え、即ち聴くこと見ることにより

酔ひがわが身に浸み入つた。

あゝ喜悅よあゝ云ひ難き歡喜よ

あゝ愛と平安とに完き生命よ

あゝ渴きなき定かなる富よ。

10 わが眼前に四つの燈が

燃えて立ち、最先に來たものが

一際灼き始め、その姿は

宛ら木星が火星とともに

ダンテ天國の榮光に耳目を酔はさる。やがて深き沈黙のうちに聖彼得法王の墮落腐敗を確するや、滿天赫怒し、ベアトウリチエも頬を染む。折柄凱旋の諸靈火の吹雪の如く上昇し、ダンテは諸大と地球とを蹴下す。かくて原動天に入りベアトウリチエ人類の貪慾を慨嘆す。

1 一切の渴望の充たされし諸靈。

2 彼得と雅各と約翰とアダム。

3 彼得。

今俺に纏はる喜悅の源なる『至高善』は

地上にて『』と呼ばれてゐた。⁴⁵

後^{エロ}とと呼ばれたが、さもあるべきである。

蓋し人間の慣ひは散つて

また生へる枝の葉のやうである。

波上いと高く聳ゆる山に、潔うして

而も汚れた生命を抱いて俺がゐたのは

第一時より第六時の次の時刻まで

即ち太陽が四分の一度を變へる間であつた。⁴⁸

45 原始希伯來民族は神を「エロ（ヤハ）」と呼びたりき。

「神のみまへに歌へ……その名をヤハと呼ぶ」詩篇六八の四。

46 「強大」てふ意。ダンテは「エホバ」てふ名を「エロヒム」てふ名よりも遅き時代のもなりと考へしと見ゆ。出埃及記六の三。

47 煉獄淨罪山。

48 第六時とは正午のことなり。即ち太陽が朝（午前六時）より測りて軌道の四分の一を通過せし時なり。アダムの地上樂園の滞在期間は初代神學者の問題の一なりしが、ダンテは茲に此を六時間餘とせり。

また朝に雲を彩る色に

三 滿天がその時漲るを私は見た。

すると自らは常に疚しきところなきも

他人の過^{あやまち}をたゞ聞くだけにて

怯^{おそ}ぢけつく慎^{しん}ましい貴女^{きぢよ}のごとく

ベアトヴリチ^エは貌^{すがた}を變へた。

至高の力が患^{うれ}みたまふた時

天に起こつた蝕^{しょく}も斯くあつたと私は信ずる。

かくて貌^{すがた}の變はつたのに

劣らず變つた聲^{こゑ}して¹⁰

彼の言葉が發して出た

四 「黄金獲得に用ゐられんため

基督^{はなよめ}の新婦^{はなよめ}がわが血またやリノ¹¹

クレト¹²の血に育てられたのではなく

シストやピオ、またカリストやウルバノ¹³が

9 基督が十字架に懸かりし時「晝の十二時より三時に至るまで其地あまねく黒闇となる」馬太傳二七の四五。

10 顔色が白より赤に變ぜし如く聲は柔和より義憤に變ぜり。

11 傳説に依れば彼得に繼いで法王となりしと。提摩太後書四の二一。

12 リノに繼いで法王となり殉教せり。

13 共に信仰に殉ぜし初代法王等。シスト（一一九—一二七）ピオ（一二四〇—五五）、カリスト（一二一七—一二七）ウルバノ（一二二一—一二三〇）。

趨うち交す時の

態にさも似てゐた。

彼處にて役と務とを定める

「攝理」が四邊の祝福まれし

合唱隊に沈黙を課した時

私は聞いた「俺が色を變ずるとも

云 汝怪しむ勿れ。蓋し俺が語るにつれ

此等の者皆も色を變へるを汝は見るであらう。

地上にてわが位を冒すものは

（わが位、神の子のみ前には

空しかるわが位）

わが墳墓を血と穢れの溝となし

斯くてこゝ上方より墮落せる

邪惡者が下界に安如としてゐる。

太陽に面するため、夕に

4 木星が火星の色と混ざる時の如く、聖彼得の白き光が赤くなれり「木星は凡ての星の中恰も銀の如く白し」火星は「その色煙の如し」饗宴篇二の一四。

5 法王位。

6 法王ボニファチオ第八世。賄賂と詐譎によりチエレステイノ第五世（地、三の六〇）を退位せしめて自ら法王となりし爲正當の法王に非ずとなり。但しダンテは此主張を徹底せしめ居らざる處あり（煉、二〇の八六註）。

7 羅馬のプティカノ丘にあり。

8 魔王ルチフェロ。地獄篇第三十四曲を見よ。

グロスコニア人とは備へをした。あゝ善き初よ

何たる惡しき終りに汝は陥るべかりしぞ。

然しスシビオネにより防ぎて羅馬のため

世界の榮光を保たしめし高き『攝理』は

方に俺の思ふごとく速かに救ひ給ふであらう。

そこで汝人間の重量により再び

下界に歸る子よ、汝の口を開き

俺が隠さなかつたことを隠す勿れ。

天の「牝山羊」の角が太陽に觸れる時

われらの空氣は片々として

水蒸氣を降らす。

さ 宛らその如く精氣が飾られ

既にそこに我等と宿を共にせし

凱旋者達の蒸發氣を息吹き上げるを私は見た

私の眺は彼等の姿を追ひ

21 佛蘭西の西南隅のグロスコニア(地、一九の八四)に生

まれし法王クレメンテ第五世(一三〇五—一四年)。

彼は法王廳を羅馬よりアヂニオンに遷せり。又佛蘭

西のフィリップ美王と結托し「シモニア」を行へり

(地、一九の八四)。

22 スシビオネはアンニバレ(ハンニバル)を撃攘したり

き。六の五二。

23 肉體の重量。

24 一七の一二四以下。

25 魔羯宮に太陽が入る時、即ち眞冬(十二月と一月に亘りて)。

26 雪を降らす。

27 煉、一一の六。

28 冬紛々として雪の降る如く、今凱旋の諸靈は煙の片々の如く天上へと昇り行く。二二の一三〇。

多くの哭きの後にその血を注いだのは
この喜悅の生命を獲んためであつた。

基督を信ずる人民の一部が

我等の後繼者等の右手で坐し、一部分が
左手に坐するは我等の志であかつた。

また俺に委ねられた雙鍵が

洗禮を受けし人々に對して戰ふ

旗の紋章にならうとは思はず。

賣買される虚偽の特典の印形に

俺が用ゐられやうとは考へなかつた。

そこで俺は屢煨けて火花を發する。

牧羊者の衣を着けた掠奪の狼どもが

あらゆる牧場にゐるのが此處天上から見える。

あゝ神の防禦よ、何ぞ徒らに臥すぞ。

我等の血を潑らうとしてカオルサ人

14 デエルファイ黨(法王派)とギベルリニ黨(皇帝派)の軋轢を指す。

15 法王の紋章は二個の鍵なりき。此句は恐らくコロナ家に對する法王ボニファチオ第八世の挑戦を指せるものならん。地、二七の八五—九〇。

16 赦罪券に彼得の頭が印せらる。

17 「偽りの預言者を愼めよ彼等は綿羊の姿にて汝等に來たれども内ば荒き狼なり」馬太傳七の一五。

18 「主よ醒め給へ如何なれば眠りたまふや起きたまへ」詩篇四四の二三。

19 教會の生命。

20 法王デオワンニ第二十二世(一二三—一六—三四)。南方佛蘭西にありて高利に名高きカオルサ(地、一一の五〇)の人。此句は神曲の此部分の書かれし年代を示す。

わが戀ひ慕ふ心は、わが眼を彼女に
歸らしめんとて常よりも強く燃えた。

人の心を捉へんため、自然或は

藝術が人體またはその繪畫により³⁸

眼を惹く餌をつくるが

その凡てを一緒にしても、身を彼女の

微笑む顔に向けた時、私を照らした

聖き快樂に比べては無に等しく見えやう、

斯くてこの仰望の私に恵んだ力は

レダの美しき巢より私を引き放し³⁹

最も迅き天へと追ひ立てた、

100 到る處が一樣に輝き儼かであつたので

わがため何處をベアトワリチエが

選んだのか私は語り得ない、

然しわが願望を見た彼女は

38 煉、三一の五〇、五一。

39 スバルタ王ティダレオの妻。デオゴ彼女を戀ひして

白鳥の形となりて來たり遂に二個の卵を生ましむ。

その一つよりエレナ（地、五の六四）生まれ、他の一

つよりカストレとポルルチエの双兒生まれ雙女宮と

なれり。

40 雙女宮。

41 原動天。

42 此天の何れの部分にゐるかを。

追ふて間が廣くなり、その上

前に過ぎ行く力を奪はるゝ迄に至つた。²⁹

すると貴女は私が仰望を止めたのを

見て私に云つた「眺め下ろして

なんぢの經た廻轉のほどを見よ」。

曩に見た時以來、私が

ハ 第一「クリマ」の半より端に當たる弧を

全く運行してゐたのを見た。

即ちガデの彼方にウリッセの

狂亂の船路を、近く此方にはエウロバが

樂しき荷となる海岸を私は見た。

もし太陽が一宮あまり過ぎて

わが足の下に進んでゐなかつたならば

此小き打殻庭の位地が尙廣く私に示されたであらう。³⁰

わが貴女と絶えず思ひ交はせし

29 三〇の一二一三、三一の七八と對照せよ。

30 二二の一二七以下。

31 clima. 古代地理學者は地球を赤道に平行して七つ

の地帶に分ち此を「クリマ」と稱したりき。第一

「クリマ」は赤道より北方二十度に及ぶ。恒星天をめぐりて今ダントのある雙女宮は方に此第一「クリマ」に相應す。而してダントは二二の一二七以下より今に至る迄第一「クリマ」の幅の半を過ぎたりと云ふ。

二「クリマ」の幅は百八十度なれば其半は九十度即ちエルサレムよりガデに到る距離に等し。九十度を経過するに六時間を要す。

32 現今の Cadix 西班牙西南岸の海港。

33 當時人類の住める地の極西とせられしデアラタルの海峡。ウリッセ此海峡を過ぎて大西洋に出て雄破せり。地、二六の八五以下。

34 フェニチアの海岸。デオエはカドゥモの姉妹エウロバを戀ひし自ら牡牛の形となりて背上に彼女を誘ひ乗せ、泳ぎてクレタ島に渡り、ミノス其他の子等を生ませたり。

35 地球。

36 太陽は金牛宮を距て、白羊宮にあり。即ち約三時間西方に進み居れり。故に雙女宮より見ゆべき北半球の東端は太陽の光に照られずして暗し。

37 「思ひ交はした」の原語 *donnes* に就ては二四の一八註を見よ。

葉を他の花鉢のうちに茂らす譯が

一二〇 いま汝に示されるであらう。

あゝ汝の下に人類を沈め

かくて何人をも汝の波浪の上に

眼を挙げ得ざらしむる貪慾よ。

意志は人々のうちに良く花咲くが

然し小止なき雨が眞の洋季を

變へて硬實にする。

信仰と無垢とは只小兒のうちに

見られるが、やがて頬の蔽はれぬ間に

いづれも失せ去つてしまふ。

一三〇 或る者は片言を云ふ間斷食するが

後その舌が弛められる時

いづれの月にも凡ゆる食物を貪り食らふ。

また或る者は片言を云ふ間、おのが母を

48 眼に見ゆる運行。

49 諸天。

50 ダンテは貪慾 (cupidity) を制御せられざる慾望と

觀じ、此を政治的社會的害惡の根元とせり。

51 bezzacchione. 氣候又は害虫の爲に腐爛せし李。

b. zza は腫瘍。

52 頬に髯の生える前に、即ち壯年に成らざる前に。

53 幼年時代。

大齋等の斷食精進の日にも。

神もその顔に悦びたまふほど

いたく嬉しげに微笑しつゝ始めた

「中心を鎮め、斯くてその周圍に

凡てのものを動かす宇宙の性は

こゝを其極として始まる。

またこの天は、此をめぐらす愛と

110 此が雨降らす力との燃ゆる

神意のほかに『處』を有たず。

光と愛とが此を一環に包むこと

なほ此ものが他の諸環を包むが如し。

斯くて此を繞る者のみ此境の慧智たり給ふ。

その運行は他のものに劃されず

他のものが此によつて測らるゝこと

十の半または五分の一に於けるが如し。

時がその根をこの花鉢のうちに下ろし

43 natura. 茲にては自然力と云ふ程の意味。宇宙に固有せる性能。此によりて其中心(天動説に基づきて)

たる地球が動き、諸天廻轉す。此力は原動天に起因す。原動天は空間に超越して只神の愛と光とに充滿す。

44 天使的慧智は諸天の原動力たるも、原動天を取繞る清火天のみは直接神自身に支配さる。

45 神。

46 諸天中運行最も迅速なる原動天によりて諸天の時が測らるゝこと、恰も二と五の十に於けるが如し。

47 原動天。

第二十八曲

わが心を天國とせし彼女が^{かのぢよが}

淺間しき人間の現世に關はる^{うつしよ}

實相をうち擲げた時¹

宛ら前に見もし

思ひもしなかつた燭の焰が^{ともしが}

後より鏡に寫つるを見^{うしろ}

硝子が眞を語るや否やを知らうとして^{まこと}

振り返り、譜のその節に合ふごとく^{ふし}

これに合ふのを見るやうに

一〇 愛が私を捕へる紐とした美しい眼を²

眺めてゐるうちに、斯く私が

振返つたことをわが記憶が想ひ起こす³

私が振向き、その廻轉を胸むる際^き

ベアトリチエの眼に煌々たる光の反射せるを見、振向きてダンテは
鋭き光を放つ一の點を見て眩暈す。やがて九段なす天使の階級が此點
を中心に火花を發しオザンナを唱へつゝ廻轉す。ベアトリチエ即ちア
リストテレスとアクリサスの説に基きて天使の種類の方に就て語る。

1 前曲一二一行以下。

2 煉、三一の一七。

3 神より發する光を恰も鏡の如くに反映せるベアトリチエの眼を眺めをるうちに反射の本源たる光そのものにダンテは振向けり。

愛してその言^{ことば}を聴くも、後言葉が完くなる時

彼女の葬らるゝを見んことを願ふ。

かくて朝^{あした}を齎^{ゆよべ}らし夕を貽^{おこ}すものゝ⁵⁵

美しい娘の肌は一見白く

見えるが、黒くなつて来る。

このことを怪しまぬため、地上に

二四 支配する者なきを汝^{みづか}おもへ。⁵⁷

かくて人類が斯く迷ひ行くのである。

然し下界にて忽^{ゆるがせ}にせられる百分の一により⁵⁸

一月^{いちげつ}が全く冬を越す前に

天上の此等の環^{くわん}が轟^{とどろ}き

長く俟たれし嵐^{あき}が舩^{ふね}の

ある處に艦^とを廻し

かくて艦隊は眞直^{ますぐ}に航し

眞^{まこと}の果^みが花に繼^{つぎ}ぎ来るであらう。⁵⁹

55 太陽。hēlios hēliaton hēliō kai hēlios
(人と太陽とが人を生む) アリストテレス「物理學」II
の二。天、二二の二六。

56 恐らくは「人性」の意ならん。人の性質は幼年時代には善良なるも年の進むにつれて墮落しゆく。煉、二の八、九。

57 法王位は神の前には事實空虚であり(二十三行)、伊太利亞は又皇帝を缺く。斯く教會と國家の慘狀を思へば人民の迷ひ行くは怪しむに足らざるべし。煉、一六の九七以下。

58 古代デウリアノ曆は一年を 365 $\frac{1}{4}$ 日とし四年毎に閏年を配置せしが、斯くては一世紀毎に約一日即ち一年に約十二分を過算することとなる。此がダンテ時代に十日餘と成りゐたり。此が積り積りて遂に一月が春に來るやうに成らぬ前と云ふは「數千年過ぎざる前に」即ち「遠からず」の意なり。此誤差はダンテの死後二世紀半を経て一五八二年グレゴリオ曆にて訂正されたり。

59 帝國を救ひ教會を清むる偉人。地、一の一〇七参照。

三〇 次に第三は第四のものに、第五のものに

第四、次で第六に第五が取巻かれてゐた。

その上に第七のものが續き、既に

その擴がれる大いさは、ヂウノネの

使者の全身も此を容るゝに狭くあらう。

かくて次第に單位¹³を距つるに従つて

運動が緩漫になつた。¹⁴

また「純なる閃光」を距つること

いと小さなものが最も煌々たる焰を發してゐた。

はその「眞理」を體すること多きに據ると私は信ずる。

四〇

私のいたく思ひ惑ふを見て

わが貴女は云つた「この點に

天と一切の自然が懸かる。¹⁵

これに最も密着せる環¹⁶を見

そして愛に燃やされ貫かれるので

12 イリ。虹のこと。一二の10。煉、二一の五1。

13 十六行の「一の點」。

14 諸天は地球を距つるに従ひて廻轉緩かなり、然るに
清火天に在りては此に反して神に近きものほど廻轉
速かなり。

15 *ἐκ τοιαύτης ἀπο ἀρχῆς ἡστῆται ὁ οὐρανὸς
καὶ ἡ φύσις* (即ち斯かる本源より天と自然とが
懸かる)「アリストテレス」『形而上學』λ、七〇。

16 環狀にめぐるセラフィニ。

常にこの圈⁴のうちに見るもの⁵に
わが眼が觸れた時

鋭い光を放つ一の點⁶を私は見たが
これに燃やされては眼も

その強烈さに閉ぢねばならなかつた。

また此處⁷より見ゆる極微の星も

二 星と星とが相駢ぶやうに此點の

側^{かたはら}に置かれんか、月程に見えるであらう。

支へる水蒸氣がいと濃き時

暈^{かき}があのれを彩る光の近くに

帯となるやうに見えるが。

凡そこれ程の距離^{（たしり）}を置いて火の環^わが

この「點」の周圍^{（まわり）}を廻り、迅きこと世界を

速かに巻くかの運行¹⁰にも優つてゐた。

また此は第二のものに、第二は第三のものに¹¹

4 volume. 此語は神曲中に九回使用さる。其中六回

は單に卷物の意なるが、他の三回即ち天、二六の一
一九にては「廻轉」、同じく二三の一・一二にては「廻
轉する諸天」を意味せり。茲にては原動天のこと。

5 原動天を包む光と愛。

6 單一不可分の神の榮光。

κετα εἶναι τῆς οὐαί, ἀλλ' ἀνεργὸς καὶ
ἀδύνατος εἶναι. (神には大いき有り得ず、而し
て部分もなく、不可分たり) アリストテレス「形而
上學」入、七。

7 地上。

8 暈^{かき}が太陽や月に照る如く。一〇の六七・九。

9 天使セラフィニ。

10 原動天。

11 以下天使の九階級を述ぶ。その諸天との對應に就て
は一〇一行註を見よ。



その運動の斯くも速かなるを知れ」。

そこで私は彼女に「此等の諸輪のうちに

見る順序に世界が排列されてあれば

わが前に置かるゝものを私は會得したであらう。

しかし感覺の世界にあつては

吾¹⁷ 中心を距つること遠きに從つて

廻轉¹⁸は一層神速なるを我等は見る。

そこで只愛と光とを境域とする¹⁹。

この奇しき天使等の殿堂のうちに

わが願望^{わがもひ}が果たさるべくば

更に何ゆる摸寫と雛型²⁰とが

一樣に行かぬかを私は聽かねばならぬ。

蓋し私自ら考ふるも徒らである」。

「たとへ汝の指が斯かる結節^{ちすび}を解くに足らぬとも

怪しむべきでない。試みられなかつたので

17 地球。

18 諸天。三十六行註を見よ。

19 空間のうちに存在せざる。三〇の三八。

20 天使等の階級は模型であり、物質的世界(諸天)は摸寫たり。

六〇 これは斯く堅くなつたのである。」

斯くわが貴女は語り、やがて云つた「汝
會得せんとせば、わが語らることを捉へ
その周圍まわりに汝を鋭く向けよ。

有形の諸環11はその部分全體に亘つて
擴がる能ちからの多少に準じて

或は廣く或は狭くある。

大なる善は必ず大なる祉福さいふを齎もたらす。²²

大なる物體はその諸の部分にして等しく

完からんか、大なる祉福さいふを包つむ。

セ かくて己と共に残りの宇宙全體を

提げ行く此ものは、愛と智の²³

最も大なる環14に對應してゐる。

そこで汝に圓まるに見ゆる諸の本體25の

外觀ではなく、その力の

21 九天。容積の大なるに従ひて力強し、従ひて最も大なる原動天最も神速なり。

22 善は前節の力に照應す。大なる物體は、諸部分にして完全ならんか、小なる物體よりも大なる力を有し、従ひて祉福を降すこと多し。

23 原動天。

24 セラフイニ。天使階級中首位にあるものにして神に最も近く愛することも多し。二六の二八。天使階級と諸天の對應に就ては本曲一〇一行註を見よ。

25 諸天。

煮ゆる鐵の火花を發するに異ならず。

閃光は何れもその燃焼に従ひ

その數夥しくして碁盤の倍加に

優ること方に數千であつた。

彼等を常にありし *Urbi* に保ち

また永久に保つ此定かな「點」に向け

合唱また合唱、オザナの歌聲を私は聞いた。

するとわが心の中にありし訝りの思ひを

見た彼女は云つた「首め二つの環の

汝に示すはセラフィノとケルビノの群である。

100 能ふ限りこの「點」に自らを似せんとて

彼等は繩のうちに斯く速かに追ひかけ

視る力の高めらるゝに従つて能く此をなす。

彼等の周圍を行く他の諸の愛は

聖顔の前の「位」と呼ばれる。

32 一の五九。

33 碁盤の發明者が波斯王より報酬を申出でよと云はれ

し時、碁盤の第一目に麥を一粒置き順次倍加して第

二日に二粒、第三目に四粒、第四目に八粒を置き、

斯くして幾何級數的に第六十四日迄計算せるものを

要求せり。王輕々しく應諾せしが實際計算するに及

び其莫大なる數に驚きたりと。其數は實に二十桁に

及 $30.18\ 446\ 744, 673, 702, 531, 615$ 。天使の無數を

示さんとてダメンテ此例を引けるなり。

34 「處」に定め置かれし處なり。

35 「新生」二三の短詩第五齣五行參照。

36 *Vini*、その屬する圈の軌道に沿ひて。以下ダメンテは

ディオニシオに従ひて天使階級の順序を記す。

セラフィニ (*Seraphini*) 原動天

ケルビニ (*Cheerubini*) 恒星天

位 (*Troni*) 土星天

宰治 (*Dominanzioni*) 木星天

能 (*Virtudi*) 火星天

權威 (*Podestadi*) 太陽天

政 (*Principati*) 金星天

首天使 (*Archangei*) 水星天

天使 (*Angeli*) 月天

37 天使。

38 九の六一參照。

周圍に汝の測定を向けんか²¹

いづれの天にても、大は小に

小は小に、奇しく其慧智に²⁷

應合するを汝は見るであらう」。

ボレア²⁸がいと柔くその頬より

ひひ吹く時、空の半球が

耀いて澄み亘り

斯くて前に此を濁してゐた濛が²⁹

潔め拂はれて、天が隅々

隈々までも美しく和かに微笑む。³⁰

わが貴女がその明かな答へを私に

與へた時、このやうに私はなり

天上の星のごとく眞理が示された。

かくて彼女の言葉が止むや否や

諸の環が火花を散らし、宛ら

20 諸天の内部的(心靈的)性質を考察せんか。

27 天使。物質的諸天の廻轉の大きさは、各これを司る天使の各階級の神に近接する度に比例す。

28 北風のこと。

29 北風が稍東方より吹く時。北東の風は空より雲を拂ふと云はれき。伊太利亞にては北東の風が北西の風より和かなりしと(ボッカッチオ)。

30 ogni sua pirofita, pirofita は piroecchia (教區)の意ならんか。即ちダンテは天堂をフィレンツェの如く多くの教區より成れる都に比せしものならん。

31 天使。

二三 三重なす三團に響き亘らす。

この段階政治に三つの神性がある。

首に宰治、次に能

第三に權威の團である。

かくて終りに先立つ二環の歡舞は

政と首天使等の廻轉である。

最後のものは全く天使等の技より成る。

此等の諸團は悉く上方を眺め

また下方に力を及ぼして一切のものを

神の方に惹き寄せ、また一切が寄り行く。

一三〇 デイオニシオは熱心に此等諸團の

瞑想に身を委ね、彼等を命名し

且つ分類することが私に同じ。

然しグレゴリオは後に彼より離れた。

そこで眼をこの天に開くや

42 *eccelesia*. 神聖なる政即ち股階なす天使の配置を

43 *de*. これは饗宴篇二の五に於てプラトオンの *Idem* (觀念) と同一視さる。茲にては天使のこと。

44 以弗所書一の二〇。哥羅西書一の二六。

45 アレオ山の裁判人デオヌシオ(使徒行傳一七の三四)。彼は保羅の説教によりて改心し雅典の最初の僧正となり七五年頃殉教せりと傳へらる。神の名、象徴的神秘的神學、天使の股階政治に關する著作あるも實際は五、六世紀のネオ・プラトニストの産物なり。ダンテは彼の *De Celesti Hierarchia* に據る。天、一〇の一五—七。

46 但し饗宴篇二の六に出づるものは「位」を第七位、「宰治」を第六位に、「政」を第四位に、「權威」を第三位に置けり。ダンテは後年此説を棄て、デイオニシオに従ひしものと見ゆ。

47 法王グレゴリオ第一世。四五〇年頃羅馬に生まる。法律を學びしが父の死後財産を施し僧院を建て五九〇年法王となり異教と異端とに對して戦ひ六〇四年に死せり。煉、一〇の七五。天、二〇の一〇六—

七。彼の *Homilies* (以西結書講解) には「政」と「能」との位置を轉換し、*Moralia* (約百記講解) に出づるものはダンテの饗宴篇に記さるゝものに同じ。

これ彼等が第一の三級の終りなるに據る。

また一切の智の靜安處たる『眞理』³⁹に

その眼光を徹せしむる度に準じて

凡てのものが喜悅するを汝は知らねばならぬ。

そこで祉福^{めふみ}を受くるは見る業^{わざ}に

二〇 據りて、後に繼ぐ愛の業^{わざ}に

據らざることが分かる。⁴⁰

また恩寵と恩澤とを齎らす

功德は、この仰望^{ぎやうぼう}の度に據る。

斯くて段一段の開展がある。

夜な夜な白羊宮の奪ひ去らぬ

この常春^{とこはる}のうちに同じ狀^{さま}に

芽ぐむ次の三級は

三つの施律^{メロゾイア}にあはせて永久^{とこしへ}に

オザンナを冬知らず顔に喜悅^{きえつ}の

39 「智識は靈魂の窮極的完成にして、そのうちに窮極

的幸福が存する」『聖宴篇一の一』。靈魂の幸福が智識のうちに存するや或は愛のうちに存するやはスコラ神學の大問題の一にしてアクサナスは前者にドウ・スコトウスは後者に存すとせり。

40 これ神曲全篇を支配する思想なり。

一四の四〇—二。二九の一三九—四一等。但しダンテは智識（瞑想）が其儘にて愛（行爲）に優ると云ふにはあらず、眞の行爲の源泉として智識を尊重せしなり。さればアクサナスの如きも「我等の上なる者殊に神に對する愛は、此に對する智識に優る」と云へり。尙ほアリストテレスの「倫理學」一〇の八を參照せよ。

41 秋分霜枯時より春分まで夜は白羊宮に始まる。この句の意味は「秋も冬もなし」となり。

第二十九曲

「牡羊」と「天秤」¹とに蔽はれて

ラトナ²のふたりの子等³が共に

地平線を己が帶とし

天頂が彼等を平衡に保つ瞬間

各その帶より平衡を

失つて半球を換へる。³

恰もその如く微笑を顔面に描いて

ベアトウリチエは沈黙し、私を

壓倒した「點」⁴を胸⁵めてゐた。

10 やがて彼女⁶は始めた「訊ねずとも汝の

聞かうと願ふことを私は語る。蓋し私は

一切の『處』と一切の『時』の尖頭點⁷を見た。

己れ自らに善を増さんためでなく

ベアトウリチエは微笑しつゝ一切の時處の集約する「點」を凝視し、
やがて天使創造の時期に關する神秘高遠なる論議に入り、次第に廣
く世界の創造論に及ぶ。やがて彼女は一轉して地上神學者の虛妄と
説教者の無稽を罵倒して餘蘊なし。

1 白羊宮と天秤宮。

2 アポロロ(太陽)とディアナ(月)。煉二〇〇、一三〇。

3 太陽が獸帶中の白羊宮に、月はその反對面にある天
秤宮にありて、彼が昇らんとし此が沈まんとする瞬
間、正に天頂を中心として左右に均衡すと見ゆ。然
し其間は眞に一瞬間なり。

4 *deus appointa*、神のこと。アクサナスは *Divina*

beatitudo complectur omnem beatitudinem (神の

祉福は一切の祉福を包容す)と云へり。

5 神の光を受けて此を反映する被造物。一三の五三、
五八。

否や彼は私に微笑んだ。

さて地上の人間が斯く秘れたる眞理を

述べたとしても、汝の愕かざらんことを望む。

蓋しこゝ天上にて此を見た者が此諸環に關る

他の多くの眞理と共に此を彼に示したからである」。

48 使徒保羅。彼は「第三の天に至り」また「樂園に至り」

（哥林多後書一二の二—四）天使のことを見て此をデ
イオニシオに傳へたりと信じられき。

その『主』より輝き出でゝ存在となり

三〇 いづれが先との別なし。

秩序が本體と共に造られ、共に

定められた。そして純粹現勢と

成りし本體が世界の頂に置かれた。

純粹潛勢は低い部分に置かれ

中央には決して解かれぬやう

紐が潛勢と現勢とを結び合はした。

世界の残りが造られた前

數世紀の長きに亘つて天使等が

造られたとデエロニモは汝等に書き貽した。

四〇 然しこの眞理は聖靈によれる著者達の

多くの處に記されてあつて

良く意を留めんか自ら此を識るであらう。

且つ又理性も幾干か此ことを洞察し

15 purat o. アクサナスは Deus solus est purus

actus (神のみ純粹現勢なり) angelo est actus et
potentia (天使は現勢と潛勢なり)と云へり。學
綱要一の五〇。然しアリストテレスは天使は純粹

に ἐντελέχεια 即ち ἐπέφεια (現勢)なりと云
へり(靈魂論)の二) ダンテはアリストテレスに
従ひしと見ゆ。

16 原動天。

17 pura potentia. 諸天の感化に従屬する受働的物質。

一三の六二に ultime potentia (最終潛勢)とあり。
形質によりて特殊化せられざる純粹物質を指す。

18 地球。

19 天使と純粹物質との中間に。

20 死によりて斷たるも復活によりて再び(斯くて永久
に)結合さるゝ。

21 人間及び一般の物質世界。

22 聖デエロム。拉甸教會の有名なる教父にして三四〇
年頃生まる。後年ベツレヘムに行きて四個の僧院を

建て舊約聖書の拉甸翻譯を完成せり。天使創造の時
期に關る彼の説はその提多書註解一の二にあり。ア

井クナスは彼の説を「神學綱要」の六四に駁せり。

23 聖書の記者等。

(斯かることは有り得ず)その映光⁵が
映じつゝ『我有り』と語り得んがため、

時を超絶し、他の一切の制限を

超絶して己が永遠のうちに、心のまゝ

永遠の愛が自らを新しき愛に現した。

しかし前に彼が魯鈍に臥しむたのではな

い¹⁰ 蓋し水上神のさすらひの進行に¹⁰

前後がなかつたのである。¹¹

形質と物質とが、結合しまた純粹に

三弦の弓が三つの箭を放つやうに

發して缺なき存在となつた。

そして硝子や琥珀やまたは水晶に

光線が映する時、その來て充つる間に

少しの間隙もないやうに¹⁴

三體の功が諸共に

6 神の像と榮とを現し得んため。七の六五。約百記三八の七、三五。

7 空間。

8 時間の存在するに足らざりし前に。但しアクサス^{サス}は天使が宇宙創造の際最先に造られしとせし如し。天使の創造されし時期はスコラ神學者間の大問題の一なりき。

9 森羅萬象、*nove amoi* として天使の九階級の意に解する人あり。

10 「地は形なく空しくして淵の面にあり神の靈水の面を覆ひたり」創世記一の二。

11 *A ternitas non habet prius et posterius* (永遠には前も後もなし)「神學綱要」の一〇。時間は天地創造前に存在せず。時間は只被造物にのみ關聯す。茲に「進行に」と譯せし原語 *proedette* の代りに *proedette* を採り「水上神のさすらひに先立ちて前後がなかつた」とする人あり。

12 形質 (*formi*)、物質 (*materia*)。純粹の形質とは天使、純粹の物質とは所謂原初物質 (*materia prima*)。形質と物質の結合せるは人なり。以上三存在は同時に創造されたりき。

13 三位一體。その各位が共に天地創造に參與せりとなり。地、三の六註。

14 光線は經過するに時間を要せずとはアリストテレスの物理學の承認せる處なりき。ベアトリチエは云ふ、天使、物質、人間等凡ての創造は同時にして、創世記の初に記さるゝは其時間に於ける發展の行程に過ぎずと。

彼等を斯く大なる智解に敏からしめし

六〇『善』より自らの出でたことを識つてゐた。

そこで啓蒙の恩寵と己が功德により

彼等の視る力が高められ

かくて彼等の意志は充ちて堅固になつた。³¹

恩寵を受くるは此に向けて

開かるゝ愛情の功德に據ることを

汝が疑はずに信ぜんことを妾は望む。³²

さて若しわが言葉を收穫らんか

他の助けを要せず此集團のことを

汝は充分瞑想することが能きやう。

セ 然し地上なんぢらの諸學派にては

天使の性が良く悟り、記え

また意ふものなりと説かれるゆゑ³³

曖昧にも斯かる教によつて混亂せしめられる

31 *Voluntas angeli adheret fix et immobili ier* (天

使の意志は固定不動なり)「神學綱要」一の六四。

32 天使は何の功德に據りて祝福を受けしや、これ初代
神學者の一問題なりき。

33 煉、二五の七九以下参照。

この諸の原動力が斯く長く

不完全なまゝであつたことを容さない。

さて何處に、何時、また如何にして

此等の『愛』が造られたかを知り得たがゆゑ
なんぢの願望の三つの焰が既に消された。

然し人が算へて二十に達する間も

五〇 あらせず、直ちに一部の天使等が

汝等の住む諸原素の最下層を騒がした。

他の者等は残り、なんぢの看る

この技をなし始め、大いに悦んで

旋回より永久に去らず。

墮落の起因は、その世界の全重量に

壓せられてゐたのを汝が見た

かの呪はるべき慢心であつた。

汝がこゝに見るもの等は慎ましくして

24 天使。

25 機關ありて其作用なきは不完全と云ふべきなり。天使の造られしは諸天を動かす爲なりき。然るに諸天の創造に先立ちて天使造られしとせば、天使は其動かすべき諸天なしに存せしこととなる。斯かることは有り得べからざることなり。

26 然し實際を云へばアトウリチエは三十三行の「頂」と云へる外「何處」にな説かざりき。

27 異本、選ばれた (cello)。

28 地球のこと。

29 創造さるゝや否や天使等の一部分は反逆を企て、地球の中なる地獄へ投ぜられき。地、三四の一二一六。

30 地、三四の一一。魔王ルチフエロ墮落の原因は彼の慢心、忠誠なる天使等の主なる徳はその神に對する謙卑なる精神なり。煉、一二の二七。

または牽強附會せらるゝに比し

90 こゝ天上界にて憤らるゝことが少ない。

茲に此を世に播くに如何に多くの

血が費やされたか、また謙卑^{へんくだ}つて此を

守るものゝ如何に樂しめるかを人々は考へず。

萬人が誇示^{かえ}のために智慧を絞る

工夫を凝らす。説教者等も

斯く努め、福音は沈黙する。³⁸

基督^{くりすと}の受難の際月が退^ひく

中に挿まつたので太陽の光が

下に至らなかつたと一人は云ふ。³⁹

100 また光は自^{みづか}から隠れた。かくて猶太人と共に

西班牙人また印度人⁴⁰に同じ日蝕が

相呼應したのであると他の人々は云ふ。

フイレンツ^エにラボやピンド⁴¹多しと雖も

37 殉教者の血。

38 雄辯にて有名なりし金口クリソストム曰く「我にして汝等の徳に進むを見ざれば、汝等の喝采は我に何の益ぞ、又我にしてその信仰の増すを見ば、よしわが聴衆より沈黙を受くるとも我に何の害ぞ。……喝采はその口より出づるや否や空中に消失す。然れども聴衆にして善に進むことあらば、これ語る者にも聴く者にも不朽不滅の報いを齎らす。……されば人もし説教者を愛せば、又説教者もし己が民を愛せば、喝采を好まず聴衆の利益を願はしめよ」。

39 基督磔殺の際晝の十二時より三時に至るまで地の上空闇となれり（馬太傳二七の四五）。その原因に就てオリゲンは合理的解釋を下して雲の爲なりしと云ひ、アクサスは奇蹟的日蝕なりとせり。

40 ダンテに據れば西班牙はエルサレムの西方九十度に、恒河（印度）は同じく東方九十度にありとせられき。兩地間は當時の世界の東西兩極端なりき。

41 フイレンツに多かりし綽名。ラボはヤコボの、ピンドはイルテブランドの畧語なり。

この單純な眞理を明かに汝が見うるやう尙も妾は語りたい。

此等の本體は神の聖顔を見て

歡びし原初より以來、その眼を

隠るゝものとはなき者より背けなかつた。

そこで彼等の眺は新しき物象によつて

遮られず、かくて又分かれたる

觀念によつて記憶する要もなし。

然し下界には眠らずに夢みながら眞實を

語ると信じ、また然信ぜざる者がある。

前者よりも後者罪深く耻多し。

下界にあつて汝等の辿る哲學的行路は

一つでない。これ誇示の嗜好と

その思想とが斯く汝等を轉々せしむるに據る。

而もこれは聖き經典の蔑みせられ

34 神。

45 萬物の常に現在する神を常に眺むる天使は一切を觀る、從つて記憶の用なし。「分かれたる觀念」(conetto diviso)とは何を指すや明かならざるも現今我等の云ふ抽象的觀念といふ程の意味ならんか。

36 地上にて人々の口にする教理の多くは眞の基礎を有せずして夢の如し。或人は心より信じ、或る人は内心信ぜずして此を他人に傳ふ。罪後者に多し。

もし民衆にし此を見んか

一三〇 その信賴する赦罪の真相を識るであらう。⁴⁶

斯くして地上に大なる愚昧が増長し

遂に何等の證據もなしに人々が

いかなる約束にでも群るに至つた。⁴⁷

聖アントニオの豚は此によつて肥え

更にまた優る豚共は支拂ふに

印銘なき貨幣をもつてする。⁴⁸

さて我等は大分側道に入つたので

いま汝の眼を真直な途の方に向け

かくて時に準じて道を縮めしめよ。⁴⁹

一三〇 この自然は段一段夥しき數にあよび

これに及びうる人間の言葉

また觀念は嘗てなかつた。⁵⁰

そして汝もしダニエルによつて啓示されし

46 神にあらず惡魔に暗示さるゝ赦罪の無稽なることを知るならん。

47 何の根據もなき赦罪券を買ふに至る。

48 埃及の聖アントニオ（二五一—三五六年）。修道僧の族長にして彼の表象は通常側に臥せる豚なり。これ彼が肉慾を征服せしことを示すものか或は家畜の病を癒せしことを示すものか。彼の教團の修道僧は豚の群を飼ひしが、人民これを敬ひて其食糧を提供したりき。ダンテは此一事を捉へ虚偽の赦罪券を賣りて懷を肥やせし該修道僧等を諷刺す。

49 不當の赦罪券を賣りて善男善女の布施を食ふ。

50 神曲漸く終りに近づき、されば原動天に長く止まる可からず。

51 natura. 天使のこと。八の一四二行註を参照せよ。

52 Angeli…… maxima multitudo sunt omnia materiam multitudinem excedentes（天使の數の夥しきこと、一切の物質的衆團に超る）〔神學綱要〕一〇五〇。

年中此方彼方の講壇より叫ばるゝ
斯くのごときお伽噺には及ばず。

かくて何も知らぬ羊等は

風を食らつて牧場より歸る。

然し害に氣付かぬことが彼等の辯疏とならず。

基督はその最初の集團に『行きて

二〇世の人に諧謔を宣べよ』とは云はず

彼等に眞の根柢を與へ給ふた。

また只これのみが彼等の頬に響き

かくて信仰を燃やさんための戦ひに

福音を楯としまた槍とした。

而るに今や人々は戲言と滑稽を以つて

説教に行き、只よく笑はし得んか

僧帽を脹らしてまた何をも願はず。

然し頭巾の先端に一羽の鳥が巢くひ

42 無智。

43 弟子達。

44 衣の頸の處に附着せる頭巾。

45 初代教會にては惡魔を石炭の如く黒き鳥として表せり。地、二二の九六及び三四の四七にて惡魔は鳥と呼ばる。而して煉、二の三八及び八の一〇四にて天使は鳥と呼ばるも天國篇に於ては然呼ばれず。

第三十曲

第六時はこゝより凡そ六千里を

距てゝ灼き、この世界は既に

その陰をほゞ平な床に傾ける時、

頭上奥深き中天が

照り初め、星が一つ宛

この奥底に向かひてその姿を失ふ。

また太陽のいとも輝く侍女の進み

来るにつれ、天は景また景を鎖し

遂に最も美しきものに迄もあよぶ。

一〇 私を壓倒した「點」をめぐりて永久に

戯るゝ「凱旋」が自ら包むものに

包まるゝやうに見え、徐ろにわが眺より

消え失せた状もこれに異ならなかつた。

曉と共に空に星の消えゆく如く天使の群神の光のうちに融合し、ベ
アトウリチュエの美秘致に達す。かくてダントは物質界を全く脱離し
て光と愛と喜悅の清火天に昇り、光河を見、次いで諸聖徒の群より
成る薔薇を仰ぐ。

1 曉の頃。 第六時とは正午のことなり。正午が東方

六千里（ダントは地球の周囲を二〇、四〇〇哩とせ
り、饗宴篇三の五）を距つる時は曉の明け初むる頃

なり。曉に於て地球は陰影を地平線の平面に投ず。
やがて朝日の昇るにつれて蒼空の星は漸次消えてゆ

く。

2 地球。

3 曉。

4 di vista in visu. 空に輝く星のこと。

5 二八の一六。二九の九。

6 trionfo. 天使の階級。第二十八曲参照。

✓ 一點に集約せる神の光のうちに天使等は融け入り
ぬ。天使に圍まると見えし「點」が今や却つて天使
を圍めり。神は宇宙の中心なると同時に又これを包
容する周圍たり。

ことを考へんか、彼の數千と云ふ言葉に
確たる數の蔽かくされあるを見るであらう。⁵³

その凡てを灼かきやかす原光を受けて

彼等はさまざまの姿に輝き

それぞれ原光に相添そふ。⁵⁴

かくて愛情は思ふ働きに準ずるゆゑ

一四〇 愛の甘美は彼等のうちに

さまざまに熱わくしまた暖まる。

永遠の力の高さ廣さを

今見よ。碎けて身を斯くも

夥しき鏡としながら自らは

依然として前さきのごとく一つである」。

53 「彼に仕ふる者は千々彼の前に侍る者は萬々」但以
理書七の一〇。

54 「天使は形質と物質の結合ならざる故互に種を異に
す、これ二つの白色二つの人道の有り得ざるが如
し」神學綱要一の五〇。天使は悉く種々を異にせ
り。各原光より獨有の光を受く。

最初の日よりこの眺ながめに至るまで

三 私わたしは遮さへられずにわが歌に従つて來た。

然し力盡ちからつきさし凡ての藝術家のごとく

彼女の美を追ふて尙も歌ふことを

私は今廢めねばならぬ。

あのが嶮あやしき題材11を終局に

到らせつゝある喇叭えきに優る大なる

傳令者12に私は彼女を委ねるが

役終やくすまへし導者の態度と聲を以つて

彼女は再び始めた「我等は最大の

物體13より純光の天14へと脱け出でた。

四〇 愛に充つる智の光

喜悅きえつに充つる眞善しんぜんの愛。

一切の快樂を超越する喜悅。

こゝに汝は天國の二つの軍勢15を

9 「新生」全篇。天、一八の七以下。二三の二二等に。

10 一四の七九―八一。一八の八一―一二。二三の二二

及び四九―六〇に於てダンテはベアトウリチエの美の増きさり行く狀を述べ得ずと云へり。然しその際には言外に彼女の美を仄めかし得たり。今茲に至りては絶對に表現し得ずと。

11 地獄、煉獄、天國の如き高遠なる問題を題材とせる神曲。

12 ベアトウリチエの此美の極致を歌ふことは神曲の作者以上の天才に委ね。

13 原動天。物質的諸天中の最大なるもの。

14 清火天。全く時間空間を超越し只光（信仰）と愛と歡喜（希望）とに充つる天。

15 世の誘惑に對して戦ひて勝ちし諸靈と、反逆天使の一群に對して戦ひし善き天使等の二軍勢。

かくて見るものゝなきことゝ愛とが

私をして眼をベアト^グリチ^エに向けしめた。

彼女につき茲に至るまで述べられたことが

よし悉く一篇の頌歌に綴らるゝとも

この度^{たび}の用を倣すには足らじ。

わが見し美は嘗に我等^{はかり}の測定^{はかり}の度を

二 超ゆるに止まらず、これを全く賞美し得るは

その造主^{つくものし}のみなりと私は確信する。

嘗て喜劇家または悲劇家が

その題材の要處に挫折したよりも甚だしく

私はこの刹那^{しゅな}にあえなくも崩^{くづ}れた。

蓋し太陽が眼^めを甚^{いた}く顫^{ふる}はすやうに

甘美な微笑の記憶そのものが

わが心より記憶^{きおく}を殺^{ころ}ぎ去るに據る。

この世にて彼女の顔を見し

8 一の四—九。ベアトウリチエの此極美はダンテが最

高天即ち清火天に昇りしことを示す。

私の眼が防ぎ得ずといふ程に

六〇 瞭かな光は一つもなかつた。

かくて光は河の形となり¹⁹

妙なる春を彩る兩岸の間に

照り輝くを見たりき。

この流より活ける火花注ぎいで

兩側の花に落つるさま

宛ら黄金に圍まる紅玉に似たり。

斯くて後香に酔へるがごとく

自から奇しき奔流に再び沈み

入るものあれば又飛び出づるものありき。

七〇 「いま汝を燃やし、汝の見るものにつま

知らんことを汝に促す高き願望は

増さる行くにつれて愈妻を悦ばす。

然し汝の斯くも強き渴望の充たさるゝ前に

19 以下神曲中最も莊美鮮麗なる句なり。 神の榮光は

先づ花咲く岸邊を流るゝ河となり、次で圓形の光の湖となり、諸聖徒の群がる薔薇となる。「天の使生命の水の河を我に示せり其水澄透りて水晶の如し」約翰默示錄二二の一。「彼の前より一條の火の流わき出づ」但以理書七の一〇。失樂園三の五一八。

20 二八の一六。

21 受福の諸靈。

22 紅玉は虛妄淫蕩なる思ひを抑え争闘を和らげ健康を與ふる力ありとせられき。

見るであらう。またその一つは、

最後の審判に汝の見る姿をしてゐる」。

恰も物見る靈¹⁷を挫き、かくて

いとも強き物體の及ぼす作用をすら

忽ち眼より奪ふ閃光のごとく

活ける光が私をめぐり照らし

五 その光耀^{かじやう}の面覆^{かほおほひ}にて卷いたので

何ものも私に見えなくなつた。

「この天を安靜ならしめる愛は

蠟燭に焰を當てがはんだめ、常に斯く

待遇^{もてな}して自らのうちに迎へ容れる」¹⁸。

この短い言葉が私に達するか

達せぬに、わが力以上に身の

登つてゐたのを私は識^きつた。

また新しき眺^{ながめ}に燃やされたので

16 諸靈の軍勢。諸靈は清火天に於て肉體的形態を探

る。靈魂は最後の審判の日に肉體を再び纏ふも天使には其要なし。故に天使のことは語るに及ばずとして茲に特に諸靈が肉體的形態を以つて現れしを云ふ。

17 二六の七二註。「新生」三及び四。

18 光と愛とにて清火天を充たす神は、此に入らんとする蠟燭（靈魂）に神の榮光を見得るやうにせんとて斯く準備せしめ給ふ。

飲むや否や、長かりしものが

ち 圓くなつたやうに見えた。²⁸

假面を被つてゐた人々が自らを

隠してゐた似もつかぬ面を脱ぐ時

いかにも前よりは違つた顔のやうに見える。²⁹

恰もその如く花と火花とが其時

私にとつて壯大な祭と變はり、かくて

天の宮居の二つながら示さるゝを見た。³⁰

あゝ神の光輝よ、われ此によりて

眞の王國のいや高き凱旋を見たりき³¹

願くは我見し狀を語る力を我に與へ給へ。³²

造主を見てのみ己が平安を

得る被造物にこれを

見せしむる光が高き彼方にある。

圓形に擴がること

28 長形の流が圓形の薔薇となれり。

29 假面を脱ぐや其人の顔は前よりも異なる如く見ゆ。

30 四十三行註を見よ。

31 煉、三一の一三九。

32 以上二聯に於てダンテは^{インニ}（我見たり）を三度押韻せり。この新幻影を高調せんためか。地、一の
一〇註。

この水をなんぢは飲まねばならぬ」。

わが眼の太陽が斯く私に云ひ

なほ彼女は加へた「流と、入りては

出づる諸の黄玉と、草の微笑みとは

その真相の影なる序に過ぎず。

此等のもの自らが澁きにあらず

ふ なんぢの方に飲ありて、眺が

未だ斯く高められないのである」。

常よりも餘程遅れて

醒めた時、顔を乳に向けて

いと迅く飛びつく嬰兒も

私が眼を優れる鏡となすため

我等を尙も善からしめんとて注ぐ波の上に

身を傾けたのには及ぶべくもない。

斯くてわが臉の檐がこれを

23 黄玉は傷害を避けしめ熱湯を冷やし又肉慾を鎮の狂

亂を和らぐ力ありとせられき。茲にては天使のこ

と。一五の八六。

24 受福の諸靈。

25 流、火花、花は凡てこれ外觀的表現にして實相に非

ず、只些かに實相を暗示するに過ぎざるなり。

26 以上の光景其ものが看取するに難きにあらず、人の

眼が能く其實相を見得る程に高からざるなり。三三

の一〇九—一一四参照。

27 煉、三〇の四三—五。

自失せずして、この歡喜の

二〇 量と質とを悉く攝收した。

彼處^{かしこ}にては近さも加へず遠さも減^{げん}ぜず³⁵。

蓋し介在を要せずして神の治め給ふ處には

自然の法則が何の關りもないからである³⁶。

擴がりて段をなし、また常春^{とこばる}を

齋らす太陽に頌歌の薰香^{かそり}を放つ

窮^{きはみ}なき薔薇^{ばうい}の黄^きの中心へと

ベアトウリチェは、恰も沈黙のうちに語らんと

願ふ人のやうに私を引寄せ寄せて云つた

「白衣^{びやくい}の集團^{つどひ}のいかに」なるかを見よ³⁷。

二一 我等の都の周圍のいかに廣さかを見よ。

我等の席の沿く充ちて、既早

こゝに人々を殆んど要せざるを見よ³⁸。

汝この婚筵に飲む前

35 天堂は空間を超越す。

36 介在物に遮らるゝことなくば極微の物を如何なる遠距離よりも見るを得べしとデモクリトスは主張せり。但しアリストテレスは此を否定せり。ダンテは茲にも希臘の物理的哲學を採りて心靈化し、自家藥籠中のものとせり。

37 「勝をうる者は白衣を着せられん」約翰默示錄三の五。

38 「我等は今や世の最後の時代にある。げに我等は諸天の運行の終滅を俟ちつゝある」饗宴篇二の一五 世界の終滅近きにありとは中世紀を通じての一般信仰なりき。

極めて遠く、その圓周は太陽にとり

帶としては長過ぎるであらう。

その全光景は原動天の頂いたゞき

(これより原動天は生命いのちと力を採る)

より反射する光線より成る。

また草と花との盛り時に

110 恰もあのが飾を見んとて

丘が麓の水に影を映すやうに³³

光の上にあつて周一周、千餘の坐に

我等を去つて天上に歸りしもの³⁴、

悉く寫りうつをるを見た。

さて最も低き段が斯くも大なる光を

己のうちに收むるとせば、最端いっはての瓣に

亘つてこの薔薇の廣大さは如何ばかりぞや。

わが眼は廣さと高さとに

33 異本「いかに自ら草(或は緑)と花とに豊かに飾られ
あるかを見んとて」 失樂園四の二六一―三。

34 此世を去り救はれて天の家郷に歸り、諸靈。

第三十一曲

聖徒の一團層をなして白薔薇の形に現れ、彼等と神との間を天使等上下して平安と熱誠とを頒かつ。ベアトリチエ榮光の坐に登り、最高部に聖母マリアの榮光輝く。瞑想直觀の典型聖ベルナルド諸聖徒をダンテに指示す。

かくて基督がその血により

新婦とし給ふた聖軍が

純白の薔薇の形して私に示された。

また他の一軍は翔りつゝ、

彼等を愛慕せしめたもの、榮光と

彼等を斯く大ならしめた善を眺めつ歌ひつ

宛ら一疋は花に潜り、その間に

一疋はちのが勤勞に香味

あらしむる處に歸る蜜蜂の群のやうに

10 無數の瓣に飾られる莊麗な

花のなかへと降下し、また其處より

彼等の愛の常住する處へと再び昇つた。

その顔は全く活ける焔

1 基督が己が血にて贖ひ給ひし聖徒の群。

2 天使の群。

3 神。

4 集。

5 神の御坐。

6 レエテの堤を諸靈の逍遙する狀を述ぶる「エネアの歌」六の七〇七—七一を參照せよ。曰く—

恰も爽かな夏、野邊にて蜜蜂が

さまざまな花に潜つて眞白な百合花の

周圍に付き、羽音にて野を唸らすやうであつた。

エネアはこの突如たる光景に愕き、その原因を

知らざるまゝ、遙かなる河は何か

斯く群をなして堤を充たすは何の靈かと尋ねた。

「失樂園」一の七六八—七五參照。

既に上に置かるゝ王冠ゆゑに汝の眼を

注ぐ彼の大きな坐に、やがて地上にて

アゴスタたるべき尊きエンリコの魂が

坐るであらう。彼伊太利亞の未だ備へせざるに

これを直くせんために來るであらう。

汝等を魅する盲目の貪慾が

一四〇 汝等を宛ら乳母を逐ひ遣りて

餓死する嬰兒のやうにした。

また陽に陰に彼と

一つ道を歩まぬものが

その時聖廳の長たるであらう。

然しその後神の彼に聖職を容し給ふことが

暫くであらう。蓋し己が業により

シモン・マゴのゐる彼處に彼は押し落とされ

かのアナニア人を尙も低からしめるであらう」

39 上方に空席ありて王冠の置かるゝを見る。

40 チェザレ(皇帝)と同意義。

41 勇敢にして敬虔なるエンリコ第七世。一三〇八年

に皇帝に選ばれ、一三一一年ミラノにて戴冠し、ダ

ンテに先立ちて一三一三年に死せり。ダンテは彼を

伊太利亞の救済者とし、期待しむたりき。煉、六の

一〇二註。同、三三の四三註。

42 一七の八二。

43 教會の支配者を腐敗せしめしは此貪婪なりき。二

七の一二一。

44 法王クレメンテ第五世。二七の五九註。伊太利亞

遠征の際エンリコ第七世を公然彼は援助せしが漸次

反抗的態度を取るに至れり。

45 法王。

46 地、一九の八四。

47 法王ボニファチオ第八世。地、一九の七六―九。

天、一七の八二―四。

48 ベアトリチエは辛辣なる非難を最後の言葉として

ダンテを去り榮光の坐に歸れり。

斯くこれを充ち足らす三重の光よ¹⁵

三 下界なる我等の擾亂を覽^みはせ給へ。¹⁶

おのが慕ふ子と共に

めぐるエリチ^エに毎日蔽はるゝ

地方より來た野蠻人等

ラテラノ¹⁸が人事^{ひとわざ}の上に卓絶した時¹⁹

羅馬とその壯烈な事業とを見て

昏迷したとすれば

人界より神界へ、時より

永劫へ、またフィレンツ^エより²⁰

義しく康かな人民へ來た私は

四 何たる驚愕^{けいおつ}に充たさるべかりしよ。

げに驚愕と喜悅とのうちにて私は何事をも

聞かうとせず、沈黙して立つてゐた。

また宛ら己が誓願の寺院に入り

15 三位一體の神。

16 天の窮極にありてダンテは尙ほ地を忘れず。

17 アルカディアの王リカオネの娘。ディアナ(月)のニ

ムフォの一人なりしがデオゴに辱められて一子を生
めり。デウノネ嫉みて彼女を熊となす。やがて子は
彼女を追ひ行きて共に大熊星小熊星となれり。「メタ
モルフォシ」二の四〇一―五三〇。煉、二五の一三
二。大小熊星に日々蔽はるゝ地方とは北方の謂な
り。

18 ネロ帝以來皇居たりしをコスタンティノ大帝が法王
シルゲストウロに贈與せし宮殿。

19 羅馬が世界の女王たり、又ラテラノが皇帝乃至法王
の權力の坐所たりし時。或は法王が政治に干渉せざ
りし時の意とも、或は一三〇〇年の大會式の意とも
解する人あり。

20 これ神曲にフィレンツエの名を擧ぐる最後にして而
も虚偽と墮落の典型として此を記せり。地、二六
の一―三。煉、六の一―二七以下を参照せよ。

また翼は黄金、その他は純白にて
いかなる雪もこの極には達しない。

席より席へと花のうちへ降つた時

彼等は己が兩脇を煽る間に

得た平安と熱誠とを傳へた。

而も上なるものと花との間に、

三 介在する斯く大なる飛翔の集群は

眺をも輝きをも遮らなかつた。

蓋し神の光は宇宙に汎く

處に應じて透徹し、かくて

何ものも此が障碍たるを得ず。

舊新¹³の人にて群る

この安らかな歡喜¹⁴の王國は

皆たゞ一つの目標^{めあて}を眺めて愛す。

あゝ只一つの星として彼等の眼に閃き

7 燭と黄金と雪の三色は天使の愛と智と力の表象たり。
煉獄篇第二十九曲のグリフォネの色と對照せよ。

8 平安と熱誠とは地上にありては乖離するな常とする
も天上にありては相一致して、熱誠は平安、平安は
熱誠たり。

9 上なる神と普微なす諸聖徒の間。

10 飛び交ふ天使。

11 聖徒の神を眺むる擬げともならず神の聖徒を照らす
障りともならざりき。

12 一の二三。

13 舊約聖書及び新約聖書の時代の諸聖徒。 次曲に詳
し。

14 歡喜は今や失はるゝ恐れもなく又既に充ち足りて此
上獲得する必要もなく、只彼等は三位一體の神に仰
望と愛とを集注するのみ。 二七の九。

ベアトウリチエを見ることゝ信じてゐた私は

六〇 榮光の民に等しく装ふ一人の長老を見た。²³

その眼と頬には慈愛深き喜悅が

漲り、その憐み深き態度は

柔しい父に適はしいものであつた。

そこで「彼女は何處ぞ」と直ちに私は云つた。

すると彼は「汝の願望を果たすやう

ベアトウリチエが俺をわが處より動かした。

もし最高の段より第三の環を仰ぎ見んか

おのが功德によつて贏えた王座に

彼女のゐるを汝は再び見るであらう」。²⁵

七〇 答をせずに眼を上に見上げて私は

彼女を見たが、永遠の光線を身より

反射して自らその王冠となつてゐた。

雷鳴するいと高き處より人その肉眼を

²³ 聖ベルナルド（一〇九一—一五三年）。巴里に學

び二十二歳にしてシトオ市の新設のベネディクト派僧院に入り、後出て、狼と盜賊と荒廢の「にが艾の谿」と呼ばれる處に僧院を建て、此を葡萄と穀物の豊かな Clairvaux（光の里）とせり。以後彼は其一代の有力なる人物となり、十字軍をも起させり。彼は甚く聖母マリアを崇慕し、著作中最も重要なものは De Consideratione にて教會の極端なる中央集權に反對せるものなり。ベルナルドの天國に於ける職務はマテルダの煉獄に於ける職務に類似す。マテルダも微笑み（煉、二八の六九）ベルナルドも然り。

²⁴ 三二の七—九。最高の環に聖母マリア、次にエザ

第三にラケレとベアトウリチエ。

²⁵ ダンテの慕ひ求めしベアトウリチエは終極に於て遠く彼を離れて王座に登れり。蓋し眞の結合は愛する者を専有することに非ずして、聖アウグスティヌスの云へる如く、神に於て己が友を愛し、神ゆゑに己が敵をも愛しむものなり、蓋し永久に朽つることなき神に於て愛する者のみ其愛するものを永久に失はざればなり。三三の一〇—一五。

四邊を眺め廻して勇み立ち

有りし狀を傳へんと夙くも望む巡禮²¹のやうに

活ける光のなかを辿りつゝ

或は上に或は下に或は廻らしつゝ

多くの段に沿ふて眼を馳せらせた。

「彼²²」の光と己が微笑とに粧はれて

吾人を愛に誘ふ顔の數々と

氣高き極みに飾られし舉動を私は見た。

天國の概形は既に悉く

わが仰望のうちに容れられたが

まだ何の部分にも眺が注がれてなかつた。

そこでわが心を恍惚たらしめたものに就き

わが貴女に訊ねんと願望に

再び燃やされて私は身を回した。

然るに思ひも寄らぬ他の者が私に答へた。

21 ダンテは此曲中巡禮の比喩を心中に抱き行く。一〇
三行以下た見よ。煉二の六三。同、八の五。同、
二三の一六。同、二七の一〇。天、一の四九。「新
生」四一。

22 原語 *altri* (他の者)。神のこと。

斯くて康かにし給ひしわが魂を

九 汝の旨により肉體より解放^{ときはな}ち給へ」。

斯く私は祈願した。すると如何にも

遠ざかつて見えた彼女が微笑んで私を眺め
かくて永遠の泉に振り向いた。

そこで聖き長老は云つた「祈禱と

聖き愛とが俺^{わし}を遣した目的

即ち汝の旅路を完全に終へるため

眼をこの花園³⁰に汎く翔らしめよ。

蓋し此を見るは、やがて神の光線を貫いて

汝の仰望^{ぎやうぼう}をいや高く登らす備へである。

100 また俺^{わし}が全く燃えて愛する天の『女王³¹』が

恩寵の限りを我等に賜ふであらう。

蓋し俺^{わし}は彼女の忠信なるベルナルドである」。

恰もゴロニカ³²を見んとて恐らく

30 薔薇のこと。

31 聖母マリア。ベルナルドの存命中三度彼女は現れ
たりと。

32 In Veronica (眞の像)。一人の猶太婦人ゴルゴタ
山上の途上十字架を負へる基督に面覆(或は手巾)を
差出して彼の顔より汗を拭はんとせり、やがて再び
此を受取りし時鮮かに基督の貌寫されありしと。羅
馬の聖彼得得會堂に保存さる。「新生」四一註一參照。

海中にいか程奥深く潜らすとも

その距離は彼方ベアトウリチエと

わが眼とのそれには及ぶべくもない。

而も此は何の障りともならず、彼女の貌は

介在物に濁ることなく私に降つて來た。

「おゝわが希望を強くし、また

わが救済のため地獄に汝の足跡を

残すことを忍びし貴女よ

なんぢの力と汝の恵みにより

わが見るを得しもの凡てに

恩寵と徳とを認む。

汝の力の倣し得るかぎり

凡ゆる道により凡ゆる方法により

汝われを奴隸より引きて自由にせり。

願くは汝の威嚴を我うちに護り

26 三〇の一二一一三。

27 地、二の五二以下。

28 煉、一の七一〇。

29 *magnificenza*. これはアリストテレスの *periplo-*
etica の譯語にして寛容の意とも解せらる。三三の
二〇、

谷より山に移すやうにして私は

一三〇 朝地平線の東の方が、太陽の

没する方よりも照り優るがごとく

際涯の一端が残れる前面

一體を壓して灼くを見た。

かくてフエントネが曳き損ぜし

車軸の俟たるゝ處にいと強く燃え

また此方彼方の光の薄れゆくやうに

この平安の錦の旗も真中は鮮かに

兩側に向かひい同じ度合に

焔が和いでゐた。

一三〇 この真中に灼きと巧とに別ある

千餘の天使等が翼うち伸べて

歡呼するのを私は見た。

彼等の技と彼等の歌とに微笑みつゝ

35 地、一七の一〇六。煉、四の七三。

36 太陽の昇る處。

37 マリアの處が最も輝き其他は次第に薄れ行きぬ。平安の錦旗 (pasilica orfiatiana) とは天國の薔薇のうち聖母マリアの坐せる部分ないふ。佛蘭西の古代の王等に首天使ガブリエルの與へしと云ふ戰闘的オリアフイアンマに對照して此は平安の錦旗と呼ばれる。戰闘的錦旗は黄金地に焔を描きしものにて (aurea blanna) と稱せられき。此旗の下に戰ふ者は負けることなしと。天上の錦旗は戰ひに非ず平安の常勝旗なり。

38 中世紀の天使學に據れば各の天使は獨特の「種」なりき。二九の一三六一一四一。

クロアツィア³³より來たり、古き傳へのみに

満足しなかつたので示される間

絶えず「わが主耶蘇基督、眞の神

さらば汝が聖貌は斯くもありしや」と

心のうちに囁く人のやうに私は

この世にあつて瞑想のうちに

110 この平安を味ひしものゝ³⁴

活ける慈愛を眺めてゐた。

彼は始めた「恩寵の子よ

眼を専ら下界の底に注ぎゐては

この歡喜の心境は汝に分からぬであらう。

この王國の屬し且つ献げらるゝ

女王の坐したまふを見得るまで

諸の環の奥の極を眺めよ」。

私は眼を擧げた。そして恰も眼を

33 奥太利匈牙利國の一地方。

34 ベルナルド。

彼は瞑想の典型なり。彼が生存中神

を本質的 (per essential) に觀しや否やとさへ論ぜられき。

第三十二曲

おのが喜悅を慕ひて

この瞑想家は進んで師の務^{つとめ}を採り

此等の聖き言葉を始めた

「マリアが閉ぢて膏油^{あぶら}を塗りし傷を

開^{ひら}きしもの刺し貫きしものは

彼女の足もとにゐるいと美しき女¹である。

彼女の下第三の席にあたる位に

汝の見るごとく、ラケレ²が

ペアトウリチ^エと共に坐してゐる。

一〇 本名を擧げつゝ薔薇のなかを

瓣³より瓣へと私が降りゆくにつれ

サラ⁴、レベッカ⁵、ユデイト⁶及び過^{あやまち}を愁しみて

天上の薔薇の中に聖母マリアを始め舊約新約の諸聖徒順次相聯なる。その下に罪なくして死せし幼児等群らがる。ダンテ聖母マリアを仰いで天使がブリエルロの彼女を渴仰するを見る。やがて神曲終りに近づき愈々神の幻影に接する力をダンテが獲るやう聖ペルナルド聖母マリアに祈らんとす。

1 エゾ。 エゾの罪の爲基督は十字架に懸かり肉を裂き給へり。

2 地、二の一〇一、二。 煉、二七の一〇〇一八。 ラケレとペアトウリチエとは瞑想の典型なり。

3 原文、葉より葉へと (di foglia in foglia)
4 アブラハムの妻。 希伯來書一の一。

5 イサクの妻。

6 猶太の處女にして信仰と美と勇氣と貞操の典型。
煉、一二の五八註。

其處にひとりの佳しき者が凡て他の

聖徒等の眼に喜悅となりをるを私は見た。

たとへ想像に適ふほど私が

詞に富むとも、この歡喜の

些をだに敢て語らうとはせず。

ベルナルドは己が熱愛するものに

二〇 わが眼の向けられ注がるゝを見るや

いかにも愛情に充ちて彼の眼をその方に向け

いよくわが眼をして熱心に眺めしめた。

39 祝福されし聖母。

40 原語 stava a bada. 「口を開けて立つ」

また此方^{こゝた}には天の「貴女」の榮^{さかえ}ある坐

並びにその下の諸の坐が

三〇 大なる境界となつてゐるのと同じく

對^{むか}ふ側には常に聖うして

荒野^{こうや}と殉教、次で二年間地獄に

耐^{ぞう}へし偉大なる約翰^{ヂョウアンニ}¹⁵の坐がある。

かくて彼の下にフランチェスコ¹⁶、ベネデット¹⁷と

アゴステイノ¹⁸、その他の者等が分ち定められ

環^{くわん}より環へと降^{くだ}つてこゝに及ぶ。

さて高き神の攝理を觀よ

蓋し信仰の彼我兩方面が

等分にこの花園を盈たすであらう。¹⁹

四〇 また二區分の中央を貫く段以下に

坐するものは何等ものが功德の爲でなく

或る條件²⁰のもとに他のものゝ

15 荒野に住みへロデア王のために投獄せられ遂に斬首

(一八の一三三、四)せられ、死して地獄に降り、基督の救出まで(地、四の五二一六三)二年間其處に止

まりし洗禮の約翰。

16 アッシシの聖フランチェスコ。第十一曲を見よ。

17 第二十二曲を見よ。

18 聖アウグステイヌス。一〇〇一二〇。

19 舊新兩約の諸聖徒の數は相等しからん。斯かる思想は聖トマス・アクヴィナスの教義中にも又他のスコラ神學者等の教義中にも發見し得ず。恐らくは均整を好むダンテの趣向に據れるものか、或は世界の終極近きにあるとの中世紀的信仰に據れるものか。

20 七十六行以下に出づ。

Miserere mei⁷と歌ひし歌人^{かじん}の⁸

曾祖母^{みへおば}たりし彼女^がを、次第に斯く

坐より坐へと下に汝は見る^でことが能^でさる。

また第七段以下は、これに到る迄と同じく

花^{はな}の髻^{むすこ}を凡てかき分けて

希伯來^{えぶれな}の女達が相連らなる。

蓋し彼等は信仰^{くふす}の基督^{きりすと}に

三 注^なぎし眺^{ながめ}に従ひ、聖^{きぎはし}き階^{はし}を

分かつ墻壁である。

此方^{こなた}花^{はな}の凡ての瓣^{はな}が

熟^うせる處^{ところ}には、來たるべき基督^{きりすと}を

信じた人々が坐してゐる。

彼方^{かなた}多くの半圓^{はんえん}が空處^{くうち}に

遮られる處には、來たり給ひし

基督^{きりすと}に顔^{おもて}を向けた人々^{ひと}がある。

7 詩篇第五十一篇の起句。煉、五の二三。

8 詩篇の作者ダビデ。彼は正義(二〇)の三七—四三、謙虛(煉、一〇)の六四—六の典型とせらる。

9 路得。ダビデの曾祖母にして遙かに聖母マリアの祖先たり。路得記四の二一、二二。

10 當來の基督を信ぜし人々即ち舊約時代の諸人物と、已來の基督を信ぜし人々即ち新約以後の諸人物の境界となる。

11 花瓣の人々の充ちをる部分。

12 舊約時代の人々。舊後の上半分は垂直に縱斷されて一方には聖母マリアより希伯來の女達順次下に連らなり、他方には洗禮の約翰を上^{うへ}に諸聖徒相連らなる。

13 花瓣の形狀をさす。

14 新約以後の人々。

されば眞まことの生涯に急ぎ來たりし

此等のものに自らおのづかこゝに卓越の

増減あるは sine causa27 なる。

これ以上敢て願ふ意志とはなき程の

大なる愛と大なる喜悅のうちに

この王國を慰はしめ給ふ『王』は

凡ての心を造り、悦んでこれを眺め

おのが意こころのまゝに恩寵を様々さまざまにして

彼等に與へ給ふ。されば聖業みわざに安んぜよ。

このことは聖書のうち母の胎内にて

忿怒いかりを起こした双兒ふたごの記事により

なんぢらに顯あらはにも明かである。

七 即ち斯く恩寵の髪の色に準じて

至高の光は彼等の頭上つばなうへに

それぞれ冠を置くべきである。³⁰

26 天死して早く天國の生涯に入りし小兒等。

27 「原因なし」。

28 effetto. 茲にては「事實」と云ふ程の意。 神意に

對して「何故に」と問ふ勿れ。煉、三の三七。

29 ヤコブとエサウ。 色と皮膚を異にせし兩人の例よ

り暗示を得て斯く云へるものか。創世記二五の二一—二六。天、八の一三〇。

30 神は己が意に従ひ又人々の量に準じ異なる度合に於て彼等に恩寵を注ぎ給ふ。然し恰も小兒等の毛髪は何故に色を異にするや其原因の不明なる如く、敢て神意を探らんとする勿れ。

功德によると知れ。²¹

即ち彼等は皆眞の判斷を

做し得る前に解かれた靈である。²²

汝彼等を良く看、又彼等に耳傾けんか

その顔により、更に又その子供らしき

聲によつてそれと識ることが能きやう。

さて汝は訝り、訝つて沈黙する。²³

五

しかし汝を緊るこの微妙な思ひの

強き紐を俺は汝に解くであらう。

この王國の領域にあつては

悲しみや渴きや飢がないやうに。²⁴

一點の偶然すらも起こり得ない。²⁵

蓋し汝の見る一切のものは、永遠の

法則によつて定められ、かくて茲には

指輪が正しく指に嵌まるのである。

21 自ら功德を積む時なしに夭死せし小兒等。

22 肉體より解かれし靈。

23 小兒等に功德の如何なる相違ありて斯く彼等の坐席に上下の差異ありやとの疑問。

24 「神彼等の目の涙を悉く拭ひとり又死あらず哀しみ哭き痛み有ることなし蓋前の事すてに過ぎ去ればなり」約翰默示錄二一の四。

25 煉、二一の四〇以下參照。天、一七の三七、八。

かの高處に冲るやうに造られし

聖き諸の心に携ふ大なる歡喜が

ち〇彼女の上に雨降るを私は見た。

嘗て見し歡喜は一として斯く

大なる驚嘆に私を恍惚たらしめ

或は神の斯かる似貌^{ヒナゲ}を私に示さなかつた。

曩⁴⁰に彼女に降りしものゝ愛は

Ave, Maria, gratia plena⁴²と歌ひつゝ

彼女の前にその翼を擴げる。

祝福^{めぐ}まれし宮居^{みやゐ}は四方より

この聖歌に應^{こた}へ

かくて貌^{すがた}は何れも一際^{ひときはまや}研かになつた。

100 あゝ永遠^{とこしへ}の定^{さだめ}によつて坐すべき

甘美な處を去り、わがために忍びて

下なる此方^{こなた}にゐる聖き父⁴³よ

39 天使等。

40 恒星天にて。二三の九四。

41 首天使がブリエルロ。煉。一〇の三五、六。

42 「ペリアよ慶たし惠まるゝ者よ」路加傳一の二八。
天、三の一二一。一六の三四。

43 聖ベルナルド。

されば彼等が異なる段に置かるゝは
慣ひの功德によるにあらず

全く原初鋭敏³¹の差異による。

げに早き世³²には幼兒³³も

救拯³⁴を獲るに親の

信仰のみにて充分であつた。

原始時代が終はるや³⁴

ハ
男兒^{だんじ}はその罪なき翼に力を獲るに

割禮³⁵に據るべきものとなつた。

しかし恩寵の時代の到來後³⁶は

基督の完き洗禮を受けざる幼兒は

下の彼方^{かなた}に止め置かれた。³⁷

さて基督に最も似る顔³⁸を

仰ぎ觀よ。その輝きのみが能く

基督を見得るやう汝を整へる³⁹」。

31 *primiero faciente*. 神を見る生得の能力。此能力の

強弱は生まるゝ前に神より受けし恩寵の度に據る。

32 アダムよりアブラハムまで。

33 *innocenti*. 無罪無垢。

34 アブラハムより基督まで。

35 創世記一七の一〇—一四。

36 基督降世後。

37 地獄の邊疆なる *limbus puerorum*. 地、四の三六の
註。煉、七の二八—三〇。

38 聖母マリア。

彼方かたの上に坐し、『皇后アウグスタ』に

最も近くいとも福なる彼かの二人ふたりは⁵⁰

二二〇 謂はゞこの薔薇ばちの二つの根である。

左方彼女の隣りにゐるは己が

大膽なる嘗味ゆゑに斯く苦き味を

人類に嘗めさす『父51』である。

右方には基督がこの佳うはしき花の

雙鍵を委ね給ふた聖き教會の

彼の古いにしへの『父52』を見よ。

また彼の側かたはらに、槍と釘とにて

贖はれし美しき新婦はなよめの慘53ましき月日を

死する前に見盡した彼54の

二二一 坐するを見よ。又いさ一人ひとりの者55の側に

満那まんに活なきし忘恩、浮薄、頑冥な民を

率かゐた彼の指導者56が慰なぐさめてゐる。

49 聖母マリヤ。

50 アダムと彼得。前者は罪を犯せしも基督の降臨を信ぜし最初の人、後者は甦よみがへりし基督を信ぜし第一人。

51 アダム。煉、三二の三七。天、七の三五―九。

52 彼得。「われ(基督)天國の鑰を汝に與へん汝が地に於て繋ぐことは天に於ても繋ぎ汝が地に於て釋くことは天に於ても釋くべし」馬太傳一六の一九。煉、九の一・一六以下。天、二三の一三七。二七の四九―五一。

53 基督の十字架によりて建てられし教會。

54 福音書の約翰。彼は永く生きて初代教會の迫害を受けるを目撃せり。或は將來教會の受くべき迫害を豫め幻に見て默示録に記せりとの意か。

55 アダム。

56 神より満那を受けつゝも荒野に曝さらきしイスラエル人を率ゐしモオゼ。出埃及記十六章三十二章。

いたく悦んで我等の『女王』⁴⁴の

眼を眺め、慕ふて燃えるやうに

見える彼の天使は何であるか」。

曉^{あけ}の星が太陽よりするごとく

マリアより美を受けてゐた彼の教を

斯くて再び私は受けやうとした。

すると彼は私に「凡そ天使または魂の

二〇 抱さうる剛膽と優美とが悉く

彼のうちにある。我等も此を好^{よし}とする。

蓋し神の子が自ら我等の重荷を

負はんとし給ふた時⁴⁶、マリアに

稷欄を持ち降りしは彼⁴⁷である。

さて俺^{わし}が語りゆくにつれ

以後眼を擧げて此いとも正義にして

敬虔なる帝國⁴⁸の大なる族長等に心を注めよ。

44 聖母マリア。

45 「美を受けてゐた」の原語は *abbelliva* なるがフランス語の *abbellis* (煉、二六の「四〇参照」の意に解して「マリアに悦ばれてゐた」とも譯すべし。

46 人類の罪を負はんとて基督が降世せし時。

47 首天使カブリエル。稷欄は受胎告示 (*Annunziazione*) の表象。

48 天國。

汝を扶けうる彼女（り）の恩寵を獲よ。

また汝は俺（わし）の言葉より心を

一五 去らしめぬやう、愛情もて俺（わし）に従へ」。

かくて彼はこの聖き祈願を始めた。

彼得に對してアンナがいかに満足げに
彼女の娘を眺め、オザンナを歌ひつゝ
眼を移さずに坐するを見よ。

また汝が額を垂れて落下しやうとした時

汝の貴女を動かしたルチアが

一族の最大の父に對して坐するを見よ。

さて汝を睡らし置く時が經つゆゑ

一四〇 手にある布に準じて衣をつくる

巧みな裁縫師のやうに茲に

話を止めて眼を本源の愛に向け

かくて汝は彼の方を眺め、能ふ限り

深くその光耀のうちに透徹せよ。

然りながら汝の翼を動かして進むと

思ひつゝも或は退かんことを恐れ

宜しく祈願して恩寵すなはち

57 聖母マリアの母。

58 聖母マリア。

59 ダンテが登山を斷念して低地へ落下つゝありし時。

地、一の六一。

60 シラクザの貴族の娘にして三世紀末葉に殉教し眼病を癒す力ありとして尊崇されき。地、二の九七。

煉、九の五五。

61 アダム。

62 ダンテは諸天に昇る始めに當たり肉體にありしか或は靈のみしか知らずと云へり。一の七三—五。二の三九。神曲の夢語物漸く終らんとすれば。

63 神。

貴女よ、いと偉いにして力あるかな。

恩寵を欲ふもの、汝がもとに馳せゆかざるに

その願望翼なさに飛びゆかんとするなり。

なんぢの仁愛は、たゞ願ふものを

救ふに止まらず、めぐみ深くも

願ひに先き立つこと屢なり。

なんぢに同情、なんぢに憐憫

二 汝に威嚴、被造物の善しといふ

善きもの凡て汝に結合す。

さて宇宙最低の沼より

こゝに至るまで諸靈の生涯を

逐一見來たりしこの者。

恵みによりて大なる力與へられ

窮極の救済に向かひ眼を尙高く

擧げ得んことを汝に懇願す。

4 三一の八八註参照。

5 地獄。

6 ダンテ。

7 ultima salute. 二二〇一二五。神の幻影。

第三十三曲

瞑想直觀の典型たる聖ベルナルド聖母マリアに祈願してダンテに神の幻影を啓示せんことを求む。ダンテ即ち爛々ある閃光に接し、宇宙一切の秘密を看取し、三位一體、基督の神人兩性の奧義を悟り、斯くして彼の意志は神の意志に一致融合し、愛によりて廻ること雙輪の如くなり、神曲の大幻影茲に終了す。

「處女なる母、汝が子の娘」

謙虚りて擧げらるゝこと被造物に優り

永遠の聖旨の定め給ひし窮極

汝こそは人性をいと尊からしめしもの

斯くて造主自ら被造物と

なるを厭ひたまはざりき。

なんぢの胎に愛再び燃えたりき。

その熱により永遠の平安裡に

この花かく芽ぐみたりき。

10 此方にては汝われらの慈愛の正午の

炬火となり、下界人間のあひだにては

希望の活ける源泉となる。

1 聖母マリア。 以下聖ベルナルドの莊美微虔なる祈願。

2 救世主基督の母として神に定められしもの。

3 諸聖徒より成れる嚮徴。

かくて眼は「永遠の光」へ向けられたが
いかなる被造物も斯く明かな眼を
これに指し向け得るとは信じ難し。

さて一切の願望の窮極に

接近してゐた私の心の中には

常に渴仰の熱望が終熄した。¹⁰

上方を仰ぎ見るやうベルナルドは

吾 私に相圖をして微笑んだが

私は自ら既に彼の欲ふやうにしてゐた。

蓋しわが眼は純粹になり

眞理そのものたる高さ「光」の光線へと

層一層透徹しつゝあつたからである。

これより後わが眺は我等の

言葉に超り、光景は言語に絶す。

斯かる絶景には記憶も亦熄む。¹¹

9 一の四八。

10 渴仰の熱望は今や願望の成就に於て鎮靜満足せり。

11 一の七一九。

而して彼の眺ながめのために祈いのちるに優まさりて

嘗なほて己が眺ながめのために熱あつせしことなき我

三〇 一切の祈いのち禱りを捧たもげ、その乏ひしからざらんことを祈いのちる。

願ねがくは汝の祈いのちにより

人間一切の雲霧を彼より拂はらひ

かくて『至高の悦樂』を彼に現し給へ。

欲ほひのまゝを做なしうる『后きさき』よ

われ尙ほ汝に祈いのちる、斯く大なる眺ながめの後あとも

なんぢ彼の情意を康すこやかに保たもちたまへ。

汝の守護まもり人間の衝動を滅なぼしたまへ。

ベアトウリチエの多くの受福者等と共に

わが祈いのちに添そひ汝に合掌するを見させ給へ』。

四〇 神に悦よろこばれ尊たげらるゝ眼めが

祈願者の上に注つがれ、敬虔なる祈いのちが

いかに彼女の意こころに適あひしかを我等に示した。

8 父なる神に悦よろこばれ子たる神（基督）に尊たげらるゝ聖母マ
リアの眼。

蓋し些^{いさ}かたりとも我記憶に歸り

この詩のうちに微かに響かんか

汝の勝利¹³の識らるゝことが多いであらう。

私の堪へをりし活ける光線より

もし眼を背^{そむ}けもせば、その鋭さのため

私は眩^{めくら}んだであらうと信ずる。

然し私はこれに向かひて一層^{つよ}勁くなり

よ 遂にわが眼を無限の力に

結び合せたことを記憶する。

あゝ裕かなる恩寵よ、その力により

わが顔を敢て永遠の光のうちに向け

遂に眺^{ながめ}を彼處^{かしこ}に滅盡^{めつじん}せしめたり。

汎く宇宙に片々として散れるものが¹⁴

愛により一巻^{ひとまき}に編まれて

その奥深き處に綴ぢられあるを私は見た。¹⁵

13 vittoria. 榮光のこと。

14 equaderna. 元來は四つ折の紙のこと。煉、一二の〇四に quaderno とありて「帳簿」の意に用ゐらる。

15 以下ダンテは先づ形而上學眞理を直觀し、次で三位一體の神學的眞理に及ぶ（一一五行以下）。

夢みる人は見るも夢の後に

熱情のみは印象されて残り

その他を思ひ回し得ない。

そのやうに私はなつた。即ちわが幻影は

殆んど全く熄みしが、此より

生まれし甘美が尙も心のうちに雫する。

雪が太陽に封を解かるゝ狀にも似

風のため輕らかな葉のうへに

シビ¹²ラの託宣の消え去るにも似る。

自ら人間の觀念に斯くも

超ゆる至高の「光」よ、汝の現れし狀を

些かなりとも我心に呼び起こし

且つわが舌を強からしめて

なんぢの榮光の一閃光をだに

後の人々に残さしめたまへ。

12 羅馬カムパニアのクメ洞窟に住みし巫女。人の運命を卜して此を木葉に記し風の散らす狀によりて判ずるなり。「エネアの歌」三の四四一以下。

蓋し意志の對象たる善が一切

この中に集積せられ、外にあつて

缺くるものがこゝに完全である。

さて記憶することに對してすら

わが言葉の足らざるは、げに母の胸に

なほ舌を潤す嬰兒の片語よりも甚し。

それも私が眺めてゐた「活ける光」のうちに

二〇 一つ以上の貌があつたと云ふのではない。

この光は常に依然たるものである。

然し眺めつゝ私のうちに力を増せし

眺により只一つの出現が私自らの

變はるにつれて姿を化へたのである。

高き光の深奥澄明な

本體のうちに、三色一容積の

三つの環が私に現れた。

21 以下三位一體の秘義を述ぶ。

22 對象の光そのものは變化せざるも、見る者の視力に準じて變化しゆく。ベアトウリチェの眼にクリフォネの姿の反映せし狀も此に似たりき。煉、三一の一二四一六。

本體と偶然¹⁴並びにその諸相が

謂はゞ共に相結び¹⁷、宛ら

九〇 如上のものは單一な光¹³のやうであつた。

この結節¹⁶の宇宙的形質¹⁵を見た

私は信じた。蓋し斯く語りつゝも

わが悦びの増大しゆくを感じるからである。¹⁹

たゞ一瞬間の昏睡は私にとり

アルゴの陰影にネットウノを愕^{くたて}かした金^{くたて}以後の

二十五世紀間よりも深いものであつた。¹⁰

かく私の心は全く宙に

確く動かず、一心に眺め

眺めつゝいよく燃やされた。

100 この光に對しては人は自らを

これより他の光景に轉ぜしめることが

到底不可能である。

16 スコラ哲學の意義にては(一)本體(ens substantia)とは自立自存する實體を指す、例へば人、樹、劍の如き此なり。(二)偶然(accident)とは本體に附着するも其本質たらざるもの、例へば愛、綠、輝きの如き此なり。

三の二九註。「新生二五の註一」

17 萬有一切が神に集約すとの意なり。即ち創造者に於ける創造の合致なり。

18 un semplice l'uno. 或は「微光」の意に採りて此句を「以上わが述ぶることは實際わが見しことの微かなる閃光に過ぎず」と解する人もなり。

19 語るだに今心に喜悅を齎らすは幻影を確かに見し證左なり。

20 一瞬間がダンテの見し幻影を忘れしめしこと、二千五百年が彼の黄金の羊毛を獲んとて航せしアルゴの船のことを忘却せしめしにも優る。アルゴの船の初めて海上を航し來るを見てネットウノ(海神)は吃驚せり。

圓の測量に全く身を委ねて

考へ、而もその要する原則を

發見しない幾何學者がある。³⁰

この新しき眺に對して私も斯くなつた。
像が環に添ふ狀と、またそれが

その處を占める狀を觀やうと欲ふた。

然しわが心が一の灼きに撃たれて

二四〇 その願望が叶へられなかつたならば

。自らの翅は此に堪ふべくもなかつた。³¹

高き幻影にむかひ茲に力は崩ほれた。

しかし既にわが願望と意志とは

宛ら等しく廻る輪のごとく

太陽と諸の星を動かす愛に廻つてゐた。³²

30 圓を四角形に直さんとし幾何學者は直徑によりて圓周を測定せしも遂に徒勞なりき。その如く神のことゝを人間の言葉にて表さんとするは不可能事なり。

31 基督の人性神性の神秘を見究めんとせしも、素より此は人力の堪ふる所にあらず、然し一の光閃めきて此奥義をダンテに啓示せり。

32 神の幻影に接して今やダンテの願望は成就し、彼の意志は神の意志と一致結合して宛ら雙輪のめぐるが如く、かくて彼の社福は完成せり。神曲各篇は皆星 (stella) の語を以つて終結す。

そしてイリとイリのやうに、一は²⁴

他より反射するものゝ如く、第三のものは²⁵

一三〇 双方より等しく吹き出づる火のやうに見えた。

あゝ如何に言葉足らず、わが歡喜を

表すに力弱さよ。否わが見しものに對して

言葉は微かなりとさへ呼ぶに足らず。

あゝたゞ自らに常住し、たゞ自ら悟り

且つ自らに識られ自ら悟りて

愛し微笑む永遠の光よ。

わが眼を少しく回らした時

汝のうちに反射せる光と成つて現はれし

かの廻轉は、われらの肖像を²⁶

一三〇 自らに、自らの色合にて

寫し出だせる如く見えたとがゆゑ

わが眼は全くその上に注がれた。

23 虹。 虹が虹の上に懸るが如く 三位一體を大さ同

一にして夫々色の異なる三つの虹にて表す。一二の一〇一五。

24 基督。

25 神。

26 聖靈。 一〇六一三。

27 異本、三つのうちに (color)。 以下ダンテは基督

の受肉のことを記す。

28 circunlazione. 光のうちの第二圓。

29 人間の貌。

大正六年三月廿九日印刷
大正六年四月一日發行

【定價金壹圓九拾錢】

ダ ン テ
天 國 篇
奧 附

不許複製

著者

中山昌樹

發行者

河本龜之助

印刷者

河本俊三

印刷所

洛陽堂印刷所

發行所

電話番町四二五八番
振替東京二〇九一四

洛

東京市麴町區
陽堂
平河町五丁目

特賣

發行所

東京市麴町區平河町五丁目
振替口座東京二〇九一四番

洛陽堂

る成譯全曲神テンダ

譯 樹 昌 山 中

天國篇

菊版三百三十三頁挿畫八枚
天金總クロース箱入
定價金壹圓九拾錢
送料八錢

煉獄篇

菊版三百三十七頁挿畫十枚
天金總クロース箱入
定價金壹圓九拾錢
送料八錢

地獄篇

菊版三百三十六頁挿畫九枚
天金總クロース箱入
定價金壹圓九拾錢
送料八錢

GTU LIBRARY

3 2400 00550 0220

3 2400 00559 9299

GAYLORD			PRINTED IN U.S.A.

GAYLORD

PRINTED IN U.S.A.

百

1918

GTU Library
2400 Ridge Road
Berkeley, CA 94709
For renewals call (510) 649-2500
All items are subject to recall.

